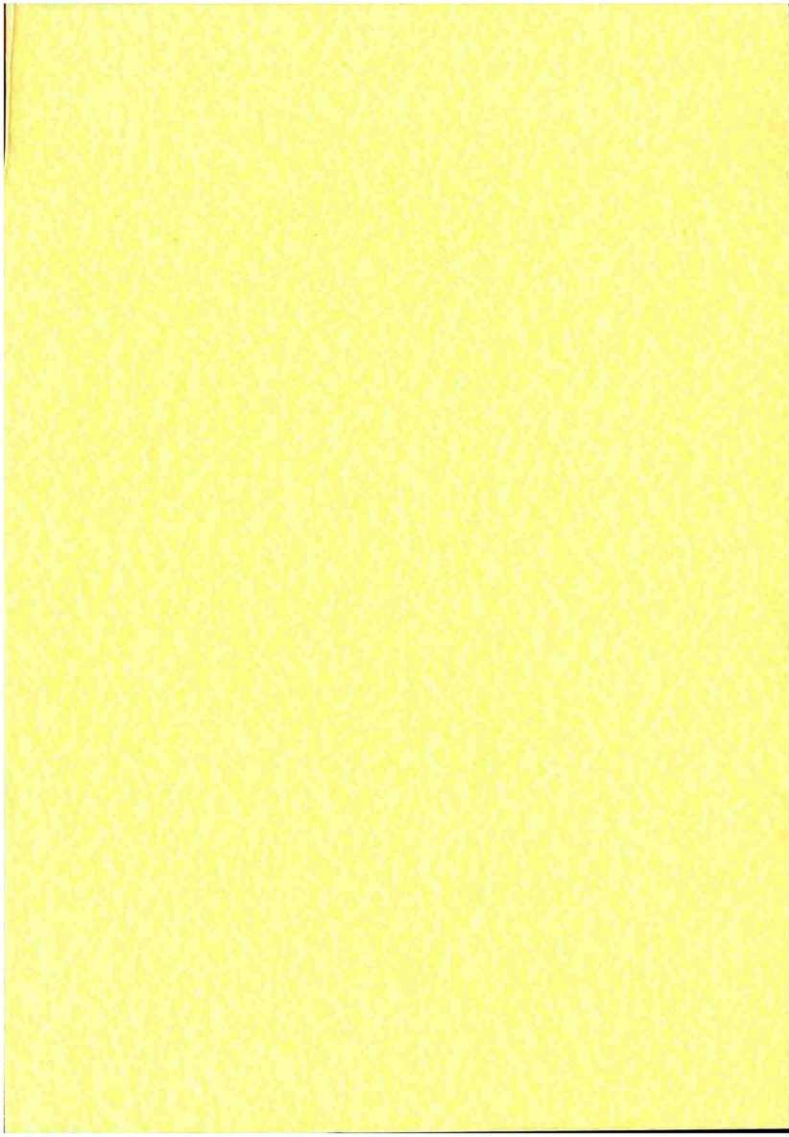


大阪市平野区

瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告

2000. 9

財団法人 大阪市文化財協会



大阪市平野区

瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告

2000.9

財団法人 大阪市文化財協会

「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告」正誤表

頁	行	誤	正
16	19		
17	28・30	UR6Z層	UR6 _Z 層
19	2		
42	図40	自然流路	<u>NR501</u>
46	6	陶質土器と考えられる。	陶質土器の可能性もある。
103	図110右上、4	NG87-64	NG87- <u>65</u>
103	図110中央下	UR92-46	<u>NG92-46</u>
158	23・24	UR6A層	UR6 _A 層
158	25	UR6Z層	UR6 _Z 層
159	34	(図168)	(<u>図169</u>)
169	8	高橋工2000a・b	<u>高橋工1999・2000</u>
172	14	SB03	<u>SB13</u>
180	24	高橋工1999a	<u>高橋工1999</u>
180	33	高橋1999a	<u>高橋工2000</u>
182	26	二面庇	<u>一面庇</u>
184	12	藤井正明・阿部幸一1985	藤永正明・阿部幸一1985
186	38	建設省国土地理院	建設省国土地理院 <u>1965</u>
187	17	高橋工1999a	<u>高橋工1999</u>
187	19	高橋工1999b	<u>高橋工2000</u>
188	11	藤井正明・阿部幸一1985	藤永正明・阿部幸一1985
188	12	三谷拓実2000	光谷拓実2000
図版8	上段	北区北半(北から)	南区北半(北から)
図版18	中段	(南から)	(北から)





UR86-11次調査地遠景(北東から、奥は大和川)

大阪市平野区

瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告

2000.9

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

瓜破遺跡は、戦前に大和川の河床で弥生土器が採集され、古くから遺跡として知られていた。1953年には、日本考古学会によって、弥生文化の起源とその成長の解明を目的として発掘調査が行われ、学史の上でも著名な遺跡となっている。

近年の地域開発に伴い、瓜破台地とその周辺では数多くの発掘調査が行われるようになった。その結果、この地域が弥生時代のみならず、後期旧石器時代以降の各時代にわたる人々の営みが、連綿と繰り返された地域であることが明らかとなった。本書では、1980年から1993年にかけて瓜破遺跡・瓜破北遺跡で実施した24件の発掘調査の成果をあわせて報告しており、それらはこの地域の歴史的な発展を知る上での基礎的な資料となろう。

とりわけ瓜破遺跡東南地区で検出した飛鳥時代の建物群は、東隣の長原遺跡に拡がる水田の開発・経営を管理するための中心的な施設と考えられ、政権の中核が前期難波宮にあった7世紀中葉を画期に大きく発展することが判明した。律令国家が成立する過程での地域支配のあり方を知る上で、日本古代史の解明にも寄与するものと思われる。

最後に、発掘調査から本書の作成までご理解やご協力いただいた関係各位に、心より深謝の意を表する次第である。

2000年9月

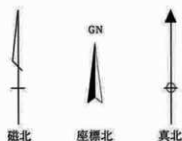
財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は、大阪市平野区に所在する瓜破・瓜破北遺跡において、1980年から1993年にかけて行った24件の発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、第I章第2節の表1に記した各事業者の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島暉臣(現調査部長)の指導のもと、同課植木久(現大阪市教育委員会文化財保護課)・伊藤純(現同)・京嶋覚・南秀雄・森毅・松尾信裕・田中清美・鈴木秀典・趙哲済・黒田慶一・櫻井久之・清水和明・岡村勝行・田中秀和・山崎栄・鳥羽正剛・大成可乃が担当した。それぞれの調査の担当者・面積・期間などは第I章第2節に記した。
- 一、本書の作成は、報告書作成室長代行田中清美の指揮のもと、同室大庭重信が編集した。本文の執筆は、田中・大庭のほか、調査課長京嶋覚・同主任趙哲済・同課平田洋司・李陽浩が分担し、執筆者名は各節もしくは担当個所の最後に示し、文責を明らかにした。なお、巻末の英文要旨はRobert Condon氏が作成し、調査課宮本康治がこれを助けた。
- 一、第II章第5節の縄文土器については福岡県教育委員会の宮地聡一朗氏に、また瓜破遺跡採集資料[関西大学考古学等研究室1986]の採集経緯については関西大学米田文孝氏に、瓜破廃寺の推定経緯については流通科学大学の長山雅一氏に、瓜破遺跡東南地区建物群の変遷および造営尺度については植木久氏に、それぞれご教示を得た。心からお礼を申し上げたい。
- 一、遺構写真は担当調査員が撮影し、遺物写真の撮影については、本文中の写真10を大庭が撮影したほかは、徳永園治氏に委託した。
- 一、瓜破遺跡東南地区UR86-11次調査の基準点測量および航空測量はアジア航測株式会社に委託した。
- 一、瓜破遺跡東南地区UR86-11次調査および周辺調査の遺構平面図については、航空測量により作成したマイラー原図および手実測により作成した遺構図のトレースをラスターベクトル変換し、デジタルデータ化する作業を株式会社かんこうに委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学の用語については、[趙哲済1995b]に準じる。
2. 遺構名の表記は、掘立柱建物(SB)、井戸(SE)、溝(SD)、土壌(SK)、柵(SA)、自然流路(NR)、その他(SX)の分類記号の後に、各調査次数ごとに別個の番号を付している。方形周溝墓、土器溜りには分類記号を与えず、そのまま遺構名とした。
3. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP±〇m」と記した。挿図中の方位は、磁北・座標北・真北を下図のように区別して用いた。
4. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類については次の文献に拠った。本文中では煩雑を避けるため、これら引用文献をその都度提示することは割愛している。古墳時代の須恵器(TK209型式まで)：[田辺昭三1966・1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[佐藤隆2000]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]、鎌倉・室町時代の土器：[鈴木秀典1982]。なお弥生時代後期の土器編年については、[都出比呂志1976、森毅1980]に準拠しつつ、遺跡に則して独自の編年で示した。基準となる資料は、後期前葉が長原遺跡SB01[大阪市文化財協会1978]、後期中葉が瓜破北遺跡SE02[大阪市文化財協会1980]、後期後葉が上六万寺遺跡第7層[勝田邦男1981]の各出土土器である。



本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の立地環境と既往の調査	1
第1節 遺跡の立地と地形環境	1
第2節 調査の歴史と今回報告する調査	3
第Ⅱ章 瓜破遺跡西地区の調査	7
第1節 UR80-1・4・5・8次調査	7
1) 調査の経緯と経過	7
2) 層序	9
3) 遺構と遺物	11
i) 旧石器時代	
ii) 縄文時代	
iii) 弥生時代	
iv) 古墳～奈良時代	
v) 平安時代後期～室町時代	
4) 小結	15
第2節 UR85-16次調査	16
1) 調査の経緯と経過	16
2) 層序	16
3) 遺構と遺物	17
4) 小結	17
第3節 UR85-30次調査	18
1) 調査の経緯と経過	18
2) 層序	18
3) 遺構と遺物	19
4) 小結	20
第4節 UR90-12次調査	21
1) 調査の経緯と経過	21
2) 層序	21
3) 遺構と遺物	23
i) 弥生時代前期以前	
ii) 飛鳥時代	
iii) 鎌倉時代	
4) 小結	24

第5節	UR92-28次調査	25
	1) 調査の経緯と経過	25
	2) 層序	25
	i) 調査地の層序	ii) 検がけ法による火山灰の降下層準の予察
	3) 旧石器-縄文時代中期の遺構と遺物	29
	i) 石器遺物	ii) 土壌
	4) 縄文時代後期-弥生時代前期の遺構と遺物	32
	i) 自然流路	ii) 自然流路出土遺物
	iii) 土壌	iv) その他の出土石器
	5) 弥生時代中-後期の遺構と遺物	38
	6) 奈良時代の遺構と遺物	39
	7) 小結	39
第6節	UR93-2次調査	40
	1) 調査の経緯と経過	40
	2) 層序	40
	3) 遺構と遺物	42
	i) 弥生時代	ii) 鎌倉時代
	4) 小結	42
第7節	UR86-28次調査	43
	1) 調査の経緯と経過	43
	2) 層序	43
	3) 遺構と遺物	44
	i) 縄文時代	ii) 弥生-平安時代
	4) 小結	46
第Ⅲ章	瓜破北遺跡の調査	47
第1節	UR80-3次調査	47
	1) 調査の経緯と経過	47
	2) 層序	49
	3) 遺構と遺物	49
	i) 各層出土遺物	ii) 北区
	iii) 南区	
	4) 小結	67
第2節	UR80-2次調査	68
	1) 調査の経緯と経過	68
	2) 層序	68
	3) 遺構と遺物	69
	i) 北区	ii) 南区

4) 小結	70
第3節 UR88-43次調査	71
1) 調査の経緯と経過	71
2) 層序	71
3) 遺構と遺物	72
i) 弥生時代後期	ii) 古墳時代前期
4) 小結	74
第4節 UR89-1次調査	75
1) 調査の経緯と経過	75
2) 層序	75
3) 遺構と遺物	77
i) 溝	ii) 小穴
iii) 土壇	iv) 井戸
v) 土器溜り	vi) 包含層出土遺物
4) 小結	79
第5節 UR90-13次調査	80
1) 調査の経緯と経過	80
2) 層序	80
3) 遺構と遺物	83
i) 古墳時代以前	ii) 飛鳥時代
4) 小結	83
第6節 UR91-3次調査	84
1) 調査の経緯と経過	84
2) 層序	84
3) 遺構と遺物	85
4) 小結	86
第IV章 瓜破遺跡東南地区の調査	87
第1節 UR85-39、86-11次調査	87
1) 調査の経緯と経過	87
2) 層序	89
3) 古墳時代以前の遺構と遺物	89
i) 旧石器時代	ii) 縄文～弥生時代
iii) 古墳時代	
4) 飛鳥～平安時代の遺構と遺物	91
i) 飛鳥時代	ii) 平安時代
iii) 包含層出土遺物	
第V章 瓜破遺跡東北地区の調査	127

第1節	UR83—3次調査	127
	1) 調査の経緯と経過	127
	2) 層序	127
	3) 遺構と遺物	127
	i) 溝	ii) 井戸
	iii) 土壌	
	4) 小結	137
第2節	UR89—26次調査	138
	1) 調査の経緯と経過	138
	2) 層序	138
	3) 遺構と遺物	138
	4) 小結	139
第3節	UR85—41次調査	140
	1) 調査の経緯と経過	140
	2) 層序	140
	3) 遺構と遺物	140
	4) 小結	141
第4節	UR91—1次調査	142
	1) 調査の経緯と経過	142
	2) 層序	142
	3) 遺構と遺物	143
	i) SX801	ii) 平安時代以前の遺構と遺物
	iii) 鎌倉時代以降の遺構と遺物	iv) 時期不明の遺構
	4) 小結	150
第5節	UR83—26次調査	151
	1) 調査の経緯と経過	151
	2) 層序	151
	3) 遺構と遺物	151
	i) 溝	ii) 掘立柱建物
	iii) 土壌	
	4) 小結	153
第6節	UR88—5次調査	154
	1) 調査の経緯と経過	154
	2) 遺構と遺物	154
	i) 弥生時代	ii) 古墳時代
	iii) 平安時代	iv) その他
	3) 小結	156

第VI章 遺構と遺物の検討	157
第1節 瓜破・瓜破北遺跡の歴史の変遷	157
1) 旧石器時代	158
2) 縄文時代	158
3) 弥生時代前期～古墳時代前期	158
4) 古墳時代中・後期	161
5) 飛鳥～平安時代中期	161
6) 平安時代後期～室町時代	162
第2節 UR86-11次調査飛鳥時代建物群の検討	163
1) 飛鳥時代須恵器・土師器の年代的位置づけ	163
i) はじめに	ii) 1～5区の第2層出土の須恵器と土師器
iii) 遺構出土の須恵器と土師器	iv) まとめに代えて
2) 1区建物群の変遷	169
i) 建物構成と敷地区分	ii) 方位
iii) 遺構の変遷	iv) 建物群とその変遷の特徴
3) 飛鳥時代建物の造営尺度について	176
i) はじめに	ii) 掘立柱建物群における尺度の検討
iii) 掘立柱建物群の配置計画における尺度について	
iv) まとめ	
4) 周辺の状況からみた建物群の性格	180
5) まとめ	183
引用・参考文献	185
あとがき・索引	
英文目次・要旨	

原色図版目次

瓜破北遺跡・瓜破遺跡東南地区出土遺物

上：瓜破北遺跡出土遺物(UR80-3、88-43次)

下：瓜破遺跡東南地区出土遺物(UR86-11次)

図版目次

- 1 瓜破遺跡西地区 UR80-1・4・8次調査
上：80-8次D区南半全景(南から)
中：80-4次a-b区西壁断面
下：80-1次2区SD101およびSK01(東から)
- 2 瓜破遺跡西地区 UR85-16・90-12次調査
上：85-16次SD04・05(東から)
中：90-12次調査地全景(南から)
下：90-12次NR1101埋土断面(南から)
- 3 瓜破遺跡西地区 UR92-28次調査(一)
上：第18層下面検出状況(南から)
中：西壁地層断面
下：旧石器遺物出土状況(北から)
- 4 瓜破遺跡西地区 UR92-28次調査(二)
上：第11D層下面検出状況(南から)
中：第11A層上面検出状況(南から)
下：第9層下面検出状況(南から)
- 5 瓜破遺跡西地区 UR92-28次調査(三)
上：NR1101埋土断面(北から)
中：NR1101埋土と断層断面(北から)
下：NR1101西岸の隅降傾足跡(東から)
- 6 瓜破遺跡西地区 UR86-28・93-2次調査
上：93-2次調査地全景(南から)
中：86-28次 SX501(西から)
下：86-28次 NR601(南から)
- 7 瓜破北遺跡 UR80-3次調査(一)
上：調査地全景(南から)
中：SD03(南から)
下：SD03南壁断面
- 8 瓜破北遺跡 UR80-3次調査(二)
上：北区北半(北から)
中：SK16(東から)
下：SB04(東から)
- 9 瓜破北遺跡 UR80-3次調査(三)
上：SD01(南から)
中：SD01東壁断面
下：SK04-06(南から)
- 10 瓜破北遺跡 UR80-3次調査(四)
上：SB01・02・SK07
中：SK07(北から)
下：SK03
- 11 瓜破北遺跡 UR80-2・89-1・91-3次調査
上左：80-2次 北区方形周溝墓1(南から)
上右：91-3次 石器遺物集中区
下左：89-1次 II区全景(西から)
下右：89-1次 I区全景(西から)
- 12 瓜破北遺跡 UR88-43・90-13次調査
上：88-43次 SK01・02(北東から)
中：90-13次調査地全景(南から)
下：90-13次東壁断面
- 13 瓜破遺跡東南地区 UR86-11次調査(一)
上：調査地遠景(南から)
下：1区建物群
- 14 瓜破遺跡東南地区 UR86-11次調査(二)
上：SB08とSA04(白線)(北から)
下：SB17(北から)
- 15 瓜破遺跡東南地区 UR86-11次調査(三)
上：SA05(西から)
中：SB06(北から)
下：SB09・10・16の重複状況(北から)
- 16 瓜破遺跡東南地区 UR86-11次調査(四)
上：1区北半(北から)
中：3区東半(東から)
下：3区西半(西から)

- 17 瓜破遺跡東北地区 UR83-3 次調査
上: 2 区SD04(西から)
中: SE08(東から)
下: SE02(北から)
- 18 瓜破遺跡東北地区 UR85-41・89-26 次調査
上: 85-41 次 SK01・02・SD02(北西から)
中: 89-26 次調査地全景と旧中野街道(南から)
下: 89-26 次 SD01・SK06(東から)
- 19 瓜破遺跡東北地区 UR91-1 次調査
上: 調査地全景(東から)
中: SX801(北から)
下: SX801瓦出土状況(南から)
- 20 瓜破遺跡東北地区 UR88-5 次調査
上: 調査地全体(南から)
中: SB01(南から)
下: SD01 遺物出土状況(北東から)
- 21 瓜破遺跡西地区 UR92-28 次調査出土遺物(一)
- 22 瓜破遺跡西地区 UR92-28 次調査出土遺物(二)
- 23 瓜破遺跡西地区 UR80-1・8、85-30、86-28、93-2 次調査出土遺物
- 24 瓜破北遺跡 UR80-3 次調査出土遺物(一)
- 25 瓜破北遺跡 UR80-3 次調査出土遺物(二)
- 26 瓜破北遺跡 UR80-3 次調査出土遺物(三)
- 27 瓜破北遺跡 UR80-2・3、88-43、89-1 次調査出土遺物
- 28 瓜破遺跡東南地区 UR86-11 次調査出土遺物(一)
- 29 瓜破遺跡東南地区 UR86-11 次調査出土遺物(二)
- 30 瓜破遺跡東南地区 UR86-11 次調査出土遺物(三)
- 31 瓜破遺跡東北地区 UR83-3 次調査出土遺物
- 32 瓜破遺跡東北地区 UR91-1 次調査出土遺物

挿 図 目 次

- 図1 瓜破遺跡・瓜破北遺跡の位置 1
- 図2 遺跡周辺の地形 2
- 図3 周辺の遺跡位置図 3
- 図4 瓜破・瓜破北遺跡の調査地位置図 4
- 図5 UR80-1・8、85-16 次調査地位置図 7
- 図6 UR80-4・5 次調査地位置図と地層柱状図 8
- 図7 3 区西壁地層断面図 10
- 図8 旧石器時代の遺物 11
- 図9 縄文～弥生時代の遺物 11
- 図10 UR80-1・4・5・8 次調査地平面図 12
- 図11 SD01 断面図(3 区) 13
- 図12 古墳～奈良時代の遺物 14
- 図13 平安時代後期～室町時代の遺物 15
- 図14 UR85-16 次調査地平面図・南壁断面模式図 16
- 図15 SD01 出土遺物 17
- 図16 UR85-30、90-12 次調査地位置図 18
- 図17 UR85-30 次調査地平面図・南壁断面模式図 19
- 図18 第3 層出土遺物 20
- 図19 UR90-12 次調査地西壁断面模式図 22
- 図20 第14 層下面平面図 23
- 図21 第11 層上面平面図 23
- 図22 第9 層上面平面図 23
- 図23 UR90-12 次調査出土遺物 24
- 図24 第5 層下面・第7 層上面平面図 24
- 図25 UR92-28、93-2 次調査地位置図 25
- 図26 UR92-28 次調査地南壁断面模式図 26
- 図27 サンプリング箇所模式図 28
- 図28 第13～15 層下面平面図 30
- 図29 旧石器時代の遺物 31
- 図30 SK1301 平・断面図と出土遺物 32
- 図31 第11D 層下面平面図 33
- 図32 NR1101 断面図 33
- 図33 NR1101 出土遺物 34
- 図34 縄文～弥生時代の石器遺物 36
- 図35 SK1108 出土遺物 37
- 図36 第9 層下面平面図 38
- 図37 SD901 出土遺物 38
- 図38 第6 層下面平面図 39
- 図39 UR93-2 次調査地北・東壁断面模式図 41
- 図40 第5A 層下面平面図 42
- 図41 第3 層下面平面図 42
- 図42 SK501 出土遺物 42
- 図43 UR86-28 次調査地位置図 43

図44	UR86-28次調査北・西壁断面図	44	図85	旧石器～古墳時代の遺物	90
図45	第6a層下面平面図	45	図86	I区南半遺構配置図	92
図46	第5層下面平面図	45	図87	SB03平・断面図	93
図47	UR86-28次調査出土遺物	46	図88	SB04平・断面図	93
図48	瓜破北遺跡調査地位位置図	47	図89	SB05平・断面図	93
図49	南・北区遺構平面図・地層断面模式図	48	図90	SB06平・断面図および出土遺物	94
図50	包含層出土遺物	50	図91	SB07平・断面図	94
図51	南区出土鏡	51	図92	SB08平・断面図および出土遺物	95
図52	立岩堀田遺跡35号甕棺出土連弧文清白鉄鏡	51	図93	SB09平・断面図	95
図53	SD01平・断面図	53	図94	SB10平・断面図および出土遺物	96
図54	SD01出土遺物(1)	53	図95	SB11平・断面図	96
図55	SD01出土遺物(2)	54	図96	SB12平・断面図	97
図56	SB01-03平・断面図	56	図97	SB13平・断面図	97
図57	SB01出土遺物	56	図98	SB13出土遺物	97
図58	SK01出土遺物	56	図99	SB14平・断面図	98
図59	SK03平・断面図および出土遺物	57	図100	SB15平・断面図	98
図60	SK04平・断面図	57	図101	SB14・15出土遺物	98
図61	SK04出土遺物	58	図102	SB16平・断面図	99
図62	SK06出土遺物	60	図103	SB17平・断面図	99
図63	SK07平・断面図および出土遺物	61	図104	SB18平・断面図	100
図64	SD03平・断面図および出土遺物	62	図105	SB19平・断面図	100
図65	SB04平・断面図および出土遺物	63	図106	SB20平・断面図	101
図66	SK16平・断面図	64	図107	SB21平・断面図	101
図67	SK16出土遺物	65	図108	SB22平・断面図	101
図68	SK20出土遺物	66	図109	SA04平・断面図	102
図69	瓜破北遺跡弥生～古墳時代前期遺構配置図	67	図110	SA05・06平・断面図および出土遺物	103
図70	南区西壁断面図	68	図111	I区北半遺構配置図および溝断面図	104
図71	UR80-2次調査北区分・断面図	69	図112	SD01出土遺物	105
図72	第9層出土土製品	69	図113	SD03・04・06出土遺物	107
図73	UR80-2次調査南区平面図	70	図114	SD05出土遺物	109
図74	UR88-43次調査地平面図・断面模式図	72	図115	SD07・11出土遺物	110
図75	UR88-43次調査出土遺物	73	図116	SD07-11平面図および断面図	111
図76	UR89-1次調査地平面図・I区北壁断面模式図	76	図117	SD17・18-20出土遺物	112
図77	SK02平・断面図	77	図118	1区土壌出土遺物	114
図78	UR89-1次調査出土遺物	78	図119	3区遺構配置図	116
図79	UR90-13次調査地平面図・東壁断面模式図	82	図120	SB01平・断面図および出土遺物	117
図80	UR91-3次調査地平面図・東壁断面模式図	85	図121	SB02平・断面図	117
図81	石器遺物出土状況	86	図122	SB23平・断面図	117
図82	UR85-39、86-11次調査地位位置図	87	図123	SB23出土遺物	117
図83	UR86-11次調査地の遺構配置図	88	図124	SB301平・断面図	118
図84	UR86-11次調査地層断面模式図	89	図125	SA01・02平・断面図	118
			図126	3区その他の遺構出土遺物	119
			図127	SB31平・断面図	121
			図128	SB32平・断面図	121

図129 SD30平・断面図	121
図130 SB30出土遺物	122
図131 1区第2層出土遺物(1)	123
図132 1区第2層出土遺物(2)	124
図133 1・3・5区第2層出土遺物	125
図134 UR83-3次調査地位位置図	127
図135 UR83-3次調査地平面図	128
図136 4区北壁断面模式図	129
図137 SD04出土遺物	130
図138 溝出土遺物	131
図139 SE02平・断面図	132
図140 井戸出土遺物	133
図141 奈良時代の軒丸・軒平瓦	134
図142 SE08遺物出土状況	134
図143 SE08出土遺物	135
図144 SE08出土瓦	136
図145 UR89-26次調査地位位置図	138
図146 UR89-26次調査出土遺物	138
図147 UR89-26次調査地平面図・東壁断面図	139
図148 UR85-41次調査地位位置図	140
図149 UR85-41次調査地平面図・北東壁断面図	141
図150 第3層出土遺物	141
図151 UR91-1、83-17・26次調査地位位置図	142
図152 UR1次調査出土の瓦	142
図153 主要な遺構の層位関係	143
図154 UR91-1次調査地平面・断面図	144
図155 SX801出土遺物	145

図156 土壇出土遺物	146
図157 SK810平・断面図	147
図158 SK810出土遺物	148
図159 UR83-17・26次調査地平面図・北壁断面模式図	152
図160 SB01-03平・断面図	153
図161 SK02遺物出土状況	153
図162 SK02出土遺物	153
図163 UR88-5次調査地位位置図	154
図164 UR88-5次調査地平面図・東壁断面図	155
図165 SB01断面図	155
図166 UR88-5次調査出土遺物	156
図167 瓜破北遺跡弥生〜古墳時代前期の遺構分布	159
図168 UR91-14次調査地(25地点)出土遺物	160
図169 瓜破・瓜破北遺跡弥生〜古墳時代前期集落分布と出土青銅器	161
図170 瓜破・瓜破北遺跡出土古代の瓦分布	162
図171 1〜5区第2層および主要遺構出土須恵器編年	166
図172 主要遺構出土土師器杯C編年	167
図173 建物の規模と構造	170
図174 建物の配置と方位	171
図175 建物の方位	171
図176 飛鳥時代の遺構変遷	173
図177 瓜破遺跡東南地区・長原遺跡西南・南地区の飛鳥・奈良時代の遺構の分布	181

表 目 次

表1	今回報告する調査一覧	5	表7	UR86-28次調査層序表	43
表2	報告以外のおもな既往の調査一覧	5	表8	UR90-13次調査層序表	80
表3	UR90-12次調査層序表	21	表9	UR86-11次調査の建物・構一覧	91
表4	UR92-28次調査層序表	27	表10	各調査のおもな遺構・遺物一覧	157
表5	試料の観察結果	28	表11	1区の建物柱寸法	178
表6	UR93-2次調査層序表	40	表12	1区の建物間距離	179

写 真 目 次

写真1	UR80-4次調査風景	9	写真7	SK1108検出状況	37
写真2	SK01検出状況	13	写真8	北区調査風景	47
写真3	3区出土銅銭	14	写真9	現地説明会風景	87
写真4	a-4区UR4層上面遺構検出状況	15	写真10	SB10出土櫛羽口	96
写真5	UR85-30次調査風景	18	写真11	SE08出土瓦	136
写真6	第13-18層出土石器遺物	30			

第Ⅰ章 遺跡の立地環境と既往の調査

第1節 遺跡の立地と地形環境

瓜破遺跡は大阪市平野区瓜破を中心に、東西1.7km、南北1.6kmの範囲に広がる、後期旧石器時代から室町時代にかけての複合遺跡である。瓜破遺跡の北西側には瓜破北遺跡が隣接している(図1・2)。地形的には南から北に延びる河内台地の北端に立地しており、前面には河内平野が広がっている。瓜破遺跡の西半部および瓜破北遺跡は沖積平野部に位置している。

宝永元(1704)年に付け替えられた大和川によって、河内台地は南北に分断され、特に遺跡範囲の大和川以北は瓜破台地と呼称されている[建設省国土地理院1965]。この台地の生成過程については、足利健亮の復元が参考になる[足利健亮1985]。足利によると、台地はおもに中位段丘面から構成されており、最終氷期に「古天野川」によって形成された扇状地が、それ自身の侵食によって段丘化したものとされている。現在の天野川は台地の南端に位置する狭山池に流れ込んでおり、そこから東除川と西除川が台地の両側に分かれて北流している(図2)。台地東側の東除川流域は、中位段丘面を削りながら形成された低位段丘構成層が発達しており、台地の東縁と沖積平野部の間には顕著な傾斜変換点がなく、緩やかな地形となっている。一方、西側の西除川流域では低位段丘構成層は未発達で、台地の西縁は5m前後の比高をもつ急な傾斜で沖積面下に埋没している[趙哲済ほか1992]。

このような台地の東側と西側の地形的な差異は、遺跡の形成にも大きな影響を与えたと考えられる。台地の東側では長原遺跡や八尾市八尾南遺跡といった後期旧石器時代以降の複合遺跡が面的に広がっているのに対し、台地西側では遺跡の分布が希薄である。台地東側に展開する遺跡群は平野遺跡群と総称されており、瓜破・瓜破北両遺跡は平野遺跡群の西端に位置している。

台地を構成する中位段丘面は、南から北に向って緩やかに低くなり、瓜破遺跡の北端付近で沖積平野の地下に埋没する。この台地上にも凹凸があり、段丘面を侵食して形成された開析谷が複数存在している。谷地形は東から「馬池谷」、「東谷」、「西谷」と呼称されている[京嶋寛1992](図2)。「馬池谷」は発掘調査の結果、位置や規模、埋没の過程などが判明している。このような台地上の凹凸も当地域の歴史環境に一定の影響を与えたことは想像に難くない。

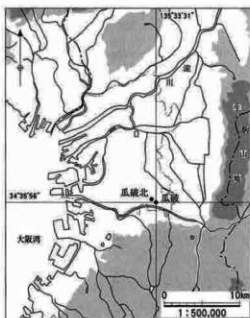


図1 瓜破遺跡・瓜破北遺跡の位置

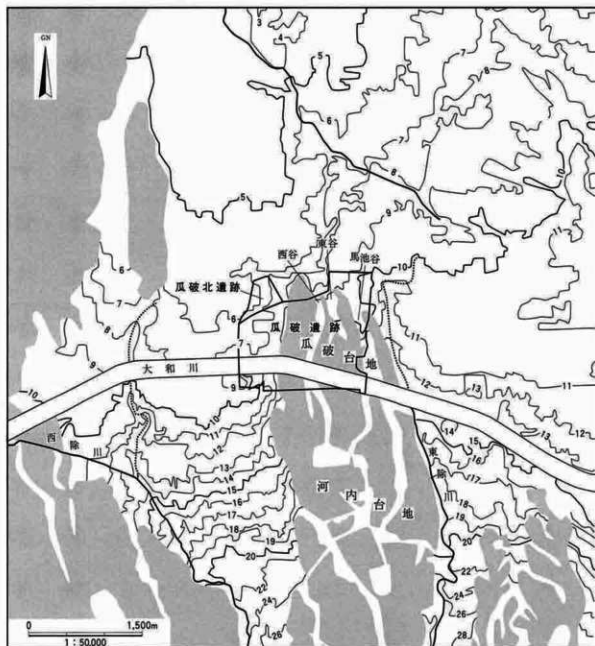


図2 遺跡周辺の地形(足利健亮1985を一部加筆)

本報告では、以上のような地形的特徴を加味し、瓜破遺跡を西地区・東南地区・東北地区に区分する(図3)。西地区は瓜破台地西斜面および西方の沖積平野部に、東南部および東北地区は、「西谷」・「東谷」・「馬池谷」を含む瓜破台地上に、そして瓜破北遺跡は台地西側の沖積平野部にそれぞれ立地している。また、東北地区は北側を喜連東遺跡、東側を長原遺跡西地区、東南地区は東側を長原遺跡西南地区と接している。

(大庭重信)



図3 周辺の遺跡位置図（国土地理院発行2万5千分の1地形図「大阪東南部」に一部加筆）

第2節 調査の歴史と今回報告する調査

これまで行われた主な調査は、図4、表1・2のとおりである。本文および図4の番号は、表1・2のそれと対応している。

瓜破遺跡の存在が世に知られるようになったのは戦前にさかのぼる。また、1939年に市営瓜破公園の建設の際に弥生土器が出土し、このことが当時の新聞でも報道されている〔東住吉区役所1961、関西大学考古学等資料室1985〕。1940年には大和川河床で採集された弥生土器が学会に紹介された(2)〔山本博1940・1941a・b〕。これを受けた今里幾次は、1940年と1941年に大和川河川敷で調査を行い、弥生時代前期の土器の細分を提唱した(3)。

戦後まもない1953年には、近畿地方での弥生時代文化の成立と前期土器の編年研究を目的として、日本考古学協会が大和川河川敷で発掘調査を実施した(4)〔杉原壮介・神沢勇一1961〕。また、1949年には、この地で採集された新の王莽代の貨泉が誌上で紹介されている(1)〔日本考古学会1949〕。このように、瓜破遺跡は古くから近畿地方の代表的な弥生時代遺跡として著名であり、特に弥生時代



図4 瓜破・瓜破北遺跡の調査地位位置図

前期土器の編年の研究は学史に残るものである。

この地域の開発に伴い発掘調査が本格化したのは1976年になってからである。まず、瓜破遺跡西地区で阪神高速道路松原線建設に伴う試掘調査が大阪文化財センターにより実施された(5)。その後1976年から1978年にかけては、難波宮址顕彰会と大阪市教育委員会によって阪高橋脚・共同溝・下水・ガス工事などに伴う10件の調査が集中的に行われ(UR 1～10次)、1980年以降は大阪市文化財協会が調査を引き継いだ。この5年間に、阪神高速道路松原線付近での調査が飛躍的に増加し、瓜破遺跡の北西側が新たに瓜破北遺跡と命名された。瓜破北遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての堅穴住居や掘立柱建物・方形周溝墓が見つかり、また中国新代の方格規矩鏡や後漢代の内行花文鏡片が出土するなどの成果を挙げた(B～F、9・10・12・13・15)[大阪市文化財協会1980・

表1 今回報告する調査一覧

№	調査名称	地 区	調査の理由	面積 (㎡)	調査期間	担当者	調査期間	大 阪
A	UR80-1	瓜屋地区	大阪ガス・電気会社による供排水 松原局用ケーブル方式工事	1,193	平野区瓜屋2-1-3-5	森越・船賀清	1980年3月11日～1980年8月20日	7
B	UR80-2	瓜屋北	大阪ガス・大阪市による道路施設工事	112	平野区瓜屋1	鈴木秀典・森越・ 立崎寛	1980年7月10日～1980年9月15日	68
C	UR80-3	瓜屋北	大阪市による下水管工事	900	平野区瓜屋1	松尾信和・森越・ 田中清彦	1980年6月18日～1980年12月31日	47
D	UR80-4	瓜屋西地区・瓜屋北	大阪市による下水管工事	223	平野区瓜屋1	鈴木秀典・森越・ 船賀清	1980年8月18日～1980年11月15日	7
E	UR80-5	瓜屋西地区・瓜屋北	関西電力による電圧調整工事	155	平野区瓜屋1-1	船賀清	1980年10月29日～1981年2月28日	7
F	UR80-6	瓜屋西地区・瓜屋北	大阪市による下水工事	524	平野区瓜屋1・4・6	鈴木秀典・松尾信和・ 船賀清	1980年12月19日～1981年5月30日	7
G	UR83-3	瓜屋東北地区	(仮称)横須町マンション建設工事	300	平野区瓜屋東3	榎本久	1983年5月9日～1983年6月30日	127
H	UR83-26	瓜屋東北地区	大阪市による水道工事	65	平野区瓜屋東2	黒川康一	1984年1月28日～1984年2月7日	151
I	UR85-16	瓜屋西地区	横須町マンション建設工事	220	平野区瓜屋西4-1-48	伊藤純	1985年8月20日～1985年8月31日	16
J	UR85-30	瓜屋西地区	大阪市による水道工事	24	平野区瓜屋西3-10-14-19	船賀清・榎本久之	1985年10月25日～1985年10月30日	18
K	UR85-39	瓜屋東地区	経営者邸野大改修工事の改修工事	172	平野区瓜屋東7	榎本久之	1986年2月3日～1986年2月14日	87
L	UR85-41	瓜屋東北地区	市立立派斎場跡の施設建設工事	50	平野区瓜屋東4-	田中秀和	1986年2月3日～1986年2月10日	140
M	UR86-11	瓜屋東地区	経営者邸野大改修工事の建設工事	4,800	平野区瓜屋東8-9	南秀典・山崎隆	1986年8月1日～1987年4月9日	87
N	UR86-28	瓜屋東北地区	平野区による建設工事	128	平野区瓜屋東1-51-2	鈴木秀典	1987年1月20日～1987年2月10日	43
O	UR88-6	瓜屋東北地区	村山氏によるマンション建設工事	160	平野区瓜屋東2	立崎寛	1988年5月23日～1988年6月13日	154
P	UR88-43	瓜屋東北地区	横山一興氏による建設工事	48	平野区瓜屋東1-19-6	森越	1988年3月22日～1988年3月31日	71
Q	UR89-1	瓜屋北	横山氏による建設工事	140	平野区瓜屋西1-64・66	榎本久之	1989年4月5日～1989年4月28日	75
R	UR89-26	瓜屋東北地区	市販野菜園による建設工事	165	平野区瓜屋東3-438-1	立崎寛	1989年2月13日～1989年3月5日	138
S	UR90-12	瓜屋西地区	横須町住居による建設工事	400	平野区瓜屋西3-475-5	清水和明	1990年9月13日～1990年11月22日	21
T	UR90-13	瓜屋北地区	田中氏による建設工事	75	平野区瓜屋東1-23	船賀清	1990年9月20日～1990年10月31日	80
U	UR91-1	瓜屋東北地区	北地区による建設工事	370	平野区瓜屋東4-1	岡村勝行・島田正剛	1991年4月15日～1991年5月20日	142
V	UR91-3	瓜屋北	横山氏による建設工事	75	平野区瓜屋東1-31-1	田中清彦	1991年5月7日～1991年5月22日	84
W	UR92-28	瓜屋西地区	瓜屋小学校の増築工事	722	平野区瓜屋東3-31	清水和明・大成可乃	1992年12月25日～1993年3月30日	25
X	UR93-2	瓜屋西地区	横山氏による建設工事	230	平野区瓜屋東6-178-312a	清水和明	1993年4月10日～1993年5月21日	40

表2 報告以外のおもな既往の調査一覧

番号	名称および調査地	地 区	調査年度	おもな遺 構・遺 物	参 考 文 献
1	馬場町駅前跡地	瓜屋西地区	1939	弥生後期中間土・後期土器・貨幣	日本考古学会1949、文殊寺31986
2	山本氏邸跡地	瓜屋西地区	1940	弥生前・中期土器・土器	山本雅1940、1941e-b
3	今里後次氏調査地	瓜屋西地区	1940・41	弥生前・中期土器・土器	今里後次1943
4	日本考古学会調査地	瓜屋西地区	1953	弥生前期土器、石器、木簡	杉原茂一・神沢勇一1961
5	大阪文化財センター・沢間	瓜屋東北地区	1976	縄文晩期・弥生後期中間土・古墳・中期土器・土器群 (TK22 部式中心)・弥生文軒丸・元瓦、漢文文軒丸瓦	大阪文化財センター1976 (新報大阪市史編纂委員会1988、藤田博子1987)
6	UR-1 (瓜屋下水)	瓜屋東北地区	1976	太形給石石片、円筒埴輪、古代灰土器・土器群、平瓦、中世土器、平瓦入平埴輪	(大阪市文化財協会1983)
7	UR-2 (瓜屋下水)	瓜屋東北地区	1976	太形給石石片、円筒埴輪、古代灰土器・土器群、平瓦、中世土器、平瓦入平埴輪	(大阪市文化財協会1983)
8	UR-3 (瓜屋下水)	瓜屋東北地区	1976	太形給石石片、円筒埴輪、古代灰土器・土器群、平瓦、中世土器、平瓦入平埴輪	(大阪市文化財協会1983)
9	UR-4	瓜屋北	1976	弥生前期・古墳前期土器、土器	(大阪市文化財協会1980)
10	UR-5	瓜屋北	1976	弥生前期・古墳前期土器、土器	(大阪市文化財協会1981)
11	UR-6	瓜屋西地区	1976	弥生前期土器、弥生前期方形埴輪基	(大阪市文化財協会1983)
12	正本商店跡地	瓜屋北	1977	弥生前期土器	(大阪市文化財協会1983)
13	UR-7	瓜屋北	1978	弥生前期土器、小穴群	(大阪市文化財協会1992a)
14	UR-8 (瓜屋下水10)	瓜屋東北地区	1978	弥生前期土器	(大阪市文化財協会1992a)
15	UR-9	瓜屋北	1978	古墳前期方形埴輪基、土器基、土器、中国磁	(大阪市文化財協会1980)
16	UR-10	瓜屋西地区	1978	古墳前期方形埴輪基、土器基、土器、中国磁	(大阪市文化財協会1980)
17	UR81-1	瓜屋西地区	1981	弥生文軒丸瓦	(大阪市文化財協会1983)
18	UR81-3	瓜屋北	1981	太形給石石片、漆、小穴群	(大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983)
19	UR81-5	瓜屋北	1981	弥生前期土器・弥生前期土器群	(大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983)
20	UR82-22 (立会)	瓜屋東北地区	1982	漢文文軒丸瓦、奈良時代土器	(宮本在知子・佐藤隆1986、大阪市文化財協会1992a)
21	UR83-17	瓜屋東北地区	1983	古墳中期土器、古墳・奈良時代土器、瓦	(本書参考文献)
22	UR87-17	瓜屋西地区	1987	中・近世作土	(大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989)
23	UR87-20	瓜屋西地区	1987	中・近世作土	(大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989)
24	UR88-6	瓜屋東北地区	1988	中・近世作土	(大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989)
25	UR91-14 (立会)	瓜屋東北地区	1991	弥生前期土器	(本書参考文献)
26	UR96-12	瓜屋西地区	1996	弥生前期土器・弥生前期土器群	(大阪市文化財協会1999a、九條勲士・宮本康治1997)
27	UR97-19	瓜屋西地区	1997	弥生前期土器・弥生前期土器群	(大阪市文化財協会1999a、宮本康治1998)

1981]。西地区でも弥生時代前期の土墳墓や中期の方形周溝墓が調査された[大阪市文化財協会1983]。ほかにもUR3次調査(8)では、遺跡で2例目となる貨幣が出土するといった成果があった。また、調査は東北地区にも及び、下水管工事に伴うUR1次調査(6)では、古墳時代中期の須恵器・土師器が大量に出土したほか、奈良時代の瓦が大量に出土しており、古代寺院の存在が推定されるようになった[鎌田博子1987、新修大阪市史編纂委員会1988]。

以後、調査は今日に至るまで継続して行われている。近年の注目される成果としては、まず1986年に東南地区の府営住宅の建設に先立って行われたUR86-11次調査があげられる(M)。調査では飛鳥時代の溝や櫓に囲まれた建物群が検出され、整然とした建物配置から有力豪族の居館と推定された[南秀雄1987]。

また、1996年には西地区の大和川以南にも調査が及び、UR96-12次調査(26)では弥生時代中期前葉期の居住域が検出された[久保和士・宮本康治1997、大阪市文化財協会1999e]。翌1997年には、東隣で行われたUR96-12次調査(27)で同じ中期前葉の方形周溝墓や土墳墓が確認されている[宮本康治1998、大阪市文化財協会1999f]。両調査の結果、弥生時代中期前葉に限定される時期の居住域と墓域を把握することができ、古くから知られていた弥生時代集落の一端が明らかになった。

本書では、1980年から1993年にかけて行われた、24件の発掘調査の成果を報告する。各調査の原因は表1の通りであり、調査総面積は瓜破遺跡が9,836㎡、瓜破北遺跡が1,350㎡である。区域別に見ると、瓜破遺跡西地区10件、瓜破北遺跡6件、瓜破遺跡東南地区2件、同東北地区6件である。次章以下、区域別にそれぞれの調査成果を報告する。(大庭)

第Ⅱ章 瓜破遺跡西地区の調査

第1節 UR80-1・4・5・8次調査

1) 調査の経緯と経過

現在、瓜破遺跡西地区のほぼ中央を南北に縦断する阪神高速道路付近では、1978年から1981年にかけて多くの調査が行われている(表1・2)。本節では、このうち1980年度に行われたUR80-1・4・5・8次の4件の調査成果をまとめて報告する(図5)。

UR80-1次調査地は、阪神高速道路の西隣にあり、東西幅3～7m、長さは南北約250mの範囲に及ぶ。3個所に分かれた調査区を北側から1・2・3区と呼称する(図5)。

UR80-4次調査地は、南北600mに及ぶ区間内にあり、北半は瓜破北遺跡の範囲に含まれる。この区間のうち、下水管渠築造工事のシールド発進口9個所、到達口6個所の計15個所に一辺2m前後のトレンチを設定した。北からa-1～a-15区と呼称する(図6)。それぞれの調査区では、弥生時代の遺構面までを調査した後、瓜破・瓜破北遺跡の層序の関係と立地環境の成立過程とを探るために、支保工を行った後に工事敷近くまで重機によって深掘りし、地層観察を行った。

UR80-5次調査地は、南北400mの区間に及び、瓜破遺跡西地区から瓜破北遺跡の範囲内にある。この範囲内の電柱設置に伴い、一辺1～3mの方形の調査区を設定し、調査を実施した。調査区は橋脚部の東側12個所、西側16個所の合計28個所で、それぞれをb-1～b-28区と

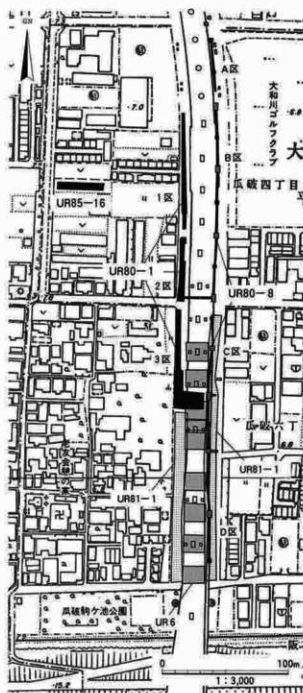


図5 UR80-1・8、85-16次調査地位図

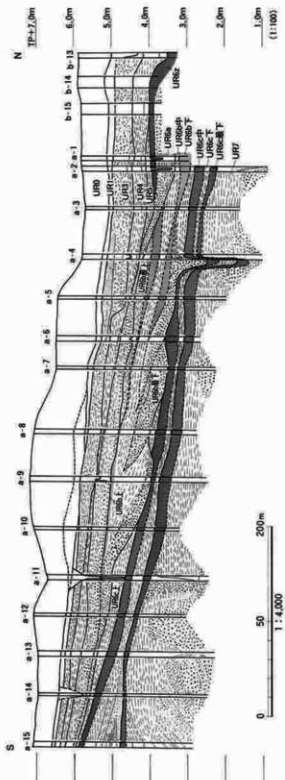
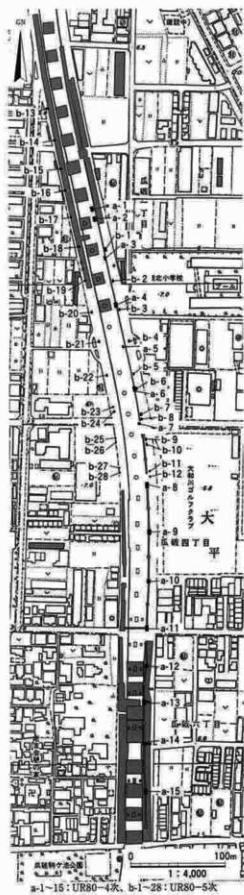


図 6 UR80-4・5次調査位置図と地層柱状図

呼称する(図6)。

UR80-8次調査は、先に行われたUR80-4次調査のa-8区とa-15区にはさまれた区間に調査区を設定した。東西幅約2m、南北の長さは約420mに及ぶ。4個所に分かれた調査区を、北側からA・B・C・D区と呼称する(図5、図版1)。このうちC・D区は、既に調査成果が報告されているUR81-1次調査地と重複しており[大阪市文化財協会1983]、本報告で



写真1 UR80-4次調査風景

は必要に応じてのみ言及する。なお、本文で個々の調査地点について言及する際には、煩雑さを避けるために調査次数の表記を省略し、1～3区、a-1～a-15区、b-1～b-28区、A～D区といった各調査地の区名で示す。

2) 層序(図6・7)

上記の調査のうち、UR80-1・4次調査では、無遺物層を含む現地表下約5mまでの地層のデータが得られ、瓜破・瓜破北西遺跡にまたがる南北600mの範囲の地層のつながりと堆積過程が判明し、その結果、瓜破遺跡の基本層序が設定された[趙哲済1983]。当地域は瓜破台地西斜面から沖積平野部にかけての南から北へなだらかに下る地形で、後背湿地性の堆積環境下からしだいに離水し、耕地化されていくようすが推測されている。ここではUR80-1・4次の調査成果から、基本層序ののっとり層序の特徴を記述する。なお、ほかの調査の報告で用いる層序番号との混乱を避けるために、層序番号の前にURを付す。

UR0層：現代の盛土で、層厚は50～140cmあった。

UR1層：阪神高速道路の建設に伴って放棄された現代の作土層で、層厚は15cmあった。

UR2層：西地区南部の1区にのみ分布し、人為的な掘削と埋積により下位のUR3層を切っている。赤灰褐色を呈するシルト質砂層および上位の砂礫層からなり、前者を2b層、後者を2a層と呼称する(図7)。江戸時代の遺物を含む。

UR3層：各調査区に広く分布する含細礫灰褐色砂質シルト層で、一般に淘汰が悪く、耕作されたものと考えられる。2区では、重整合をもって上位より3a・3b・3cの各層に細分されるが(図7)、ほかの地点では不明瞭で細分できない。a-1～a-5区では層厚は60cmあるが、a-6区以南では15～30cmと層厚を減じる。また、a-4～a-5区付近では、上部にラミナ構造をもつ水成層が分布する。旧石器時代から江戸時代までの遺物を包含する。

UR4層：含細礫灰色シルト～粘土層で、層厚は7～20cmあった。a-8区以南では、一般に層厚を減じて砂質となる。鉄・マンガンの汚染が著しく、耕作された可能性が高い。鎌倉・室町時代の遺物を含む。

UR5層：含細礫暗灰色シルト～粘土層で、層厚は3～8cmと薄い。a-1～a-10区では細粒物質、

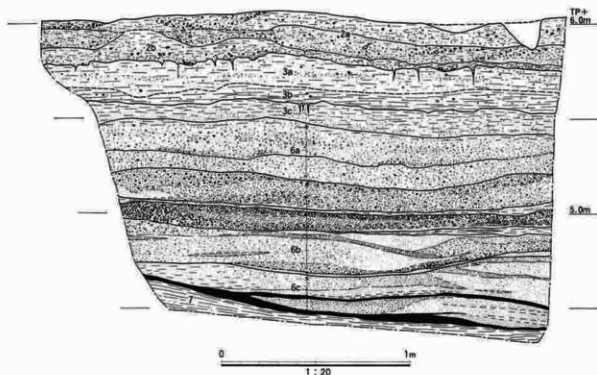


図7 3区西壁地層断面図

それ以南では砂質となり、2・3区では下部に砂礫を伴う。古墳時代後期から平安時代までの遺物を含む。

UR6層は、粗粒から細粒物質へ少なくとも5回のサイクルで連続的に堆積した地層である。氾濫原ないし後背湿地性の堆積層の構造をもち、南から北へ漸次堆積した状況を示す(図6)。細粒物質中には5層の有機質に富む暗色帯が挟在され、下部の2層は連続がよい。下部の2層の暗色帯をUR6c層、この上位の2層の暗色帯を含む層相変化の著しい層準をUR6b層、縄文時代晩期の遺物を包含する水成層をUR6a層、最上部の弥生時代の遺物を多く包含する暗色帯をUR6z層に区分する。

UR6z層：含細礫黒灰色シルト～粘土層で、有機質を多量に包含する暗色帯である。西地区北部のa-1～a-3区、および瓜破北遺跡側では14cmの厚さで分布し、これ以南では遺構埋土としてのみ点在する。下位層とは漸移関係にある。瓜破北遺跡側では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を中心に、弥生時代前期から古墳時代後期までの遺物を含む。

UR6a層：灰色粗粒砂からなる水成層である。a-1～a-15区の広い範囲に分布し、層厚5～48cmあった。北部でシルトを挟し、南部でシルト質となる。縄文時代晩期の土器を含む。

UR6b層：層厚5～130cmをはかり、北部域のa-1～a-7区では最上部の砂礫薄層を挟在する暗青灰色砂質粘土層、上部の暗紫灰色シルト質粘土層、中部の暗灰色シルト質粘土層、下部の黒灰紫色シルト質粘土層、最下部のシルト質粘土層を挟在する暗灰色砂礫層によって構成される。このうち上部層および下部層は暗色帯で、植物遺体や昆虫遺体を多く含む。これらの暗色帯はa-8区付近で収斂し以南では細分できない。a-8～a-10区では、本層上面で乾痕が認められた。また、2区およびa-6・a-7区では上面で遺構を検出した。遺物は出土していない。

UR6c層：層厚は90cmで、上部の青灰色シルト質粘土層、中部の砂混り黒色粘土層、下部の灰色砂質シルトないし粘土層、最下部の黒灰色粘土質シルト層によって構成される。連続がよく、a-1～a-15区で認められた。このうち中部層および最下部層は暗色帯である。また下部層はa-15区で100cmと層厚を増し、粗粒化していた。遺物は出土していない。

UR7層：青緑色シルトおよび砂礫層からなり、層相変化が著しい。上位層とは漸移関係にあるが、上位層よりしまりがよく、また規則的な堆積機構は認められない。a-4区およびa-11区の本層上面で自然流路と思われる削剥が観察された。層厚は220cm以上で、下限は不明である。低位段丘構成層と思われる[大阪市文化財協会1983]。

3) 遺構と遺物

i) 旧石器時代(図8、図版23)

遊離資料であるが、3区のUR3c層から1が、a-9区のUR3層から2が出土した。

1・2は国府型のナイフ形石器で、サヌカイト製である。1は長さ5.3cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm、2は長さ4.6cm、幅2.1cm、厚さ1.0cmある。1は先端部をわずかに欠失し、底面にクラックが認められる。打面部は細かい剥離が施され、一端は折り取られている。2は主要剥離面側から5回の調整剥離が認められ、断面は厚い台形を呈している[森穀1980]。

ii) 縄文時代(図9・10、図版1・23)

a-6区の西壁断面で、UR6b層最上部層上面に幅0.5mの畦畔状の高まりが見られた(図版1)。平面調査を行っていないため確定できないが、人為的なものの可能性がある。このほか、3区とB区では、UR6a層で埋没する自然流路NR01～03を検出して(図10)。

NR01 3区で検出した北東-南西方向の自然流路と思われる落込みで、調査区内で2本に分かれている。埋土下部はUR6a層に相当する砂礫層で、上部はシルトに移化していた。遺物は出土していない。

NR02 B区で検出したUR6a層に相当する砂礫層による幅約5.0mの削り込み痕である。水流は北東から南西方向と考えられる。遺物は出土しなかった。

NR03 a-7区で、UR6a層の上部から切込む流路の西肩を検出した。南北方向の流路と思われ、同一層準の粗い砂の堆積が北隣のb-8区でも認められる。

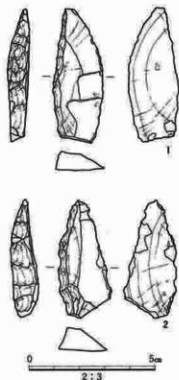


図8 旧石器時代の遺物
3区UR3c層(1)、a-9区UR3層(2)

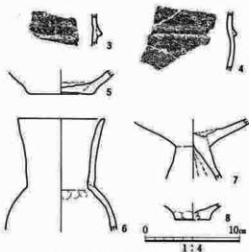


図9 縄文～弥生時代の遺物
2区UR6a層(3～5)、SD02(6～8)

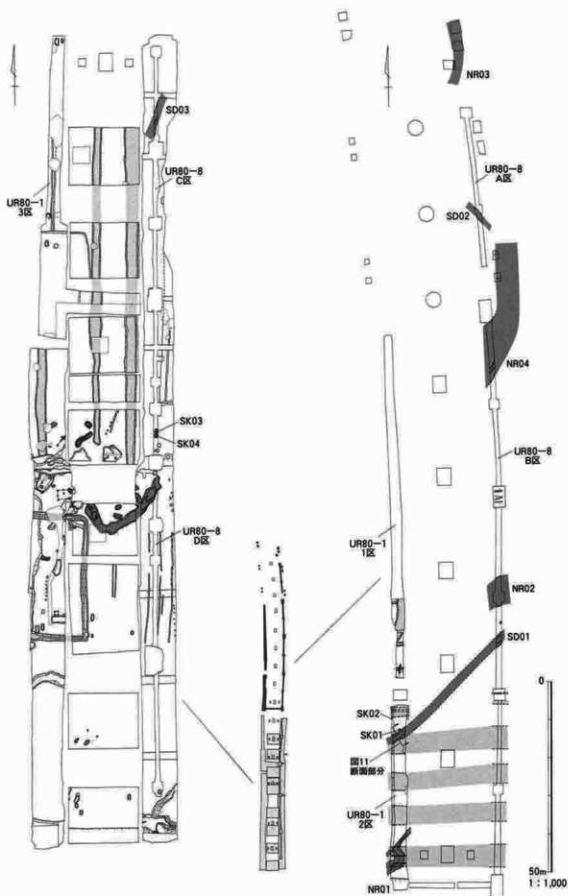


图10 UR80-1・4・5・8次調査地平面图

UR6a層出土遺物 2区のUR6a層から3～5が出土した(図9、図版23)。3・4は突帯文をもつ深鉢の体部破片である。突帯は低く、上側からの押さえによって垂れ下がっている。突帯上には小さなO字のキザミメが観察される。3は突帯付近で体部が緩やかに屈曲する。5は平底の底部破片である。3～5の胎土は角閃石粒を多く含む生駒西麓産で、ともに縄文時代晩期終末の長原式に位置づけられよう。

iii) 弥生時代(図10・11、図版1)

弥生時代前・中期の遺構は、当地域南部に限定されており、UR6次調査地点で土壌墓や方形周溝墓が検出されている[大阪市文化財協会1983]。一方、弥生時代後期の遺構は北部に分布しており、溝や流路が認められる。さらに北側の瓜破北遺跡では大溝や柱穴(a-1区)・土壌(b-3区)などが検出された。瓜破北遺跡側の状況については第Ⅲ章で触れることとし、ここでは西地区北半で検出した遺構について記述する。

SD01 2区およびB区のUR3層基底面で検出した幅2.2m、深さ0.7mの溝である(図版1)。北東-南西方向に直線的に延びており、長さは40m以上ある。3区とB区での溝底のレベル差はほとんどない。埋土は砂礫層と粘土～シルト層の互層堆積からなり、自然状態で徐々に埋っていったこと

がうかがえる(図11)。溝の底付近から弥生時代後期の土器片が出土した。

SD02 A区のUR4層基底面で検出した南東-北西方向の溝である。幅1.5m、深さ0.2mで、灰褐色砂泥りシルトで埋っていた。埋土の下半から弥生時代後期の土器が比較的多く出土した(図9)。

6は長頸壺、7は高杯、8は壺の底部である。6は頸部がやや短く、肩の張りが弱い。後期中～後葉のものであろう。

NR04 B区北端で検出した北東-南西方向の自然流路で、幅10.0m以上、深さ0.8m以上ある。下部が細～中礫で、上部が細～粗粒砂で埋っており、縄文時代晩期の突帯文土器の破片および、弥生時代中期と思われる土器片が出土した。北隣のb-11・12区でも、同一層準の厚い砂礫の堆積が認められることから、NR04は北側で向きを南北方向へ変えていたと考えられる。

出土石器(図版23) 9がa-4区UR3層、10がa-8区UR6a層、11がa-12区UR2層、12がa-13区UR2層からそれぞれ出土した。9～11は凸基式、12は凹基式の石鏃で、ともにサヌカイト製で弥生時代前～中期のものである。

iv) 古墳～奈良時代(図10・12、図版1、写真2)

この時代の遺構には、土壌SK01～04、溝SD03がある。

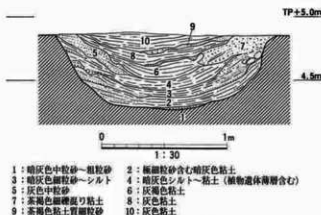


図11 SD01断面図(3区)



写真2 SK01検出状況

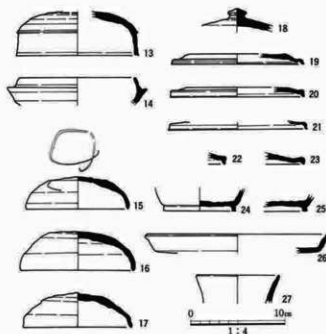


図12 古墳～奈良時代の遺物

SK01(16)、SK02(15)、包含層その他(13・14・17～27)

SK01・02 3区で検出した円形の小土墳で、両者は約4mと近接した位置にあった。規模はSK01が直径0.4～0.5m、深さ0.15m、SK02が直径0.5m、深さ0.1mあった。ともに完形の須恵器杯蓋が1点づつ、倒置した状態で出土しており、意図的な埋納と考えられる(写真2)。

15はSK02、16はSK01から出土した須恵器杯蓋である。15は口径10.7cm、器高3.4cm、16は口径12.0cm、器高4.1cmである。15は天井部にヘラ記号がある。ともに難波Ⅲ古段階に属し、7世紀前葉のものである。

SK03・04 C区南端で検出した南北にならぶ円形の土墳である。規模はSK03が直径1.0m、深さ0.9m、SK04が直径0.9m、深さ

0.8mあった。ともに断面は漏斗状を呈しており、底の付近は直径0.4mと小さくなっていた。SK03から土師器の甔と須恵器片が出土した。形状から井戸の可能性がある。

SD03 C区北半で検出した北東～南西方向の溝である。幅2.0m、深さ0.9mで、灰色ないし褐灰色粘土で埋っていた。遺物が出土しなかったため、時期は不明であるが、埋土が弥生時代のもものと異なることから、当該期の遺構に含めた。

その他の出土遺物(図12、写真3、図版23) 須恵器18～25・27が1区から、13・14・26が2区から、17が1区から、和同開珎28が3区からそれぞれ出土した。

古墳時代の遺物には、2区の室町時代の鳥島溝から出土した杯蓋13、2区のUR5層から出土した杯身14がある。13はTK208型式、14はTK43型式に属する。

飛鳥時代の遺物には、1区のUR5層から出土した杯蓋17・18がある。17はSK01・02出土須恵器とほぼ同じ頃のもので、かつ完形品である

ことから、同様に土壌内に埋納していた可能性がある。

奈良時代の遺物には、おもにUR5層から出土した須恵器19～27、和同開珎28がある。19～23は杯B蓋、24・25は杯B身、26は皿C、27は甕で、8世紀後葉のものである。

v) 平安時代後期～室町時代(図10・13、写真4)

土壌 a-4区のUR4層上面で、一辺0.2m前後の方形土壌群を検出した(写真4)。これらはUR4層に由来する粘土の偽礫を含む砂で埋戻されていた。深さ0.1mと浅く、鋳による掘削の痕と考えられる。土壌内からはⅣ-2期に位置づけられる瓦器椀29・30が出土しており(図13)、土壌が埋めら



写真3 3区出土銅銭

れたのは14世紀中葉と考えられる。また、UR 4層からも瓦器碗31～35、瓦器小皿36が出土しており、これらはⅡ-1～2期に位置づけられる。したがって、UR 4層の時期は12世紀前葉にまでさかのぼる可能性がある。

溝 2区で東西方向の溝が4条、ほぼ等間隔に並んで検出された(図10)。阪神高速道路をはさんで東側の2区南半でも、断面観察によりこの溝群の続きが確認されている。規模は幅約5.0m、深さ約0.2mあり、埋土中に瓦器・土師器・瓦質土器などを含むことから、室町時代の島島溝であると考えられる。この北側にも幅の狭い東西方向の溝が数条存在する。また、南側のUR 6次・UR81-1次調査地点では、これらと直交する南北方向の島島溝が3条検出されている[大阪市文化財協会1983]。この時期の遺物として、2区のUR 4層から白磁碗37が出土している。

4) 小結

以上の4件の調査は、瓜破遺跡の調査の中でも初期のものである。各トレンチの調査範囲は狭いが、瓜破台地西側に広がる沖積平野部の状況を知ることができ、以降の周辺の調査を行う上での基礎資料となった。

弥生時代の集落の検出が期待されたが、調査区域内では検出されず、D区付近が前期および中期の墓域として利用されていた。一方、弥生時代後期中葉以降に瓜破北遺跡に分布する居住域は、西地区には及んでおらず、この時期の溝を2条検出したのみであった。また、遺構は検出されなかったものの1区から3区にかけて奈良時代を中心とした時期の遺物が比較的多く出土しており、付近に未発見の集落の存在が予想される。

(大庭)

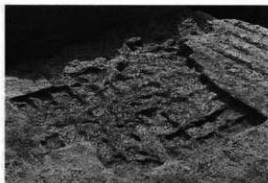


写真4 a-4区UR 4層上面遺構検出状況

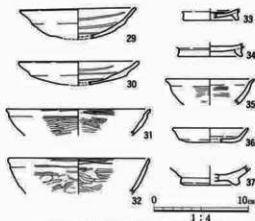


図13 平安時代後期～室町時代の遺物

a-4区土境内(29・30)、a-4区UR 4層(31～36)、
2区UR 4層(37)

第2節 UR85-16次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(瓜破西4丁目)は、阪神高速道路の西側、西地区北西部に位置する(図5)。前節で報告したUR80-1次調査のA区からは、約60m西側の地点にある。マンション建設工事に先立ち試掘調査を行ったところ、古墳時代中～後期のものと思われる須恵器を包含する地層が確認されたことから、1985年8月20日から同年8月31日までの間、調査を実施した。

調査区は東西43m、南北9mの範囲である。調査は第4層の直上まで重機によって掘削し、第4層の上面およびこれを除去した段階で遺構の検出を行った。これ以深の地層については、調査区南側を一部深掘りし、断面観察を行った。

2) 層序(図14)

現地表下1.9mまでの地層を確認し、以下の第0～7層に区分した。

第0層：現代の盛土である。

第1層：現代の作土層である。

第2層：にぶい黄褐色シルトで、層厚は約15cmあった。

第3層：灰白色シルトで、層厚は約5cmあった。

第4層：黒色細粒砂～シルトで、層厚は15～20cmあった。本層は暗色帯の可能性があるが、調査区西半ではマンガンの沈着が著しく、地層の境界を明確に認識できなかった。試掘調査で出土した須恵器は本層に伴う可能性があり、また本層に伴う遺構から弥生時代中期の土器片が出土した。このことから瓜破基本層序のUR6Z層に対応すると考えられる。

第5層：にぶい橙～にぶい黄橙色の粗粒～中粒砂からなる水成層である。層厚は平均60cmで、調査区東部は80cm以上ある。ラミナの切合いがいくつも見られた。

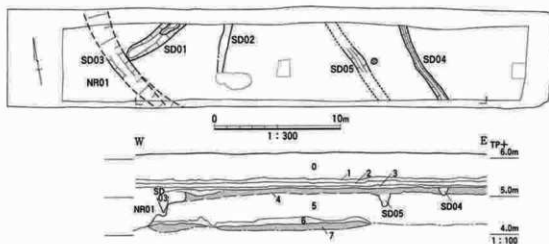


図14 UR85-16次調査平面図・南壁断面模式図

第6層：黄灰色シルトの水成層で、層厚は約10cmあった。

第7層：褐灰色粘土で、暗色帯の可能性がある。層厚は30cm以上あり、調査区東部で落込んでいた。

第5層以下の地層からは遺物が出土しなかったが、第5・6層はUR6a～6b層、第7層はUR6c層に相当する可能性がある。

3) 遺構と遺物(図14・15、図版2)

第4層上面での遺構検出作業中に、SD01～04およびNR01を、第4層を除去した段階でSD05を検出した。

SD01 南西―北東方向の溝で、幅は1.2mあった。埋土は砂礫層で、調査区内で確認した溝底のレベルは北東端が南西端より約0.3m深く、水流によって削られたものと思われる。埋土中から弥生時代中期の甕底部38および口縁部39が出土している(図15)。39は口縁端部をつまみ上げており、中期後葉のものである。

SD02 SD01の東隣で検出した南北方向の溝である。幅0.5～0.6m、深さ0.1mで、中粒砂で埋っていた。遺物は出土しなかった。

SD03 SD01の西隣で検出した南東―北西方向の溝である。幅1.2m、深さ0.4mで、埋土は偽礫を多く含むシルトである。後述するNR01の東肩と平行することから、NR01が埋没した後の窪地を利用して掘られた溝である可能性もある。遺物は出土しなかった。

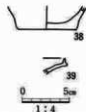


図15 SD01出土遺物

SD04 調査区東部で検出した南東―北西方向の溝である。幅0.5～0.6m、深さ0.1～0.15mで、溝の断面は浅いU字形であった。黒みの強い粘質の土で埋っており、埋土中に土器の細片が含まれていた。時期は不明である。

SD05 SD04の西隣でこれと平行する溝である。幅1.0m、深さ0.2mで、粗粒砂で埋っていた。遺物は出土しなかった。

NR01 調査地西端に位置する西側へ傾斜する落込みである。砂礫で埋っており、幅6m以上、深さ0.8m以上の流路と考えられる。断面観察のための深掘りで確認したのみであり、遺構の詳細は不明である。

4) 小結

本調査では4条の溝と流路と考えられる落込みを検出した。SD01は出土遺物から弥生時代中期後葉の遺構の可能性があるが、これ以外は時期が不明である。これらの遺構を検出した地層がUR6Z層に対応することから、弥生～古墳時代にかけてのものと推定しておく。ただし、UR80-1・8次で検出したUR6Z層に伴う溝・流路とは方向を異にしており、これらとの関係は不明である。(大庭)

第3節 UR85-30次調査

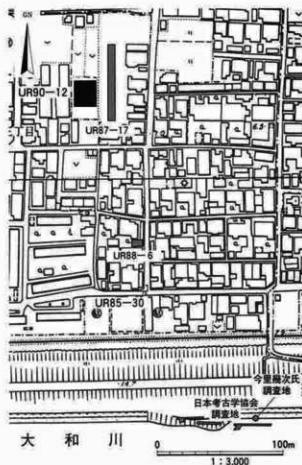


図16 UR85-30、90-12次調査地位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地(瓜破西3丁目)は、遺跡西地区の南西部、大和川の北側に位置する(図16)。南東側約100mの大和川河川敷では、1953年に日本考古学協会による調査が行われ、弥生時代前期を中心とした時期の遺構・遺物が多数検出されている[杉原莊介・神沢勇一1961]。

水道管理設工事に先だって行われた試掘調査で、現地表下0.9mに弥生時代中期の遺物を含む包含層が確認された。この結果を受けて、1985年10月25日～30日の間、東西に細長い工事計画ルートを対象に調査を実施した。調査地は路上にあり、掘削計画幅が0.4mと狭く十分な遺構検出が困難であること、隣接する下水管渠工事時に相当の部分が攪乱されていると予想されたこと、また工事が急を要することなどから、調査の方法は工事の進行とあわせて遺物包含層を確認し、遺物を採取する方法をとった(写真5)。また、調査で用いたレベルは、現地表からの深さである。



写真5 UR85-30次調査風景

2) 層序

現地表下1.4mまでの地層を以下の4層に区分した(図17)。

第1層：現代の盛土もしくは攪乱である。

第2層：現代の盛土がなされる直前に使用されていた用水路の堆積物である。灰色砂礫を主体とし、一部に暗緑灰色粘土の薄層を挟む。

第3層：黒褐色ないし暗褐色シルト質粘土からなる暗色帯で、弥生時代中期の遺物や炭化物を多く含む。層厚は5～30cmで、西部ほど残りがよい。道路面の標高から換算すると、第3層上面のもっとも高いレベルはTP+6.7m前後となる。

第4層：第3層のベースとなっていた淡黄色ないし黄褐色粘土

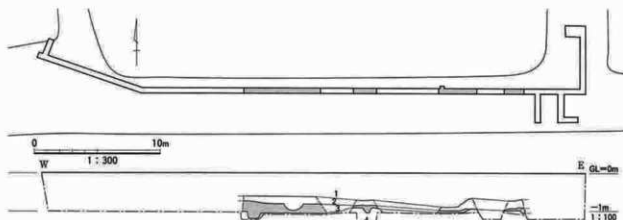


図17 UR85-30次調査地平面図・南壁断面模式図

質シルト層であり、下方へはシルト質粘土に漸移する。層厚は50cm以上あり、下限は不明である。

出土遺物から、第2層は瓜破基本層序のUR6Z層に相当する。第2層の上位にはごく最近の用水路の堆積物があり、調査区内では地層が欠落する結果となった。

3) 遺構と遺物(図17・18、図版23)

断面観察によると、第3層の下面に比高15cm内外の緩やかな凹凸があり、また小穴が数箇所認められた(図17)。多数の遺物が出土していることと合わせて、調査地は弥生時代中期の居住域かその付近であったと考えられる。

第3層から出土した遺物のうち、弥生土器40~49、石器50・51を図示した(図18、図版23)。

40は口縁部を水平に折り曲げ、内外面をヨコナデ調整する甕である。体部はやや張りがあり、外面にタテハケを施す。41は厚手の甕で、40同様、口縁部を水平に折り曲げている。口縁部の外面の下を指で押さえており、指頭圧痕の下にはハケ調整のあとが残る。体部の内外面はヘラミガキ調整である。胎土には細かい角閃石・雲母粒を含んでいる。42は口縁部が緩やかに外反する甕で、口縁部の内面はヨコハケ、口縁部および体部の外面はタテハケ調整である。胎土中に石英粒を多く含む点の特徴である。43は甕の底部である。底は輪台状を呈し、木の葉の圧痕が残る。外面はタテハケ調整である。

44は碗形の高杯もしくは鉢で、内外面ともヘラミガキ調整である。口縁端部に煤が付着しており、蓋に転用したものと考えられる。

45は受口状口縁をもつ生駒西麓型の広口壺である。口縁部の外面に2列の櫛描簾状文を施す。46は壺の頭部で、ヘラ描多状沈線帯を1.2cmの間隔を置いて上下に巡らす。下段の沈線帯は幅3.7cmで、沈線は10条ある。47・48は大型の壺底部、49は胎土中に角閃石・雲母粒を多量に含む壺底部である。

以上の土器のうち、40~43・47・48は弥生時代中期前葉、44・45・49は中期中葉に属する。また、46はヘラ描沈線文を用いている点に古い様相を留めているが、器形からみて中期前葉に下るものであろう。

50はクサビ形石器、51は石鏃の破片で、ともにサヌカイト製である。50は図の上端に剥離痕が顕著であり、下端に使用痕と思われる磨滅のあとがある。

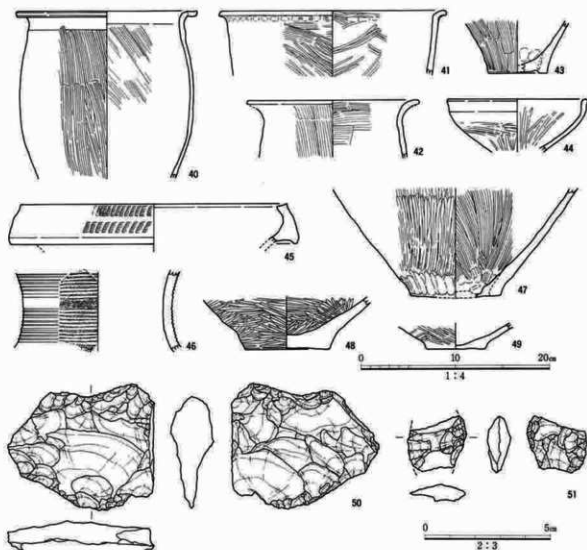


図18 第3層出土遺物

4) 小結

工事立会に近い制限された調査であったが、第3層から多数の弥生時代中期前～中葉の遺物が出土し、当該期の居住域の範囲を推定する上で重要な資料を得ることができた。本調査地の北側40mの地点で行われたUR88-6次調査では、弥生時代の遺構・遺物はまったく検出されていないことから、居住域は調査地付近を北端とし、以南に広がっていたと考えられる。

(大庭)

第4節 UR90-12次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(瓜破西3丁目)は、前節で報告したUR85-30次調査地の北側150mの地点にある(図16)。東隣でも1989年に調査が行われており(UR89-14次)、奈良時代のものと思われる落込みが検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989]。

建物の建設に先だって行われた試掘調査で、弥生～古墳時代にかけての地層が良好に残存していることが確認されたため、調査を実施した。調査の方法は、現代客土以下、鎌倉時代の作土層(第5c層)までを重機によって除去し、それ以深は人力により掘削した。遺構検出は、確認された4枚の暗色帯(第7・9・11・13層)の上面で行った。

2) 層序(図19、表3)

現地表下3.5mまでの地層を第0～16層に区分した(表3)。以下、おもな層準の特徴を述べる。

第0層は現代の盛土、第1層は現代作土、第2・4層は江戸時代の作土、第5層は鎌倉時代の作土である。第3層は水成層で、第4層を直接覆っていた。第4層上面では畦畔を検出した。第5層は層相から第5a～5c層に細分できるが、上位の耕作による削平を受けており残りが悪い。第5c層は溝の埋土として残存しており、鎌倉時代の瓦器・土師器が出土した。

第6層以深は水成層と暗色帯の互層堆積からなる。第7・9・11・13の各層は暗色帯で、水成の第8・10・12・14の各層が堆積したのち、その上部が土壌化したものである。また、第6層は第7層を覆う水成層で、調査区東部で極細粒砂、西方にいくにつれ細粒化している。第8層は水成層で、

表3 UR90-12次調査層序表

層序 番号	層序 概念図	層 相	層 厚 (cm)	特 徴	おもな遺構	おもな遺物	時 代	主要 基本層序 との対応
第0層		現代盛土	110	客 土				UR 0
第1層		黒褐色含極粗粒砂質シルト	15	作 土			現代	UR 1
第2層		にぶい黄褐色含極粗粒砂～中粒砂細粒砂質シルト	10	作 土				
第3層		にぶい黄褐色含シルト角礫極粗粒砂～中粒砂	20	水成層	←畦畔		江戸	UR 2・3
第4層		にぶい黄褐色含極粗粒砂～中粒砂シルト	10	作 土		陶磁器		
第5a層		黄褐色極粗粒砂質シルト	5	作 土				
第5b層		黄褐色極粗粒砂質シルト	5	作 土			鎌倉	UR 4
第5c層		黄褐色含粗粒砂シルト	5	作 土	↓ 竪穴	土師器・瓦器		
第6層		灰黄褐色含極細粒砂シルト	15	水成層	←SK701-702		飛鳥・奈良	UR 5～6a
第7層		灰黄褐色含粘土シルト	10	暗色帯		土師器・須恵器		
第8層		灰黄褐色シルト～極粗粒砂	30～180	水成層		弥生前期土器	弥生前期	UR 6a
第9層		黒褐色含極粗粒砂中粒砂質シルト	10	暗色帯	←NR901			UR 6b
第10層		灰黄褐色含極粗粒砂細粒砂質シルト	10～110	水成層	←NR1101			
第11層		黒褐色含極粗粒砂細粒砂質シルト	5	暗色帯				UR 6c
第12層		黄灰色シルト	≤10	水成層	←木根痕			
第13層		黒色含極粗粒砂細粒砂質シルト	5～10	暗色帯				
第14層		黄灰色極細粒砂質シルト～極粗粒砂・礫	≥90	水成層	↓ NR1401			UR 7
第15層		明黄褐色含極粗粒砂シルト質粘土	10					
第16層		緑灰色粘土～シルト質極細粒砂	≥60					

←上面検出遺構。↓下面検出遺構

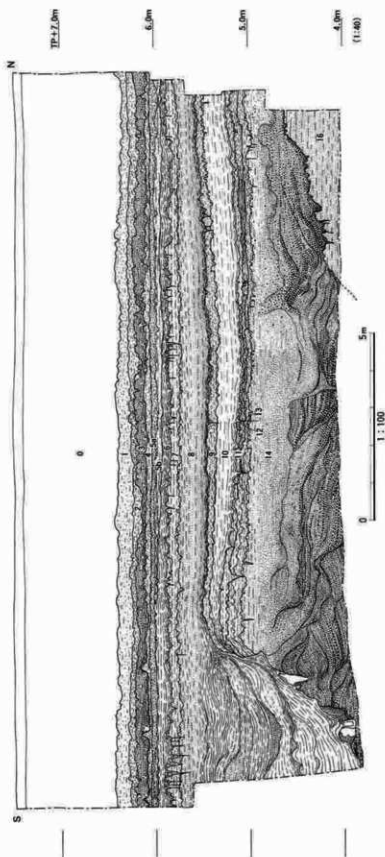


図19 UR90-12次調査地西壁断面模式図

下部のNR901を埋積するシルト～極細粒砂と、上部の調査区の全域を覆う極粗粒砂からなる。調査区の西半に厚く堆積しており、東半では薄くなっている。第10層はNR1101を一気に埋積する極粗粒砂を主体とした水成層で、この外側では細粒砂質シルトに移化している。第12層はシルトからなる水成層で、調査区の西部でのみ確認した。この下位には暗色帯の第13層があり、第12層が分布しない範囲では上位の第11層と区分できなかった。第13層の上面では木根痕と思われる落込のほかは、遺構は検出できなかった(図20)。

第14層は調査区西部で確認したNR1401を埋積する水成層で、下位層を大きく挟む粗粒な堆積物からなる。調査区の北東半には分布していない。

第15層はNR1101・1401により削平を受けていたが、調査区の東半でわずかに遺存していた。本層以深は上位の地層と比べて非常に硬くしまっており、低位段丘構成層と考えられる。

第16層は調査区の東半でわずかに認められ、層厚60cmまでを確認した。上位の第15層とは不整合の関係にある。下部はシルト質極細粒砂で、上部は粘土に移化している。

3) 遺構と遺物

i) 弥生時代前期以前(図20～22・24、図版2)

第14層下面・第11層上面・第9層上面でそれぞれ自然流路を検出した(NR1401・1101・901)。これらはともに南東から北西側に向けて流れており、流路の埋没による地形の変化とともにその位置を変えていたことが観察された。

NR1401(図20) 調査区の西部で検出した幅10m以上、深さ1m以上の自然流路である。第15層の含極粗粒砂シルト質粘土で埋っており、遺物は出土しなかった。

NR1101(図21、図版2) 調査区の中央で検出した幅約7m、深さ0.8mの自然流路である。溝底にわずかに粘土質シルト層が認められ、その上を第10層の極粗粒砂が覆っていた。遺物は出土しなかった。

NR901(図22) 調査区の南西隅で北東肩を確認したのみで規模は不明である。深さは調査区内で1.6mあった。埋土の様子から徐々に埋ったことがうかがえる。第8層中から弥生時代前期の土器片が3点出土した。

52はそのうちの1点である(図23)。壺の体部片で、肩部に段を形成し、ここに1条、その下に2条、合わせて3条のヘラ描直線文を巡らす。色調は橙色で、胎土中にチャート・長石粒を多く含む。前期Ⅱに位置づけられる[田中清美2000]。

ii) 飛鳥時代(図23・24)

第7層の上面で不整形な土塊SK701・702を検出した。調査区の東壁沿いに南北に並んでおり、断面の観察によると一連の掘込みであることが確認できた。下部は埋戻し土、上部は第7層を母材とした作土層である。下部から土師器移動式甕54が、上部から須恵器平瓶53が出土した。

54は大きく広がる曲げ底を有するが、焚口の外縁にも幅3cm程の突帯が巡る特異な形態である。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に長石・チャート・赤色粒を主体に含む。53・54ともに7世紀代のものである。

iii) 鎌倉時代(図24)

耕作に係わると思われる南北方向の溝を6条以上検出した。第5層下面の遺構であるが、重機により第7層まで掘削したのちに検出したため、遺構は上部がかなり削平されている。検出面での



図20 第14層下面平面図

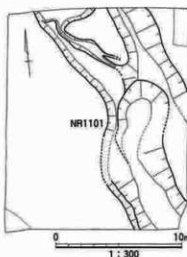


図21 第11層上面平面図



図22 第9層上面平面図

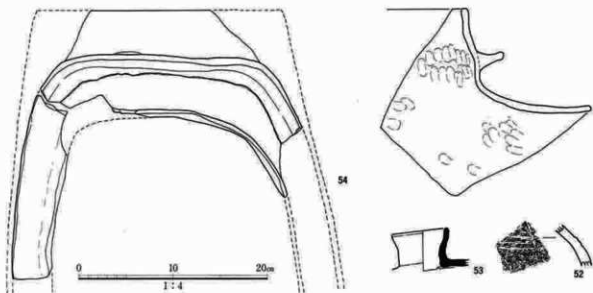


図23 UR90-12次調査出土遺物
第8層(52)、SK701・702(53・54)

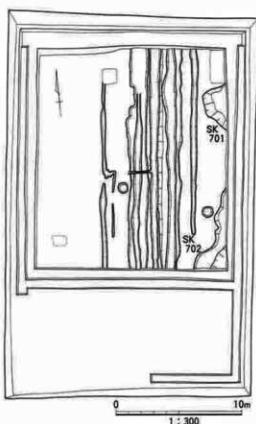


図24 第5層下面・第7層上面平面図

溝の幅は約1m、深さは約0.3mで、二段掘りになっている。溝の底に水つきのシルト層が認められ、畝の畝間であったと推定される。細片化した土師器・瓦器が少量出土した。

4) 小結

本調査では、地層の細かい観察により、沖積平野部の流路の形成と地層の堆積過程を把握することができた。期待された弥生時代の遺構・遺物はほとんど検出されず、当該期の集落域からは離れていたようである。また、SK701・702からは飛鳥時代の遺物が出土しており、周辺にこの時期の集落が存在していた可能性がある。

(大庭)

第5節 UR92-28次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(瓜破5丁目)は、遺跡西部地区の北東部に位置し、阪神高速道路から約200m東の瓜破小学校内にあり(図25)。1992年8月25日に行われた試掘調査の結果、弥生時代の包含層が確認され、従来の瓜破遺跡で確認されてきた集落との関連が予想されることから、調査が実施されることになった。

調査は1992年12月25日～1993年3月30日の間実施した。調査地は厚さ約50cmに盛土され、下位には現代・近世・中世とそれ以前の地層が順次堆積している。断面観察から、中・近世の地層は作土と判定し、これらを重機で除去した

のち、以深の地層を人力により順次掘下げていった。調査期間の後半では、縄文時代晩期の土器を多量に含む流路を検出し、瓜破小学校の児童を対象として調査の公開を行った。

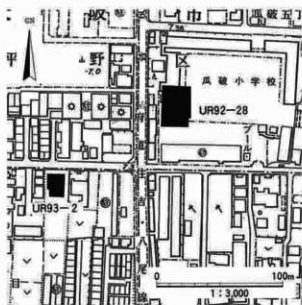


図25 UR92-28、93-2次調査地位位置図

2) 層序

i) 調査地の層序(図26・32、表4、図版3・5)

現代の盛土以下、後期旧石器時代までの地層が良好に残存していることが確認され、現地表下4.0mまでの地層を第1～19層に区分した(表4)。後期旧石器時代の遺物包含層を含む沖積層下部の地形は、敷地内では北東から南西にかけて急激に傾斜している。このことは、当該地が南東から北西に向って開く谷地形の北東側の傾斜変換点に当ることを意味している。したがって、以後の地層は、この谷地形を埋める過程で堆積した洪水層が母材となっている。以下、おもな層準の概略を述べる。

第1層は小学校の旧講堂建設のために行われた盛土、第2～5層は作土層である。調査地内ではほぼ水平に堆積しており、北東部では第5層の下面が地山の上面を削平している。各層の時期は出土遺物や地層の特徴から、第2層が現代、第3層が江戸時代、第4層が室町時代、第5層が鎌倉時代と考えられる。

第6・7層は調査区南西部にのみ分布しており、出土遺物から第6層が奈良時代、第7層が飛鳥時代から古墳時代にかけて形成された地層と考えられる。第7層は作土層で、第6層もその可能性がある。

第8層および第9層上部は水つきの状態で形成された地層、第9層下部は植物の根により攪拌され、暗色化した地層である。調査区の南西部に薄く分布しており、第9層はNR1101埋没後の窪地に比較

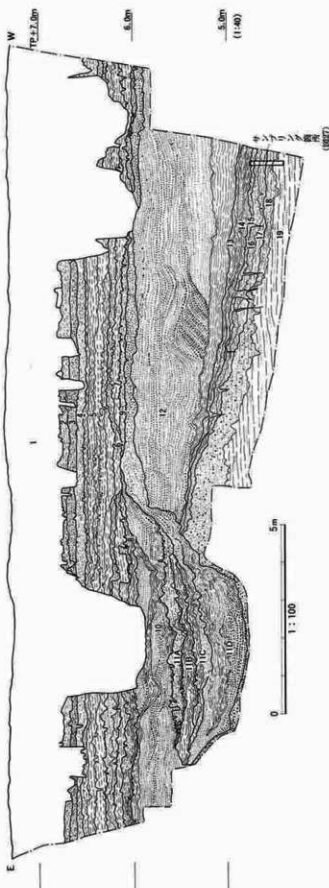


図26 UR92-28次調査地南壁断面模式図

的厚く堆積していた。第8層中から弥生時代後期後葉の土器、第9層中から同後期前葉の土器が出土した。

第10層はNR1101の上半部を埋積する水成層で、全体は粗粒な堆積物で占められるが、一部に暗色化した暗オリーブ灰色シルト層が認められた。基底の第11A層との境界付近では、一部に礫面からの踏込み痕が確認された。弥生時代前期の土器や石鏃を含む。

第11層はNR1101内を埋積する地層で、大きく第11A～11Dの4層に区別されるが、流路の肩および、流路の西側では細分不可能である。第11D層は流路の形成初期に堆積した河成の極粗粒砂層で、上位の第11A～11C層は静水状態と流水状態が繰り返される中で形成された地層である。第11C層は暗色化した下部層と水つきの上部層とに分けられ、上部層の上面には乾痕が見られた。第11B層も暗色化した下部層と水つきの上部層とに細分できる。下部層には一部にラミナが認められ、縄文時代晩期の船橋式土器が多量に出土した。第11A層は水つきの下部層と、上面の踏込みにより攪拌された上部層に分けられる。第11A層からは縄文晩期終末の長原式および弥生前期の土器が出土した。

第12層はNR1101の西側にのみ分布する水成層で、層厚は調査区の南西端で最大100cmとなる。シルトを主体とした下部層と、極粗粒砂を主体とした上部層とに分けられる。下部のシルト層が堆積した直後に形成された断層があり、地震の結果と考えられる(図32、図版5)。断層

表4 UR92-28次調査層序表

層序 番号	層序 概全図	層 相	層厚 (cm)	特 徴	おもな遺物	おもな遺物	時 代	調査 区番号 との関係
第1層		現代土	60	客土			現 代	
第2層		灰オリブ色含礫シルト質粗粒砂	10	作土			NG1	
第3層		灰オリブ色含礫シルト質粗粒砂	7	作土			江戸	NG2
第4層		オリブ灰色含礫シルト質粗粒砂	10	作土			室 町	NG3
第5層		上部：オリブ灰色含礫粗粒砂シルト 中部：暗灰黄色含礫シルト 下部：オリブ灰色含礫粗粒砂質シルト	30	作土	▼土器埋納土層1基、溝1条、井戸1基	土師器、瓦器	鎌 倉	NG4
第6層		暗オリブ色含礫粗粒砂質シルト	10	作土?	▼SK601~611	土師器、須恵器	奈 良	NG6
第7層		黄灰色含礫粗粒砂シルト	7	作土		土師器、須恵器	飛鳥・古墳	
第8層		灰白色シルト	8	水つき	→SF901	弥生後期後葉土器		NG7
第9層		上部：灰色含中～粗粒砂シルト、一部タナホ 下部：灰色含礫粗粒砂質シルト	≦13	水つき 暗色帯	→SD901~904, SX901~905	弥生後期前葉土器 石鏡・銅片	弥生後期	NG8A~B
第10層		褐色含礫粗粒砂～灰オリブ色含礫粗粒砂、一部暗色化		水成層	▽部込み →部込み	弥生前期-長尾式土器		NG8C
第11A層		上部：暗オリブ灰色含礫粗粒砂シルト 下部：暗オリブ灰色シルト	≦18 ≦10	作土 水つき		弥生前期-長尾式土器 石器	弥生前期	NG9A
第11B層		上部：灰色シルト 下部：暗色含礫粗粒砂質シルト	≦15 ≦20	水つき 暗色帯		船橋式土器、石器	縄文晩期	NG9B
第11C層		上部：暗色含礫粗粒砂シルト 下部：暗褐色含礫粗粒砂質シルト	≦10 ≦15	暗色帯 水成層	→乾重 →SP1103~1106、▼四神堀足跡	北白川上層B・B式 石器	縄文後・晩期	NG9C
第11D層		灰色含礫粗粒砂 上部：暗色～黄褐色含礫粗粒砂、下部：灰色含礫粗粒砂質シルト	≦25 ≦100	水成層 水成層	▽部込み ▽部込み			NG10-11
第12層		オリブ黒色含礫粗粒砂シルト	4	水つき	→SX1301	北白川C式土器、石器	縄文中期	NG12A
第13層		暗オリブ灰色含礫シルト～細粒砂	4	水つき				
第14層		灰色含シルト～細粒砂～粗粒砂	6	暗色帯		石鏡		NG12A-B
第15層		オリブ色含礫粗粒砂質シルト	4	暗色帯		田石器		
第16層		灰オリブ色含礫粗粒砂粘土～中粒砂質シルト	7	一部暗色	▽石器制作地			NG12/13
第17層		オリブ灰色含礫粗粒砂質粘土～含礫粗粒砂マトリックスシルト	≦30	一部暗色		田石器	後期田石器	NG13A-B
第18層		緑灰色含礫粗粒砂～細粒砂質粘土	≦30					NG15

→上面検出遺物、↓下部検出遺物、▼地層内検出遺物、▽基面検出遺物

は約3mの長さで明瞭な段として確認でき、断面では逆断層状になっている。

第13層以下は、第12層によって上面を保護された範囲にのみ分布する。したがって、分布範囲は調査区の南西部に限定され、しかも地形が南西に傾斜しているため、第13～15層は北・東側では細分できない。

第13・14層は水つきで堆積した地層で、第14層は極細粒砂～細粒砂、第13層は含極細粒砂シルトと細粒化しており腐植質である。第13層に伴う可能性のある土壌から、縄文時代中期末の北白川C式の土器が出土した。

第15層は灰色含シルト極粗粒砂、第16層はオリブ色極粗粒砂質シルト、第17層は灰オリブ色含極粗粒砂粘土～中粒砂質シルト、第18層はオリブ灰色極粗粒砂質粘土～含礫粗粒砂マトリックスシルトである。第15・16層は暗色帯で、第17・18層の最上部も暗色化していた。第15層と第18層の上面が比較的明瞭な境界面をなす。平面の掘削に先行して地層の概がけを行ったところ、各層に火山ガラスが含まれていることが判明し、細かい火山灰降下層との同定と地層の年代を検討するため、土層をブロックで持ち帰った。分析結果はii)で記述する。

19層は緑灰色含礫粗粒砂～極粗粒砂質粘土からなり、厚さ30cm以上ある。上面は境界が明瞭で、特に第18層が極粗粒砂になる部分では乾涸の発達が著しい。

(大庭)

表5 試料の観察結果

層準	試料	火山ガラス	角閃石	新鮮な長石	炭化物
第14層	1	極少	極極少	極少	少～中
第15層	2	少	極少	少	中～多
第16層	3	少	極少	少	多
第17層	4	中	少	少	中～多
	5	多	中	中	少
第18層	6	極多	多	中	中
	7	極多	多	中	少
第19層	8	多	中	少	極少

図27 サンプリング箇所模式図

ii) 椀がけ法による火山灰の降下層準の予察(図27、表5)

本調査で旧石器遺物が出土した第16～18層の形成年代を予察するために、第14～19層の堆積物中の火砕物等を椀がけ法により抽出し、実体顕微鏡下で観察した。

a. 試料と観察方法

資料は調査地南壁の西端でブロック採取してあった半乾き状態のものを用いた。試料の長さは36cmあり、1～6cm間隔をあけて、第14層最下部、第15層、第16層、第17層上部・下部、第18層上部・下部、第19層最上部の各層準からそれぞれ厚さ2cm、4～5gを採取し、上位より試料1～8とした(図27)。椀がけと標準篩により極細粒砂サイズの試料をシャーレに回収し、観察用試料とした。全般的な鉱物組成を概観した上で、火山ガラス、角閃石、新鮮な長石については、多・中・少の区分を目安に各試料を比較した。また、炭化物量も比較した(表5)。

b. 観察結果

ブロック試料全般に生物擾乱や古乾裂が入っており、第18層のあたりがもっとも著しかった。また、第15～17層上部は暗色化し、第18層の最上部にも薄く暗色化した部分があった。

火山ガラスはどの試料もほとんどが偏平型ガラスで、試料6・7で極めて多く、かつ比較的大きなガラス粒子がめだち、試料8へ、および5から1へ漸減する傾向が認められた。褐色透明ガラスはどの試料にも認められたが、試料5にやや多いようであった。

角閃石は試料6・7で多く、試料8へ、および5から1へ減少する傾向が認められた。どの試料も結晶面が風化して荒れたものが多かったが、試料5～7では自形～半自形結晶が比較的多く認められ、結晶面が新鮮なものもある程度含まれていた。

新鮮な長石は試料5～7で比較的多く、1では少なかった。

そのほか、試料6・7には、磁鉄鉱が多く認められた。また、炭化物は土色がもっとも暗色を示す地層の試料3で多く、次いで試料2・4・6が多かった。

c. 考察

瓜破台地の東側にある長原遺跡では、後期旧石器時代から後に降り積もった火山灰層・火山灰濃集

層準が知られており、近畿地方中部地域の火山灰層[吉川ほか1986]との対比が行われている[大阪市文化財協会1995・1997a]。低位段丘構成層最上部の平安神宮火山灰層(長原13Bii層、AT火山灰と対比されている)、沖積層中部の横大路火山灰層(長原12/13漸移帯、Ah火山灰と対比されている)などである。平安神宮火山灰層と横大路火山灰層は偏平型ガラスに富み、後者には褐色透明ガラスを多く含む特徴がある。阪手火山灰層は長石と角閃石を特徴とする。近畿地方中部地域にはこれ以外にも鬼虎川・港・BB 7の各火山灰層が知られているが、上記の2火山灰層に比べれば層厚はたいへん薄く、火砕物の供給量は少ないので、生物擾乱の著しい地層では、火砕物からこれらの薄い火山灰層を特定することは困難である。

さて、火砕物の増減からみると、火山ガラスと角閃石がともに減少する試料1～5は横大路火山灰層の堆積より後と考えられる。また、試料8はともに上位より減少するので、平安神宮火山灰の堆積より前と考えられる。平安神宮・阪手・横大路の3火山灰層の鉱物組成と試料1～8を比較すると、偏平型ガラスが極めて多く、かつ褐色火山ガラスを含み、角閃石・新鮮な長石も多い試料6～7付近が、これら3火山灰層の降下層準だと考えることができる。

さらに、透明褐色ガラスが試料5でほかよりやや多い点に注目すると、横大路火山灰層の降灰は試料5から下位で、6より上位であったと考えることができる。試料5と6の間にある第18層最上部はわずかに暗色化しており、古土壌であったと考えられる。試料6で炭化物が少し多くなるのはそのためではないだろうか。横大路火山灰層が堆積した約6,300年前は、瓜破台地は最終氷期以来の台地上にあって、長原遺跡側では黒ボクが形成されており、本調査地もよく似た土地条件であったと考えられる。したがって、横大路火山灰層が第18層上面に堆積した可能性を指摘することができる。

以上の考察を前提とすれば、第18層(試料7・6)は長原13A～B層(～12/13層漸移帯)、第17層(試料5・4)は長原12/13層漸移帯に対比することができ、第16層(試料3)から上位は長原12A～B層に対比できる可能性がある。したがって、また、第18層から出土した石器遺物は、2.5万年前から6,300年前までの中のある時期の年代が与えられ、器種・剥離技術・風化の程度などに矛盾がなければ、後期旧石器時代後半期の本来の層準から出土したとみてよいことになる。

しかしながら、第18層の生物擾乱は著しく、第18層そのものが第19層最上部の攪乱帯である可能性は否定できない。このことを踏まえれば、第17層出土の旧石器遺物は、それが下底面、すなわち第18層上面から出土したのであれば、後期旧石器時代の層準をとどめている可能性があるといえるが、そうでないもの、および第16層から出土したものは、本来の層準を遊離した二次的堆積物であると考えられる。

(趙哲済)

3) 旧石器～縄文時代中期の遺構と遺物

第13層以下の地層に伴う遺構・遺物を報告する。第13～18層は調査区南西部の後述するNR1101以西でのみ分布しており、地形は北東側から南西側に向って傾斜していた。検出した遺構は、第13層に伴うと判断される土壌1基で、第13～18層から後期旧石器時代から縄文時代中期にかけての石器遺物が出土した。



図28 第13～15層下面平面図

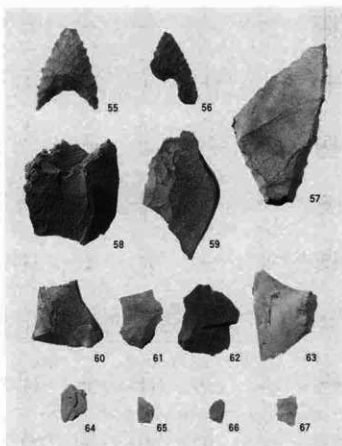


写真6 第13～18層出土石器遺物(原寸)

i) 石器遺物(図28・29・34、写真6、図版3・22)

先述したように、第13層以深を平面掘削するにあたり、先行して掘下げた断面観察用トレンチで、第17層を前後する地層に比較的多くの火山ガラスが含まれることが判明し、また上位の地層から旧石器が複数出土した。したがって、旧石器遺物の捕集を目的に調査を進め、掘削中に出土した遺物は、出土状態のまま土柱の状態に残した。そして遺物が含まれる地層の検かけを行い、含まれる火山灰の組成を肉眼により確認し、出土層準を確定していった。その結果、第13～18層から合計14点の石器遺物を検出することができた。

横大路火山灰降下層準と判断される第17層より下位の層準から出土した遺物は、58・63・65～67・73の6点で、すべて第18層からの出土である。

調査区の中央付近では、1.5m四方の範囲内でまとまる石器集中部があり、65～67が出土した。この範囲内から出土し、細かい層準の判別が出来なかった61と64も、本来は第18層に伴うものであった可能性がある。いずれもサヌカイト製のチップである。分布状況から後期旧石器時代の石器製作址であった可能性がある。

これらと同一層準の遺物には、石器集中部より南側約4mの地点で63・73が、さらに約2m南側で58がある。ともにサヌカイト製の剥片である。

第13～17層から出土した石器遺物は6点である。62が第13層、57・60が第13～14層、55・56・

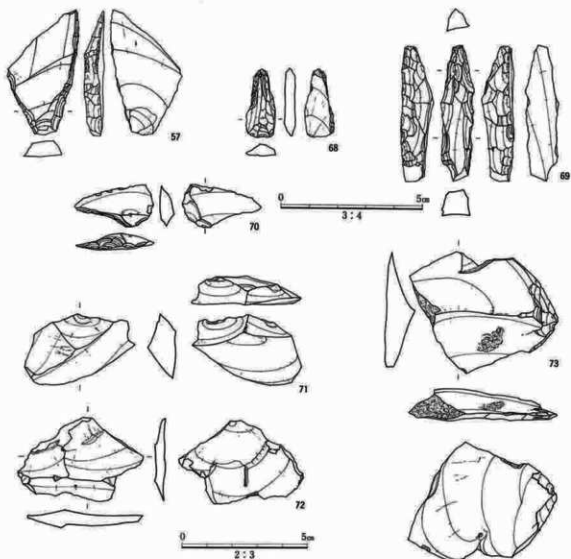


図29 旧石器時代の遺物

第13～14層(57)、第6層(68・70)、第5層(69・71・72)、第18層(73)

59が第15～17層から出土している。トウールは55～57のみで、その他は剥片である。55・56は凹基無茎式石鏃で、ともにやや細長い。逆刺は55が突出し、56が丸みをもっている。縄文時代中期を前後する時期のものであろう。57は切り出し形のナイフ形石器で、全長4.6cm、最大幅2.3cm、厚さ0.7cmである。翼状剥片を素材としていると思われる、サヌカイト製で、表面の風化が進んでいる。後期旧石器時代のものである。

以上が第13層より下位の地層から出土した石器遺物であるが、これ以外にも、奈良～鎌倉時代の地層から旧石器時代の石器遺物68～72が出土している。68・70は第6層、69・71・72は第5層からの出土である。

68は剥片の末端に両側から調整剥離を行っている。加工部分に使用痕は認められず、用途は不明である。69は角錐状石器で、横長剥片を素材としている。素材の背面側の調整には稜上剥離が見られる。70～73は底面をもつ横長剥片である。典型例ではないが、打面調整や背面の状況から翼状剥片と考えられる。これらはすべてサヌカイト製であり、表面の風化が進んでいる。

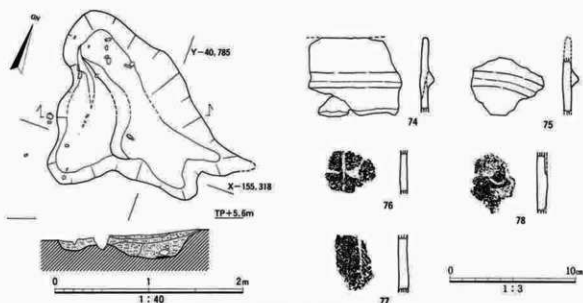


図30 SK1301平・断面図と出土遺物

ii) 土壌(図28・30、図版22)

SK1301 調査区北西部の第13～15層下面で検出した、最大径2.0m、深さ0.5mの不整形な土壌である。地層が細分されない地点であるため正確な層準は判別できなかったが、出土遺物の時期から第13層に伴うものと考えられる。土壌の底は焼けており、埋土にもわずかであるが炭化物を含み、土壌内で火を焚いたと考えられる。土壌内部とその付近から縄文土器の破片が散在した状態で出土した。胎土の特徴から一個体分のものと考えられ、74～78を図化した。

74は口縁部で、口縁部から下がった位置に突帯を貼り付けている。突帯は口縁部に対し平行に巡っているが、同じ部位と思われる75では下方に弧を描いている。76～78は体部の破片である。76・77には区画帯の一部と考えられる縦方向の沈線文があり、77は沈線の片側部分に縄文が施される。また、78には円弧状の沈線文が見られる。色調は灰黄色で、胎土は粗く、直径2mm前後の角ばった長石・石英・チャート粒を多く含む。縄文時代中期末の北白川C式に属する。

4) 縄文時代後期～弥生時代前期の遺構と遺物

第10層および第11A～11D層に伴う遺構・遺物を報告する。

i) 自然流路(図31・32、図版4・5)

第10層の水成層を除去後、これによって覆われた自然流路NR1101を検出した。幅約8.0m、深さ約1.2mで、調査地内の中央を南東から北西方向に流れていた。埋土は第11A～11D層に区分され、第11D層が流路の形成初期に堆積した水成の灰色極粗粒砂、第11C層が下部の黒褐色極粗粒砂質シルトと上部の黒色含粗粒砂質シルト、第11B層が下部の暗色化した黒色極粗粒砂質シルトと上部の水つきの灰色シルト、第11A層が下部の水つきの暗オリーブ灰色と上部の攪拌をうけたオリーブ灰色含粗粒砂シルトとからなる(図版5)。後述するように、流路を埋める第11A～11C層から縄文時代後期から弥生時代前期までの土器が出土し、特に第11B層下部の粗粒砂を中心に縄文時代晩期の船橋式土器

が多く出土した。

NR1101の西岸の第11C層基底では、多数の偶蹄類の足跡を検出した(図版5)。第11C層では砂とシルトの攪拌が認められ、地層を攪拌した原因の一部は動物の行動に求められよう。一方、流路中央では本層の下面が平坦で第11D層のラミナを切っている場所があり、後述するように流路内で土壌が複数見つかっていることから、人の手が加わった可能性もある。

また、第11A層上面では、NR1101は深さ約0.2mの浅い窪地として残っており、この窪地内の全面にわたって小さな凹みが認められた(図版4)。ヒトの足跡と判定できるものも一部あった。凹みの埋土にはラミナが明確に確認できるものと、砂やシルトが攪拌さ

れた状態で埋っているものとがあり、後者は第10層の堆積初期に砂の上から踏み込まれたものであろう。

ii) 自然流路出土遺物(図33・34、図版21・22)

第11C・11B・11Aの各層から土器・石器が出土した。まず土器について出土層準毎に、次いで石器についてまとめて記述する。

第11C層からは79～82が出土した。

79は口縁端部を肥厚させ、端部外面に爪形文およびD字のキザミメを施す深鉢である。外面は条痕、内面は植物繊維状の原体で横方向にナデている。胎土は比較的精良で、直径2mm前後の長石・石英粒

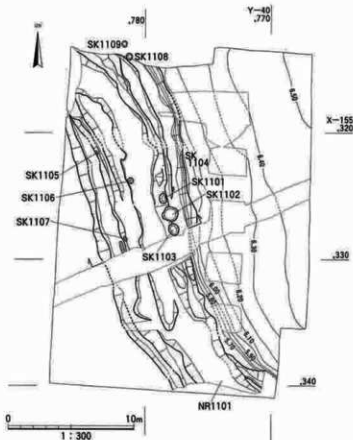


図31 第11D層下面平面図

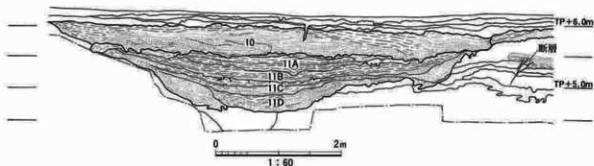


図32 NR1101断面図

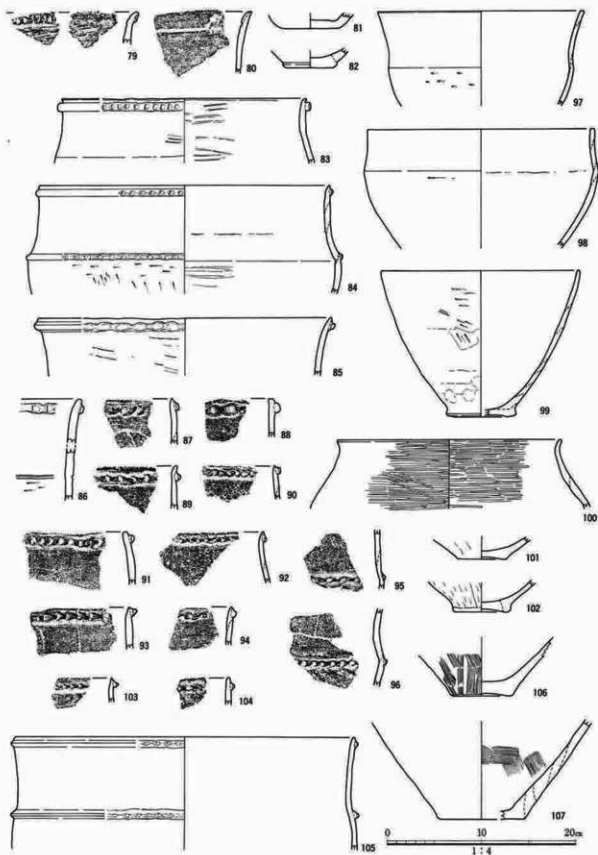


圖33 NR1101出土遺物
第11C層(79~82)、第11B層(83~102)、第11A層(103~107)

を含む。80は口縁部の内面に横方向の沈線を巡らし、その上位に縄文を施す浅鉢である。外面にはミガキ様のナデを施す。角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土である。81・82は平底の底部で、胎土は非生駒西麓産である。80が縄文時代後期北白川上層Ⅱ式ないしⅢ式にさかのぼるほかは、晩期に下るものであろう。

第11B層からは比較的多くの土器がまとまって出土した。83～96は突帯文をもつ深鉢、97・98は突帯をもたない深鉢、99は直口の浅鉢、100は広口壺、101・102は平底の底部である。

器形がある程度わかる84は2条の突帯を有し、下段の突帯を貼り付けた位置で肩部が屈曲し、上半が内湾する。83も肩部に突帯を貼り付けた痕跡と思われる横方向のナデが残っており、同様の形態と思われる。95・96についても、突帯付近で明瞭に屈曲している。これら以外は口縁部の破片である。口縁端部をていねいに面取りしたものは認められず、83・89は端部をわずかに外反させている。口縁部下の突帯は、口縁端部より下がった位置に貼り付けたものがほとんどで(83～91)、突帯の上側と口縁端部の内面をつまむようにナデる92～94も少数認められる。突帯とキザミメの形状は幅広い突帯上にD字のキザミメを施す83・86・89・91、同じく指頭によって突帯を押しつぶす85・87・88、断面三角形の低い突帯上にD字もしくはO字のキザミメを施す84・92・94、断面三角形の突出した突帯上に深いD字のキザミメを施す93とバラエティに富む。97・98は肩部で屈曲し、上半が内湾する深鉢で、外面の調整は屈曲部より上がナデ、下がケズリである。

99は屈曲部をもたずに直線的に開く浅鉢で、底は平底である。口縁部下に横方向のケズリを施す。

100は黒色磨研の土器で、「浅鉢変容型」の広口壺とされるものであろう[藤尾慎一郎1990]。肩部が緩やかに屈曲し、口縁部は内傾したのち端部付近で短く外反する。内外面の調整は細かい横方向のヘラミガキである。外面に黒色物質が付着しており、煤の可能性はある。

これらの土器は、胎土の特徴から複数のグループに分けられる。角閃石を多く含む生駒西麓産の個体は92・93・98・99の4点のみで、それ以外は非生駒西麓産である。中でも主体となるものは、色調が灰褐色ないし灰黄褐色を呈し、胎土中にやや風化の進んだ長石を中心に石英・雲母・チャート粒を含む個体で、83・84・87・89・91・95・96・101の8点である。これらは在地産であらう。ほかにも、灰白色を呈し、胎土中に長石を主体に雲母・赤色粒を含む85・88、風化のほとんど進んでいない直径3mm前後の長石粒を多く含む90・94、結晶片岩粒を多く含む97・102、風化の進んだ雲母粒を多量に含む86がある。また、100は胎土が精良で、ほかの土器とは様相を異にする。

以上の第11B層出土土器は、長原式に先行する要素をもち、船橋式の範疇に含まれるものであろう。口縁部や突帯の形状に見られるバラエティは、胎土の特徴と対応する場合が多く、細かな地域差を反映している可能性がある。

第11A層から出土した遺物は少ない。図化できたものは103～107の5点である。

103～105は突帯文を有する深鉢である。器形のわかる105は口縁部下と肩部に二条の突帯を巡らし、体部は肩部突帯付近で緩やかにカーブしている。口縁部下の突帯は、103が口縁端部に接して、104・105がやや下に貼り付けている。突帯の形状は断面三角形で突出が弱く、突帯上に小型で浅いO字のキザミメを施す。また、第11B層出土土器と比べて器壁が薄い。103・104の胎土は生駒西麓産であ

る。105も生駒西麓産の胎土に類似するが、角閃石が微量しか含まれない。これらは長原式に属するものであろう。

106・107は平底の底部である。ともに底部は厚く、106が外面にタテハケ、107が内面にナナメもしくはヨコハケの調整が残る。色調は106が灰白色、107が浅黄色で、胎土中に2mm前後の長石・石英・チャート粒を含む。これらは遠賀川式土器の壺底部と考えられる。

土器以外の出土遺物には石器遺物がある。116が第11A層、108・110～112が第11B層、109が第11C層からそれぞれ出土した。

116は凹基無頸式の石鏃で、平面形態は縦長の二等辺三角形である。サヌカイト製で、残存長は3.4cmある。

108～112はいずれもクサビに関連する資料である。108・110～112はクサビ本体であり、リング・フィッシャーの発達した剥離面が周縁を取巻くものである。特に111・112は小型のもので、クサビの使用方法を考える上で興味深い例である。109は背面がやや風化の進んだ剥離面によって構成され

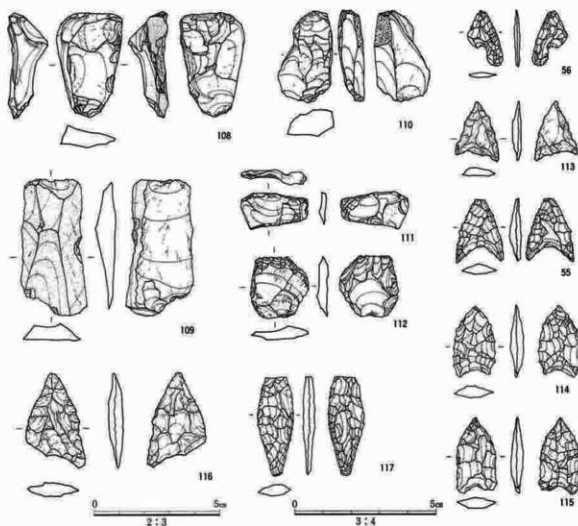


図34 縄文～弥生時代の石器遺物

第5層(117)、第6層(114)、第9層(115)、第11層(113)、第11A層(116)、第11B層(108・110～112)、第11C層(109)、第15～17層(55・56)

るクサビの剥片である。クサビ使用時にできた剥離面はネガティブで、この剥片がクサビ本体からはじけたものであることを示している。図示した上端が打縁である。刃縁は加撃やその他の折れによって失われているが、下方からの衝撃によって形成された打点の近い剥離面があり、さほど大きく失われたわけではないようである。古い時代の石器を再利用してクサビに使用したものと考えられる。ともにサヌカイト製である。

iii) 土壌(図31・35、写真7、図版22)

SK1101~1107 NR1101内の第11C・D層下面で複数の土壌を検出した。SK1101~1103は流路の東斜面から下端にかけて確認された、直径0.7~1.1m、深さ0.3~0.7mの円形の土壌で、流路に沿って並んでいた。いずれも埋土は灰色中粒砂を主体とし、ラミナが認められる。SK1102から型式不明の縄文土器の細片が出土した。SK1104~1107は直径0.5m未満の小土壌である。流路中央のSK1106は、直径0.5m、深さ0.1mあり、埋土は第11C層に由来する水つきの黒色シルトである。遺物は出土しなかったが円形の小穴で、人為的なものであろう。

SK1108・1109 調査区北西部のNR1101東肩からはずれた位置の第11層下面で、SK1108・1109を検出した。この範囲では第11層が細分されず、遺構の細かい層準は確認できなかった。

SK1108は直径0.4m、深さ0.3mの円形の土壌で、埋土の上半部から縄文土器118が出土した(図35、写真7、図版22)。比較的大きな破片であり、体部から上が残存していた。

118は口径29.1cmの一条突帯の深鉢である。突帯は口縁端部よりやや下がった位置に貼り付けており、突帯上にD字のキザミメを施す。口縁端部は面取りを行っておらず、丸くおさめている。肩部には沈線を一条巡らし、これより下位に横方向にヘラケズリ調整を行う。器形は肩部の沈線付近で緩やかにカーブし、口縁部はやや内傾している。色調は黄灰色を呈し、直径2mm以上の褐鉄鉱・酸化黒雲母・長石粒を多量に含み、ほかに角閃石粒を少量含む。風化した混和材を多く含むという特徴をもち、器形からも他地域からの搬入品と考えられる。NR1101の第11B層から出土した86はこれと器形や胎土が類似している。したがって118も船橋式に属するものであろう。

SK1109は直径0.6m、深さ0.5mの円形の土壌で、埋土の基底には炭化物を含む水つきのシルトが堆積していた。SK1108同様、縄文時代晩期と考えられる土器の小破片が出土した。

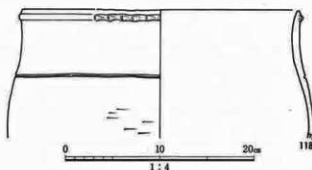


図35 SK1108出土遺物



写真7 SK1108検出状況

iv) その他の出土石器(図34、図版22)

第11層中から113が出土した。また、遊離資料であるが、第6層から114が、第9層から115が出土した。

113・114・115はサヌカイト製の平基無茎式石鏃である。113は基部がわずかに欠け、逆刺は鋭い。114・115は平面が五角形に近い形態で、作用部の先端が欠け、切先が突出する。同様の石鏃は第6層からもう1点出土している。この形態の石鏃は長原遺跡標準層序の長原9C層から多く出土しており、縄文時代晩期のものと考えられる[菅栄太郎1995]。

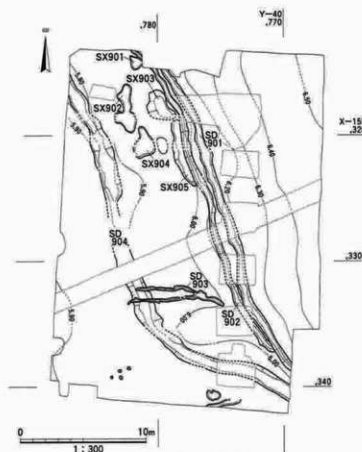


図36 第9層下面平面図

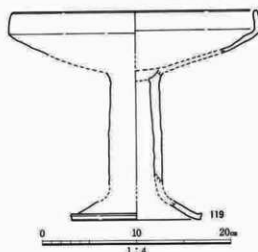


図37 SD901出土遺物

5) 弥生時代中～後期の遺構と遺物 (図34・36・37、図版22)

第9層は第10層の堆積後にその上部が土壌化して形成された地層である。本層の上面を精査したが明確な遺構は検出されず、調査区南東隅から北西隅にかけて浅い窪地となっていた。これは第11層の流路の影響である。第9層の下面では、SD901～904、SX901～905を検出した。

SD901・902 南東～北西方向の溝で、検出面ではともに幅0.6m、深さ0.1mあった。これらは地形の変換点付近で傾斜に平行して掘削されており、溝底は北に向って若干低くなっている。SD902が古く、SD901が新しい。

SD902からはサヌカイト製の石鏃や剥片が出土しており、SD901からは弥生時代後期の高杯119が出土した。

119は口縁部と脚柱部、脚柱部がそれぞれ接合しないが、胎土の特徴から同一個体と判断した(図37)。浅い杯部から口縁部が直立して短く立ち上がり、長い柱状部を有する形態である。弥生時代後期前葉のものである。SD903 地形の傾斜に直交する東西方向の浅い溝で、西側の低い方が二股に分かれている。水成層で埋っており、遺物は出土しなかった。

SD904 南東から北西に向って蛇行する溝で、検出面では幅1.0～1.5m、深さ約5cmあった。埋土は一部に水成の極粗粒砂を含む水つきの堆積物であり、植物の影響で暗色化している。下位の第10層が堆積した後、溝状に窪んでいた部分にたまったものであろう。

SX901～905 調査区北半に集中し、どれも深さが検出面で5cm以下と浅かった。SD904同様、第10層の堆積後の小さな窪みが植物の影響で暗色化したものと考えられる。

石器 117は第5層から出土したサヌカイト製の凸基無茎式石鏃である(図34)。切先は欠損している。本来の地層に伴うものではないが、弥生時代中期の所産であろう。

6) 奈良時代の遺構と遺物(図38)

奈良時代の遺物を包含する第6層の分布は、TP+6.3m付近よりも低い調査区西半の範囲に限られる。遺構は第6層下面で検出したSK605～610、SD601～603がある。また、第6層が分布しない調査区東半の高い部分では、第5層基底面で土壌SK601～604を検出した。埋土の状況から第6層下面遺構と同時期と判断できる。

SK601～610 直径が約0.5m、深さ0.1mのものと、直径約0.2m、深さ約5cmと小規模のものがある。SK604の埋土からは奈良時代の須臾器甕片、SK607からは土師器、移動式甕片などが出土した。

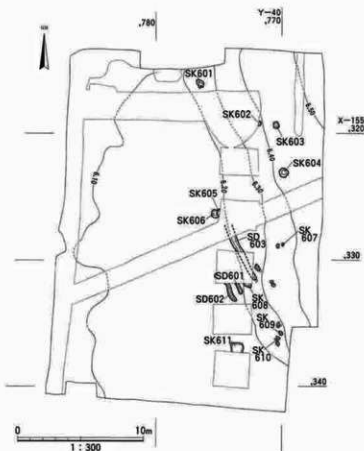


図38 第6層下面平面図

SD601～603 検出面での幅0.3m、深さ5cmの浅い溝で、地形の傾斜に沿って並んで検出した。遺物は出土しなかった。

7) 小結

本調査では、流路内からの出土ではあるが、縄文時代晩期終末の長原式に先行する突帯文土器の一括資料を得ることができた。これらは船橋式に併行するものと考えられ、瓜破台地周辺の縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての動向を知る上で、重要な資料となろう。また、火山灰降下層率の同定によって後期旧石器時代の遺物を含む地層を確認することができた。遺跡内ではこれまで遊離資料として後期旧石器時代の遺物が出土しているが、本調査地のような谷内部もしくは台地斜面部では、この時代の遺物を含む地層が残存している可能性があろう。(大庭)

第6節 UR93-2次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(瓜破6丁目)は、前節で報告したUR92-28次調査地の西側100mに位置する(図25)。試掘調査の結果、UR92-28次調査同様弥生時代以前の地層が良好に遺存していることが判明し、1993年4月19日～同年5月21日の間、調査を実施した。

調査は低位段丘構成層上部までの地層を確認するため、掘削深度が約3mに及ぶことが予測された。そのため、調査期間とのかねあいから、現代客土以下第4層までの地層と、水成層である第6・8層を重機により掘削し、作業効率を高めた。

2) 層序(図39、表6)

現地表下約3.0mまでの地層を第0～15層に区分した。

第0層は現代の盛土、第1～3層は現代から鎌倉時代までの作土層である。第4層についてもラミナ構造が認められないことから、作土層の可能性が高い。第4層からは須恵器の細片が出土した。

第5層は暗色帯で、下面で生物擾乱が顕著に見られた。調査区北西端では本層最下部から切込まれる自然流路NR501を検出し、第5層下面で検出した遺構の埋土中から弥生時代中期の石畿が出土した。

第6層は層厚が約40cmの水成層で、調査区東南部では粗粒砂、北部ではシルトに移化していた。第8層は層厚が約50cmの水成層で、下部にシルトが堆積したあと、その上を含礫粗粒砂が覆っていた。本層の上位には水つきの状態で堆積した第7層が調査区全域に薄く分布していた。

第8層の下位には、層厚が20cmと比較的厚い暗色帯(第9層)が見られた。第10層の最上部が植物擾乱されたものと考えられる。第10層は層厚が30cmの水成層で、下部は極粗粒砂、上部は極細粒砂

表6 UR93-2次調査層序表

層序 番号	層序 概略	層 相	層厚 (cm)	特徴	おもな遺構	おもな 遺物	時代	UR92-28 次調査地 との対応
第0層	現代盛土		40	客土			現代	第1層
第1層	黒褐色含粗粒砂細粒～極細粒砂		40	作土				第2層
第2層	オリーブ褐色～暗オリーブ色含極粗粒砂細粒～中粒砂		20	作土	↓耕作溝		室町・鎌倉	第4・5層
第3層	オリーブ褐色含極粗粒砂シルト		15	作土				
第4層	にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂質シルト		10	作土?			須恵器	飛鳥・奈良
第5層	暗褐色中粒砂質シルト～中粒砂		5～10	暗色帯	↓SD501, SX501, NR501	石畿	弥生中期	第6・7層
第6層	黄褐色含粗粒砂シルト～粗粒砂		40	水成層				第10層
第7層	暗オリーブ灰色細粒砂質シルト～シルト質細粒砂		10	水つき				第11A層
第8層	灰オリーブ色シルト～含礫粗粒砂		50	水成層				第11B層
第9層	上部:黒色シルト、下部:黄灰色シルト		20	暗色帯				第11C層
第10層	オリーブ灰色極細粒砂質シルト～極粗粒砂		30	水成層				第12層
第11層	オリーブ黒色含粗粒砂火山灰・中粒砂質シルト		10	水つき				第13層
第12層	黒褐色含礫火山灰・中粒砂質シルト、褐色透明ガラス含む		5	暗色帯				第17層
第13層	灰色含礫中粒砂質シルト		10					第18層
第14層	オリーブ灰色粗粒砂質シルト		15					
第15層	灰色砂礫		≥25					第19層

↓下面検出遺構

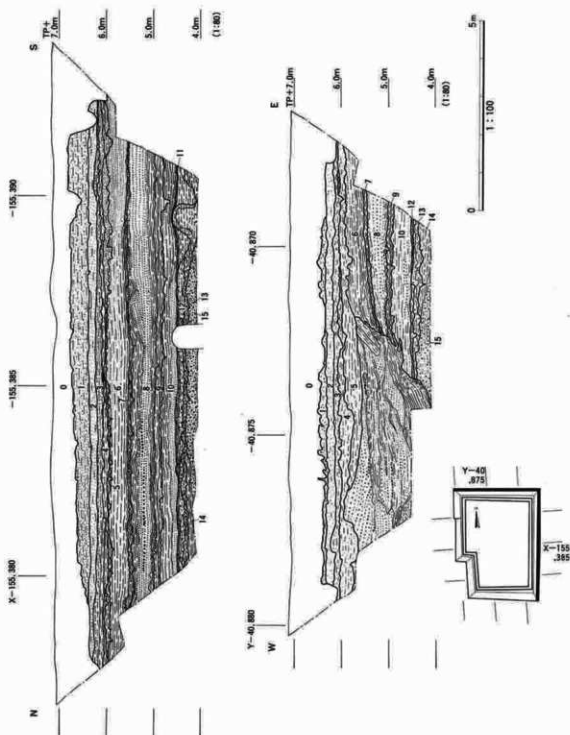


図39 UR93-2次調査北・東壁断面模式図

質シルトに移化していた。第11・12層は調査区全域に分布する暗色帯である。第11層は水つきのオリープ黒色含粗粒砂中粒砂質シルト、第12層は黒褐色含礫中粒砂質シルトで、ともに火山灰を含み、特に第12層には褐色透明ガラスが多量に見られた。前節で報告したUR92-28次調査の第17層に対応すると考えられる(表6)。本層下面で遺構検出を行ったが不整形な土塊状の窪みが多数検出されたのみであり、出土遺物もなかった。

第13層以深は低位段丘構成層と考えられる。層相は第13層が含礫中粒砂質シルト、第14層が粗粒

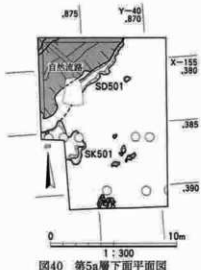


図40 第5a層下面平面図

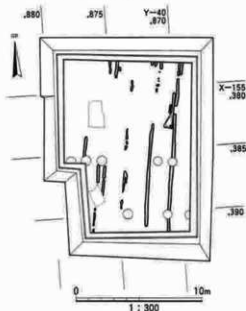


図41 第3層下面平面図

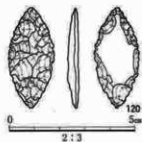


図42 SK501出土遺物

砂質シルト、第15層が砂礫であった。第15層は厚さ25cmまで確認したが、下限は不明である。遺構・遺物は検出されなかった。

3) 遺構と遺物

i) 弥生時代(図40・42、図版6・23)

第5a層下面でSK501・SD501を、第5b層下面でNR501を検出した。

SK501 調査区西部で検出した長径3.3m、深さ0.1mの不整形な土壌である。埋土中からサヌカイト製の凸基無茎石鏃120が出土した(図42、図版23)。全長4.0cm、最大幅1.8cmで、重さは2.7gある。弥生時代中期のものであり、SK501もこの時期の可能性がある。

SD501 調査区北西部で検出した南西―北東方向の溝で、幅が最大で0.6m、深さが0.1mある。後述するNR501が埋没後の窪地に形成されたものであろう。遺物は出土しなかった。

NR501 調査区北西部で検出した南西から北東に流れていたと考えられる自然流路である。幅5m以上で、深さは約2mあった。最下部に黒色極細粒砂質シルトが堆積したのち、植物遺体を多く含む粗～極粗粒砂で埋っていた(第5b層)。遺物は出土しなかった。

ii) 鎌倉時代(図41)

作土である第3層の下面で、幅15cm、深さ10cm程度の

南北方向の溝を複数検出した。溝は約1.7m間隔で併行しており、畝の畝間と考えられる。溝内から瓦器・土師器の細片が出土した。

4) 小結

本調査地の第5層以下、すなわち弥生時代以前には、沖積作用が顕著であり、その間の暗色帯では人為の痕跡はまったく認められなかった。調査地周辺は、段丘面から沖積平野側に下った位置にあり、UR92-28次調査地(本章第5節)でみられたような人間の活動域からは離れていたようである。

(大庭)

第7節 UR86-28次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(瓜破町1丁目)は、遺跡西地区の北端に位置しており、北側が瓜破北遺跡の南東部と接している(図43)。これまで調査がほとんど及んでいない地域であったが、試掘調査の結果、奈良～平安時代以前の地層が良好に残存していることが判明したため、1987年1月20日から調査を実施して、同年2月10日に調査を終えた。建物建設予定部分の南北14m、西18mの範囲を調査区とした。調査の方法は、鎌倉・室町時代の作土層(第4層)までを重機で掘削し、これ以後を人力掘削して、遺構・遺物の検出を行った。



図43 UR86-28次調査地位位置図

2) 層序(図44、表7)

現地表下3.1mまでの地層を、第0～11層に区分した。各層の特徴は表7の通りである。

表7 UR86-28次調査層序表

層序 番号	層序 概念図	層 相	層 厚 (cm)	特 徴	おもな遺構	おもな遺物	時代	UR92-23次 調査地との対応
第0層		灰色砂礫混りシルト	110	客 土			現代	第1層
第1層		灰色砂礫混り粘土	20-40	作 土			近・現代	第2層
第2層		灰白色砂礫混りシルト	15	作 土			江戸	第3層
第3層		灰白色粘土	20	作 土				
第4層		黒灰色粘土角礫混り淡灰色粘土	15	作 土			鎌倉・室町	第4・5層
第5a層		灰黒色粘土	10	暗色帯	SX501埋土 ▼ SD501、小穴	土師器・須恵器・瓦	平安	第6層
第5b層		灰色粘土	10	水成層				
第5c層		灰黒色粘土	10	暗色帯				
第5d層		淡灰色粘土	30	水成層				
第5e層		灰色粘土	10-20	暗色帯				
第5f層		灰色砂礫混り粘土	10	水成層	SX501埋土 ▼ SD501、小穴	石蔵	弥生後期	第8-9層
		灰色砂礫、暗灰色粘土の薄層挟在	≦50			弥生後期土器		
		黒灰色砂混り粘土質シルト	≦20			弥生後期土器		
		灰色砂礫、粘土角礫含む	≦10					
第6a層		黄白色砂礫、上部は白色シルト	≦150	水成層	NR601	縄文晩期土器	縄文晩期	
第6b層		灰白色シルト質粘土、上位はシルト	20	水成層				第11層
		橙黄色を帯びた灰白色粘土	15					
		よごれた灰白色粘土	10					
第7層		黒色粘土質砂礫、上部は砂礫混り粘土	25	暗色帯				
第8層		灰白色シルト～砂礫	30-60	水成層				第12層
第9層		黒色粘土～砂混りシルト	10-20	暗色帯				第13層
第10層		よごれた灰白色粘土質シルト	10					第14層以下
第11層		灰白色シルト混り粘土	≧30					

▼地層内検出遺構、↓下面検出遺構

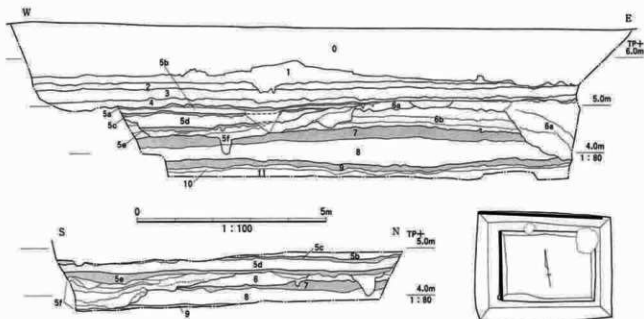


図44 UR86-28次調査北・西壁断面図

第0層は現代の盛土、第1～4層は現代から鎌倉時代までの作土層である。

第5層は調査区のほぼ全域に広がる落込みSX501内の堆積物で、第5a～5f層に細分できる。第5f層はSX501の形成初期に堆積した水成層で、調査区南西部に分布する。南西端では下位の地層を大きく挟っており、粘土の偽礫を含む砂礫、粘土質シルト、砂礫、砂礫混り粘土の順に堆積している。本層内から弥生時代後期の土器および弥生時代中期の石畿が出土した。第5e層はこの上位にある暗色化した粘土層で、SX501内のほぼ全域に分布する。本層より上位は細粒な堆積物からなり、水つきの状態で徐々に堆積したと考えられる。最上部の第5a層は、SX501が埋没する最終段階に形成された暗色帯で、SX501の外側にも分布していた。本層からは平安時代の須恵器や瓦が出土した。

第6層は水成層で、第6a・6b層に区分できる。上部の第6a層は調査区東部で検出した自然流路NR601を堆積する粗粒な堆積物である。NR601の外側ではシルトに移化しており、かたくしまっていた。本層内から縄文土器の破片が3点出土した。下部の第6b層はシルト～粘土で、色調から3層に細分できる。

第7層以深は、自然状態で堆積した地層で、人為の痕跡はまったく認められなかった。第7層は粘土質砂礫を主体とした暗色帯で、上部は砂礫混り粘土に移化している。第8層はシルト～砂礫からなる水成層で、調査区中央が粗粒で、東西側方へ細粒化している。第9層は粘土～砂混りシルトからなる暗色帯である。

第10・11層は水成層で、第10層は汚れた灰白色の粘土質シルト、第11層はシルト混り粘土層である。第11層は層厚が30cm以上あり、下限は不明である。

3) 遺構と遺物

i) 縄文時代(図45・47、図版6・23)

NR601 調査区内で北屑を検出した自然流路である。幅4.0m以上、深さ1.7m以上ある。北から南西側に蛇行して流れていたと思われる。埋土は下部に黄白色砂礫、中部に灰白色シルト、上部に黄白色砂礫が堆積していた(第6a層)。最下部層には黒色砂礫混り粘土の偽礫が多く含まれる。埋土から縄文土器の破片が3点出土した。このうち図化しえた133は、口縁部が内湾する浅鉢と考えられる(図47、図版23)。口縁端部を指頭により押圧している。色調は褐灰色で、胎土中に長石・石英粒を含む。縄文時代晩期のものと考えられる。

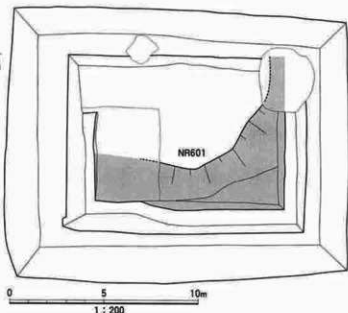


図45 第6a層下面平面図

ii) 弥生～平安時代(図46・47、図版6・23)

SX501 調査区の西半で南北方向に深く、中央付近で東側に枝分かれする落込みである。調査区南西端では埋土最下部の第5f層が下位層を大きく挟っており、南西側へ低くなる自然の谷地形もしくは流路があった可能性がある。この第5f層からは弥生時代後期の土器がまとまって出土した。

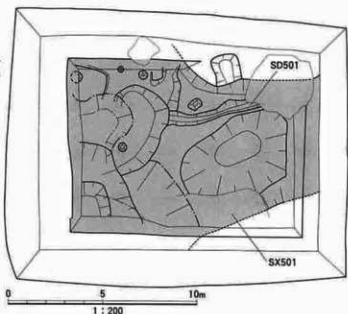


図46 第5層下面平面図

第5f層堆積後、SX501は第5e～5f層によって徐々に埋っており、これら

の層から遺物は出土しなかった。しかし、埋没の最終段階に形成された第5a層から平安時代の須恵器・瓦が出土しており、SX501は比較的長期間形状を留めていたものと思われる。

SX501出土遺物 第5f層から121～125・134が、第5a層から126～132が出土した(図47、図版23)。

121・122は長頸壺の口縁部、123は高杯、124は脚台を有する鉢、125は甕の底部である。123は短く外反する有段の口縁部をもち、脚裾部が急激に広がる高杯である。脚裾部には円形のスカシ孔を4方向に穿つ。外面および杯部内面にはミガキがほどこされ、口縁部外面のミガキは鋸歯状を呈する。弥生時代後期中葉に属するもので、ほかの土器もほぼ同じ時期のものであろう。134はサヌカイト製の凸基有蓋式石甕で、全長4.1cm、重量は4.4gある。弥生時代中期のものである。

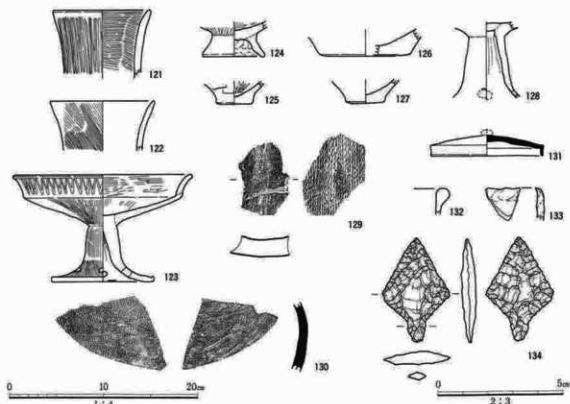


図47 UR86-28次調査出土遺物
SX501(121~132、134)、NR601(133)

第5a層から出土した遺物のうち、地層の時期を示すと考えられるものは129・131・132である。131は須恵器壺蓋で9世紀代のものである。129は平瓦の破片で、凹面に布目の圧痕、凸面に縄目の圧痕が見られる。表面は灰色であるが、断面は橙色を呈し、焼きが甘い。132は製塩土器の口縁部の破片である。126~128・130は古い時期の遺物の混入品である。126~128が弥生時代後期の土器で、第5f層から出土した遺物とはほぼ同時期のものである。130が須恵器甕の体部の破片で、外面に縄文タタキ、内面にナデを施す。5世紀代の陶質土器と考えられる。

SD501 調査区北部の第5e層内で検出した東西方向の溝である。幅0.5~0.7mで、深さ0.1m前後である。埋土は黒灰色砂礫混り粘土質シルトで、遺物は出土しなかった。溝底のレベルは東側より西側が低く、SX501の深い部分にとりつく排水用の溝であった可能性もある。

小穴 第5e層を除去した段階で複数の小穴を検出した。性格は不明である。

4) 小結

調査地は長期間、谷地形もしくは流路部分になっており、人間の生活には適さない場所であったようである。しかし、弥生時代後期から平安時代までの各時期の遺物が出土したことから、周辺には集落の存在が予想されよう。特に、弥生時代後期中葉の土器がまとまって出土しており、調査地は瓜破北遺跡を中心に広がる弥生時代の集落の東限を示すものと判断される。(大庭)

第三章 瓜破北遺跡の調査

第1節 UR80-3次調査

1) 調査の経緯と経過

全長150mに及ぶ調査個所の中間には東西方向の道路が位置するため、道路を境に南・北のトレンチに二分して、北側の調査から着手した(図48、図版7)。調査地域には阪神高速道路松原線の工事に伴う約1mの盛土がなされていたため、盛土および近現代の作土層を重機で除去したあと、各層ごとに人力で掘削して調査を行った。本報告では北側のトレンチを北区、南側のトレンチを南区として記述する。

1980年8月18日に北区から調査に着手した。

北区では、調査開始当初の8月下旬におこった豪雨によって最終遺構面まで達していた調査区北半部の壁面が全面崩壊したほか、その後も壁の崩落が続いた。そのため、作業の安全を確保する必要から、調査区の東壁の全面に土留め用の鋼矢板を打設したほか、西壁についても盛土および近現代の作土を二段に掘下げて、壁の崩落に対処した。南区についても安全管理の面から北区と同様の土留めを実施することになったため、関係各位と協議を行って調査期間を延長し、12月31日をもってすべての現場作業を終えた。

調査は上述したように北区から南区へと実施したが、本報告では両地区の層序および各層出土の遺物についてまとめたあと、北区から南区の遺構・遺物について記述する。

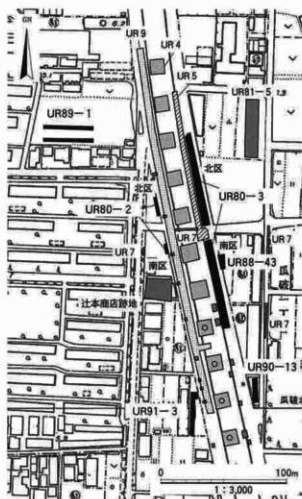


図48 瓜破北遺跡調査地位置図



写真8 北区調査風景

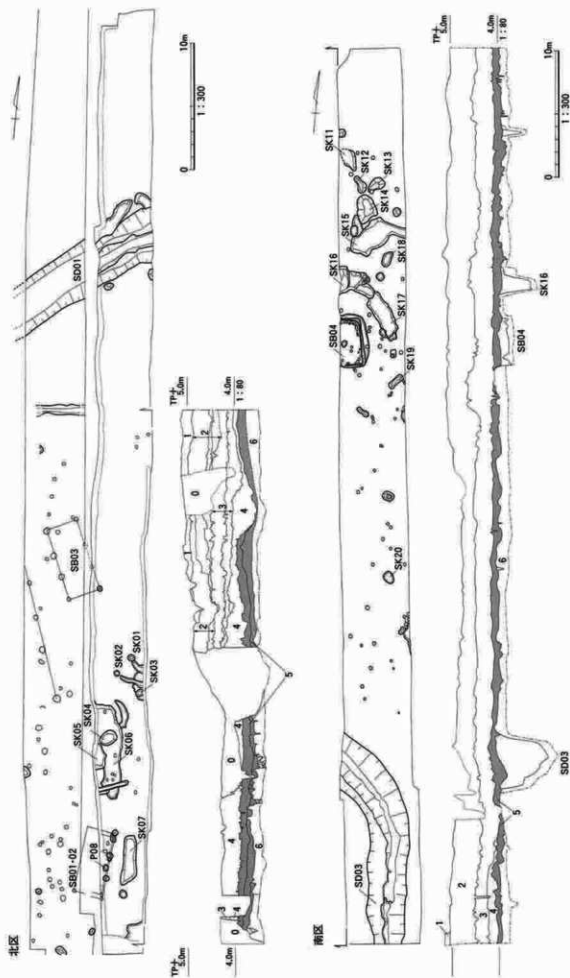


图49 南·北区遺構平面図・地層断面模式図

2) 層序(図49、写真8)

調査地域の基本層序は第0～6層に区分した。

第0層：現代の盛土および攪乱層である。

第1層：現代の作土層である。

第2層：灰～黄灰色砂質シルトおよび明褐色含砂シルトで、層厚は20～60cm前後ある。瓦器・土師器・陶磁器・瓦の細片が出土した。本層は近世の作土層である。

第3層：灰黄色粘土で、層厚は20～40cm前後ある。古代の須恵器や土師器をはじめ、中世の土師器や瓦器の細片を含む。古代～中世の作土層と思われる。

第4層：黄灰色粘土で、層厚は20cm前後ある。南区の南部にあるSD03の南側でのみ確認された。

第5層：黒褐色細～中粒砂混りシルト質粘土で、層厚は10～20cm前後ある。前漢鏡片をはじめ、弥生時代後期中葉の土器および古墳時代前期末葉の古式土師器が出土した。北区の北部に位置するSD01の周辺では土器溜まりが見られたほか、北区の南部でも古式土師器がやや集中して散布する個所があった。本層は瓜破基本層序のUR6z層に相当する。

第6層：黄褐～暗緑灰色シルト・粘土および暗青灰色砂層で、上面の標高は4m前後ある。本層は南区から北区に向ってわずかに下降している。瓜破基本層序のUR6a層に相当する。両区とも上面で弥生時代後期中葉および古墳時代前期末の遺構を検出したが、これらの多くは調査時に遺物包含層と認識した第4層の層内あるいは下面の遺構である。なお、南区の北端部で行った深掘りトレンチでは、第6層の下位に砂礫層を挟んで黒色粘土を主体とする暗色帯が確認された。本層では遺物は出土しなかったが、瓜破基本層序のUR6b層に相当するものと思われる。

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物

a. 土器(図50・図版27)

135～139は第3層から出土した須恵器である。135は平瓶の口頸部および体部片で、口縁部ににぶい凹線が巡る。136は鉢の底部で、表面は磨減が著しい。外面をカキメで調整している。137は口径8.8cmの杯Hで、底部はヘラ切り後不調整である。138は口径13cmの杯Aで、底部裏面をヘラ切りのあと、ヨコナデ調整している。139は口径14.4cmの杯Bで、高台はわずかに開く。以上の須恵器のうち、135～137は難波Ⅲ中～新段階、138・139は難波Ⅳ古段階に属するものであろう。

141・142・145は北区の第5層(黒色粘土～砂混り粘土)から出土した。141は口径6.1cm、器高7.7cmの小型の壺で、体部の内面を左上りのヘラケズリで調整している。142は高杯の脚部で、裾は柱状部から水平に開く。脚部を成形した後に杯部を成形しており、接合部の中央に粘土塊を充填している。ともに布留式新相に属する古式土師器であらう。145は口縁部が緩やかに外反した高杯の杯部である。口縁部の外面を縦方向のヘラミガキで、同内面を横方向のヘラミガキで調整している。弥生時代後期中葉に属するものである。

140・143・144・146は南区の第5層(黒色粘土)から出土した弥生土器である。140は口径8.4cmで、

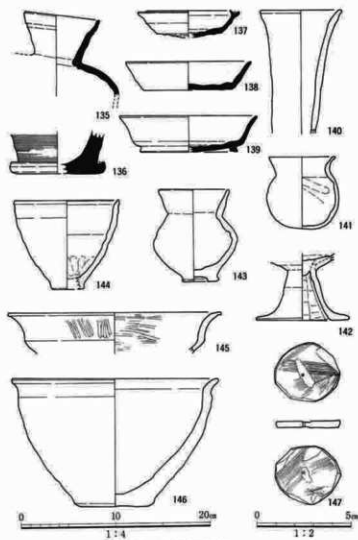


図50 包含層出土遺物

第3層(135~139)、第5層(140~147)

口縁部は細長い頸部からわずかに開く。体部が玉壺状を呈する細頸壺の口頸部と思われる。143は口径7.5cm、器高9.8cmの小型の壺で、短い口頸部が体部から直線的に開く。底部の裏面が浅く凹む。器表面が剥落しており、調整は明らかでない。144は口径11.2cm、器高9.4cmの鉢である。口縁部はわずかに内湾しながら伸びる体部から直立しており、同端部は内傾している。口縁部の内外面をヨコナデ調整、底部の内面をユビナデ調整している。146は口径21.6cm、器高13.7cmの鉢で、器壁が全体に厚い。口縁部はわずかに内湾しながら立つ体部から短く開く。口縁部の内外面をヨコナデ調整で、体部の内外面をやや粗いナデで調整している。以上の土器の色調にはぶい黄橙色を基調にしており、胎土中に長石粒を含むものが多い。これらは弥生時代後期中～後葉に属するものであろう。

b. 石製品(図50)

147は直径3.1~3.4cm、最大厚0.4cmの滑石製の有孔円板で、北区第5層から出土した。側面および表裏面に加工時の擦痕があり、中央に両面から直径約1mmの孔を穿つ。141・142と同時期のものだろう。(田中清美)

c. 青銅器(図51・図版27)

前漢鏡 148は南区北端付近の第5層下部からの出土遺物を調査終了後に整理していた際に発見された鏡片である。異体字銘帯鏡の銘帯およびその内区側の櫛齒文帯の小破片であり、長辺約2.5cm、短辺約1.0cmで、外縁部は残っていない。銘文は楔形体(註1)で「□永而思」と読める。その内側には外方に向けて逆時計回りに斜行する櫛齒文があり、間隔は密で整然としている。

銘文中に「永」の文字があることや斜行する櫛齒文からみて、前漢後半代に製作された「潔清白・」で始まる清白銘鏡と考えられる(註2)。銘文中の「永」と「思」の間に入る「而」は文意とは関係がない文字であるが、ここに「而」が入る例は管見によるかぎりほかにない。また、「永」の前の文字は、遺存する文字下部部から本来あるべき「願」ではないと思われ、欠字あるいは挿入文字があるものと推定され



図51 南区出土鏡



図52 立岩堀田遺跡35号菱棺出土連弧文清白銘鏡
(立岩遺跡調査委員会1977)

る。清白銘鏡には内行花文(連弧文)式と重圈文式が知られるが、本資料は銘帯部の小片であることから、いずれとも判断できない。だが、他遺跡出土の完形鏡から推測すると、楔形体は内行花文式に多いことから、直径15～18cmの内行花文(連弧文)清白鏡の可能性が高い。

過去に瓜破北遺跡で出土した2鏡片は王莽代の方格規矩鏡片と後漢後半代の内行花文鏡片で、外周は研磨され、前者は鈕に、後者は穿たれた円孔に紐ずれの痕跡があり、いずれも懸垂されていたものであった[大阪市文化財協会1980]。しかし、今回の鏡片は穿孔もなく、割れ口は一部を除いてよく磨滅しているが、明らかな研磨痕跡は認められず、二次的に研磨されたり懸垂されたものではない。

廃棄された時期 前項で示したように、本資料が出土した第5層は調査地全域に分布する弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層である。鏡片が出土した地点は南区北端部と断定でき、この付近の第5層下部から出土している土器はほとんどが弥生時代後期に属し、鏡片はこれらの土器とともに廃棄された可能性が高いと思われる。

共存する弥生土器は前述のとおり弥生時代後期中～後葉であるが、この地点の数m南には後述する弥生時代後期中葉の土器を出土した堅穴住居SB04があるほか、周辺には弥生時代後期の遺構が分布していることが明らかになっている。調査地の阪神高速道路橋脚を挟んだ西側のUR9次調査地[大阪市文化財協会1980]では、同時期の堅穴住居2棟や井戸・溝・土壌が調査されており、特にSD17出土土器群は弥生時代後期中葉でも古相を呈し、この遺跡を代表する時期のものとみられる[森毅1980]。両調査地の間の橋脚部でのUR4次調査でも、弥生時代後期とされる堅穴住居や井戸が検出されており、井戸出土資料は弥生時代後期中葉[田中清美1981]、寺沢・森井らは「河内V-3様式」の標識とする[寺沢薫・森井貞雄1989]。

以上の周辺での調査成果を踏まえれば、鏡片は弥生時代後期中葉を中心とする集落で使用された土器(西ノ辻E(D)式[都出比呂志1974]を中心とする)とともに廃棄されたと考えることが妥当であろう(註3)。

前漢鏡出土の意義 日本での清白銘鏡の出土はほとんどが北部九州に限られ、福岡県三雲遺跡・須玖岡本遺跡・立岩堀田遺跡(図52)、佐賀県二塚山遺跡などがその代表的な遺跡である(註4)。北部九州以外では、香川県石清尾山猫塚古墳出土鏡[梅原末治1933]と奈良県西の京付近出土と伝えられる1面[富岡謙蔵1920]のほか、本資料の発見後、神戸市森北町遺跡でも重圈文又銘帯鏡の破片が出土している[神戸市教育委員会1986]。

弥生時代の中国鏡片出土の意義については、伝世鏡論[小林行雄1955]の可否をめぐる大きく二分される。中国鏡の伝世を妥当とする川西宏幸や岡村秀典らは弥生時代中期末から後期の近畿に中国鏡が製作後それほど時間を経ることなくもたらされていたとみる[川西宏幸1989、岡村秀典1986]。これに対して、中国鏡片の先駆的研究[高倉洋彰1976、高橋徹1979]をなした高倉洋彰や高橋徹らは北部九州の甕棺墓地域にいち早く前漢鏡がもたらされ、核となる集団の首長に鏡が集中するが[高倉洋彰1993]、そこに象徴された権威が近畿など東方へと波及していく媒体となったのが中国鏡片や小形仿製鏡[高倉洋彰1972]であり、弥生時代終末期に伝統的な価値観が否定され、一方で古墳出土の完形後漢鏡が魏晉鏡などとともに同時期にもたらされたとみる[高橋徹1986]。

瓜破北・加美遺跡の鏡を検討[森岡秀人1990]された森岡秀人も、これらを当該期の弥生時代後期の地域間交流の所産とし、その廃棄は弥生時代祭祀の崩壊とした上で、大陸との直接交渉の主体が形成されつつあった弥生時代終末から古墳時代初頭の近畿に完形の漢鏡が三角縁神獣鏡とともに入ってきたと考えた[森岡秀人1993]。

北部九州および、近畿を含むそれ以後の地域での出土状況から、改めてその意義を求めるならば、北部九州における漢代の中国鏡は、鏡片や前漢鏡を模した仿製鏡を含めて基本的には副葬されるものであり、埋葬された個人に属するものと認識され、はるか大陸の王朝の権威を一身に纏う首長に人格的に結びつけられていたといえるのではなからうか。しかしながら、北部九州の周辺部やさらに東方の地域では、本資料を含めて住居内や溝、あるいは集落内の包含層から出土するものが多く(註5)、鏡がもつ象徴的な価値が外部の周辺地域に広く波及していく過程は、必ずしも特定の人格を核としたものではなかったと考えられるのである。

北部九州で想定された鏡片分有による地域連合[高倉洋彰1993]を形成する社会や、本来、権威ある個人の所有にかかる漢鏡群が主体不在のまま贈与され、世代を越えて保管・管理される社会を、この時期の近畿・中国地方に想定することがはたして可能であろうか。特定の人格に結びついた神話的世界のプロローグを映し出す鏡片が瓜破北遺跡SX12や加美遺跡2号周溝墓などに副葬される、庄内〜布留式まで時期を下降させる必要があろう。(京嶋寛)

ii) 北区(図49、図版8)

北区では既述したように第6層の上面で遺構の多くを検出したが、これらは既述したように弥生時代後期の遺構は第5層の下面、古墳時代前期に係わるものは第5層中のものと判断された。ここでは

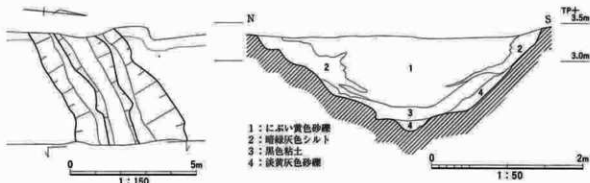


図53 SD01平・断面図

弥生時代後期の遺構である溝SD01、古墳時代前期の掘立柱建物SB01～03、土壌SK01～04について記述する。このほかにも小規模な土壌や柱穴と思われるものも確認されたが、建物としてあるいは遺構の性格が判明したものはなかった。

a. 溝(図49・53、図版9)

SD01 調査区の北部に位置する東西方向の溝であり、西側の阪神高速道路松原線および共同溝調査地区で検出された大溝の延長部と考えられる。最大幅約4m、深さ約1.4mで、溝内には肩に沿って青灰色粘土が広がっており、これを抉り取るようににぶい黄色砂礫が厚く堆積していた。溝底の中央は抉られたようにやや深くなっており、黒色粘土と淡黄灰色砂礫が堆積していた。淡黄灰色砂礫からやや摩耗した弥生時代前期末の土器片150が、溝底に貼りついた状態で石鏃149と弥生時代中期中葉の土器片151が出土した。149・151は溝が機能していた時期の下限を示すものと思われる。また、溝がほぼ埋没した後の窪みの中から弥生時代後期中葉の土器152～173が出土した。

SD01出土遺物(図54・55、図版24・27) 149は尖端部を欠損しているが、最大長5.4cm、最大幅1.1cm、最大厚0.6cmの尖基有茎式石鏃である。表裏面ともに細部調整されており、全体に細身である。150は壺の体部片で、6条のヘラ描沈線が施されており、弥生時代前期末に属するものである。色調は灰色で、胎土中に砂粒を多く含む。151は口縁部が短く開く甕で、口縁端部を丸くおさめる。体部の調整は外面が縦方向のヘラミガキで、内面はナデである。器形は河内地域に広く分布しているものと同じであるが、色調はにぶい黄橙色で、胎土中に石英・チャート粒を含む。

152～173は窪みから出土したもので、若干の古式土師器が混る以外は弥生土器であった。152は小型の長頸壺で、器表面をヘラミガキ調整している。153も長頸壺であるが、頸部は体部の高さの割りに短い。体部外面を平行タタキで整形しており、頸部にはタテハケが残る。154は口径27.6cmで、口縁部を垂下させた広口壺である。口縁部の外端面には3条の凹線文と円形浮文を施している。色調は灰黄褐色で、胎土中に角閃石を多く含む

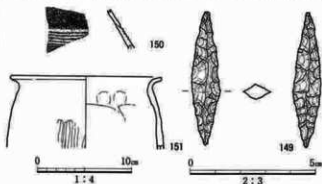


図54 SD01出土遺物(1)

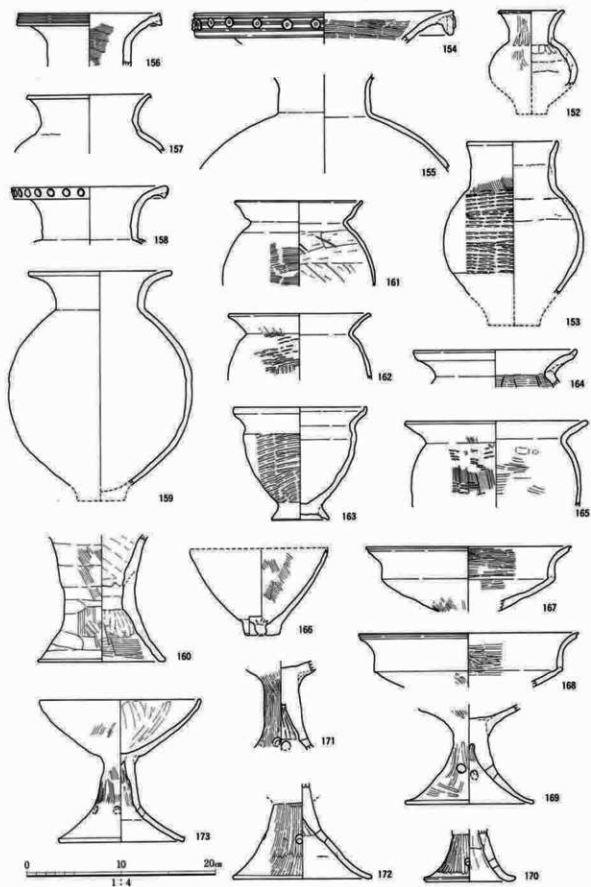


图55 SD01出土遺物(2)

ことから生駒西麓産とみられる。155は口縁部および体部の下半部を欠損した甕で、器面が磨滅しており、調整は不明である。156は口径15cmの甕の口頸部で、口縁部を上下に拡張している。口縁部の外端面には3条の凹線文が巡る。調整は頸部の外面が横方向のナデで、内面は左上りのハケである。157は広口甕で、口縁部は短い頸部から緩やかに開く。器表面の残りが悪く調整は不明である。158は口径16.5cmの広口甕で、口縁部は直立する頸部から大きく開く。口縁部の下端をわずかに拡張しており、外端面には円形浮文が巡る。159は口径15.2cm、器高24.5cm前後に復元された広口甕である。最大径は体部の中程にあり、口縁部は短い頸部から大きく開く。器面が磨滅しており、調整は不明である。160は口縁部を欠損しているが、筒状の器体の上下が大きく開く器台である。脚部径は13.5cmあり、調整は外面がタテハケのあと、横方向のナデ、内面は幅広い横方向のハケのあと、縦および左上りのナデである。161は口径13.6cmで、口縁部が外反した甕である。口縁端部を丸くおさめており、体部の調整は外面がヨコハケ、内面は縦および横方向のヘラケズリである。色調にはぶい燈色で、胎土中に長石・シャモット粒を多く含む。162は口径14.8cmの甕で、口縁部は外反しており、端部をわずかに面取っている。体部の外面は粗い平行タタキで整形しており、頸部から口縁部の外面はタタキのあと、ハケ調整を施す。163は口径14cm、器高12cmの甕で、底部に粘土紐を足して短い脚台を成形している。口縁部は外反しており、端部をつまみ上げて丸くおさめる。体部は分割成形しており、整形は粗い平行タタキである。体部の内面はナデ調整で、炭化物が付着している。164・165は口縁部が外反する甕で、口縁端部は前者が粘土紐を足して上方に拡張しており、後者は丸くおさめる。164の頸部内面の調整は粗いヨコハケである。165の体部の器面調整は外面が平行タタキのあと、タテハケで、内面は粗いヨコハケおよびナデである。166は口縁端部を欠損しているが、口径14.6cm、器高9.2cmに復元された鉢である。底部の中央には焼成前に直径8mm前後の孔を穿っている。体部の内面調整は左上りのハケで、底部の内面には工具痕が残る。167～173は高杯である。167・168は口縁部が直立したあと緩やかに開いており、口縁端部にはぶい凹線が巡る。ともに器体の内面および外面を粗いヘラミガキで調整している。169～172は高杯の脚部で、裾の開きは169・172が大きく、170は小さい。裾の上端近くに169～171は4方向、172は5方向に円形スカシ孔を穿つ。いずれも器体の外面調整は縦方向の粗いヘラミガキで、169・171・172の脚部内面にはシボリメが残る。173は口径17cm、器高15cmの杯部が碗形の高杯である。口縁端部を丸くおさめており、杯部の調整は外面がヘラミガキで、内面はナデである。脚部の裾は大きく開き、これの上端近くに4方向に円形スカシ孔を穿っており、脚端部は面取る。脚部の外面の調整はタテハケおよびナデで、内面にはシボリメが残る。以上の土器のうち、155・161は布留式新相に属する古式土師器で、これ以外のものは弥生時代後期中葉に属するものと思われる。なお、弥生土器の多くは色調が燈～黄燈色で、胎土中に長石・石英・チャート・シャモットを含んでおり、これらは在地の土器と認定しうる。

b. 掘立柱建物(図49・56・57、図版10)

SB01・02 北区の南端近くに位置する掘立柱建物である。東側柱列の3間分を検出したが、遺構の大半は調査範囲外にあるため、詳細は明らかでない。また、一部の柱穴には切合いが確認されたほか、柱の並びから判断して2棟分の建物(SB01・02)が復元された。

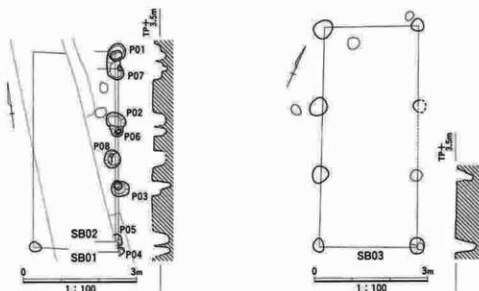


図56. SB01～03平・断面図

SB01はP01～04から構成されるもので、柱間寸法は1.7mである。掘形はやや不整形なものもあるが、直径40～50cmで、深さ30～40cmあった。P01・03・04では直径10～15cmの柱痕跡が確認されている。遺物は古式土師器の破片が出土した以外には認められなかった。

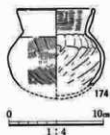


図57 SB01出土遺物

SB02の柱穴はP03・05・06・07の3間分で、柱間寸法は1.5～1.7mある。このうち、P05～07はSB01の柱穴に切られていたほか、P03は再度利用されていた。柱穴の中にはP07のようにやや不整形なものもあるが、多くは直径0.3m前後、深さ0.3～0.4mあった。P06・07では直径10～15cmの柱痕跡が確認されている。柱穴からは遺物は出土しなかったが、上述したような柱穴の切合い関係からみて、SB01とともに古墳時代前期に属するものと考えられる。なお、

P03・06のほぼ中間に位置するP08は直径50cm前後あり、埋土が柱穴と酷似していることや、出土遺物からみて、掘立柱建物と何らかの関係のある遺構と思われる。

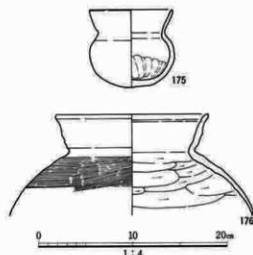


図58 SK01出土遺物

174は口径8.2cm、器高9.5cm前後に復元された小型丸底壺で、P01から出土した(図57)。口縁部はわずかに開いており、端部は丸い。体部の調整は外面がタテハケで、内面は右上りのヘラケズリである。口縁部の内面にはヨコハケが残る。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に長石粒を含む。布留式新相に属するものであろう。

SB03 北区中央で柱穴を2基検出した。西隣のUR5次調査地で続きが確認されており、梁行1間(2.6m)、桁行3間(5.8m)の掘立柱建物に復元できる。検出した柱穴掘形は約0.4mの円形で、深さは0.5mあった。遺物は出土していない。

c. 土壌(図49・59
~63、図版9・10)

SK01 直径0.6m、深さ
0.3mの土壌で、周辺にあ
るSK02・03と同様な土壌
である。埋土は黒色粘土
で、古式土師器が出土した
(図58)。

175は口径8.8cm、器高
8.2cmの小型丸底壺であ
る。口縁部は外上方に開い

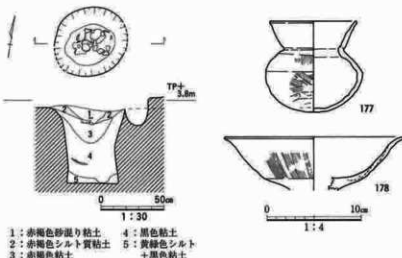


図59 SK03平・断面図および出土遺物

ており、体部はやや扁平に成形されている。調整は口頸部の内外面がヨコナデ、体部の内面はユビナデおよびナデである。176は口縁端部が内傾した甕で、調整は体部の外面がヨコハケ、内面は横方向のヘラケズリである。以上は布留式新相に属するものである。

SK02 直径0.4m、深さ0.2mで、埋土は黒色粘土である。古式土師器の細片が出土した。

SK03(図59、図版10・25) 直径0.5~0.6m、深さ0.6mの土壌である。内部には下から黄緑色シルトおよび黒色粘土からなる偽礫、黒色粘土、赤褐色粘土~シルト質粘土、赤褐色砂混り粘土が堆積しており、黒色粘土から古式土師器や加工木をはじめ、植物遺体が出土した。最下層の偽礫以外は水つきの埋土のため、井戸の可能性もあるが確定できなかった。

177は口径9.1cm、器高9.6cmの小型丸底壺である。口縁部は外上方に開いており、端部を丸くおさめる。球形に近い体部の調整は外面が縦および左上りのハケで、内面は横方向のナデである。底部の外面を横方向にヘラケズリ調整している。178は高杯の杯部で、口縁部は体部からわずかに開いており、端部は丸い。調整は外面がタテハケおよびヨコナデ、内面はヨコナデである。内面に煤が付着している。以上の色調はぶい黄橙色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。布留式新相に属するものである。

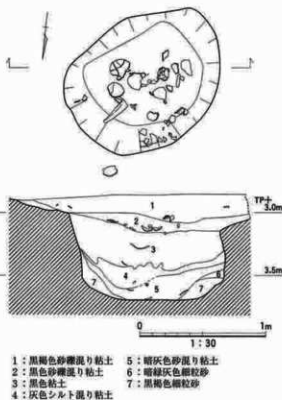


図60 SK04平・断面図

SK04(図60) 平面形がやや不整形な土壌
で、上部をSK06に切られているが短軸1.0m、
長軸1.3m、深さは検出面から0.8m前後ある。
埋土は下層(黒褐~暗緑灰色細粒砂、暗緑灰色

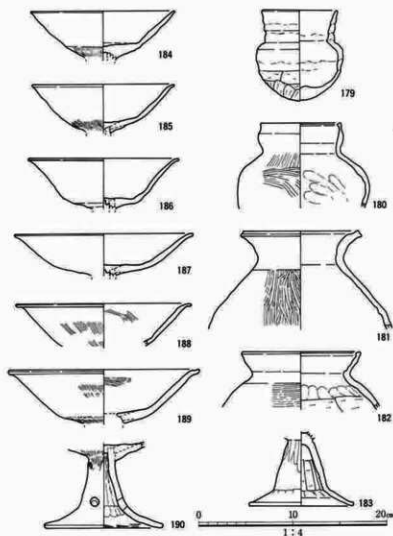


図61 SK04出土遺物

砂混り粘土、灰色シルト混り粘土)、中層(黒色粘土)、上層(黒～黒褐色砂礫混り粘土)と大きく3層に分かれており、このうち、水つきの下層が機能時の堆積層と思われる。遺物はおもに上層から出土した。

SK04出土遺物(図61・図版24・25) 179は口径8.0cm、器高9.6cmの小型丸底土器で、口頸部は球形に近い体部からわずかに開く。調整は口頸部の内外面がヨコナデ、体部の外面の下半部がヘラケズリで、上半部および内面はナデである。180は口径8.4cmで、口縁部は頸部からわずかに内湾しながら伸びたあと、内傾しており、端部は丸く内側に肥厚する。調整は口頸部の内外面がヨコナデで、体部の外面はやや粗いハケ、内面はユビナデである。181は口径12.2

cmの広口壺で、口縁部は頸部から緩やかに外反しており、端部の内面および外面が浅く凹む。調整は口頸部の内外面がヨコナデ、体部の外面は縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のナデである。182は口径12.7cmの甕で、口縁部はやや厚みのある頸部から外反しており、端部は内傾する。調整は口頸部の内外面がヨコナデ、体部の外面はヨコハケで、内面はユビオサエのあと、ヘラケズリである。183は脚部径11.1cmで、裾が大きく開く高杯の脚部である。調整は柱状部の外面が縦方向のナデ、内面はナデおよび横方向のヘラケズリである。184～189は口径15.3～20.2cmの高杯である。杯部は外上方に直線的に開く184以外は碗形であり、185～187は口縁部が水平に開く。調整は杯部の内外面とも縦方向のハケおよびヨコナデであるが、186・187以外の器体の下半にはハケが残る。190は杯部の大半を欠損しているが、脚部径12.7cmで、柱状部から裾が大きく開く高杯である。杯部から柱状部の外面にはタテハケが残る。柱状部から裾の内面はシボリがみられ、断続的なヨコハケを施している。柱状部の下端近くに3方向の円形スカシ孔を穿つ。なお、186・187・190の粘土紐の接合状況を観察した結果、高杯の成形にあたっては、まず脚部を成形したあと、この上端近くに粘土紐を縫ぎ足して杯部の下部を成形し、中央に粘土を充填したあと、一定の乾燥を経てから杯部の上部および口縁部を成形

したものと思われた。

以上の色調は黄橙～灰黄褐色で、胎土中に長石・雲母・シャモット・石英・チャート粒を含む。混入品と思われる弥生時代後期中葉の土器181以外は布留式新相に属するものである。

SK05 大型で不定形な土壙SK06に切られており、遺構の大半が調査範囲外のため、形状や規模については明らかでない。深さは0.4m前後あり、埋土は黒色粘土である。

SK06 南北7.4m前後、東西1.2～2m以上ある平面形が不定形な落込み状の土壙である。遺構の中央部にあるSK04・05の上部を掘込んでいるほか、南部は溝状の遺構に切られている。内部には黒褐色砂礫混り粘土が堆積しており、古式土師器が数多く出土した。

SK06出土遺物(図62・図版25) 191・192は小型丸底土器である。191は口縁部を欠損しているが、頸部の上端の形状からみて、複合口縁と思われる。体部は球形で、調整は外面が粗いタテハケ、内面はナデである。192は口頸部が外上方に開いており、口縁端部は丸い。体部はやや張りのあるものであろう。193は体部の下半を欠損しているが、口頸部が短く体部がやや長手の直口壺と思われる。口縁部の端面に1条の凹線文が巡る。頸部および体部の上半にはハケが残る。194は口縁部を欠損しているが、体部は球形で、口縁部は短い頸部から大きく開くものと考えられる。体部の調整は外面の下半がヘラケズリ、上半はハケのあとナデであり、内面はナデである。195は口径11.2cm、器高が11.5cm前後に復元された直口壺である。口頸部は球形の体部から大きく開いており、口縁端部の近くが内湾している。調整は口頸部の内外面がヨコナデ、体部の外面は断続的なハケで、内面は左上りおよび横方向のヘラケズリである。196・197・199～202は口径11.1～16.9cmの甕で、口縁部は内湾する196以外は外反している。口縁端部も丸い196以外は内傾しており、202は上端が浅く凹む。調整は口頸部がヨコナデで、体部は196・197・199・202の外面がヨコハケ、内面はヘラケズリおよびナデである。198は口縁部を欠損しているが底径5.4cmの低い脚台が付く鉢である。調整は脚台の内外面がユビオサエ、体部の外面はナデ、内面は底部の近くがクモの巣状のハケで、これより上が縦方向のハケである。203も口縁部を欠損しているが、底径4.2cmの鉢である。体部の外面を平行タタキで整形しており、内面はナデ調整である。なお、底部はユビオサエで整えており、外端面には粘土紐を足した痕がある。204～210は高杯の杯部および脚部である。205・207は口径18cm前後あり、杯部は碗形で、ともに口縁部が短く開く。207の脚部には円形スカシ孔が残る。204・206は脚部径が8.5～10.5cmあり、裾は前者が短く、後者はやや長い。204の裾には3方向に円形スカシ孔を穿つ。208は脚部径10cmで、杯部の大半を欠損している。脚部の裾の開きは短く、端部を面取っており、柱状部の下端には3方向に円形スカシ孔を穿つ。調整は脚部の内面がナデ、ほかは縦方向の細いヘラミガキである。209・210は口径21～23cm前後のやや大型の有段高杯で、口縁部は短く開き、端部は丸い。ともに器面の残りは悪いが、209の外面の調整はタテハケである。211は口径20cm、器高32cm前後に復元された広口壺で、体部の下半から口縁部の中程にかけての器壁が厚い。口縁部は頸部から外上方にわずかに開き、端部を丸くおさめている。体部は球形に近く、調整は外面が粗い左上りのハケ、内面はヘラケズリである。

以上の土器のうち、弥生時代後期中葉に属する193以外は布留式新相に属するものである。これら

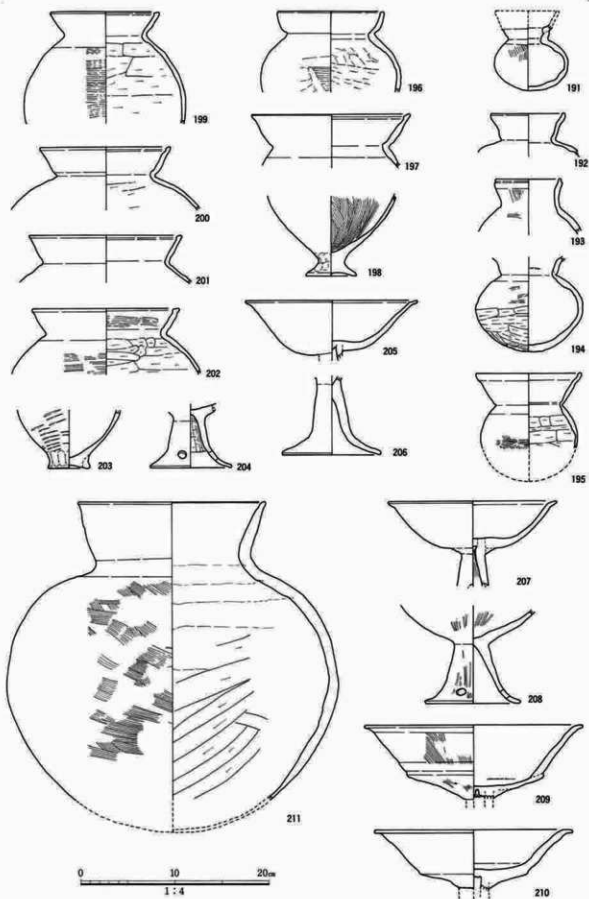


图62 SK06出土文物

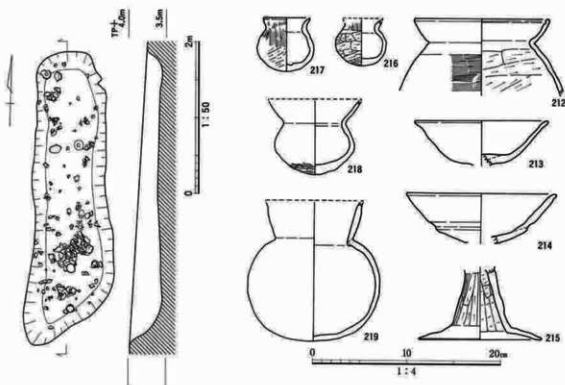


図63 SK07平・断面図および出土遺物

は色調が黄橙～灰黄褐色であり、胎土中に長石・雲母・石英・シャモット・チャート粒を含むものが多い。

SK07(図63、図版10・25) SB01・02の東側に位置する最大長3.9m、幅1.2m前後、深さ0.2～0.4mで、西南部がやや突出する長方形の土壌である。埋土は黒色砂礫混り粘土で、ミニチュア土器を含む多量の古式土師器が出土した。今回は完形品ならびそれに近いものを報告する。

212は口径14.4cmで、口縁部がわずかに内湾する甕である。口縁端部は内傾しており、丸くおさめる。体部の調整は外面がヨコハケ、内面は右上りのヘラケズリである。213・214は高杯の杯部で、口縁部は前者が緩やかに外反しながら開いており、後者は口縁端部に向って外上方に直線的に開く。214の杯部の中程は幅広く凹んでおり、有段となる。215は裾が大きく開いた高杯の脚部で、調整は裾の内外面がヨコナデ、柱状部の内外面は縦あるいは横方向のヘラケズリである。216・217はミニチュア土器で、前者は口縁端部を欠損している以外は原形を留めており、体部の調整は外面が左および右上りのヘラケズリで、内面はナデである。後者は口径4.9cm、器高5.7cmで、口頸部は球形の体部から緩やかに開く。調整は体部の上半から口頸部の外面がタテハケ、体部の下半の外面は右上りのヘラケズリである。口頸部および体部の内面の調整は横方向のナデである。218は小型丸底甕で、口縁端部を欠損している以外は原形を保っており、調整は口頸部および体部の内外面がヨコナデである。底部の調整は左上りのハケのあと、ヘラケズリである。219は口縁端部を欠損した直口甕で、口頸部は球形に近い体部から外上方に開く。調整は器面の残りが悪く明らかでない。以上の土器は布留式新相に属するもので、色調や胎土は既述した古式土師器と変わらない。

iii) 南区(図49)

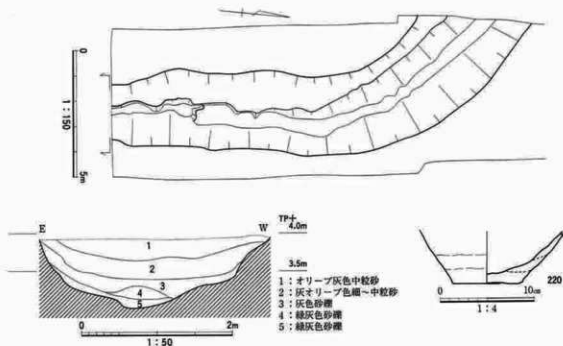


図64 SD03平・断面図および出土遺物

南区の遺構は北部の堅穴住居と土壌群、南部の大溝に大きく分かれている。ここでは南部の大溝から報告するが、北部の遺構の中で土壌については出土遺物が多かった堅穴住居SB04の周辺のものに限った。

a. 溝(図49・64、図版7)

SD03 南区の西側に位置するUR6次およびUR9次調査で検出された環濠と推定されている大溝の続きである。本溝は調査当初は南区を東西に横断するものと想定していたが、調査区内で向きを南に変えていることが判明した。溝の幅は2.2～4m前後、深さは検出面から1m前後ある。溝内には下から緑灰色砂礫・灰色砂礫・灰オリーブ色細～中粒砂・オリーブ灰色中粒砂が堆積しており、溝内が砂礫を主体とした堆積物で埋没したあとの窪みには緑灰色粘土質シルトが堆積していた。遺物は溝底から弥生土器が1点出土した以外にはさしたるものは見られなかった。

220は底径7.3cmの壺の底部である。調整は内外面ともに器面の残りが悪く不明である。色調は灰色で、胎土柱に長石粒を多く含んでおり、弥生時代前期末に属するものと思われる。

b. 堅穴住居(図65、図版8・26)

SB04 南区の北部に位置しており、東および北側には複数の土壌や小穴がある。平面形は隅丸方形で、西半分が調査範囲外であるため住居の全容や規模は不明であるが、南北は4.3m前後ある。壁の高さは検出面から0.14m前後あり、これに沿って幅0.1～0.3mの周壁溝が巡っている。床面のほぼ中央には直径約0.4m、深さ約0.2mの土壌があり、壺・甕・高杯・鉢など完形を含む土器が出土した。周壁溝に沿って大小の柱穴が検出されたが、このうち、床面のコーナー近くの柱穴および東側のテラスの南寄りにある直径0.16～0.2mの柱穴が主柱穴の一部と考えられる。住居内の基本的な埋土は暗緑灰色シルトで、弥生時代後期中葉の土器片が出土した。

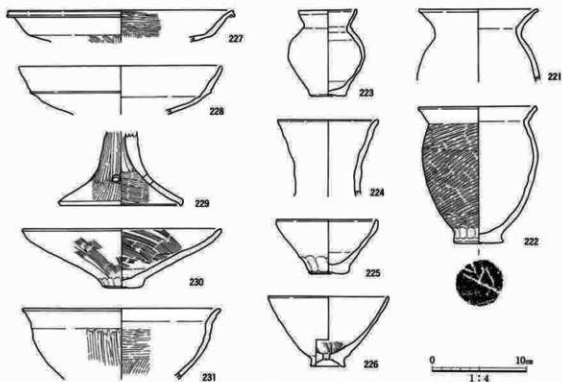
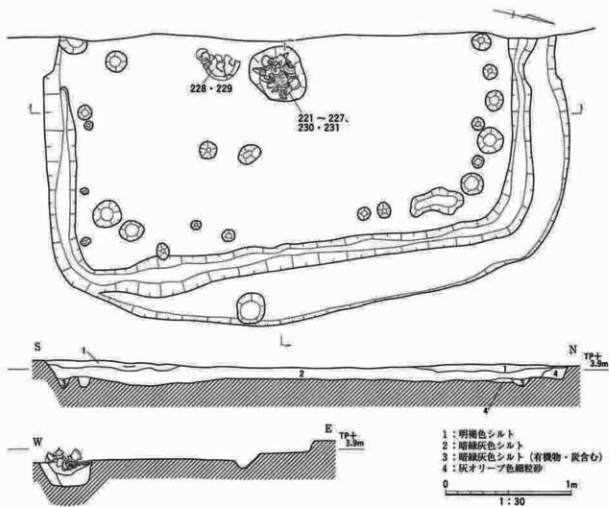


図65 SB04平・断面図および出土遺物

221～231は中央土壌から出土した土器である。221は口径12.4cmの甕で、口縁部は外上方に開く。調整は不明である。222は口径12.5cm、器高14.6cmの甕で、口縁部は張りのない体部から短く開き、端部をわずかに面取る。体部は右上りの平行タタキで3分割に成形しており、底部の裏面には木の葉の圧痕がある。調整は口頸部および体部の内面がヨコナデである。223は口径6.1cm、器高9.2cmの壺で、口縁部はわずかに内湾しながら外上方に伸びており、端部は丸い。最大径は体部の中央にあり、底部の径は口径および器高の割に大きい。調整は口頸部の内外面がヨコナデ、体部も内外面ともにいていねいなナデである。224は長頸壺の口頸部で、口縁部は頸部から外上方に開く。調整は内外面ともヨコナデである。225・226は小型の鉢である。225は口径10.7cm、器高5.8cmで、口縁部は体部からわずかに内湾しながら立つ。底部の外表面はユビオサエで整えており、裏面は浅く凹む。226は口径12.6cm、器高7.4cmで、口縁部は体部から外上方に開き、端部は丸い。中央が深く凹む底部には焼成前に穿った孔がある。器体の内外面の調整はヨコナデで、内底面には横方向のハケが残る。227～229は高杯の杯部および脚部である。227は口縁端部を下方にわずかに拡張しており、端面は浅く凹む。228の口縁端部は丸く、体部の中程にはにぶい稜をなす。ともに器体の調整は横および縦方向のヘラミガキである。229は椀が柱状部から大きく開く高杯の脚部で、端部は内側にわずかに肥厚する。調整は器体の外面が縦方向のヘラミガキ、内面はハケおよびナデで、柱状部の下端近くに4方向のスカシ孔を穿つ。230は口径21.2cm、器高6.4cmの鉢で、口縁部は大きく開く体部からわずかに内湾しており、外端面はわずかに凹む。裏面が浅く凹む底部は体部の大きさに比して小さく不安定である。器体の調整は内外面とも左上りのハケで、底部の外表面はユビオサエである。231は口径21cmの鉢で、口縁部は内湾しながら立つ体部から短く開いており、端部は丸い。体部の調整は外面が縦、内面が縦から横方向のヘラミガキである。以上の土器は弥生時代後期中葉に属するもので、色調や胎土は既述した当該

期のものと変わらない。

c. 土壌(図49・66、図版8)

SK11～14は南区の北部に近接して位置する平面形が不整形な土壌である。深さはSK11・12が0.1m前後、SK13・14は0.2m前後あった。埋土は黒褐色砂礫混りシルト質粘土で、弥生時代後期の土器片が出土した。

SK15 東側に溝状の浅い窪みが取付く東西約4.0m、南北2.0m前後、深さ0.3m前後の土壌である。埋土は水つきの灰色シルト・灰オリープ色細粒砂で、弥生時代後期の土器片が出土し

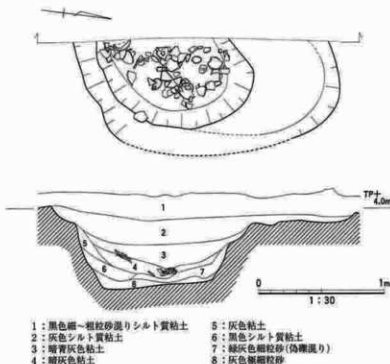


図66 SK16平・断面図

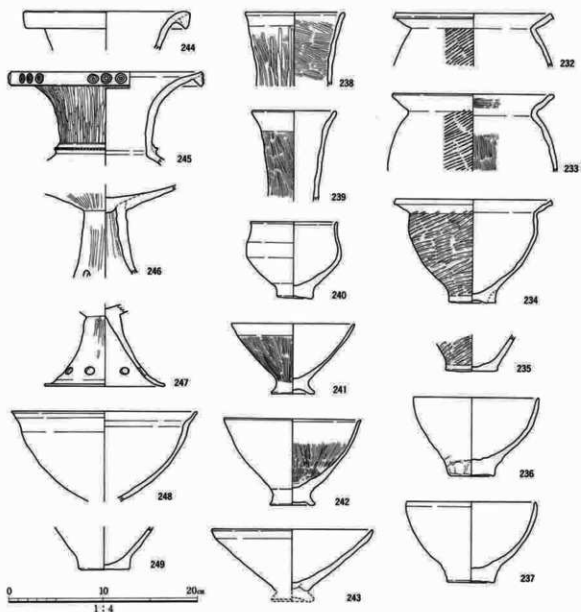


図67 SK16出土遺物

た。

SK16(図66、図版8・26) SB04の北に位置する土壌で、東側を弧状に連なるSK17に掘込まれている。遺構の検出時には一連のものと考えたが、調査の過程で複数の土壌が切合うことが判明した。ここでは比較的多くの土器が出土したSK16について報告する。平面形は不整形で、南北約2m、深さは0.6m前後ある。埋土は下層の灰色極細粒砂・緑灰色細粒砂(偽礫混り)・黒色シルト質粘土、中層の灰色粘土・暗灰色粘土・暗青灰色粘土、上層の灰色シルト質粘土に大きく分かれる。これらのうち、下層と中層が水つきで、後者から数多くの弥生土器が出土した。埋土の状態からみて、井戸の可能性はある。

SK16出土遺物(図67、図版26) 232・233は口径16.4~16.6cmの甕で、口縁部はともに外反している。口縁端部は前者の外端面が浅く凹んでおり、後者は丸い。ともに体部の整形は右上りの平行タタ

キで、内面の調整は前者がナデ、後者は縦方向のハケである。なお、233の口縁部の内面にはヨコハケが残る。234は口径16.5cm、器高10.9cmの甕で、口縁部は外反しており、端部を面取る。体部は3分割に成形しており、整形は右上りの平行タタキである。調整は口頸部がヨコナデ、体部の内面はハケのあとナデである。底部の裏面が浅く凹む。235は甕の底部で、外面の整形は右上がりの平行タタキである。236・237は口径13.3～13.8cm、器高8.3～8.6cmの椀形の鉢である。ともに口縁部は体部からわずかに内湾しながら立ち、端部は丸い。体部の調整は内外面がナデで、236の底部はユビオサエである。240～243は口径9.2～17cm、器高7.4～9.1cmの鉢で、240は椀形、241・243は体部が直線的に開き、242の体部はわずかに内湾している。体部の調整は240・243の内外面がナデ、241の外面および242の内面はタテハケである。なお、241・242の底部は外縁をつまみ出しており、243も剥離痕からみて同様な底部と思われる。248は底部を欠損しているが口径19.7cmで、口縁部は短いものの2段に開く鉢である。体部は球形に近く、器面の残りが悪いが内面には一部にヘラミガキが残る。238・239は口径8.8～10.4cmの長頸甕で、口縁端部を丸くおさめている。調整は前者の外面がタテハケおよびヘラミガキ、内面は左上りのハケで、後者は外面がタテハケ、内面がナデである。244は口径16.6cmで、口縁部の下端を拡張した広口甕である。調整は口縁部の内外面がヨコナデ、頸部は外面がナデ、内面はハケおよびナデである。245は口径20.3cmで、口縁部の下端を拡張した広口甕である。

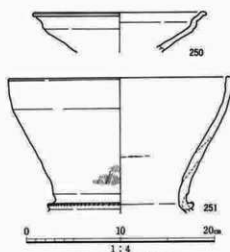


図68 SK20出土遺物

口縁部の外端面には竹管文を加えた円形浮文が3個1単位で巡る。頸部と体部の境にはキザミメを加えた突帯を貼付けており、頸部の外面の調整は縦方向のヘラミガキである。249は甕の底部であろう。器面の調整はナデである。246・247は高杯の脚部で、前者は柱状部を成形したあとと杯部の下半をつくり、中央の孔に粘土塊を充填した様子が観察された。247は柱状部と裾の境が不明瞭な脚部で、脚端の近くに7方向の円形スカシ孔を穿つ。ともに器体の外面の調整は縦方向のヘラミガキで、246の柱状部の内面にはシボリメ、外面には3方向の円形スカシ孔がある。以上は弥生時代後期中葉に属するもので、色調や胎土から生駒西

麓産と判断された244・245以外は在地の土器と思われる。

SK17 SK16の東に位置する平面形が隅丸長方形で、短辺1.2m、長辺3.2m、深さは0.4m前後ある。埋土は下層の灰オリブ色極細粒砂と上層の灰色シルトに2分され、後者から弥生土器の細片が出土したが、図示できるものはなかった。

SK20 直径0.9m前後、深さ0.1m前後の浅い土壇である。埋土は黒褐色砂礫混り粘土で、底に密着して弥生土器が出土した。250は口径18.5cmで、口縁部が体部から一旦立ったあとと開く高杯で、端部は下方に肥厚している(図68)。器面の調整は口縁部がヨコナデ、体部はナデである。251は口径23.8cmで、口縁部は頸部からわずかに内湾しながら外上方に開いており、端部を面取る。頸部にはキザミメを加えた突帯を貼付けており、頸部の外面にはタテハケが残る。弥生時代後期中葉に属する。

4) 小結

本調査で検出した大溝の性格、弥生時代後期および古墳時代前期の集落の変遷について略述する。

大溝はUR 9 次調査地の西部で弧状をなし、一連の溝として完結するものと思われる。溝の北部については微高地の北縁に沿うように北東方向に延びており、溝の南部はUR80-3 次調査地南区において南に方向を変えている。したがって、大溝は先の調査で推定されたようないわゆる環濠ではない。

弥生時代後期中～後葉の遺構としては竪穴住居 4 棟以上、掘立柱建物 1 棟、井戸 3 基、土塋および柱穴群がある。これらの遺構群は調査地域に弥生時代後期中葉から後葉にかけての集落が営まれていたこと、後期後葉には当該期の土器の出土量が少なくなることから、集落の規模もこの時期には縮小したものと思われる。

古墳時代前期の遺構はUR 5 次調査地およびUR80-3 次調査地北地区の周辺で、布留式新相を伴う掘立柱建物 2 棟、横列 1 箇所、井戸、土塋、溝を、UR 4 次調査地UP58地区から西側のUR 9 次調査地にかけて方形周溝墓と土塋墓群を検出している。方形周溝墓は周辺の遺構に比べて時期がややさかのぼるが、本遺跡の古墳時代前期の集落は掘立柱建物が主体であり、これの西側には近接して墓域が形成されていたものとみられる。

(田中)

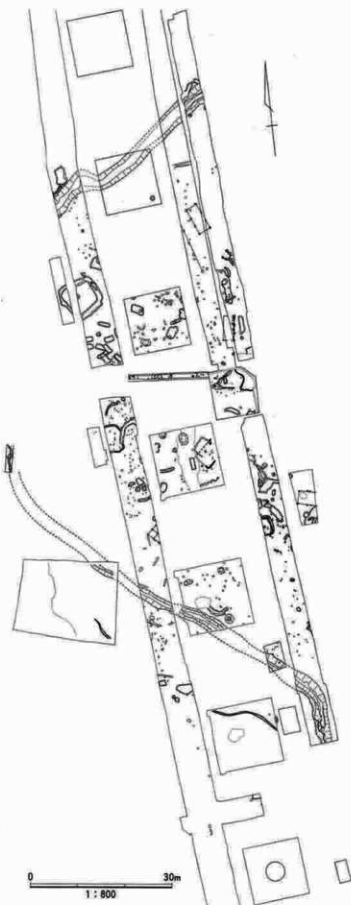


図69 瓜破北遺跡弥生～古墳時代前期遺構配置図

第2節 UR80-2次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は瓜破1丁目にあり、瓜破北遺跡の北西部寄りに位置している(図48)。当地では1978～1979年に大阪市土木局による共同溝の建設に伴うUR9次調査が行われており、弥生時代中期の大溝や同後期の集落遺構をはじめ、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている[大阪市文化財協会1980]。

今回の調査区は南北2個所に別れており、北側の調査区を北区、南側の調査区を南区と呼称する。このうち、北側の調査区の位置は上述した古墳時代前期の方形周溝墓の西側に当ることから、遺構の続きが検出されるものと予想された。

1980年7月25日から南区の調査に着手し、次いで北区の調査を実施した。この間には集中豪雨があり、調査区の壁面が崩壊するなどのアクシデントもあったが、9月15日に両区のすべての調査を終えた。

2) 層序(図70)

南区東壁断面を観察して、以下の第1～10層に区分した。

第1層：厚さ1m前後の現代の客土層である。

第2層：暗緑黒色粗砂混りシルト～青灰色中粒砂混り粘土で、層厚は10cm前後あり、現代の作土である。

第3層：オリーブ色粗砂で、層厚は5～15cmあり、調査区の北部では青灰色中粒砂混り粘土に移化している。

第4層：灰色中粒砂混り粘土～シルトで、層厚は5～10cm前後あり、部分的に酸化鉄を含む。作土である。

第5層：灰色シルトで、層厚は5～10cm前後あり、作土である。

第6層：灰黄～暗灰黄色シルトで、層厚は10～28cm前後あり、作土である。

第7層：灰色粘土で、層厚は30cm前後あり、下面には踏み込みが多数見られることから作土と思われる。

第8層：黄灰色粘土で、層厚は10～20cm前後あり、下面には踏み込みが見られる。作土であろう。

第9層：黒色粘土～砂礫混りシルトで、層厚は10cm前後ある。弥生時代後期および古墳時代前期の土器片が出土したほか、南区では本層から石鍾が1点出土している。

第10層：青灰色粘土で、酸化鉄粒を多く含む。層厚は20cm以上あり、北区では本層の上面で方形周溝墓を検出した。

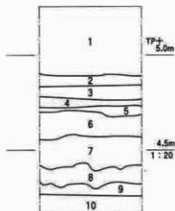


図70 南区西壁断面図

3) 遺構と遺物

i) 北区

方形周溝墓1 (図71、図版

11) UR 9次調査地と北区で検出した一連の方形周溝墓は図71に示したように3個所のコーナーを明らかにしえた。墳丘の平面形はやや不整形な方形を呈しており、規模は東西約6m、南北5～6mである。周溝は幅0.7～1.1m、深さ0.2m前後あり、砂礫を少量含む黒色シルトや緑黒色シルトが堆積していた。また、方形周溝墓の周溝および墳丘の上部は第9層に相当する黒色砂礫混りシルトで覆われていたほか、周溝の上部から弥生時代後期の土器および古式土器の細片が出土した。

なお、墳丘の盛土はすでに削平されており、主体部については明らかにできなかった。

ii) 南区

SP01 (図73) UR 9次調査区で検出された竪穴住居に伴う柱穴と思われるもので、直径30cm前後、深さは約40cmある。このほか調査区の北部で径5～12cm、深さ5～10cmあまりの小穴を検出したが、性格については不明である。なお、東側の竪穴住居から続くものと思われた周壁溝についても一部拡張して精査したが、痕跡が見られたのみで明らかにできなかった。

第9層出土石錘(図72、図版27) 252は石錘で

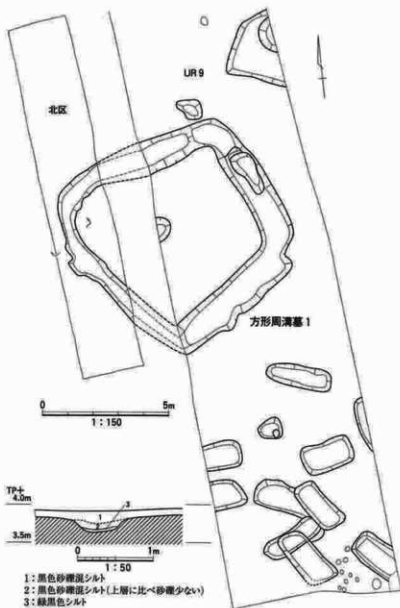


図71 UR80-2次調査北区平・断面図

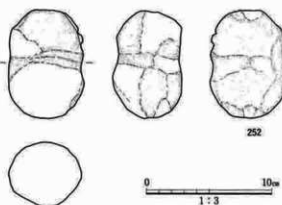


図72 第9層出土石製品



図73 UR80-2次調査南区平面図

ある。最大長8.7cm、最大幅6.0cm、最大厚は約5cmあり、長軸に対して直交する幅約2cm、深さ6mmの浅い溝がある。砂岩製で、全体に風化が進んでおり、表面の残りは悪い。

4) 小結

本調査では、先の調査を含めて方形周溝墓1のほぼ全体が確認できたことから、墓の形状や規模を明らかにしえたといえる。以下にこれまでの調査結果に基づき方形周溝墓1の平面形態と築造時期などについて述べてきたい。

墳丘の形態はやや不整形であるが方形を呈している。周溝は墳丘の周囲を巡っており、墳丘の北東および南西コーナーがほかに比べてやや浅くなっている。墳丘内では埋葬施設は確認できなかったが、東周溝のほぼ中央部

には埋葬施設とみられる土壌がある。

築造時期は北および東周溝から出土した布留式古相に属する土器類から判断して、古墳時代前期初頭と思われる。被葬者は単独で位置する方形周溝墓に埋葬されていること、東周溝内の上部およびこの近くから、本来方形周溝墓1の埋葬に伴うものと思われる後漢後半代の内行花文鏡片と王莽代の方格規矩鏡片が出土していることから、墓の南側にある土壌墓群の被葬者より上位に位置づけされる者で、集落を統率した有力者であった可能性が高い。なお、方形周溝墓1や土壌墓群を墓域とする古墳時代前期の集落は、掘立柱建物や小穴群が分布しているUR80-3次調査地から東方にかけて広がっているものと思われる。

(田中)

第3節 UR88-43次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(瓜破1丁目)は、本章第1節で報告したUR80-3次調査南地区の東隣に位置しており、同様に弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物の検出が予想された(図48)。調査を行うに当っては、古墳時代の包含層までを機械掘削し、それ以下を人力によって掘削することとなっていたが、調査に着手した時点で包含層がすでに掘上げられた状態であった。したがって、弥生時代の遺構面のベースとなる第3層が既に露出しており、遺構内の埋土が残るのみであった。このため当初予定された調査範囲を北に拡張し、古墳時代の包含層を一部人力で掘削することにした。また、調査の最終段階に第4層以下の地層を確認するために、調査区東壁に沿って深掘りを行った。

2) 層序(図74)

機械掘削によって露出した面から、2.4m下までの地層を、以下の第1～10層に区分した。

第1層：オリブ灰色粘土層で、耕作痕と思われる窪みにわずかに残っていた。

第2層：弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む暗色帯である。第2a・2b層に細分でき、上部の第2a層は黒褐色含粗粒砂粘土、下部の第2b層はオリブ黒色含粗粒砂粘土である。第2a層は層厚20cmで、調査区全域に分布していた。第2b層は調査区北半にのみ分布しており、北端では層厚30cmと厚くなっていた。第2a層と第1層との境からTK23型式の須恵器杯身273が出土した(図75)。

第3層：水成の灰オリブ色粗粒砂層で、層厚60cmあった。北部では粘土層やシルト層を挟んでいった。遺物は出土しなかった。

第4層以下は、深掘り部分の断面で確認した地層である。遺物は出土せず、人間の活動した形跡は認められなかった。また、第7～9層までは、黒色と灰色の粘土～シルトが互層で堆積しており、湿地性の環境で形成されたものと考えられる。

第4層：灰色シルト質粘土の水成層で、層厚は20cmあった。

第5層：オリブ黒色粘土で、植物遺体の薄層を多く挟む。水つきの状態で堆積した地層であろう。

第6層：黒色粘土の暗色帯である。下面に凹凸が見られ、生物擾乱を受けているものと思われる。

第7層：灰色粘土の水成層である。層厚は4～8cmあった。

第8層：黒色土層を主体とするが、間に灰色の土層を挟み、これにより3層に細分できる。上から第8a～8c層とする。第8a層は層厚7cmの黄灰色粘土、第8b層は層厚7cmの灰色粘土、第8c層は層厚16cmの黒色粘土である。

第9層：暗オリブ灰色シルト質粘土で、層厚は約30cmあった。間に黒色土層を挟むことから、本層も細分できるかもしれない。

第10層：オリブ黒色粗粒砂で、層厚30cmまでを確認した。本層の下限は不明である。

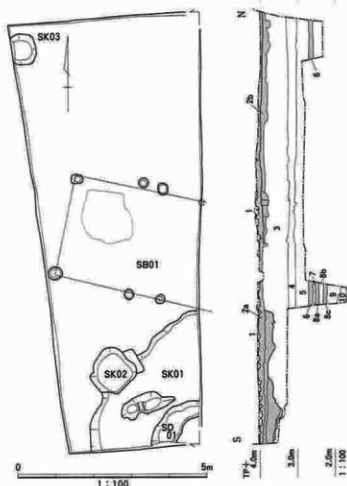


図74 UR88-43調査地平面図・断面模式図

3) 遺構と遺物

i) 弥生時代後期(図74・75、図版12)

SK01 調査区南東端で検出した不整形な土壌である。調査区内では北西肩のみを検出し、全体の形状は不明である。深さ0.1~0.2mで、底は平坦ではなく、溝状に窪んだ部分もある。埋土は黒色含粗粒砂粘土である。SK01内から比較的多くの弥生土器が出土した。

SK01出土遺物 弥生土器253~269を図示した(図75、図版27)。

253は長頸壺で、口縁部の上端に凹線文を一条巡らす。調整は内外面ともハケである。254は広口壺で、口縁端部は丸くおさめており、拡張しない。

255は体部が算盤形を呈する小型の壺で、底部は平底で突出する。口頸部が短く直立し、残存部分の上端付近で急激に外反することから、二重口縁壺の可能性がある。体部上半を半截竹管文で飾っており、上端に2列、やや間隔を置いて下方に1列の区画帯を巡らし、この間を縦

方向の3列一組の半截竹管文で埋めている。縦方向の文様帯の間には円形浮文を配する。調整は体部の上半および口頸部がナデ、体部下半がヘラミガキである。256は短頸の広口壺で、口縁端部を丸くおさめている。調整は体部外面がタテハケ、内面がヨコハケ、口縁部内外面がヨコナデである。体部および口縁部の外面には煤が付着している。

257・258は体部外面がタタキ整形の甕である。ともに口縁部が「く」の字に明瞭に屈曲し、口縁端部に強いヨコナデを施して面取りを行っている。口縁部内面の調整は、257が断続的なヨコハケ、258がヨコナデである。

259は碗形の鉢である。調整は外面がナデ、内面が左上がりのハケである。底部は小さい平底で、周縁をヨコナデによって整えている。260・262は底部に粘土を貼り付けて肥厚させる鉢である。ともに内外面の調整はナデである。261は短い脚台を有する鉢、264は口縁部をわずかに折り曲げた鉢である。263は手埴り形土器と考えられる。口縁端部をつまみ上げ、体部に突帯を貼り付けている。体部に横方向のヘラミガキを施す以外に、装飾は見られない。

265~267は有段口縁を有する高杯である。ほぼ全体の器形がわかる267は、口縁部が杯部の約半分

の長さで緩やかに外反している。脚柱部はやや太く、裾は緩やかに広がる形態である。脚裾部の上端には円形のスカシ孔を3方に配する。266は口縁部が短く、265は口縁端部に強いヨコナデを施しており、面をもつ。

268は小型の手ずくねの土器で、二次焼成を受けている。

269は円板状の甗で、両端に2孔一対の円孔を穿っている。器壁は厚く、かつ重い。

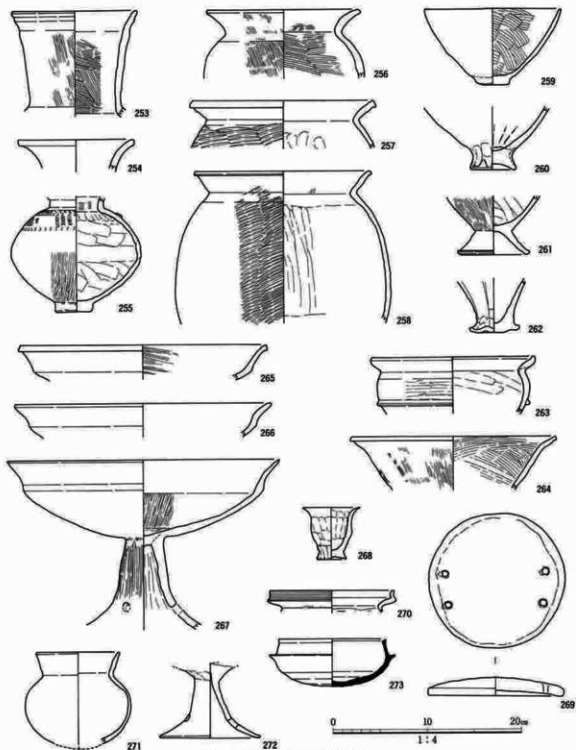


図75 UR88-43次調査出土遺物

SK01(253~269)、SK03(271・272)、第2a層(270・273)

以上の土器は、弥生時代後期中葉を主体としつつ、255や263といった新しい器種も含まれている。

SD01 SK01の底面で検出した溝状の遺構である。断面で観察すると、幅1.8m以上の円形の落込みの一部が深くなって溝状になっていたことが判明した。もっとも深い部分で深さ0.4mあった。埋土はオリブ黒色粗粒砂質粘土で、SK01とは区別される。弥生時代後期の土器の破片が出土した。

SB01 調査区中央で柱穴を6基検出した。上部が削平されているため、弥生時代のものであることを層位的に確認したわけではないが、柱穴の埋土がSK01に近似することから、弥生時代後期の遺構と考えておきたい。柱穴は直径0.3mで、柱痕の直径は約10cmある。南北1間、東西2間以上の掘立柱建物と考えられ、南北の柱間距離は2.6mある。一方、東西方向の柱間距離は極端に不揃いで、かつ柱穴の深さがもっとも浅いもので6cmしか残存していないことから、削平されて残っていない柱穴もあった可能性がある。

ii) 古墳時代前期(図74・75)

SK02 調査区南半で検出した、一辺1.1m、深さ0.5mの隅丸方形の土壇である。埋土は上部が黒褐色粘土層で、下部は砂質が強い。SK01を切っている。

SK03 調査区北西隅で検出した、直径0.9m、深さ0.5mの不整円形の土壇である。埋土は黒色含粗粒砂粘土層である。土壇内からは古式土師器271・272が出土した(図75)。

271は小型丸底甕、272は高杯の脚部である。ともに器壁は薄く、272は裾部上端に円形のスカシ孔を2方に穿つ。ともに布留式新相に属する。

その他の遺物 第2層から吉備型甕270が出土した。口縁部は直立ぎみに立ち上がり、端面に退化凹線を巡らす。亀川上層式に属する[柳瀬昭彦1977]。

4) 小結

本調査では、周辺の調査同様、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物を検出した。特に、SK01から比較的多く出土した土器は、弥生時代後期の土器の変遷を考える一つの資料となろう。これらは後期中葉の土器群を主体としつつも、二重口縁甕の可能性のある255や手焙り形土器の可能性のある268が含まれており、後期中葉から後葉にかけての過渡的な様相を示していると理解することができる。また、270は瓜破北遺跡では初例となる吉備型甕である。瓜破北遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて河内平野に搬入した吉備型甕の分布の西限に当たる[秋山浩三ほか2000]。これまで調査されている集落の時期が、吉備型甕が搬入された最盛期と若干ずれることを考慮しなければならないが、外来系土器が少ない点は瓜破北遺跡の特徴といえよう。(大庭)

第4節 UR89-1次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は瓜破西1丁目に所在し、阪神高速道路から西側に50m離れた地点にある(図48)。瓜破北遺跡の中でもっとも北西端に位置する。調査は1989年4月5日から同年4月28日まで実施した。調査区は、敷地内の建造物の基礎杭予定個所に、東西40m、南北3mの東西に長細い2列のトレンチを設定した。南側のトレンチをⅠ区、北側のトレンチをⅡ区と呼称する。調査の方法は、弥生時代後期～古墳時代前期の包含層(第6層)の上までを重機で掘削したのち、第6層を人力掘削して遺構の検出を行った。

2) 層序(図76)

Ⅰ区南壁の4箇所で地層断面の観察を行い、現地表下約2.3mまでの地層を第0～7層に区分した。先述したように第5層以上は重機により掘削しているため、これらの地層の時期は明確ではない。

第0層：現代の盛土である。

第1層：現代の盛土がなされる直前の作土層で、灰色砂礫混りシルト、層厚は10cmあった。

第2層：灰オリーブ色砂礫混りシルトの作土層で、層厚は20cmあった。断面観察で、本層下面で南北方向の幅広の溝が認められた。鳥居に伴うものと思われる。

第3層：調査区全域に分布する水成層で、灰色粘土～中粒砂である。層厚は最大で50cmあった。

第4層：上部の暗灰色砂礫混り粘土、下部の黄灰色砂礫質粘土からなる作土層で、層厚は50cmあった。断面観察で、第3層に覆われる畦畔状の高まりを確認した。また、Ⅱ区西部の本層下面で南北方向の溝を検出した。

第5層：水成層で、第5a～5c層に細分できる。第5a・5b層は調査区東端にのみ分布し、第5a層が灰色砂礫、第5b層が緑灰色シルト～粘土である。第5a層からは弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器が出土し、第5b層上面で踏込みを確認した。第5c層はⅠ・Ⅱ区東部で確認した南北方向の溝SD01の埋土で、下からオリーブ黒色砂礫混り粘土、灰色シルト質粘土、オリーブ黒色粘土の順で堆積している。このうち下部の砂礫混り粘土層はSD01の機能時に堆積した地層の可能性がある。また上部の粘土層は、SD01を越えて西側にも分布しており、下位の第6層を直接覆っていた。

第6層：弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を多く含む暗色帯構成層で、オリーブ黒色シルト質粘土からなる。Ⅰ・Ⅱ区の西半部に約10cmの厚さで分布しており、上面の標高は3.7～3.8mで、調査区内の東側にいくにつれてわずかに低くなっていた。本層上面および本層を除去した段階で多数の遺構を検出した。

第7層：水成層で、上部の粘土(第7a層)、下部のシルト～細粒砂(第7b層)に区分できる。層厚は30cm以上で、下限は不明である。

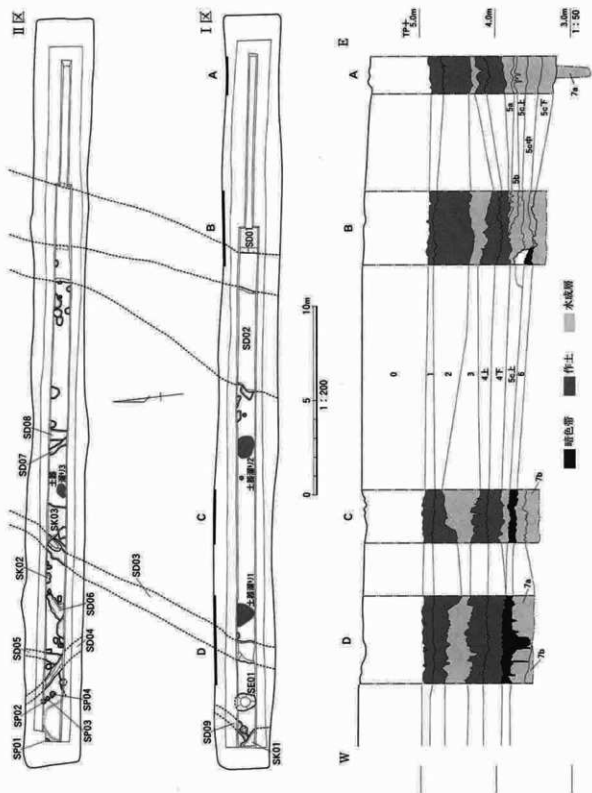


图76 UR89-1 次湖洼地平面图·I区北缘断面模式图

3) 遺構と遺物

第6層を除去した段階で遺構検出を行い、以下の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物を多数検出した(図76、図版11)。

i) 溝(図76・78)

SD01～09を検出した。

SD01・02 SD01はⅠ・Ⅱ区の東半部で検出した南西―北東方向の窪地状の溝で、幅は10m以上、深さは0.4mある。第5層で埋まっていることから、第6層上面検出遺構と判断できる。この西隣にはSD01と平行した溝SD02があり、幅2～5m、深さ0.1mあった。SD01とSD02の間には、高さ0.2m程の堤状の盛土がある。これは第6層の上に盛られており、第5層上部の粘土で覆われていた。以上のことから、SD01とSD02は同時併存していたと考えられる。弥生時代後期後葉～庄内式の土器片が少量出土した。

SD03 Ⅰ・Ⅱ区西半部の第6層内で検出した南西―北東方向の溝である。幅0.6～1.1m、深さ0.2mで、溝の断面はU字形であった。埋土は黒褐色の粘土質シルト層である。Ⅰ区で弥生時代後期後葉～庄内式の土器片がまとまって出土し、Ⅱ区では庄内式の破片が出土している。

SD04 Ⅱ区西端で検出した南東―北西方向の溝である。幅0.3m、深さ0.2mで、溝の断面はU字形であった。埋土に炭化物を含み、弥生時代後期後葉～庄内式の土器が少量出土した。

290はSD04から出土した二重口縁壺の口縁部片で、柳描直線文および波状文を巡らす(図78)。にぶい黄橙色を呈し、胎土中に石英・長石・チャート粒を少量含む。庄内式でも古相のものであろう。

SD05～09 SD05～08はⅡ区で、SD09はⅠ区で検出した小規模な溝である。ともに幅0.3～0.6m、深さ0.1m未満で、溝の断面は浅い皿状を呈していた。SD05・06から弥生時代後期後葉～庄内式の土器片が少量出土している。

ii) 小穴(図76)

Ⅰ・Ⅱ区の西半部で多数の小穴を検出した。多くは検出面からの深さが5cm未満の浅いものであるが、Ⅱ区西端で検出したSP01～04は深さが20cm以上とほかの小穴より深く、柱穴の可能性がある。調査範囲が狭いため柱筋を確定できないが、SP02～04はSD04に沿って並んでいる。

iii) 土壌(図76～78)

Ⅰ区西端でSK01を、Ⅱ区西半部でSK02・03を検出した。

SK01 調査区内で北東隅を確認するととどまった浅い落込みで、堅穴住居の可能性もある。

289はSK01から出土した二重口縁壺の頸部である(図78)。頸部は細くすばまり、斜め上方に立ち上がったあとと水平に近く開く。頸部下端に断面三角形の突帯を巡らし、口縁部は擬口縁部分で剥離し残存しない。頸部に細かいタテハケが残る。にぶい黄橙色を呈し、胎土中に長石・石英粒を多く含む。庄内式でも

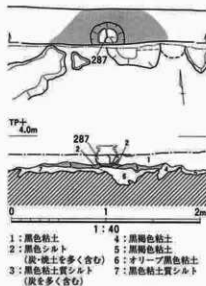


図77 SK02平・断面図

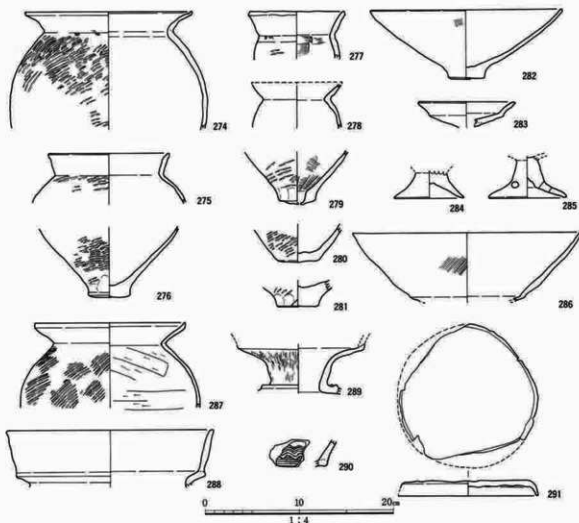


図78 UR89～1次調査出土遺物

SD04(290)、SK01(289)、SK02(287・288)、SK03(275・278)、SE01(276)、土器溜り2(282～285)、土器溜り3(274・277・279～281)、第6層(286・291)

新相のものであろう。

SK02 直径0.2mの浅い窪みで、中から甕287が正置した状態で出土した(図77)。土壌内には炭および焼土が多量に含まれており、土壌の周囲径約1mの範囲周辺にも炭が分布していた。このことから、SK02は炉跡の可能性が高い。

287は生駒西麓産の胎土を有する庄内甕である。庄内式期Ⅱ～Ⅲに属する[米田敏幸1991]。ほかにもSK02の付近から山陰系の大型甕の口縁部片288が出土している(図78、図版27)。褐灰色を呈し、胎土中に長石・石英粒を含む。青木編年のⅤ～Ⅵ期に属する[青木遺跡調査団1977]。

SK03 深さ0.1mの浅い土壌である。埋土は黒色粘土質シルトで、弥生時代後期の細片化した土器が多数出土した。

SK03出土の土器のうち、図化しえたものは甕275、小型甕278である(図78、図版27)。ともに器壁が薄く、粗雑な印象を与える。275は口縁部が直立ぎみに短く立上がり、口縁端部を丸くおさめている。これらは庄内式でも古相に属するものであろう。

iv) 井戸(図76・78)

I区西端で素掘りの井戸SE01を検出した。長径1.1m、短径0.9mの楕円形で、深さは0.5mある。底付近に木の葉が多く堆積していた。

276はSE01から出土した甕底部である(図78)。外面はタタキ整形で、突出した平底を有する。弥生時代後期後葉のものであろう。

v) 土器溜り(図76・78、図版27)

直接遺構に伴わないが、土器が密集して出土する範囲がI区で2箇所、II区で1箇所認められた。これを土器溜り1～3と呼称する。土器はともに細片化していた。

これらのうち図化したものは、土器溜り2出土の282～285、土器溜り3出土の274・277・279～281である(図78)。282は平底の浅い鉢で、外面はハケ調整である。284は鉢の脚部である。283は口径10.2cmと小型の高杯の杯部である。285は低脚の小型高杯脚部で、3方に円形スカシ孔を有する。274は口径17.6cmの甕で、口縁端部をつまみ上げている。体部外面は右上がりのタタキ整形である。277は小型の甕である。279～281は甕の底部で、279は底部に焼成前に小孔を穿ち、280は底部から体部にかけて直線的に立上る。281は突出した平底である。これらは庄内式でも古相に属するものであろう。

vi) 包含層出土遺物(図78)

遺構に伴わないが第6層から出土した遺物のうち、286・291を図化した。

286は2区から出土した高杯で、杯部は外上方に直線的に開き、受部との屈曲は甘い。赤橙色で胎土は精良である。布留式古相に位置づけられる。291は外縁部に短い折り返しが付く円形の土板で、ややひずんでいる。紐孔は見られないが蓋の可能性が高い。にぶい黄色を呈し、胎土中に長石・石英・チャート粒を含んでいる。

4) 小結

本調査では、弥生時代後期後葉から庄内式の時期にかけての溝や井戸土壌、柱穴の可能性のある小穴などを数多く検出し、ここが当該期の居住域であったと考えられる。調査地の東側50mでは、後期中葉を中心とした時期の集落が存在しているが、そこでは後期後葉から庄内式の時期の遺構・遺物は希薄となっている。この時期に、本調査地付近の低地側に居住域が移動していた可能性があろう。

I・II区の東半部で検出した窪地状のSD01・02は層位的にみて、検出した遺構中もっとも新しいものであるが、その掘削および廃絶時期は明確にできなかった。西側が居住域であった時期にも存在していたと過程すると、居住空間の東限を示す区画の役割を果たしていたと考えることも可能である。

(大庭)

第5節 UR90-13次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は瓜破北遺跡の南端にあたり、阪神高速道路の東隣に位置する(図48)。調査は建物建設予定地のうち、南北31.0m、東西3.5mの範囲を対象とした。まず、調査の円滑化をはかるためにこれより一回り広い範囲の現代の盛土部分を重機により除去し、調査範囲の現代の作土層以下を人力によって掘削した。遺構の検出作業は、第3C層上面、第4B層上面、第5層下面、第6Z層上面および下面の合計5面で行った。第6Z層以下の地層については、一部で深掘りを行い、断面観察を行った。

2) 層序(図79、表8、図版12)

現地表約4.2mまでの地層を、第0～7層に区分した。各層の特徴は表8のとおりで、以下では地層の重なりを概略する。

表8 UR90-13次調査層序表

層序番号	層序概略図	層相	層厚(m)	特徴	おもな遺構	おもな遺物	時代	瓜破基本層序との対応
第0層		現代盛土	70	客土				UR0
第1層		オリーブ褐色・暗オリーブ褐色砂質シルト	20	作土			現代	UR1
第2層		黄褐色シルト・シルト質砂礫	10～50	作土	↓溝	陶磁器・瓦	江戸	UR2-3
第3A層		黄褐色砂礫		水成層				
第3B層		黄褐色細粒砂・シルト質細粒砂・ミナ挟む	15	水成層	→足跡(ヒト・四脚類)			
第3C層		上部:灰オリーブ色シルト・微細砂・細粒砂 下部:オリーブ灰色砂質シルト	20	作土層	▽土取穴	瓦・瓦器・骨	鎌倉	UR4
第4A層		淡黄色中粒砂(足跡内に堆積)	≦3	水成層				
第4B層		灰・オリーブ灰色粘土・砂を挟む	30	作土	→溝作遺・足跡 ↓溝込み・溝作遺	瓦器・土師器・白磁		
第5層		暗オリーブ灰色細粒砂質粘土	15	作土	↓溝作遺	土師器・須恵器	戦国	UR5
第6X層		灰色砂質シルト	≦5	暗色帯		土師器	古墳	
第6Y層		暗オリーブ灰色シルト質粘土・灰色砂礫	10	水成層				
第6Z層		上部:暗オリーブ灰色細粒砂質粘土 下部:暗オリーブ灰色砂質粘土	30	暗色帯	→NR601 ▼SD601-602	弥生土器・土師器 サヌカイト製片	弥生	UR6a
第6A層		6Aⅰ:オリーブ灰色シルト質粘土 6Aⅱ:暗灰色シルト質粘土 6Aⅲ:灰色粘土質シルト 6Aⅳ:暗灰色細粒砂質シルト 6Aⅴ:灰色中・細粒砂・砂礫挟む 6Aⅴ:緑灰色シルト質粘土	≦12 ≦15 ≦10 10 ≦15 ≦7	水成層 暗色帯 水成層 暗色帯 水成層 水成層				UR6a
第6B層		6Bⅰ:やや暗い黄灰色粘土 6Bⅱ:灰色シルト 6Bⅲ:黒褐色シルト 6Bⅳ:暗灰黄色シルト 6Bⅴ:黒褐色シルト 6Bⅴ:灰色シルト・暗オリーブ灰色粘土	20 25 8 5 7 33	暗色帯 水成層 暗色帯 水成層 暗色帯 水成層				UR6b
第6C層		上部:オリーブ黒・黒褐色粘土 下部:オリーブ黒色シルト質粘土・微細粒砂挟む	30	暗色帯				UR6c
第6D層		上部:やや明るいオリーブ黒色粘土質シルト 下部:黄灰色シルト	4 6	暗色帯 水成層				
第7層		上部:オリーブ灰色シルト 下部:オリーブ灰色砂質シルト	6 ≧40					UR7

→上面検出遺構、↓下面検出遺構、▼地層内検出遺構、▽断面検出遺構

第0層は現代の盛土、第1層は現代の作土、第2層は陶磁器を含む江戸時代の作土である。

第3層は第3A～3C層に細分できる。第3C層は瓦器を含む鎌倉時代の作土層で、層厚は20cmあった。第3C層を覆う水成層を第3B層、第2層基底で確認した踏み込み内に堆積した水成の砂礫層を第3A層とする。

第4B層は作土層で、層厚は30cmあった。上面で耕作溝やヒトの足跡、下面で耕作溝や踏み込みを検出しており、14世紀後半の瓦器碗が出土した。上面で検出した踏み込み内には水成の中粒砂が堆積しており、これを第4A層とする。

第5層は作土層で、層厚は15cmあった。飛鳥時代の土師器・須恵器を含み、下面で耕作溝を検出している。

第6Z層は調査区全域に分布する暗色帯で、層厚は約30cmあった。下部に比べて上部がやや粗粒である。弥生土器もしくは土師器の破片やサヌカイトの剥片が出土しており、瓜破遺跡基本層序のUR 6Z層に相当する。また、本層上面で検出した自然流路NR601を埋積する河成のシルト質粘土～砂礫層を第6Y層、第6Y層の最上部が土壌化した部分を第6X層とする。第6X層からは土師器片が出土している。

第6Z層より下の地層は、調査区南半の東壁沿いの深掘りによって確認したものである。大きく第6A～6D層に分けられる。第6A層以深の地層からは遺物は出土せず、また人間活動の痕跡は認められなかった。

第6A層はNR601をはさんで北と南とで層相を異にする。NR601以南では比較的細粒な堆積物となる。灰色土層と植物遺体を多く含む暗灰色土層が互層に堆積しており、湿地性の堆積状況が観察された。これらを第6Aii～第6Avi層とする。この中で第6Av層が上下の地層に比べてやや粗粒であった。一方、NR601以北では、全体に砂礫を挟む中～粗粒砂に側方変化していた。地層の重なりから判断して、これは南側の第6Av層に対応する可能性がある。また、NR601の形成初期に溝内の最下部に堆積した水成層を、第6Ai層とする。

第6B層は粘土～シルトからなる細粒な堆積物で、灰色土層と植物遺体を多く含む黄灰色ないし黒褐色土層が互層に堆積しており、第6A層同様、湿地性の状態で堆積したものと考えられる。これらを第6Bi～6Bvi層に細分する。この中で最下部の第6Bvi層は層厚が33cmあり、まず粘土が堆積したあと上部にいくにつれてシルトに移化していた。

第6C層は層厚が約30cmの分厚い暗色帯で、上部はオリーブ黒色ないし黒褐色の粘土、下部は極粗粒砂を含むシルト質粘土であった。

第6D層以深は、深掘り部分で採集した土層サンプルにより認定したものである。第6D層は第6C層の下位にある細粒な堆積物で、上部が層厚4cmのやや暗色化したオリーブ黒色粘土質シルト、下部が層厚6cmの水成の黄灰色シルトである。

第7層はオリーブ灰色砂質シルトの水成層で、上部はシルトに移化していた。層厚が40cm以上で下限は不明である。瓜破基本層序のUR 7層に相当する低位段丘構成層と考えられる。

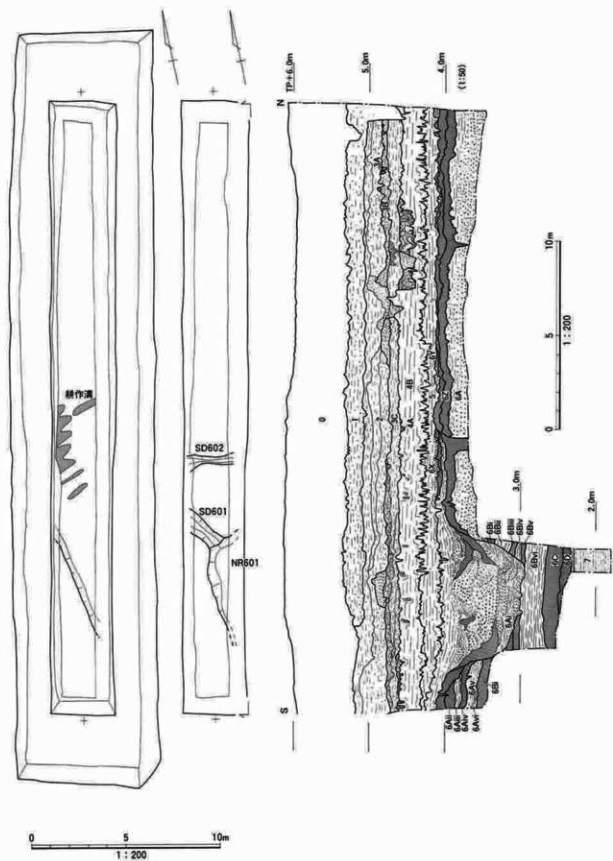


图79 UR90-13次調査地平面図・東壁断面模式図

3) 遺構と遺物

i) 古墳時代以前(図79、図版12)

調査区南東部の第6Z層上面で、南から東に蛇行する自然流路NR601の東肩を検出した。最下部に第6Ai層のシルト質粘土が堆積し、それに若干暗色化した地層を挟みながら、水成の第6Y層によって最終的に埋没している。遺物は出土しなかった。NR601を挟んで北側では水成の第6Av層が厚く堆積しており、また、南側では第6Av層堆積後に形成された第6Z・6Aii・6Aiv層の各暗色帯が流路側にたれこんでいる様子が観察される。このことから、NR601は第6Av層の堆積によってできた地形の起伏の傾斜変換部分に徐々に形成された自然流路であったと判断される。また第6Z層内では、NR601にとりつく溝SD601や、東西方向の溝SD602を検出した。

ii) 飛鳥時代(図79)

第5層下面で耕作痕と思われる東西方向の浅い溝を複数検出した。また、この溝群の東側にはこれと直交する浅い南北方向の段を検出し、これも耕作に係わる痕跡の可能性もある。第5層からは7世紀代のものと思われる土師器や須恵器の破片が少量出土しており、器形のわかるものに7世紀前～中葉の須恵器杯耳がある。第5層下面で検出した耕作に係わる遺構も、この時代にさかのぼる可能性が高い。

4) 小結

本調査地では弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物はほとんど出土しなかった。瓜破北遺跡で確認されている居住域外の南側に位置すると考えられる。また、現地表下約3.8mまでの地層の細かいデータを得ることができ、瓜破遺跡基本層序のUR6z層に対応する第6Z層以深のは、湿地性の状態で堆積していった様子が観察された。

(大庭)

第6節 UR91-3次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は瓜破1丁目にあり、瓜破北遺跡の南西寄りに位置している(図48)。ここは1978～1979年に行われた共同溝建設に伴うUR9次調査地[大阪市文化財協会1980]の西側に当る。共同住宅の建設に先立って試掘調査を行ったところ、中世以前の遺物包含層が確認されたため、建物の予定地内に南北に長い調査区(3.5m×35m)を設定して、1991年5月7日～同年5月22日まで調査を実施した。調査に際してはまず現代の整地土以下、中世の作土である第6層までを重機で掘削して、これ以深については人力で掘削した。第11層の上面で浅い落込みSX01、第12層の上位でサヌカイトの剥片や破砕片からなる石器遺物集中区、第13層の上面で溝状の遺構を検出した。しかし、調査範囲や基礎の深さとの関係もあって、大半が断面観察のみのため、遺構の性格が明らかになったものは少ない。

2) 層序(図80)

現地表面下3.2mまでの地層を第0～15層に細分した。なお、第11層から以深の層序については建物の地中梁の位置より深くなることから、最小範囲の深掘りに止めた。

第0層：現代の盛土で、上面の標高はTP+5.2～6.5mある。

第1層：灰色砂礫混りシルトは現代の作土で、層厚は10～20cmある。

第2層：黄褐色シルト混り砂礫および黄色砂礫はともに最大層厚が30cmの水成層であるが、調査区の北部では上層の耕作によって攪拌されており、層厚も10cm前後と薄い。

第3層：黄褐色砂礫で、層厚が10～30cmの水成層である。本層は作土のブロックを多く含む。

第4層：灰黄色砂礫混りシルト質粘土で、層厚が10～30cmの近世の作土である。調査区の中央部および北部では下位の砂礫層を掘込んで造成した東西方向の島島の畝が確認された。

第5層：黄褐色砂礫～細粒砂を主体とする層厚が10～30cmの水成層である。本層は砂礫と細粒砂ならびに極細粒砂に大別されるが、層厚は後者が5cm以下と薄く、下位のみに堆積している。

第6層：黄褐色粘土質シルトで、層厚は10～25cmある。本層の上面にはヒトおよび偶蹄類の足跡が見られたほか、下面には耕作痕跡があった。瓦器や土師器の細片を含むことから中世の作土と考えられる。

第7層：黄色細粒砂～砂礫を主体とした層厚が5～10cmの水成層で、第6層に係わる耕作によって攪拌されている。

第8層：灰色シルト質粘土で、層厚は10～25cmある。上面には第7層の細粒砂が堆積したヒトや偶蹄類の足跡が見られたほか、下面にも耕作痕跡が確認された。第6層と同様の中世の作土である。

第9層：調査区の中央部以南に堆積する灰色含砂礫シルト質粘土で、層厚は10cm以下である。本層は第8層に係わる踏込みや耕作時の影響を受けており残りは悪い。

第10層：灰色粘土で、層厚は10～25cmある。6世紀後半代の須恵器片を含む。下面で多数の踏込

みが見られたことから作土と考えられる。

第11層：オリブ黒色極細粒砂混り粘土質シルトを主体とする暗色帯で、UR90-13次調査地の第6Z層に相当する。層厚は10cm以内と薄い、これは上層の耕作によって攪拌されたことによるものと思われる。調査区の南端に位置するSX01は本層の上面で検出された落込みである。

第12層：灰～灰オリブ砂礫および砂礫混りシルトで、層厚は5～20cmある。調査区の北部では暗緑灰色粘土が加わって層厚を増している。本層は水成層であるが、全体に暗色化が進んでおり、調査区の中央部では本層の上部からサヌカイト製の剥片や破砕片からなる石器遺物集中区を検出した。本層は、石器遺物や弥生土器の細片からみて弥生時代中期に形成された地層で、UR90-13次調査地の第6Z層に相当するものと思われる。

第13層：灰オリブ色粘土で、層厚は10～20cmある。調査区の中央に位置する東西方向の溝SD01は本層の上面の遺構である。UR90-13次調査地の第6A層に相当する可能性が高い。

第14層：オリブ黒色粘土の暗色帯で、層厚は10cm前後ある。UR90-13次調査地のUR6B層に相当するものと思われる。

第15層：灰オリブ粘土で、層厚は25cm以上ある。

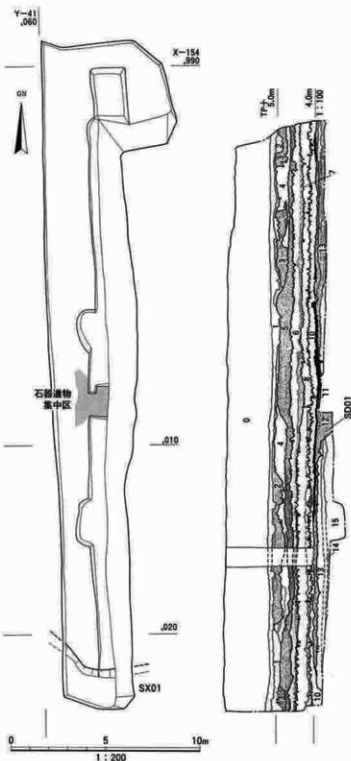


図80 UR90-13次調査地平面図・東壁断面模式図

3) 遺構と遺物

第12層上部の石器遺物集中区(図80・81、図版11) 第12層の上部で検出されたサヌカイト製の剥

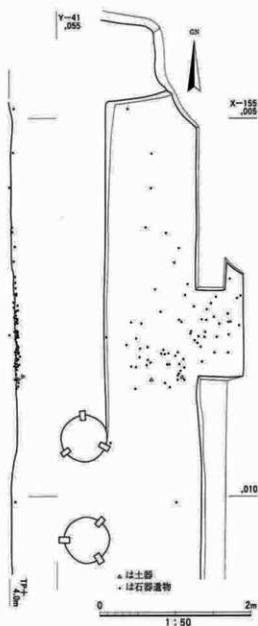


図81 石器遺物出土状況

片および破砕片からなる集中区である。東西1.5m、南北5.1mの範囲から総数777点の剥片と破砕片が出土した。これらの石器遺物は垂直分布に示したように2cm前後の範囲内に集中することから、この場所で行われたであろう打製石器の製作の過程で生じたものと思われる。ここでどのような石器が製作されたかについては断定しがたいが、剥片や破砕片からみて石鏃のような比較的小型の打製石器であったのではなかろうか。

SX01(図80) 調査個所の南端部に位置する東西方向の落込みで、幅は1m以上、深さは検出面から0.1~0.2mある。埋土は灰色粘土で、遺物は出土しなかった。遺構の大半が調査区外にあるため、性格は不明である。

4) 小結

調査地は弥生時代後期中葉から後葉の集落域からやや離れていることもあって、当該期の遺構や遺物は検出できなかった。ただし、第12層の上部から出土した石器遺物の集中区は分布状態から判断して、この地で弥生時代中期に石器製作が行われたことを示唆している。また、断面観察のみであるが溝SD01についても層準からみて、石器遺物の集中区と同様に弥生時代中期の遺構の可能性が高い。(田中)

註)

(1) 異体字銘帯鏡の書体については小篆体・楔形体・ゴシック体の分類に従う[樋口隆康1979]。

- (2) 清白鏡銘文の全文は「嚴窟藏鏡」に従えば「磐清白而事君 怨陰耀之弁明 煥玄錫之流澤 志疎遠而日忘 慎樂美之窮經 外承曜之可說 慕突寃於靈臺 願永思而母絶」である[梁上椿1940-42]。
- (3) [京嶋覚1986]では「5様式古相から中相」としたが、今回の年代観に従う。
- (4) 青柳種信1930、「筑前国怡土郡三雲村古器図説」：『京都帝国大学文学部考古学研究报告第11冊』
梅原末治1930、「筑前須玖史前遺跡の研究」：『京都帝国大学文学部考古学研究报告第11冊』
飯塚市教育委員会1977、『立岩遺蹟』
佐賀県教育委員会1979、『二塚山』
- (5) 1997年に神戸市西区の表山遺跡で弥生時代中期末の環濠最下層から狭縁の小型仿製鏡が出土した[兵庫県教育委員会1997]。この北九州に分布の中心があるタイプは広島県真亀C地点遺跡出土品が弥生時代後期前～中葉で最古であったが、この表山遺跡出土鏡は北九州での出土時期と変わらないことになる。

第Ⅳ章 瓜破遺跡東南地区の調査

第1節 UR85-39、86-11次調査

1) 調査の経緯と経過

UR85-39次調査は、府営高野大橋住宅の浴室等の増築に伴い、1986年2月3日から2月14日にかけて実施した(図82)。7.5m×3.6mの調査区を合計8箇所設定し、地山まで掘下げたが、江戸時代頃の土取り穴が調査区のほぼ全域に及んでおり、遺構は検出されなかった。

UR86-11次調査は、この西隣の府営高野大橋第2住宅を建設する計画に基づいて、1986年8月1日から実施した。当初の予定では、まず計5棟の住棟部分約2,800㎡の調査を行い、その結果を勘案して、集会室・上下水道・ガス管などの設置部分の調査を適宜行うことになっていた。ところが、調査が進むにつれ、東西2箇所を設定した調査区(図82、1・2区)のうち、東側の1区において、溝と櫓で区画される7世紀代の大規模な建物群が存在することがわかってきた。この建物群に関しては、関係部局と協議した後、調査の過程で推定された建物群の分布域に合わせて調査区を拡張した。また、建物群を区画する溝・櫓の広がりをも明らかにするために、それぞれの延長や推定交点にトレンチを設定した(4・5区)。さらに敷地北側においても、当初

調査予定の住棟部分と、以前調査されたNG84-24次調査地の間の部分に一連の建物が広がることが予想され、同様に調査区を拡張した(3区)。これらの結果、最終的に発掘調査した範囲は約4,800㎡に及んだ。また、1987年3月24日には現地説明会を開催し(写真9)、同年4月9日に調査を終了した。調査終了後は、大阪府建築部をはじめとする関係各位の努力によって、住棟の配置や規模を設計変更し、1区の建物群は、櫓外北側の1棟を除いてすべて保存されることとなった。

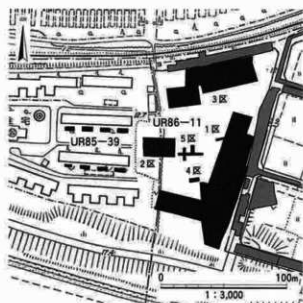


図82 UR85-39、86-11次調査地位置図



写真9 現地説明会風景

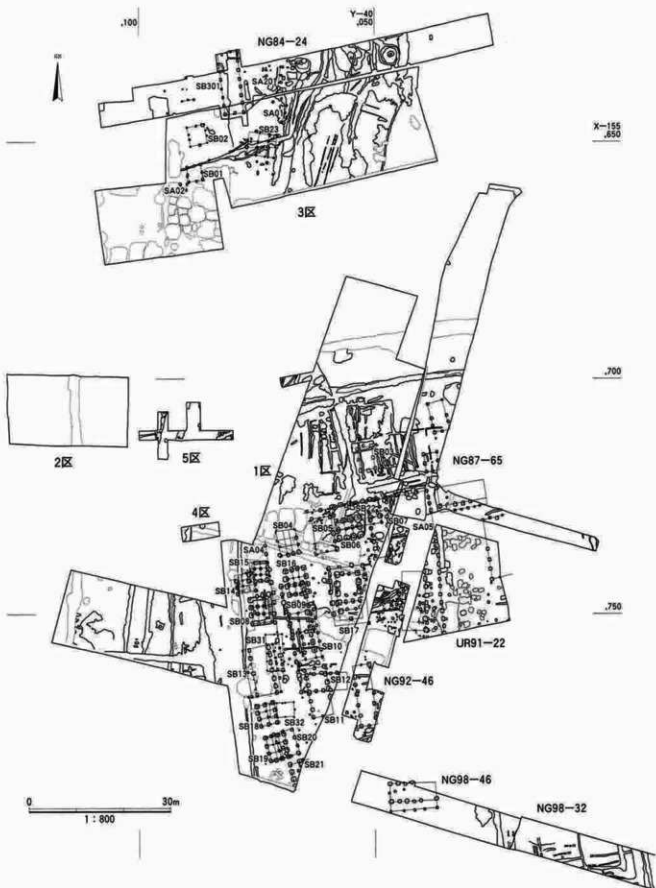


図83 UR86-11次調査地の遺構配置図

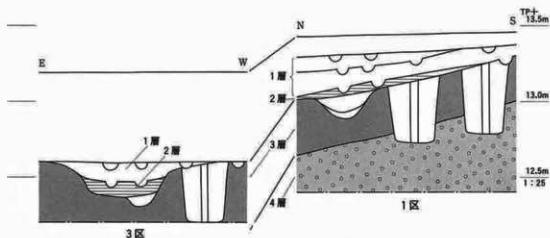


図84 UR86-11次調査地層断面模式図

調査では、旧石器時代から縄文時代にかけての石器、古墳時代の埴輪などが出土したほか、7世紀代の建物群をはじめ、平安時代の建物や中近世の耕作痕なども検出された。以下、UR86-11次調査の平安時代以前の調査成果を報告する。

2) 層序(図84)

調査地は、南から北に向けて緩やかに傾斜する台地上にあり、地山上面のレベルは南端の1区でTP+13.3m、北端の3区でTP+12.6mである。したがって、飛鳥時代の建物群を検出した1区の南半では、この時代の遺物を含む第2層がほとんど削平されており、現代の盛土とその直下の作土層を除去するとすぐに地山が露出するという状況であった。第2層は1区北半および3区にのみ残存していた。調査では以下の第1～第4層に区分した。

第1層：明黄褐色砂混りシルト層で、層厚は最大で約30cmあった。調査地のほとんど全域に分布しており、最大3層に細分された。各層の下面には多数の耕作溝が伴うことから、作土と推定される。瓦器および江戸時代の陶磁器を含む。

第2層：砂混り灰黄色シルト層で、層厚は最大10cmあった。7世紀代の土器を多量に含む。分布範囲は、1区の建物群の北側と、3区東側の落込みとその周辺に限定されており、それ以外の地形的に高い箇所ではほとんど残存していなかった。

第3層：黄色シルト層で、層厚は20～40cmあった。乾痕が見られる。長原遺跡標準層序のNG13層に相当する、低位段丘構成層である[趙哲済1995a]。

第4層：砂礫混り灰白色シルト層で、層厚は30～50cmあった。上面からの大きな乾痕があり、上位の第3層とは不整合の関係にある。NG14層に相当する中位段丘構成層である。

3) 古墳時代以前の遺構と遺物

i) 旧石器時代(図85、図版28)

ナイフ形石器292・293が出土した。292は1区の西端で第3層の上面を精査している時に、293は1区の第1層から出土した。292については、第3層に伴う可能性もあったことから、石器が出土し

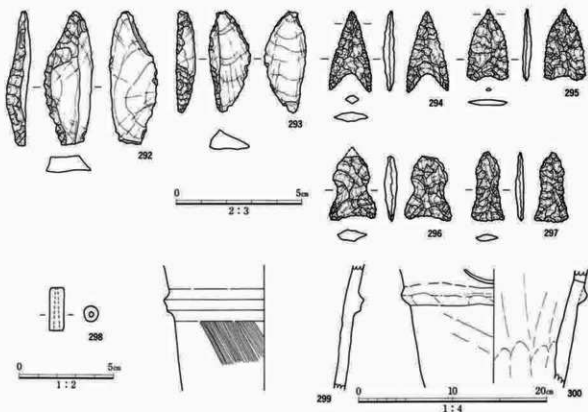


図85 旧石器～古墳時代の遺物

1区第3層上面(292)、1区第1層(293)、1区第1・2層(294～297)、1区第2層(298)、3区SK06(299・300)

た地点を中心に1m四方のグリッドを市松状に35個所設定し、第3層を対象に調査を行った。その結果、確実に第3層から出土する石器遺物は確認されず、292も第3層に伴っていた可能性は低い。

292は翼状剥片から作った国府型のナイフ形石器で、長さ5.3cm、幅1.9cm、厚さ0.6cmである。293は縦長剥片から作ったナイフ形石器で、長さ4.0cm、幅1.7cm、厚さ0.8cmである。ともにサヌカイト製で、表面の風化が著しい。後期旧石器時代に属するものである。

ii) 縄文～弥生時代(図85)

後世の遺構や地層からであるが、縄文・弥生時代の石鏃32点、削器2点が出土しており、ここでは1区出土の294～297を図化した。294は凹基無茎式石鏃、295～297は平基無茎式石鏃である。ともにサヌカイト製である。294は細長く、鋭利な逆刺をもつ。296・297は作用部の側縁に屈曲があり、平面形が五角形を呈する。長原遺跡出土の石鏃の編年観にたると、294は縄文時代中期にさかのぼる可能性があり、295～297は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてのものであろう[菅菜太郎1995]。

iii) 古墳時代(図85、図版28)

調査では古墳時代の遺構は検出されなかったが、付近に古墳が存在したことをうかがわせる埴輪や管玉が出土した。298は碧玉製の管玉で、1区の第2層から出土した。長さ2.25cm、直径0.8cmである。孔は片方から穿けられている。299・300は円筒埴輪で、7世紀代の遺構である3区のSK06から出土した。ともに黒無斑で、外面調整は299が一次タテハケ、300がナデである。タガの形状は、299が断面台形であり、300の最下段のタガは断面三角形で、ナデつけられている。ともに川西編年のV期に

表9 UR86-11次調査の建物・橋一覧

建物番号	桁×梁	構造	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)	方位	備考
SB301	7×2		12.95	3.95	51.15	N6.4°W	
SB01	2×2		3.18	3.04	9.65	N9.1°W	
SB02	3×2		3.88	3.68	14.26	N11.4°W	
SB03	2×2		4.69	3.13	14.66	N9.4°W	
SB04	3×3	総柱?	5.30	4.02	21.31	N11.6°W	
SB05	4×2		7.32	4.20	30.74	N10.1°W	
SB06	3×2	総柱東西棟	4.77	4.14	19.75	N9.3°W	SB22を切る
SB07	*6×2		*9.52	3.60	*34.27	N8.2°W	
SB08	3×3	総柱布張り	5.17	3.90	20.16	N6.5°W	
SB09	6×3		10.34	4.64	47.98	N13.7°W	SB10・16に切られる
SB10	6×2	東廂	10.20	5.43	54.90	N9.5°W	SB09を切る
				身舎4.20 廂1.23			
SB11	6×2		10.13	4.30	43.56	N10.2°W	SB12に切られる
SB12	*5×2	東西棟	*8.05	3.64	*29.30	N3.3°W	SB11を切る
SB13	6×2	東西2面廂	10.16	6.35	64.52	N10.6°W	
				身舎4.11 東廂1.06 西廂1.18			
SB14	3×3	総柱	4.07	3.90	15.87	N11.5°W	SB15に切られる
SB15	3×3	総柱布張り	3.88	3.73	14.47	N3.4°W	SB14を切り、SA04に切られる
SB16	3×3	総柱	5.23	4.05	21.18	N12.0°W	SB09を切る
SB17	5×3	総柱4面廂	12.31	7.33	90.23	N6.4°W	
				身舎9.62 南廂1.28 北廂1.41	身舎4.74 東廂1.26 西廂1.33		
SB18	3×2	総柱	4.38	3.60	15.77	N14.3°W	
SB19	3×3	総柱	4.98	3.97	19.77	N13.9°W	SB20に切られる
SB20	3×2		5.42	3.72	20.16	N19.3°W	SB19を切る
SB21	*3×*2					N11.5°W	
SB22	6×2	南廂	10.00	5.1	51.00	N10.2°W	SB06・SA05に切られる
				身舎3.9 廂1.2			
SB23	3×3	総柱	5.88	4.78		N7.7°W	
SA01	2		4.71			N16.5°E	
SA02	2		3.37			N4.8°E	
SA04	*16		*28.40			N7.8°W	SB15を切る
SA05	*9		*19.40			N10.0°W	SB22を切る
			*30.00			N4.7°W	
SA06						N10.3°W	

*は検出分の数値

属する[川西宏幸1978]。

4) 飛鳥～平安時代の遺構と遺物

i) 飛鳥時代(図83、表9、図版13)

検出した建物はすべて掘立柱建物である。1区に20棟、3区に4棟あり、1区では南半分に集中していた。建物以外にも、1・3区で溝を、1・3～5区で溝や小溝群を、1・3区で浅い土壌を検出した。また、2区にはさしたる遺構はなかった。1・3区の拡張部分で検出した掘立柱建物のうち、工事により破壊されない箇所は、遺構の上面を検出し、柱位置を確認したのみで掘下げは行っていない。まず1区の遺構を、次いで3区で検出した遺構を報告する。なお、建物・橋の方位については、ともに座標北からの数値であり、東西主軸のものは90°ずらして南北に近い方位で示した(註1)。

a. 1区掘立柱建物(図86)

SB03(図87) 桁行4.69m(2間)、梁行3.13m(2間)の小規模な側柱建物である。1区の建物群の中では、一棟だけ北に離れている。建物の西側には南北溝SD03が、南側には東西溝SD05がそれぞれ

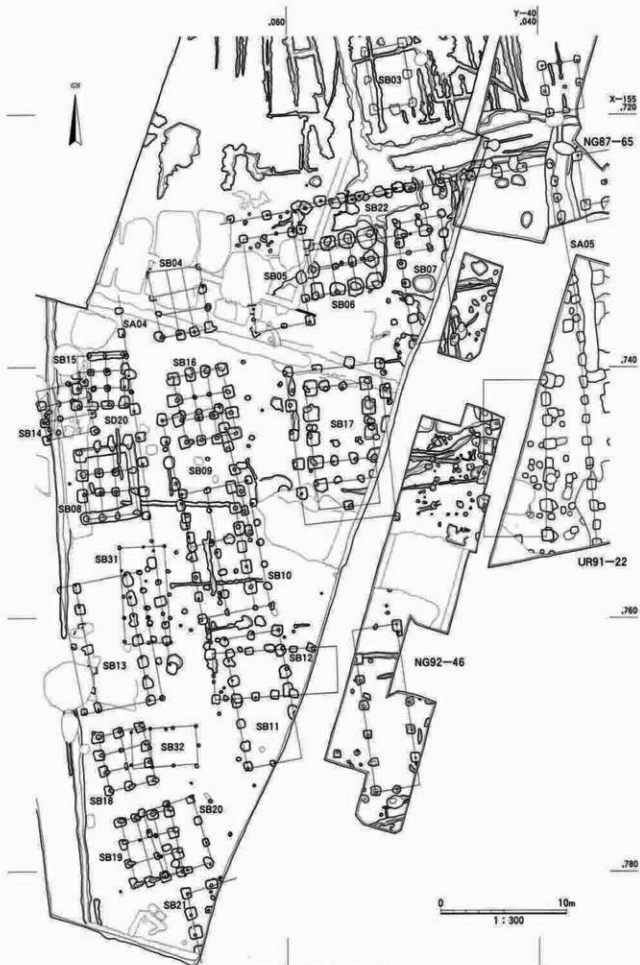


图86 1区南半遗址配置图

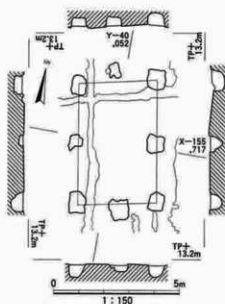


図87 SB03平・断面図

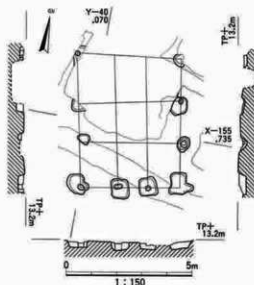


図88 SB04平・断面図

建物に平行しており、これらの溝と併存していたと思われる。方位はN9.4°Wである。柱痕跡は未確認であるが、柱間距離は推定で梁行が1.44～1.75m、桁行が2.20～2.44mで、桁行の方が長い。また、梁行の中央の柱穴がそれぞれ外側に出ている点もほかの建物に見られない特徴である。柱穴の一つから少量の土師器碗、須恵器杯の破片が出土した。

SB04(図88) 1区の建物群の北東部に位置する。建物の範囲内が攪乱を受けていたため床束は検出できなかったが、南隣のSB16や南西側のSB08と同規模であることから、これらと同様の総柱建物と推定される。桁行5.30m(3間)、梁行4.02m(3間)で、方位はN11.6°Wである。柱間距離は桁行が1.65～1.76m、梁行は南辺の内側の2本が1.33mと狭く、その両側は1.98mと2.04mである。柱の直径は20cm前後あり、抜き取り穴は確認できなかった。各柱穴の掘形から土師器・須恵器の破片が出土した。

SB05(図89) SB04の東隣に位置する、桁行7.32m(4間)、梁行4.20m(2間)の側柱建物である。方位はN10.1°Wで、東側に隣接するSB06・22と方向が同じである。判明した柱間距離は桁行が1.82～1.88mであるのに対し、梁行が1.75～2.35mと不ぞろいである。梁行中央の柱の直径は11cmと小さく、それ以外のものは20cm前後あった。柱穴から少量の土師器の破片が出土した。

SB06(図90、図版15) 桁行4.77m(3間)、梁行4.14m(2間)の東西棟の総柱建物で、方位はN9.3°Wであ

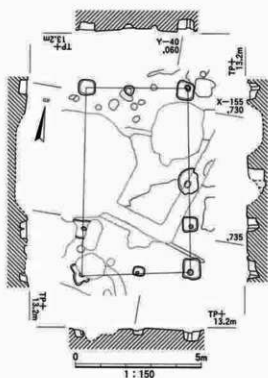


図89 SB05平・断面図

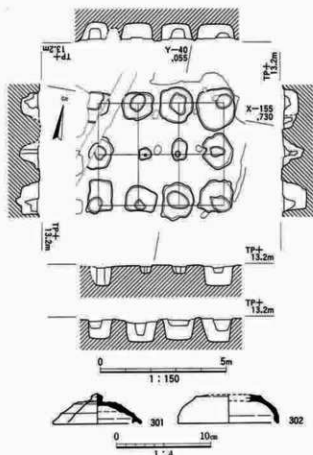


図90 SB06平・断面図および出土遺物

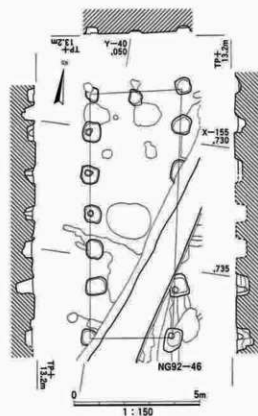


図91 SB07平・断面図

る。建物の面積はほかの総柱建物と変わらないが、側柱の柱穴が非常に大きい。柱の掘形の大きさは直径1.3mに達するものもあり、深さは1m近いものもある。側柱の柱は抜き取られており、柱の直径は20cm前後に復元できる。一方、床束の柱穴は規模が小さく、深さも浅い。柱筋は桁行方向でそうろう。柱間距離は推定で桁行方向が1.50～1.73m、梁行方向が1.97～2.15mである。SB06はSB22を切っている。SB06は、ほかの掘立柱建物に比べて構造がしっかりしており、総柱建物の中で唯一の東西棟である。またSB17のすぐ北に設けられていることから、ほかの総柱建物とは違った機能が予想される。

各柱穴の掘形および抜き取り穴から土師器・須恵器の破片が出土しており、特に抜き取り穴から須恵器甕の破片が多く出土した。301・302は柱の掘形から出土した須恵器である。

301は口径7.6cmの杯G蓋で、かえりは内におさまっている。天井部はヘラケズリ調整しており、外面にヘラ記号がある。302は杯H蓋で、復元口径10.7cm、器高3.1cmである。天井部はヘラ切り後不調整である。

SB07(図91) 桁行9.52m(6間)以上、梁行3.60m(2間)以上の側柱建物で、東隣のNG92-46次調査地で東辺の柱筋が確認されている。最長の建物が桁行6間であることからこれも6間で収まる可能性が高い。方位はN 8.2°Wで、南西隣のSB17と平行する。判明した柱間距離は桁行方向が1.58～1.62mで、梁行方向が推定で1.85mとやや長い。柱の直径は20～26cmあった。各柱穴の掘形から土師器・須恵器の破片が出土した。

SB08(図92、図版14) 桁行5.17m(3間)、梁行3.90m(3間)の総柱建物で、方位はN6.5°Wである。柱間距離は桁行方向が1.65～1.85m、梁行方向が1.22～1.40mである。柱穴は北辺のみを掘下げた。柱の直径は26～30cmで、側柱と束柱はほぼ同規模である。外側の柱は抜き

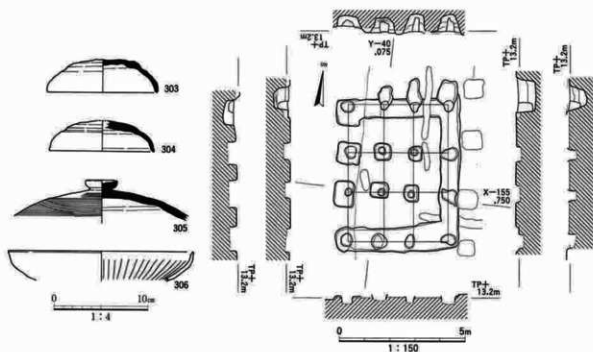


図92 SB08平・断面図および出土遺物

取られていた。また、外側の柱穴が布掘りで掘られている。布掘りは柱を立てる部分だけ深く、その間は検出面より15～20cmの深さしかない。西側の柱穴は攪乱によって削平されているためにそれぞれ独立しているように見えるが、元来は同様の布掘りで掘られていたであろう。北隣に隣接するSB15も同様に布掘りの掘形であり、位置関係からも同時併存していた可能性が高い。また、SB08は規模や柱間距離がSB04とほぼ等しい。

各柱穴の掘形および柱抜き取り穴から土師器・須恵器の破片が出土しており、特に抜き取り穴からの出土が顕著であった。303～305は布掘り内から出土した須恵器である。303・304は杯日蓋で、口径11.2～11.8cm、器高3.3～3.5cmである。305は鉢の蓋である。外面にカキメを施し、天井部に扁平な中凹みのつまみをつける。SK03から出土した441と同一個体である。306は柱抜き取り穴から出土した土師器高杯の杯部で、復元口径19.6cmである。内面に放射状の暗文を施す。

SB09(図93、図版15) 桁行10.34m(6間)、梁行4.64m(3間)の側柱建物で、方位はN13.7°Wである。柱穴は掘下げを行っていない。確認した柱の径は17～27cmあり、桁行の柱間距離は1.42

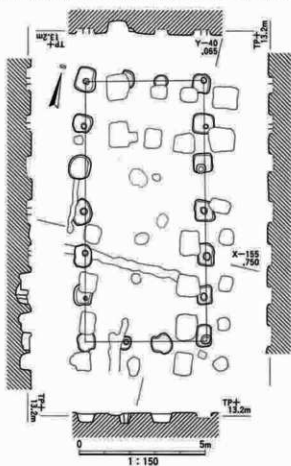


図93 SB09平・断面図



写真10 SB10出土竈羽口

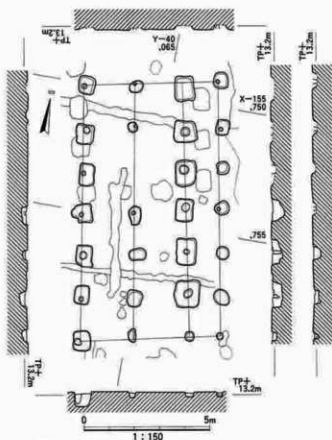
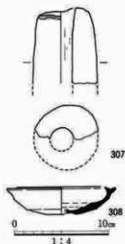


図94 SB10平・断面図および出土遺物

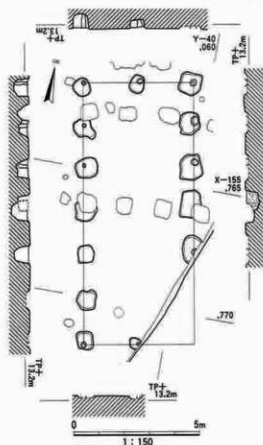


図95 SB11平・断面図

～1.93cmとややばらつきがある。SB10およびSB16に切られている。

SB10(図94、図版15) 桁行10.20m(6間)、梁行5.43m(身舎2間4.20m、庇1.23m)の東側に底をもつ総柱建物である。方位はN9.5°Wである。柱穴は北東部分を掘下げていない。身舎部分の柱間距離は桁行が1.50～1.90m、梁行が2.05～2.22mで、柱の直径は14～25cmあった。庇は梁行が1.25～1.40mで、桁行は身舎とほぼそろう。床東および庇の柱の直径は、身舎部分と比べて小さく、11～15cmあった。SB09を切っている。

各柱穴の掘形および抜き取り穴から比較的多くの土師器・須恵器破片が出土している。308は柱の掘形内から出土した須恵器杯Hである。復元口径9.5cm、器高2.9cmで、立上がりは短く内傾している。底部はヘラ切り後不調整である。

また、SB10の柱痕の一つから竈羽口307が出土した。新しい時代の遺物が含まれていないことから、

SB10が廃絶した時期に近い頃のものだと判断できる。ただし、ほかに近辺では鍛冶生産に関する遺物は出土しておらず、どのような経緯で柱の痕跡内に入込んだかは不明である。直径6.8cm、孔の直径は2.5cmある。先端はやや細くなっており、端面は溶解したガラス質である(写真10)。色調は黄褐色で、胎土中に長石・チャート・赤色粒を含む。

SB11(図95) 桁行10.13m(5間)以上、梁行4.30m(2間)の側柱建物で、方位はN10.2°Wである。柱間距離は梁行が2.15~2.23m、桁行が1.55~1.83mあった。柱穴は北西部分のみ掘下げた。柱の直径は13~35cmとばらつきがあり、東辺に比べ、西辺のものが小さかった。SB12に切られている。柱の掘形および柱の抜き取り穴から土師器・須恵器の破片が出土している。

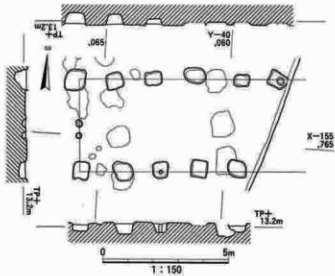


図96 SB12平・断面図

SB12(図96) 桁行8.05m(5間)以上、梁行3.64m(2間)の東西方向の側柱建物で、北側にあるSB07と類似した、桁行の長い建物である。これもSB07同様、桁行6間で収まる可能性がある。方位はN3.3°Wである。柱穴は東半部分を掘下げていない。柱の痕跡を確認できたものは、柱の直径が14cmあった。SB11を切っている。柱穴の掘形から土師器・須恵器の破片が出土している。

SB13(図97・98) 建物群の西端に位置する東西二面庇の建物で、方位はN10.6°Wである。桁行10.16m(6間)、梁行6.35m(身舎2間4.11m、東庇1.06m、西庇1.18m)あった。身舎部分の梁行の柱間は広いが、中央の柱穴が削平された可能性があり、本来



図98 SB13出土遺物

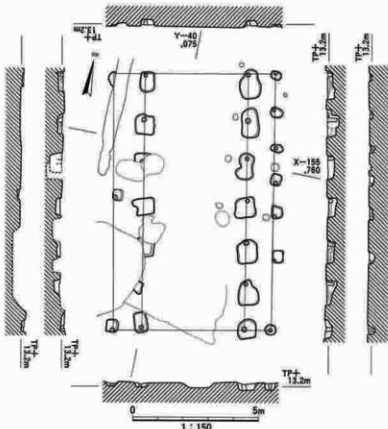


図97 SB13平・断面図

は2間であったと考えられる。身舎の桁行方向の柱間距離は1.60～1.82mで、庇の柱はこれとそろう位置にこない。SB13の平面積は64㎡になり、SB17に次いで2番目の大きさである。身舎の柱の径は13～20cmで、庇柱はやや小さく直径11～15cmであった。

柱穴の各掘形内から土師器・須恵器の破片が出土しており、309を図示した。309は口径12.1cm、

器高3.8cmの須恵器杯Hである。底部はヘラ切り後不調整である。

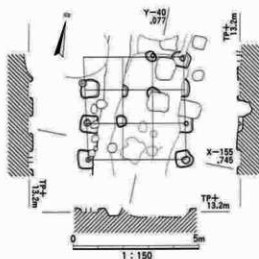
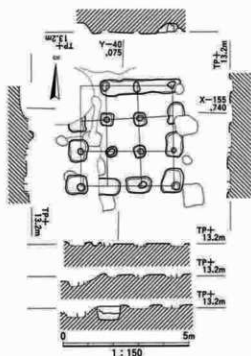


図99 SB14平・断面図

SB14(図99・101) 桁行4.07m(3間)、梁行3.90m(3間)の総柱建物で、方位はN11.5°Wである。この建物もほかの総柱建物と同じく、床束の柱の掘形が外側のものに比べて小さい。柱穴の掘下げは行っていない。確認できた柱間距離は桁行が1.30～1.42m、梁行が1.25mで、柱の直径は外側のものが15～29cmあった。SB14はSB15・SD30に切られている。

出土遺物は少ないが、柱の抜き取り穴の一つから土師器と須恵器がまとめて出土しており、土師器杯C310を図化した。復元口径11.7cmであり、径高指数は30代の前半と想定される。内外面の調整は風化のため不明である。



SB15(図100・101、図版28) 桁行3.88m(3間)、梁行3.73m(3間)の総柱建物で、方位はN3.4°Wである。一部を除いて柱穴の掘下げは行っておらず、上面で確認した柱間距離は桁行が1.20～1.45m、梁行が1.08～1.35m、柱の直径は18～31cmあった。北側柱の柱穴は布掘りで、柱を立てる部分だけを深く掘る方法は、SB08と同じである。また、規模や柱間距離はSB14とはほぼ同じである。SB14を切っており、SA04に切られている。

布掘り内および柱の掘形、柱の抜き取り穴から須恵器・土師器の破片が比較的多く出土している。311は布掘り内から出土した完形の土師器杯Cである。口径11.3cm、器高3.7cmで、径高指数は33である。内外面の調整は風化のため不明である。

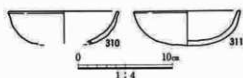


図101 SB14・15出土遺物

SB16(図102、図版15) 桁行5.23m(3間)、梁行4.05m(3間)の総柱建物である。方位はN12.0°Wで、SB04と柱筋を描いて並んでいる。柱穴の掘下げは行っていない。柱間距離は梁行が1.22～1.43cm、桁行が1.65～1.82

cmで、柱の直径は25cm前後であった。SB09を切っている。

SB17(図103、図版14) 橋に囲まれた範囲のほぼ中心に位置しており、建物群の中で最大規模をもつ。南東部は調査区外になり、南西部は攪乱により壊れているため、その規模や構造を復元するには困難が伴う。東隣のNG92-46次調査地で、南東隅に相当する位置で柱穴が検出されており、これをSB17の一部と考えると東西南北の四面に庇があったことになる[大阪市文化財協会1999a]。この場合、身舎は桁行9.62m(5間)、梁行4.74m(3間)、庇部分は桁行12.31m(5間)、梁行7.33m(3間)、建物の平面積は約90㎡に復元できる。方位はN6.4°Wである。柱穴の掘下げは

行っていないが、上面

で確認した身舎部分の

柱間距離は、梁行の北

辺が1.30~2.10m、桁

行が1.75~2.43mで、

庇部分の柱間隔は梁行

の北辺が2.35~2.95

m、桁行が2.35~2.95

mあった。それぞれの

北から4本目の柱を除

き、身舎と庇では柱位

置がすべてずれている。

また、梁行の南辺

中央部分に柱穴があり、

北辺とはそろわない。

身舎の桁行の柱掘

形は、ほかの建物に比

べて大きく、一辺1m

前後に達する。柱の直

径は20cm強と推測され

るが、これに比べると

庇の柱穴はやや小ぶり

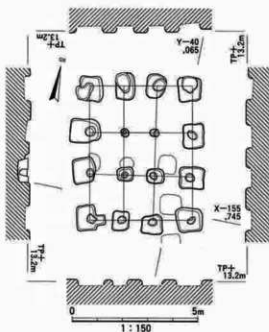


図102 SB16平・断面図

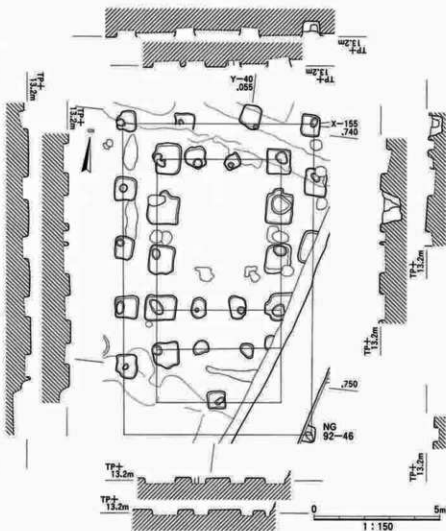


図103 SB17平・断面図

である。南半には床東がある。北半では床東は確認できなかったが、元々なかったのか削平されたのかは、判断できなかった。掘形の一部から少量の土師器・須恵器片が出土した。

SB18(図104) 建物群の南西部に位置する、桁行4.38m(3間)、梁行3.60m(2間)の総柱建物である。方位はN14.3°Wである。一部を除いて柱穴の掘下げを行っていない。身舎の柱間距離は梁行が

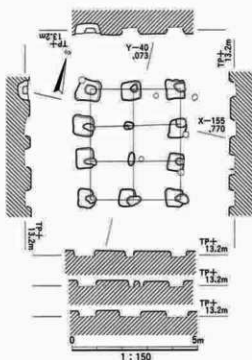


図104 SB18平・断面図

1.72~1.85m、桁行が1.35~1.50mあった。床東は非常に小さく、2本とも桁行方向から西にずれている。それに対して梁行方向では、柱筋が通る。柱穴は抜き取られていた。遺物はほとんど出土しなかった。

SB19(図105) SB18と柱筋を揃えて並ぶ、桁行4.98m(3間)、梁行3.97m(3間)の総柱建物である。方位はN13.9°Wである。これも柱穴の掘下げを行っていない。柱間距離は梁行が1.30~1.53m、桁行が1.65~1.78mあり、後者が長い。身舎部分の柱に比べて、床東が非常に小さい。柱は抜き取られており、SB20に切られている。SB18との位置関係から、これと同時併存していた可能性が高い。各柱の掘形内から土師器・須恵器の破片が出土している。

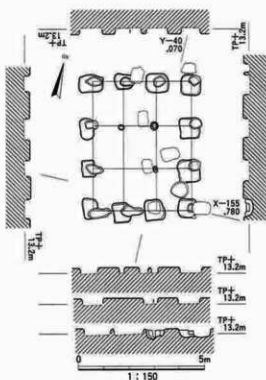


図105 SB19平・断面図

SB20(図106) 桁行5.42m(3間)、梁行3.72m(2間)の掘立柱建物である。方位はN19.3°Wとほかの建物とのずれが大きい。柱穴の掘下げは行っていないが、上面で確認した柱間距離は桁行が1.72~2.00m、梁行が1.84~2.15mで、柱の直径は12~20cmあった。SB19を切っている。柱の掘形内から土師器の破片が少量出土した。

SB21(図107) 1区の建物群の南端に位置する建物で、南東部は調査地外である。方位はN11.5°Wである。桁行3間以上、梁行1間以上あり、柱間距離は桁行が1.60mおよび1.70m、梁行が2.00mである。柱の直径は約20cmあった。SB20との位置関係から、これと類似した形態のものであったのかもしれない。柱穴内から土師器・須恵器の破片が少量出土している。

SB22(図108) 1区の建物群の北端に位置する東西方向の掘立柱建物で、南に庇が付く。桁行10.00m(6間)、梁行5.10m(身舎3.90m、庇1.20m)で、方位はN10.2°Wである。SA05とSB06に切られている。特に

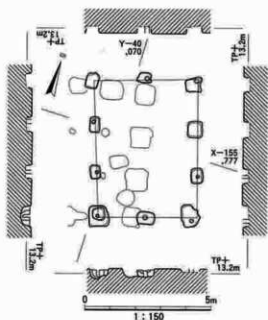


図106 SB20平・断面図

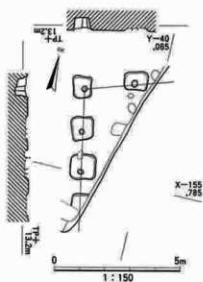


図107 SB21平・断面図

建物の南西半部はSB06の柱の掘形により削平されており、柱穴は残存していない。身舎部分の柱間距離は桁行が1.35～1.95m、梁行が1.35～1.98mで、柱の直径は15～25cmあった。底部分の柱間距離は桁行が1.70～1.82mである。底部分の柱穴は小さい。この建物の北辺の柱のラインは、その後建てられたSA05でも踏襲されている。柱の掘形内から土師器の破片が少量出土した。

b. 1区櫓

1区でSA04・05を検出した。上部構造は櫓もしくは塀であると考えられるが、検出した柱穴からそのどちらであるかは判断が難しい。ここでは、とりあえず櫓として記述することにする。

SA04(図109) 1区の建物群の西部につくられた南北方向の櫓で、16間分、28.4mを検出した。北側は攪乱によって壊されているが、おそらくあと3間分あって、SA05と連結していたと思われる。また、南端で検出し

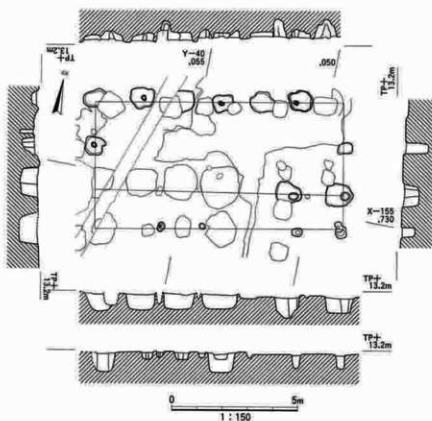


図108 SB22平・断面図

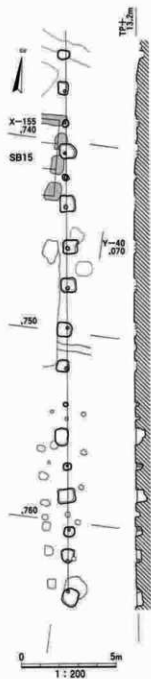


図109 SA04平・断面図

た柱穴で橋は途切れている。SA04の総長は、復元すると33.5mになる。方位はN7.8°Wで、SB17のちょうど西側に当たる中央部分の4間部分(8.5m)では、一辺約70cmの隅丸方形の掘形をもつ柱穴が並ぶが、それ以北と以南では、大小の柱穴が交互に並んでいた。この4間部分の柱間距離は2.00~2.35mで、それ以外は1.35~2.35mと不揃いである。中央部分では1区の建物群の中心的なSB17を意識し、ほかの部分とは橋の構造に違いがあったのかもしれない。柱の直径は20cm前後あった。また、SA04はSB15を切っている。各柱穴から土師器・須恵器の破片が出土している。

SA05(図110、図版15) 北側につくられた東西方向の橋で、9間分、19.4mを検出した。西側は攪乱を受けているが、SA05と連結していたと考えられる。また、1区の東隣で行われたNG87-65次調査では、SA05の東側への続きが確認されており、あと3間分東側へ続いたあと、南側へ直角に折れ曲がることが判明している[大阪市文化財協会1994]。さらに南側への続きがUR91-22次調査地でも確認されている[大阪市文化財協会1991]。東側の南北方向の橋をSA06と呼称する。SA05の総長は復元で35.5m、SA06は30.0m以上ある。SA06は北端から復元して7間目の柱穴を境に向きを変えている。方位は北半がN10.0°W、南半がN4.7°Wと、約5°のずれがある。また、SA05はN10.3°Wであり、SA06の北半とはほぼ垂直に交わっている。

SA05の柱間距離は1.23~3.00mと不揃いで、柱穴が小さいもの同士は距離が狭い傾向にある。また、SA04のように大小の柱穴を交互に並べる状況は認められなかった。柱の直径は20cm前後あった。SB22を切っており、また、東側のNG87-65次・UR91-22次調査地では、ほぼ同位置にある南北溝をSA06が切っていることが判明している[大阪市文化財協会1991・1994]。

SA05の柱穴の一つから須恵器杯G蓋312・313が出土した。口径は312が8.6cm、313が8.8cmで、ともに器高は低く扁平である。天井部はヘラケズ

り調整し、313にはヘラ記号がある。

SA04~SA06で囲まれた正方形の範囲のほぼ中心にはSB17が位置する(図110)。橋はSB17を中心にこれを「コ」の字に囲んだ遮閉物として設けられた可能性が高い。ただし、橋の東・北・西の各辺とも、方位に若干のずれが見られる。これは既存の建物などに規制された結果と考えられよう。建物との関係を見ると、SA04はSB17、SA05およびSA06北辺はSB05・06・22などとそれぞれ方位がそろう。

(大庭)

c. 1区溝(図111、図版16)

SD01(図111) 1区の北部で検出した幅1.4~2.7m、深さ0.3mの東西溝で、東から西にかけてし

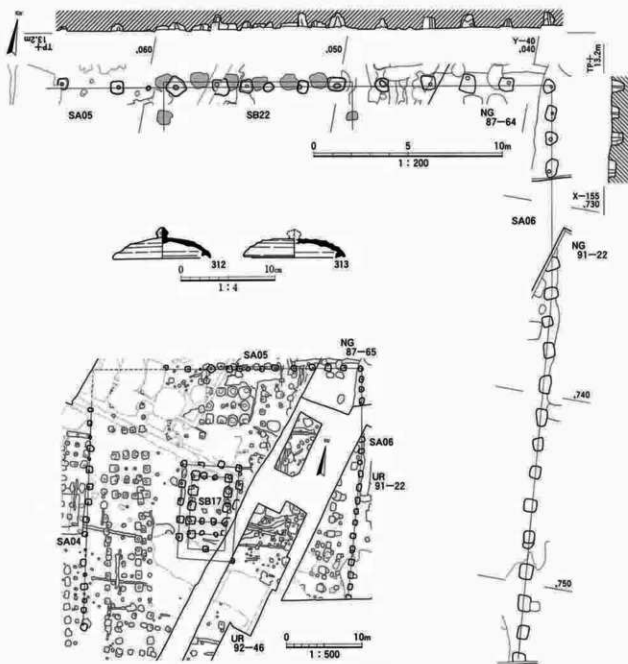


図110 SA05・06平・断面図および出土遺物

だいに幅が広がっている。西端は北側にある浅い窪みとつながっている。SD01より北側では遺構が希薄であることから、建物群を囲む区画溝の可能性はある。ただし、西側に設定した5区で、SD01が建物群の西方にある南北溝のいずれかと連結し、建物群を方形に取囲む可能性を探ったが、SD01の延長線上には溝はなかった。なお、東隣で行われたNG87-64次調査で、SD01の東側への続きが確認されており、長さは少なくとも35mはあったことになる[大阪市文化財協会1994]。溝はシルト～粘土質シルトで徐々に埋っており、人為的な埋戻しは認められなかった。

SD01出土遺物(図112、図版28) SD01からは須恵器314～324、土師器325～332が出土した。

314は口径10.8cm、器高3.2cmの杯H壺で、天井部はヘラ切り後不調整である。口縁端部は丸い。315

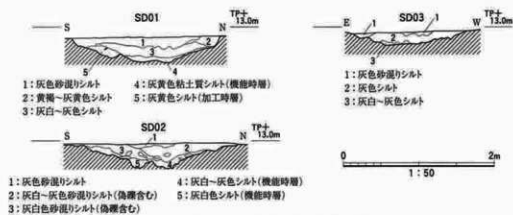
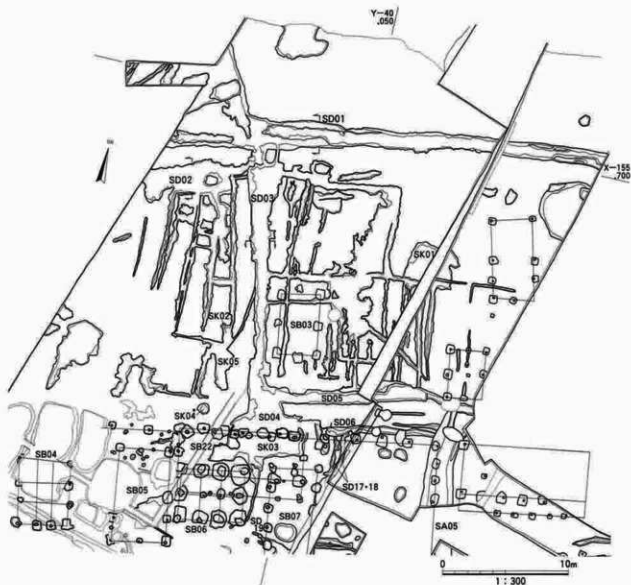


図111 1区北半遺構配置図および断面図

～319・322は杯Hで、立上がりは短く、口縁端部は尖りぎみにおさめている。底部はヘラ切り後不調整である。316の底部裏面にはヘラ記号がある。口径8.7cm、器高4.4cmで、体部がやや丸みをもつ317以外は底部を平坦におさめており、口径の割に器高が低い。320・321は杯G蓋で、前者の口径

は7.0cm、器高2.7cmあり、天井頂部にはヘラケズリの後、宝珠つまみをつけている。320のかえりは口径の大きい321より短い。323は口径9.8cm、器高2.5cmの杯Gで、口縁端部はわずかに開く。底部はヘラ切り後不調整で、裏面にヘラ記号がある。324は口径31.5cmの甕で、口頸部は緩やかに開いており、口縁端部の下端がにぶい突帯状に肥厚する。頸部の外面にはにぶい凹線と沈線が巡るほか、ヘラ先による浅い刺突文がまばらに施されている。以上の須恵器の色調は灰～灰白色で、胎土中に微細な長石・石英粒を含む。320が難波Ⅲ新段階である以外は、難波Ⅲ中段階に属するものである。

325・326は皿で、口縁端部は前者が内に丸く肥厚させており、後者はわずかに内傾している。327～331は口径14.4～31.1cmの甕で、口縁部は327・329が緩やかに開き、328・330・331は外上方に開く。331の体部の調整は外面が左上りのハケ、内面は横および右上りのハケである。332は口径24.9

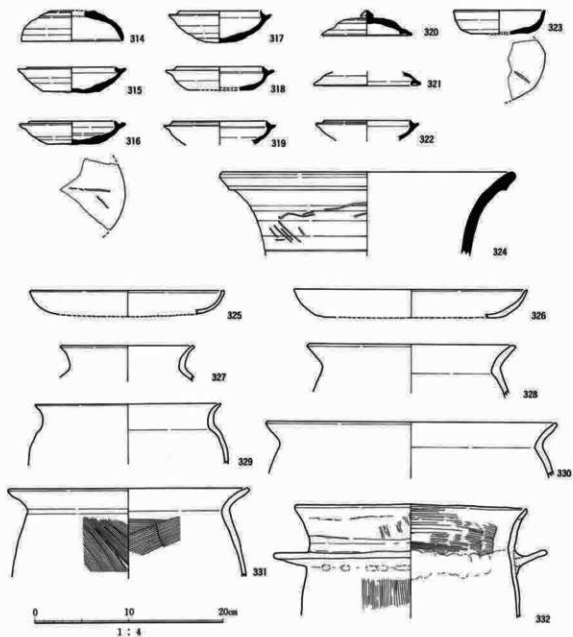


図112 SD01出土遺物

cmで、口縁部は外上方にわずかに開き、頸部に上向きの鈎をつけた羽釜である。調整は口縁部の内面がヨコハケ、同外面はタテハケのあとヨコナデで、体部の外面はタテハケ、内面は縦方向のナデである。頸部の内面および外面には鈎をつけた際のユビオサエが残る。以上の土師器は色調が赤褐色で、胎土中に角閃石粒を含み河内産とみられる332以外は、色調は橙色を基調にしており、胎土中に長石・石英・チャート・赤色粒を含むことから、在地産と思われる。前述した須恵器と同時期であろう。

SD02(図111) SD01の南西側で検出した東西溝で、西側はおそらく5区のSD16とつながると思われる。幅は広いところで2.5m、深さ0.3cmになり、鳥状の掘り残しがある。また、東側の南北溝SD03とは0.05mほどの浅い溝でつながっているだけで、その間が土橋状に掘り残されている。

溝底付近には機能時のシルト層が薄く堆積しており、上部は人為的に埋戻されていた。

SD03(図111) SD03は建物群の北にある南北方向の溝で、東西溝SA05の北で折れて東西溝SD05につながり、その屈曲部で、少し位置をずらした東西溝SD04につながっている。SD03の幅は1.0~2.5m、深さは0.1~0.3m、南から北にかけて幅が広く、かつ深くなっている。北側のSD01との連結部では、幅が狭くなると同時に、深さも約0.15mと浅くなっており、SD02との間の土橋状の掘り残しと共通している。溝の埋土は自然堆積によるシルト層で、人為的な埋戻しは認められなかった。

SD03出土遺物(図113、図版29) SD03からは須恵器333~348、土師器349~352が出土した。

334・335は口径9.6~10.7cm、器高3.2~3.4cmの杯H蓋である。いずれも天井部はヘラ切り後不調整である。335の天井部にはヘラ記号がある。340~342は口径8.8~11.0cm、器高2.8~3.1cmの杯Hである。立上りが短く内傾しているが、342は340・341に比べてやや長い。底部はすべてヘラ切り後不調整である。336~339は杯G蓋で、336は口径8.6cm、器高3.8cmあり、天井頂部にヘラケズリのあと宝珠つまみをつけている。333・343は杯Gである。343は口径10.4cm、器高4.4cmあり、口縁部は体部から直線的に外上方に開いており、底部はヘラ切りのあと粗いナデを加えている。344・345は碗形の無蓋高杯で、ともに脚部を欠損している。346は裾部径8.8cmで、短い柱状部から裾が大きく2段に開いた高杯の脚部である。347は口径12.7cm、器高8.0cm前後に復元された碗である。口縁部は球形に近い体部から内傾しており、口縁端部は丸い。口縁部と体部の境界に1条のにおい凹線が巡っており、口縁部の外面にはヘラ記号がある。348は長頸壺の口頸部で、口縁部は筒状の頸部から大きく開く。頸部に幅広く浅い凹線状のナデが見られる。以上の須恵器の色調は青灰色の329・334・340・347、橙色の343以外は灰白色で、胎土中に微細な長石・石英粒を含む。

349は口径10.8cm、器高3.5cmの杯Cである。口縁端部はわずかに内傾している。口縁部の内外面をヨコナデ調整している。350~352は高杯の杯部あるいは脚部の破片である。351は裾部径が10.5cmの脚部で、内面にはユビオサエおよびシボリメが残る。以上の土師器の色調は橙色を基調としており、胎土は精良である。

これらは難波Ⅲ中段階を主体とするものであるが、口径が大きく、立上りのやや長い杯H342は難波Ⅲ古段階、杯G蓋336、杯H340は難波Ⅲ新段階に属するものであろう。

SD04~06(図111) 1区建物群の北側で、SA05と平行する東西溝である。SD04・05は南北溝SD03と連結している。SD04は幅2.3m、深さ0.15cmあり、東端が一段深く掘られている。SD05は幅0.8~

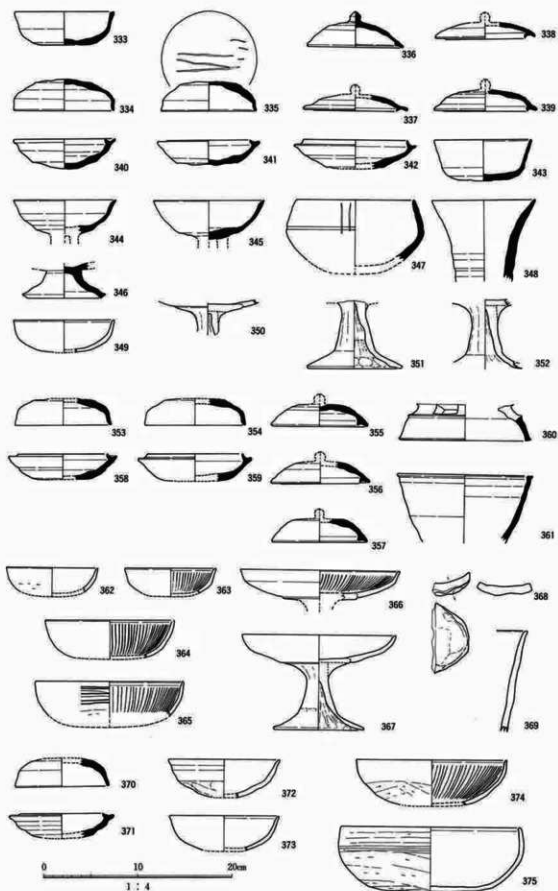


图113 SD03·04·06出土遗物
SD03(333~352)、SD04(353~369)、SD06(370~375)

1.4m、深さ約0.25cmあり、東側のNG87-65次調査地でも続きが確認されている[大阪市文化財協会1994]。SD06はSA05の北に、それに接するように掘られている東西溝で、幅1.0m、深さ0.1~0.3mある。

SD04出土遺物(図113、図版28) SD04からは須恵器353~361、土師器362~369が出土した。

353・354は杯H蓋で、口縁部と天井部の境界は丸く陵をなさない。口縁端部はわずかに外傾しており、天井部はヘラ切り後不調整である。358・359は杯Hで、立上がりは短く内傾しており、底部はヘラ切り後不調整である。355~357は口径8.2~8.4cmの杯G蓋で、かえりは短い。天井部をヘラケズリ調整している。360は底径14.1cmで、2段に開く脚部である。3方向に長方形スカシ孔を穿つ。台付壺の脚部であろう。361は口径14.4cmの鉢である。口縁端部を左右に肥厚しており、上端面は浅く凹む。以上の色調や胎土はSD03から出土した須恵器と変わらない。

362は口径9.8cmの杯Cで、全体に器面の風化が進んでいる。調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部の外面は横方向のヘラケズリで、内面は不明である。363も口径9.8cmの杯Cで、体部の内面には放射状の暗文が施されている。364・365は口径が13.8~15.7cmの杯Cで、後者の口縁端部は内傾して浅く凹む。ともに体部の内面に放射状の暗文が、365の体部の外面には横方向の暗文が施されている。366・367は口径16.4~17.0cmの高杯で、前者は脚部を欠損している。ともに杯部は浅く、366の内面には放射状の暗文が施されている。完形の367は脚部を成形したあと、上端近くに粘土紐を足して杯底部をつくり、一定の乾燥期間を経てから杯上半部を成形した様子が観察された。368は扁平な把手で、後述する甔369と同一個体の可能性がある。369は甔の破片で、口縁部は体部から外上方に直線的に開く。器面が風化しており、調整は不明である。以上の土師器の色調・胎土はSD03から出土したものと変わらない。難波Ⅲ中段階に属するものであろう。

SD06出土遺物(図113) SD06からは須恵器370・371、土師器372~375が出土した。

370は口径10cm、器高約3cmの杯H蓋で、口縁部は体部からわずかに開く。天井部はヘラ切り後不調整である。371は口径8.9cm、器高2.5cm前後の杯Hである。立上がりは短小で、底部はヘラ切り後不調整である。370・371ともに色調は灰白色で、胎土中に微細な長石粒を少量含む。

372は口径12cm、器高4cmの杯で、口縁部は丸底の体部から短く開いており、端部は丸い。調整は口縁部から体部上半の内外面がヨコナデ、体部の下半は外面がユビオサエで、内面はナデである。373は口径11.7cmの杯Cで、口縁端部を丸くおさめている。器面の調整は風化が進んでおり不明である。373は口径11.7cm、器高3.2cmの杯Cである。口縁部がわずかに開いており、端部を丸くおさめる。器面が風化しており、調整は明らかでない。374は口径16.2cm、器高4.8cmの杯Cで、口縁端部は内傾している。調整は器体の外面下半がヘラケズリで、内面には放射状の暗文が施されている。375は口径19.2cm、器高6.9cmの杯Cで、口縁部は体部から内湾しながら立つ。口縁端部を丸くおさめている。調整は器体の外面上半にヨコナデ調整のあと、横方向の暗文を加えており、下半はヘラケズリである。内面は器面が風化しており、調整は不明である。以上の土師器の色調や胎土はSD05出土のものとは変わらない。難波Ⅲ中段階に属するものであろう。

SD05出土遺物(図114、図版29) SD05からは須恵器376~390、土師器391~395が出土した。

376～378は口径9.9～10.6cm、器高2.6～3.4cmの杯Hである。376・377の口縁部は天井部から屈曲しており、378の口縁部と天井部の境界にはふいれがある。いずれも天井部はヘラ切り後不調整で、378にはヘラ記号がある。379・380は口径9.1～10.3cm、器高3cm前後の杯Hである。ともに立上がりは内傾しており、底部はヘラ切り後不調整で器壁は厚い。380の底部にはヘラ記号がある。381～384は口径8.0～8.7cmの杯Gで、381・383以外のかえりは内におさまっている。すべて天井部をヘラケズリ調整しており、381の天井頂部にはやや縦長の宝珠つまみがつく。385～387は口径9.7～9.9cm、器高2.9～3.2cmの杯Gで、385・386は口縁部がわずかに開く。すべて底部はヘラ切り後不調整で、387にはヘラ記号がある。388は口径33.7cmの寛で、口縁部は頸部から外上方に開いており、

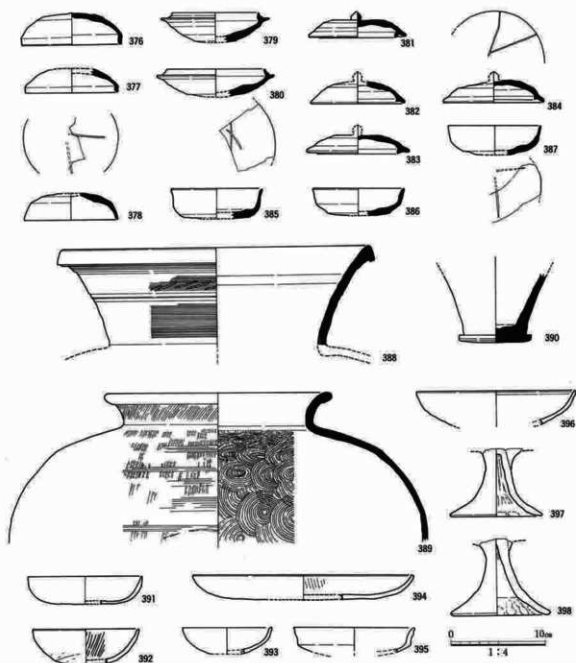


図114 SD05出土遺物

端部をわずかに垂下させている。頸部にはカキメ調整のあと、2条1単位のにぶい凹線で区画した中に楕円状突文を加えた文様帯がある。389は口径24.1cmの甕で、口縁部は頸部から緩やかに外反しており、口縁端部は玉縁状をなす。頸部および体部の外面を平行タタキで整形しており、体部にはまばらにカキメ調整を加えている。体部の内面には当具痕が残る。390は底径7.8cmの鉢で、体部の中程以上を欠損している。底部は器壁が厚く、裏面は磨減しており、ここに長さ約1.7cmの2条の沈線がある。以上の須恵器の色調は灰～灰白色を基調としており、胎土中に微細な長石・石英粒を含む。

391～393は口径9.4～12.2cm、器高2.8～3.7cmの杯Cである。392の外面の調整はヨコナデおよびヘラケズリで、内面には放射状の暗文が施されている。391・393は器面が風化しており、調整は不明である。395は口径12.8cmの杯で、口縁部は体部から直立したあと開いており、体部にはにぶい稜がある。394は口径23.5cm、器高2.6cmの皿で、口縁部はわずかに内湾しており、端部を内に肥厚させている。内外面ともに器面の残りは悪いが、内面には一部に放射状の暗文が見られる。396は高杯の杯部で、397・398は高杯の脚部である。397・398の内面にはシボリメおよびユビオサエが残る。以上の土師器の色調は明赤褐色397、淡黄色391以外は橙色が基調であり、胎土はSD03・04のものと変わらない。SD05出土資料は基本的には難波Ⅲ中段階に属するものであるが、杯H379・380、杯G386などはやや先行する時期に属するものであろう。391・393はここでは難波Ⅲ新段階としておく。

SD07～11・13～16(図115・116) 1区西部でSD07～11、4区でSD16、5区でSD13～15をそれぞれ検出した。SD10は幅0.5～2.3m、深さ0.1～0.3cmの南北溝で、4区のSD16とつながる可能性がある。SD10から枝別れして西に延びるSD11は幅約1.3m、深さ約0.3cmの東西溝である。SD10・11は自然状態で埋っており、人為的な埋戻しは見られなかった。SD10の西側には、これと方向をやや異にして南北溝SD07～09が存在する。いずれもSD11に切られており、また、人為的に埋戻されていた。特にSD07・08は埋土から、溝の掘削後、短期間で埋戻された様子が観察された。これらは5区で確認した南北溝SD13・14のいずれかとつながる可能性がある。

以上の建物群の西側で検出した溝群のうち、SD10は1区で検出した建物と方向がほぼ同じであり、建物群を区画する溝であったと考えられる。

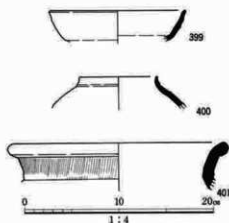


図115 SD07・11出土遺物
SD07(401)、SD11(399・400)

SD07から401が、SD11から399・400が出土した。401は須恵器甕の口縁部で、口縁端部は外側に折曲げ九くおさめている。399は須恵器無蓋高杯の杯部と思われる。復元口径は14.5cmである。400は須恵器短頸甕である。口縁部は短く直立ぎみに立上がり、肩部はなだらかである。以上の須恵器は難波Ⅲ中段階に属するものであろう。

SD17～20(図86・111) 1区の建物群内で検出した幅0.2m前後の小溝である。SD17・18はSB22の西隣で、SD19はSB06・07の間で検出した南北溝である。隣接した建物に付随する可能性もあるが、これらとは平行しない。SD20はSB08を切る南北溝である。付近に関連すると思われる建物

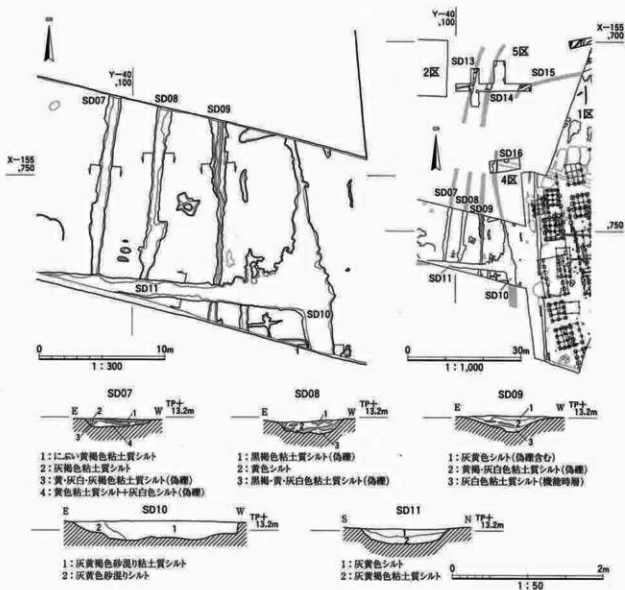


図116 SD07～11平面図および断面図

は見られない。

SD17・18出土遺物(図117) SD17・18からは須恵器402～410、土師器411～413が出土した。

402・403は口径9.8～11.2cm、器高3.2cmの杯H蓋で、ともに口縁部と天井部の境界の稜はにぶい。天井部はヘラ切り後不調整である。405・406は口径9～10cm、器高2.9cm前後の杯Hである。立上りは後者が前者に比べて短い。底部はともにヘラ切り後不調整である。404は口径9.4cmの杯G蓋である。天井部をヘラケズリ調整しており、かえりは受け部の外にわずかに伸びる。407・408は口径9.9cmの杯Gで、器高は前者が3.5cm、後者が3.8cmあり、底部が丸い後者がやや高い。底部はヘラケズリ調整である。409は口径6.9cmの短頸壺で、口縁部は頸部から短く開く。410は体部の大半を欠損しているが、口径12.2cmの横瓶である。口縁端部は玉縁状をなす。体部の外面は平行タタキのあとカキメ調整を施しており、内面には当具痕が残る。以上の須恵器の色調や胎土は前述した溝から出土したものと変わらない。

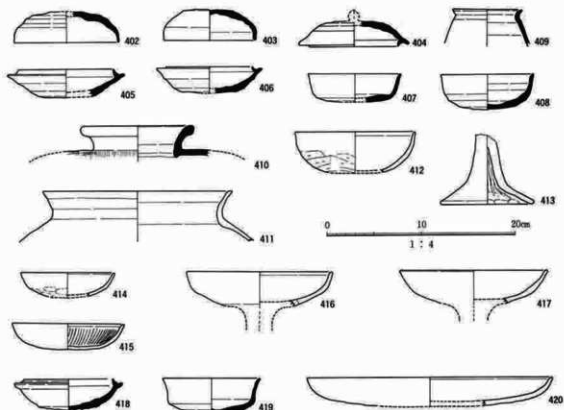


図117 SD17・18～20出土遺物

SD17・18(402～413)、SD19(418～420)、SD20(414～417)

411は口径20.2cmの甕で、口縁部は緩やかに外反したのち、上方で開く。器面が風化しており、調整は不明である。412は口径12.8cm、器高4.3cmの杯Cで、口縁端部はわずかに内傾している。調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部の外面はヘラケズリである。413は底径10cmの高杯の脚部である。内面にはシボリおよびユビオサエが残る。以上の土師器の色調は明赤褐色413以外は橙色系で、胎土は前述した溝のものと変わらない。難波Ⅲ古～中段階に属するものである。

SD19出土遺物(図117、図版29) SD19からは、須恵器418・419、土師器420が出土した。

418は口径9.4cm、器高3.4cmの杯Hである。立上がりは短く内傾しており、底部はヘラ切り後不調整である。色調は青灰色で、胎土中に微細な長石粒を含む。419は口径10.4cm、器高3.7cmの杯Gで、口縁部は体部から緩やかに開く。底部はヘラケズリ調整である。色調は灰赤色で、胎土中に微細な石英・長石・黒色粒を含む。

420は口径26.2cmに復元された皿である。口縁端部はわずかに内傾しており、体部外面の調整はユビオサエおよびヘラケズリである。色調は橙色系で、胎土中に微細な長石・石英・赤色クサリレキを含むが精良である。418は難波Ⅲ古段階、419・420は難波Ⅲ新段階に属するものであろう。

SD20出土遺物(図117、図版28) SD20からは土師器414～417が出土した。

414・415は口径10.0～11.9cm、器高2.8cm前後の杯Cである。前者は体部外面をヨコナデおよびユビオサエで調整しており、後者の体部の内面には放射状の暗文が施されている。416・417は口径15.5～15.8cmの高杯で、ともに杯部の下半以下を欠損している。以上の土師器の色調は橙色系で、胎土中に

微細な長石・石英・赤色クサリレキ粒を含む。難波Ⅲ新段階に属するものであろう。

建物群北の小溝群(図111) おもにSD01の南から、SD05のラインの北までにあり、南北方向とそれに直交する二つの方向の溝からなる。幅は0.2~0.3mのものが多く、深さも検出面より5cm前後のものが大半である。一見すると、中近世の畠の発掘でよく見られる耕作痕の溝に似ている。これらの小溝から出土する土器は多くないが、建物群を囲んでいる溝から出土する土器などとほとんど変わらない時期のものである。また、小溝群が分布している地域は、南側の建物群を避けているようにも見える。これらの小溝群は、建物群と同じ時期の所産であると考えられる。

d. 1区土壌

SK01~SK05(図111) 1区北半、SA04の以北で浅い土壌SK01~SK05を検出した。

SK01はSD01の南、調査区の壁際にあり、東隣のNG87-65次調査地でも続きが確認されている[大阪市文化財協会1994]。直径3~4mのやや不整な円形で、深さは約0.2mである。SK02・04・05はSD03の東側にあり、形は不整形である。SK03は、SA05・SB22と重なっているが、それらとの重複関係については、SK03がごく浅いために確認できなかった。

SK01出土遺物(図118、図版28・29) SK01からは須恵器421~433、土師器434~436が出土した。

421~423は口径11.2~11.3cm、器高2.8~3.7cmの杯H蓋で、口縁部と天井部の境界の境はにぶい。すべて天井部はヘラ切り後不調整で、421にはヘラ記号がある。424は口径8.4cmの杯G蓋で、かえりはわずかに受け部外にでる。天井部をヘラケズリ調整しており、中央につまみのはがれた痕がある。425~431は口径9.3~10.0cm、器高3.0~3.3cmの杯Hで、立上がりは短く内傾している。すべて底部はヘラ切り後不調整で、426にはヘラ記号がある。432は底径15.1cmの高杯の脚部である。脚端部は裾部から水平に開いており、裾部にはにぶい1条の凹線と2方向のスカシ孔を穿つ。433は口径11.2cm、器高6.4cmの無蓋高杯で、脚部は裾部が短い柱状部から水平に開く。口縁部は内湾する体部からわずかに開いており、端部は丸い。以上の須恵器の色調は明青灰色の424以外は灰~灰白色で、胎土中に微細な長石・石英を少量含む。難波Ⅲ中段階に属する423~425、429~431以外は難波Ⅲ古段階に属するものであろう。

434は口径10.1cm、器高3.9cmの杯Cで、底部は丸みをもつ。器面が風化しており、調整は不明である。435・436は口径11.6~12.9cm、器高3.7~4.3cmの杯Cである。ともに口縁端部は内傾しており、435の体部の外面にはユビオサエ、436の内面には放射状の暗文が見られる。これらの土師器の色調は明赤褐色の434以外は黄褐色で、胎土中に微細な長石粒を含む。難波Ⅲ古段階に属するものである。

SK02出土遺物(図118、図版28) SK02からは須恵器444~450、土師器451が出土した。

444は口径11.0cmの杯H蓋で、口縁部と天井部の境界はにぶい後をなす。天井部はヘラ切り後不調整である。445は口径9cm、器高3cmの杯G蓋で、かえりは短く内におさまる。天井部はヘラケズリ調整で、頂部に孔首状のつまみがつく。446は口径8.7cmの杯G蓋とみられるもので、口縁部を内に屈曲させている。天井部はヘラ切り後不調整で、全体に丸みをもつ。450は口径10.0cm、器高4.2cmの杯Gで、底部はヘラ切り後不調整である。口縁部に強いヨコナデを加えて細く仕上げている。449は口径13.7cmの杯Bで、口縁部はわずかに開いており、底部にはヘラケズリ調整のあと、高台を貼りつけ

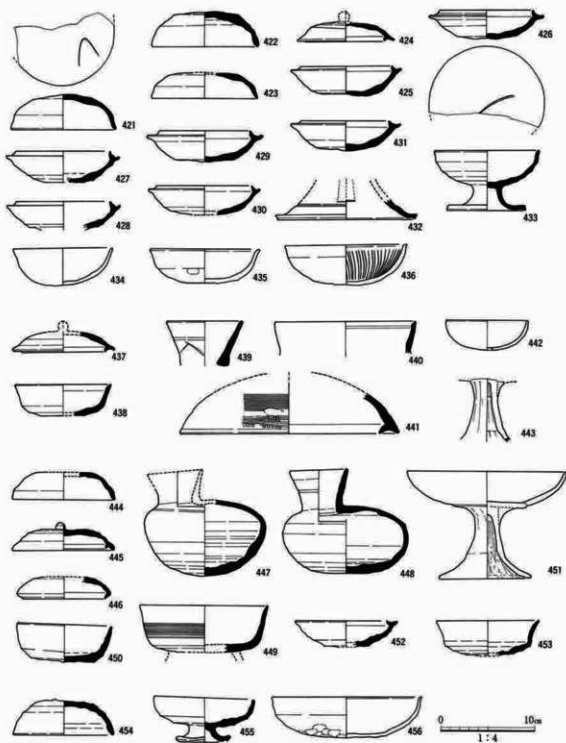


図118 I区土壇出土遺物

SK01(421~436)、SK02(444~451)、SK03(437~443)、SK04(452~453)、SK05(454~456)

た痕がある。体部の中程にはカキメが施されている。447・448は平瓶で、前者は口頸部を欠損している。447は体部が丸みをもち、中程以下をヘラケズリ調整している。体部の上端近くに1条のぶい凹線が巡る。448は口径6.3cmあり、頸部に1条のぶい凹線が巡る。体部はやや扁平に成形されており、下半部以下をヘラケズリ調整している。体部の上面には小さな粘土粒を1個貼りつけている。以上の色調は器体の内外面に炭素が吸着して、黒味をおびた450以外は灰〜灰白色を呈しており、胎

土中に微細な長石・石英粒を含む。

451は口径16.9cm、器高11.6cmの高杯で、口縁部は体部から内湾しながら立ち、端部を丸くおさめている。脚部は柱状部の外面を縦方向にナデており、内面にはシボリメが残る。色調は橙色で、胎土中に微細な長石・石英粒を含む。なお、本高杯を観察した結果、これの製作に当っては、まず脚部を成形して、これの上部に粘土紐を継ぎ足し杯底部を成形したあと、一定期間の乾燥を経てから杯上部を成形したものと思われる。以上の遺物は難波Ⅲ新段階に属するものである。

SK03出土遺物(図118) SK03からは須恵器437・441、土師器442・443が出土した。437は口径8.9cmの杯G蓋で天井部をヘラケズリ調整しており、かえりは受け部からわずかに外にでる。438は口径10.3cm、器高3.4cmの杯Gで、口縁部は体部からわずかに開き、底部をヘラケズリ調整している。439は口径8.2cmで、口縁部が大きく開いた平瓶の口頸部と思われるものである。頸部に1条のにぶい凹線とヘラ記号がある。440は口径15.0cmの短頸壺の口縁部で、端部は内傾して凹面をなす。441は口径19.4cmで、短く内傾したかえりのある鉢の蓋である。天井部は平行タタキのあと、カキメを施している。以上は色調が灰色の437以外は灰白色で、胎土は前述した土壌のものと変わらない。

442は口径8.8cm、器高3.3cmで、体部が内湾する杯である。口縁部をヨコナデ調整しているが、ほかは風化しており、調整は不明である。443は高杯の柱状部で、外面に縦方向のナデ、内面にはシボリメおよびユビオサエが見られる。442・443の色調は橙色で、胎土は精良である。難波Ⅲ古段階に属するものであろう。

SK04出土遺物(図118) SK04からは須恵器452・453が出土した。

452は口径8.6cm、器高2.8cmの杯Hで、立上がりは短く、受け部から内におさめている。底部はヘラ切り後不調整である。453は口径10.9cm、器高3.7cmの杯Gで、口縁部は外上方に開いており、底部はヘラケズリ調整している。色調は青灰色で、胎土は前述の須恵器と変わらない。難波Ⅲ新段階に属するものであろう。

SK05出土遺物(図118) SK05からは須恵器454・455、土師器456が出土した。

454は口径10.7cm、器高3.8cmの杯H蓋で、口縁部と天井部の境界の稜はにぶい。天井部はヘラ切り後不調整である。455は口径10.7cm、器高4.9cmの無蓋高杯で、脚部はやや歪んでいるが水平に開き、端部をわずかに下方に肥厚している。杯部の外面にヘラ記号がある。ともに色調は灰白色で、胎土中に微細な長石・石英を多く含む。456は口径16.0cm、器高4.3cmの杯Cで、口縁端部は短く開く。口縁部の内外面はヨコナデ調整、底部の外面をユビオサエで整えている。色調は赤褐色で、胎土は精良である。以上は難波Ⅲ中段階に属するものであろう。

(田中)

e. 3区建物(図119、図版16)

SB01(図120) 3区西半で確認した桁行3.18m(2間)、梁行3.04m(2間)の小規模な建物である。方位はN10°Wである。柱間距離は桁行が1.57~1.62m、梁行が1.40~1.64mに復元でき、梁行と桁行の柱間隔はほぼ同じである。柱の直径は16cmと小さい。SD21を切っており、SA02に切られている。

柱穴の一つから須恵器杯G蓋457が出土した。復元口径8.0cmである。天井部をヘラケズリ調整しており、宝珠つまみがつく。



図119 3区遺構配置図

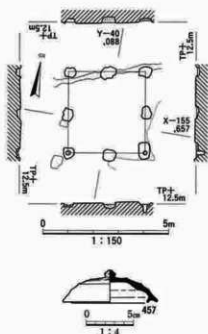


図120 SB01平・断面図および出土遺物

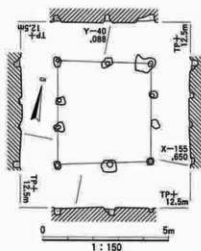


図121 SB02平・断面図

SB02(図121) 桁行3.88m(3間)、梁行3.68m(2間)の建物である。方位はN11°Wである。桁行の柱間距離は真ん中の2本が1.07~1.14mと狭く、その両側が1.28~1.56mあった。

また、梁行の柱間距離は西側の2本が2.00~2.03mであるのに対し、東側は1.58~1.68mと狭い。柱の直径は15cm前後と細かった。SB02とSB01は、柱穴の平面形態がほかの建物が方形に近いのに対して、形が不定形で、大きさも不揃いである。両者は位置関係から、同時併存していたと考えられよう。

SB23(図122・123) 3区のほぼ中央で確認した。桁行5.88m(3間)、梁行4.78m(3間)の総柱建物に復元した。桁行方向の柱列が内側と外側とでずれることから、建物に復元するには問題点もある。方位はN7.7°Eで、後述するSA01・02と方向を揃えることから複数の櫓があった可能性も残されている。ここでは、外側の柱が長方形に並ぶことを重視し、建物として報告する。柱穴の平面形は不整形で、大きさが不揃いな点は、SB02と共通している。

柱穴内から須恵器458・459が出土した。458は口径8.0cmの杯G蓋である。かえりが短く、内側におさまっている。天井部はヘラケズリ調整ののち、宝珠つまみをつけている。459は口径が9.7cm、器

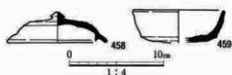


図123 SB23出土遺物

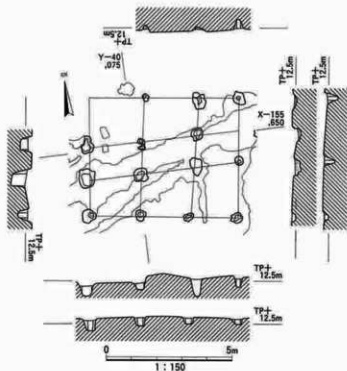


図122 SB23平・断面図

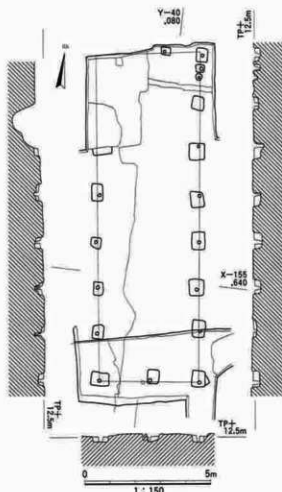


図124 SB301平・断面図

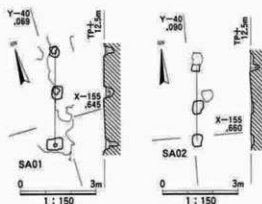


図125 SA01・02平・断面図

高が3.4cmの杯Gである。底部はヘラ切り後不調整で平坦である。

SB301(図124) 3区の北端で南辺を検出した掘立柱建物で、大半は北隣のNG84・24次調査地にある[大阪市文化財協会1992]。桁行12.95m(7間)、梁行3.95m(2間)の南北に長細い建物である。方位はN5°Wである。柱間距離は桁行が1.65~2.00m、梁行が1.65mと1.68mで、柱の直径は10~15cmあった。柱の掘形内からは難波Ⅳの土器器杯Aが出土している[大阪市文化財協会1992b]。

f. 3区櫓(図119)

SA01(図125) 3区中央北よりで2間分検出した。方位はN16.5°Eで、1区の建物群および3区のSB01・02・301とは大きくずれている。逆に西側にある溝群とは平行しており、これらとの有機的な関係が想定されよう。柱間距離1.57~2.14mで、全長4.71mと短い。柱の直径は13cmあった。NG84・24次調査地では、SA01と近接した位置に似たような櫓が見つかった[大阪市文化財協会1992b]。

SA02(図125) 3区の西部で柱穴を2間分検出した。方位はN4.8°Eで、SA01とはほぼ平行している。柱間距離は復元で1.33~1.94mあり、全長は3.37mと短い。柱痕跡は確認できなかった。SB01を切っている。

g. 3区落込みおよび土壇(図119・126)

3区東半で深さ0.1~0.2mの浅い落込みを検出した。幅は北側で約11m、南側で約16mあり、北で東に約10°振っている。この浅い落込みのほぼ中央部の南半では、幅の狭い南北方向の溝が平行して5条

ある。これと同規模の溝で、直交する方向のものが、落込みの東肩でも検出されている。

3区の北東端で、落込みの東肩と接する、不定形の浅い土壇SK06を検出した。須恵器482・483が出土した。482は甕の口縁部、483は杯G蓋である。483は天井部をヘラケズリ調整し、乳頭状のつまみをつける。天井部以外を欠損している。

h. 3区溝(図119、図版16)

3区の東半部を中心に溝SD21~28を検出した。途中で東西方向に折れ曲がるSD21を除いて、すべ

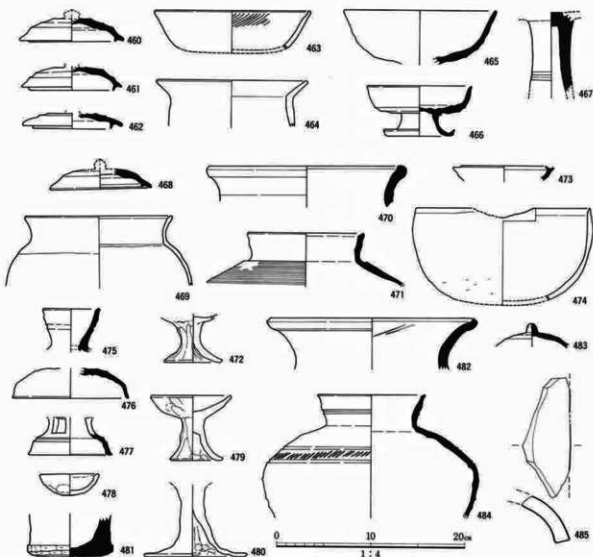


図126 3区その他の遺構出土遺物

SD21(468~472)、SD22(473・474)、SD23(460~467)、SD25(481・485)、SD26(484)、SD27(475~480)、SK06(482・483)

で落込みと平行し、北で東に約10°振っている。

SD21~26 落込み西側の肩に密接して掘られた溝群である。溝底のレベルは地形の傾斜と同様におおむね南から北に向って低くなっている。また、東側、すなわち落込みの内側にあるものほど溝底のレベルが低い。前後関係の有無などははっきりしないが、排水を目的として継起的に掘られた溝と考えられる。

SD21からは、須恵器468・470・471、土師器469・472が出土した(図126)。468は復元口径8.8cmの杯G蓋である。かえりは短く退化しており、内におさまっている。天井部はヘラケズリ調整である。470は甕、471は壺である。471は口縁部が短く直立し、口縁端部が内傾し面をもつ。体部にカキメを施す。469は復元口径15.8cmの甕で、体部の調整は風化のため判然としないが、ユビオサエの痕と思われる凹凸が見られる。色調は淡橙色を呈し、胎土中に赤色粒を多く含む。472はミニチュアの高杯で、色調は明褐色で、胎土は精良である。脚裾部の内面に、製作時のものと思われる布目の圧痕が残っ

ている。

SD22からは須恵器473、土師器474が出土した(図126)。473は復元口径8.8cmの杯Hである。立上がり、受け部とも短い。474は口径18.5cmの鉢である。口縁部はわずかに内傾し、端部はヨコナデを施すことによって細く終わる。色調は橙色で、胎土中に石英・長石粒を比較的多く含む。

SD23からは須恵器460・462・465・467、土師器463・464が出土した(図126)。460・462は口径8.2~9.2cmの杯G蓋である。ともに天井部はヘラケズリ調整である。465・467は大型の、466は小型の無蓋高杯である。465は口径16.2cm、466は口径11.2cm、器高5.3cmある。また、467は筒状の柱状部のほぼ中央に、凹線を2状巡らす。465・467はともに色調が灰白色で焼きは甘く、接合しないが同一個体の可能性がある。463は復元口径16.8cmの杯Aである。口縁端部を内側に肥厚させ、内面には放射状の暗文を施す。色調は橙色で、胎土中に細かな長石・石英粒を含む。464は甕である。調整は磨滅しており不明である。

SD25からは須恵器481、瓦丸485が出土した(図126)。481は底径9.2cmの鉢である。底部は厚く、外縁部分に横方向のケズリ調整を施す。485は色調が黄灰色の軟質焼成のもので、凹面に布目の圧痕が残る。

SD26からは須恵器壺484が出土した(図126)。口縁部は短く直線的に開き、体部はすばまった頸部から急激に開いて上半部で最大径となる器形である。口縁部の上端に強いヨコナデを施しており、口縁端部は面をもつ。体部の上半に2本の沈線とその間を斜め方向の列点文で埋めた文様帯が巡る。

SD27からは須恵器475~477、土師器478~480が出土した(図126)。475は平瓶、476は口径12.3cm、器高3.1cmの杯H蓋、477は3方向に方形のスカシ孔を穿つ台付壺の脚部である。478は碗、479は高杯で、ともにミニチュア土器である。480は高杯の脚部である。478・479はSD21出土の472と胎土が同じで、480は色調が赤褐色を呈する。

以上の土器のうち、大半が難波Ⅲ新段階に属するもので、461・476・484が難波Ⅲ古段階、461が難波Ⅲ中段階に回り、465が難波Ⅳ古段階に下る可能性がある。SD21やSD27からはミニチュア土器が出土している点は、3区北隣の方124-24次調査地で検出した祭祀的な性格が指摘されているSE 01出土遺物と共通しており[大阪市文化財協会1992b]、時期的にもこれらと同時期のものが多い。

ii) 平安時代

1区において、掘立柱建物2棟とこれに平行する溝を検出した。ほかにも、建物として復元することが出来なかったが、埋土の特徴から平安時代のものと思われる小型の柱穴を複数検出している。

a. 掘立柱建物

SB31(図127) 桁行7.6m(4間)、梁行3.55m(2間)の南北棟の掘立柱建物で、南半では床束状の柱穴も検出した。方位はN2.9°Wで、西側のSD30と平行している。柱間距離は桁行が1.69~2.07m、梁行が1.65~1.91mで、柱の直径は13cmと細かった。柱穴から緑釉陶器片が出土した。

SB32(図128) 桁行5.2m(3間)、梁行2.85m(2間)の東西棟の掘立柱建物で、方位はN4.0°Wである。SB31の南側にあり、これに西側柱を揃えるように配置されている。柱穴の掘下げは行っていないが、柱間距離は桁行が1.51~1.87m、梁行が1.50~1.65mで、柱の直径は約15cmと細い。

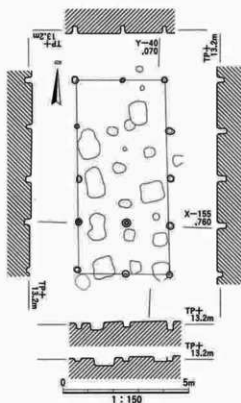


図127 SB31平・断面図

b. 溝

SD30(図129) SB31・32の西には、これらと同方向の溝SD30がある。幅0.8～0.9m、深さ約0.2mの南北方向の溝で、途中で途切れる箇所がある。これは7世紀の建物群の西側にあり、一見するとSD10などと同じ建物群を囲む溝にも見えるが、出土遺物から平安時代の溝と判断される。

SD30から486～492が出土した(図130)。486は須恵器無蓋高杯脚部、487は口径7.7cmの須恵器杯蓋である。これらは飛鳥時代建物群に伴う遺物とほぼ同時期のもので、遺構の時期を示すものではない。488は土師器碗である。器壁は薄く、高台は直径6.0cmで細い。489は緑釉陶器碗である。488・489は平安時代Ⅲ期古段階に属するもので、SD30は10世紀末～11世紀初頭の遺構と判断できる。したがって、上述したSB31・32もこの時期の遺構と考えられる。490は丸瓦、491・492は平瓦の破片である。ともに凸面に粗い縄タキメ、凹面に布目圧痕が残る、軟質焼成である。(大庭)

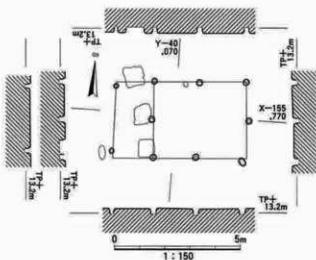


図128 SB32平・断面図



図129 SD30平・断面図

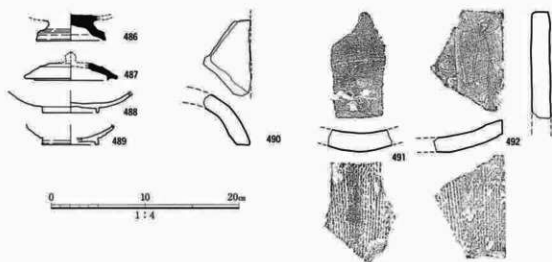


図130 SD30出土遺物

iii) 包含層出土遺物

第2層から、飛鳥時代の須恵器・土師器を中心に、奈良時代までの遺物が出土した。以下、1・3・5区の順に本層から出土した遺物について記述する。

1区第2層出土遺物(図131～133、図版30) 須恵器493～540・546～571、土師器541～545が出土した。これらのほかにも図示しなかったが、後述するような須恵器や土師器の細片が多数出土している。ただし、出土遺物総量に占める須恵器と土師器の比率は前者が後者に比べて多い。これは前述した遺構における須恵器と土師器の出土量に占める割合ともほぼ一致している。

493～503は口径9.4～12.4cm、器高3.0～3.4cmの杯H蓋である。いずれも口縁部と天井部の稜はにぶい。天井部をヘラケズリ調整する503以外はヘラ切り後不調整である。502の天井部にはヘラ記号がある。504～518は口径8.8～14.6cm、器高2.1～3.8cmの杯Hである。立上がりはいずれも短く内傾しているが、504・506・512は垂直に近い。底部はすべてヘラ切り後不調整である。518の底部にはヘラ記号がある。519～532は口径8.2～10.6cm、器高3.4cm前後の杯G蓋である。520・522・523・527・528・531のかえりは受け部からわずかに外に出ている。天井部はヘラ切り後不調整の532以外はヘラケズリ調整しており、529・532にはヘラ記号がある。520・525の天井頂部には宝珠つまみがつく。533は口径13.6cmの杯B蓋で、天井部をヘラケズリ調整している。534～540は口径8.9～10.3cm、器高2.9～3.6cmの杯Gで、534・537の口縁部はわずかに開いており、これ以外の底部はヘラ切り後不調整である。以上の須恵器の色調は灰～灰白色を呈しており、胎土中に微細な長石・石英粒を含むものが多い。

546～551は口径8.9～12.9cm、器高2.7～3.6cmの杯H蓋である。口縁部と天井部の境界の稜はにぶく、口縁端部はわずかに内傾する549以外は丸くおさめている。天井部をヘラケズリ調整する546以外はヘラ切り後不調整である。552～556は口径10.4～12.8cm、器高2.9～3.3cmの杯Hである。立上がりは受け部内におさまる555以外はいずれも短く内傾しており、底部はすべてヘラ切り後不調整である。557～565は口径7.8～9.9cm、器高2.6～3.7cmの杯G蓋で、558・560・563は歪んでいる。かえりは短く559・563・565以外は内側におさめており、天井部はヘラケズリ調整で、557以外の天井頂

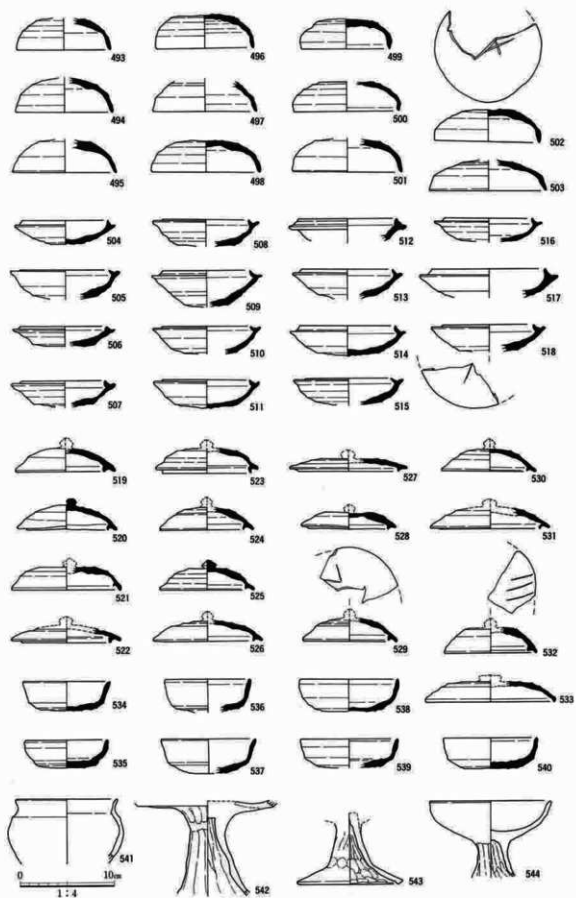


图131 1区第2层出土文物(1)

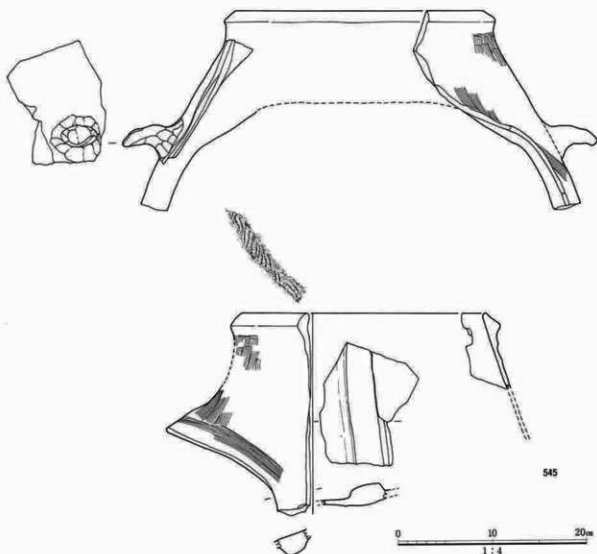


図132 1区第2層出土遺物(2)

部には乳頭状あるいは宝珠つまみがつく。563の天井部にはヘラ記号がある。566～571は口径8.7～11.8cm、器高3.1～3.7cmの杯Gで、口縁部はわずかに内湾する566、わずかに開く567～569・571、大きく開く570がある。底部をヘラケズリ調整した570以外はヘラ切り後不調整である。以上の須恵器の色調は灰～灰白色が多く、まれに青灰色を呈するものがある。546・548・552～554・556は難波Ⅲ古段階に、547・550・551・559・560・563・565・567～569・571は難波Ⅲ中段階に、549・555・557・558・561・562・564・566・570は難波Ⅲ新段階に属するものであろう。なお、549は短頸壺の蓋の可能性がある。

541は口径10.8cmの甕で、口縁部は頸部から短く開く。体部は球形に近い。542～544は高杯で、542は杯部の大半および裾部を、543は杯部を欠損している。544は口径12.9cmの碗形の高杯で、裾部を欠損している。脚部の調整は外面が縦方向のナデ、内面はナデおよびユビオサエである。以上の色調は541が赤褐色、ほかは黄橙色で、胎土中に微細な赤色粒・長石粒を含む。545は掛口径が28.8cm前後の移動式甕で、掛口の端面に同心円当具痕がある。体部の調整は外面がハケ、内面はナデである。体部の外面には下向きの把手があり、内面には幅2.8cmの突帯がつく。庇は曲げ庇である。色調は暗

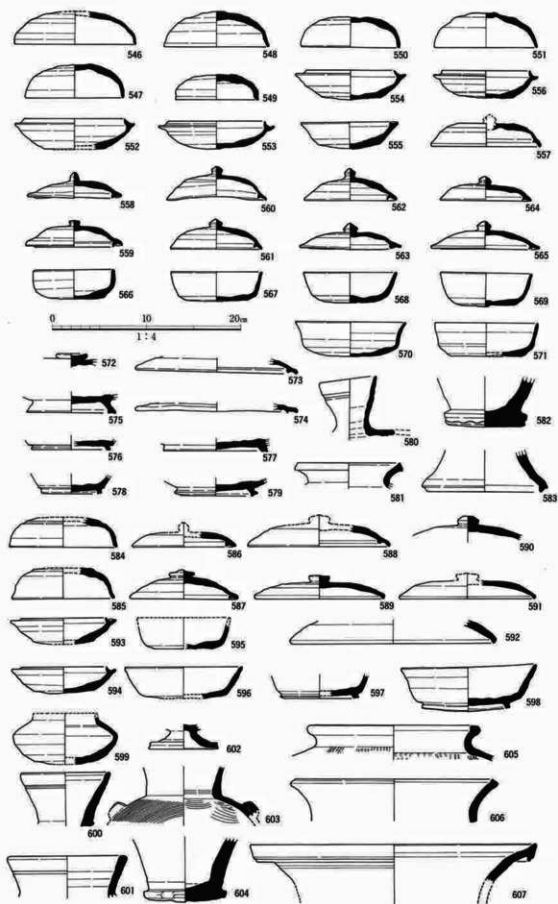


图133 1·3·5区第2层出土器物
1区(546~571)、5区(572~583)、3区(584~607)

赤褐色を呈しており、胎土は角閃石粒を含む生駒西麓産である。

3区第2層出土遺物(図133) 3区第2層では須恵器584~607を図示したが、これらのほかにも前述した2・4・5区と同様に須恵器や土師器の細片が出土している。

584・585は口径11cm前後の杯H蓋で、口縁部と天井部の後にはにぶい。口縁端部は前者はわずかに内傾しており、後者は丸くおさめている。ともに天井部はヘラ切り後不調整である。586~592は口径9.1~21.4cmの蓋である。587~590の天井頂部にはつまみがあるが、587は宝珠で、589・590は扁平におさめている。586~588は内に短いかえりがあるが、589・591・592にはかえりがない。586・587は杯G蓋で、588・589・591・592は杯B蓋と思われるが、口径の大きな592は皿の蓋かもしれない。593・594は口径9cm前後、器高2.8cmの杯Hで、立上がりはともに内傾しており短い。底部はともにヘラ切り後不調整で、594にはヘラ記号がある。595は杯Gで、596は口径12.5cm、器高3.4cmの杯Aである。595の底部はヘラ切り後不調整で、596は底部をヘラケズリ調整している。597・598は杯Bで、後者の口径は14.4cm、器高5.0cmある。ともに高台を貼りつけており、後者の高台は焼け歪んでいる。599は体部が扁平な短頸蓋で、体部の下半以下をヘラケズリ調整している。600は口径9.4cmの提瓶あるいは平瓶の口頸部とみられるもので、口縁部の下半に1条のにぶい凹線が巡る。601は口径12.8cmで、口縁部が外上方に短く開く壺あるいは横瓶の口頸部である。口縁部の下半に1条のにぶい凹線が巡る。602は底径7.5cmの高杯の脚部で、裾部は大きく開く。603は口縁部および体部の大半を欠損した提瓶で、肩部に把手が退化した板状の突起がある。体部の外面の調整はカキメで、内面には当具痕が残る。604は底径8.8cmの鉢で、底部の外端面をヘラケズリ調整しているが、裏面は未調整である。605~607は口径18.4~30.0cmの甕で、口縁端部を605は丸く肥厚させており、606はわずかにつまみ上げ、607は上下に拡張させている。605の体部は外面を平行タタキで整形しており、内面には当具痕が残る。607の頸部の上半には1条のにぶい凹線が巡る。以上の色調は青灰色の584・586・592、褐色の607以外は灰白色を呈している。難波IVに属するものとみられる588~592・596~598以外は、難波Ⅲ中~新段階に属するものであろう。なお、杯G587・595は難波Ⅲ新段階でも新しいものと考えられる。

5区第2層出土遺物(図133、図版30) 須恵器572~583が出土した。これ以外にも図示しなかったが須恵器および土師器の細片が出土している。

572は杯蓋で、つまみ以外の大半を欠損している。573・574は口径15cm前後の杯B蓋である。かえりとともに短い。575~579は高台径が6.4~11.1cmの杯Bで、体部の大半を欠損している。高台が高く外にふんばる575・579は短く低い576~578より時期が古いものと思われる。580は口径6.1cmの平瓶で、体部の大半を欠損しており、口縁部の下方には1条のにぶい沈線と凹線が巡る。581は口径11.4cmで、口縁部は緩やかに外反しており、端部を上下に肥厚させている。横瓶の口頸部片であらう。582は底径8.7cmの鉢で、底部は左右に張りだしており、端部に1条のにぶい凹線が巡る。583は底径13.25cmで、端部が内傾する脚部片である。以上の色調は暗青灰色を呈する577以外は灰白色である。やや時期の新しい572・576~578以外は難波IV古段階に属するものであろう。

(田中)

第V章 瓜破遺跡東北地区の調査

第1節 UR83-3次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は瓜破遺跡のほぼ中心、すなわち東北地区の南東部に位置し、旧中高野街道沿いに面している(図134)。共同住宅建設に先立ち、試掘調査を行った結果、瓦器を含む遺構や包含層が検出されたため、建物基礎部分について面的な調査を実施することになった。

調査区は建物の形状に合わせて1～5区を設定した(図135)。試掘調査の結果から、地山面が比較的浅く検出されることが予測されたため、現代の地層である第1層のみを重機で除去し、以下は人力で掘削を進めた。また、重要な遺構が見つかった部分では調査区の拡張を行って、遺構の続きを確認した。

なお、調査時に標高のデータが得られておらず、断面図で用いる標高の数値は、現況の道路部分のそれから換算したものである。

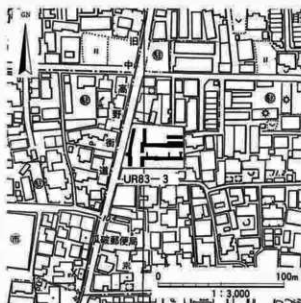


図134 UR83-3次調査地位置図

2) 層序(図136)

第1層：現代盛土および作土層で、層厚10cm前後あった。

第2層：層厚10cm前後の灰褐色粗粒砂～砂礫質シルト(第2a層)および層厚10～20cmの褐色粗粒砂～砂礫質シルト(第2b層)からなる。第2b層の上部では酸化鉄の沈着が顕著であった。第2a・2b層ともに、下面で旧中高野街道の地割と同じ方向の、南南西―北北東方向の耕作溝が認められた。国産陶磁器類を含むことから江戸時代以降の作土層と考えられる。

第3層：黄色シルト質粘土の地山である。

3) 遺構と遺物

報告する遺構はすべて地山上で検出したもので、溝7条、井戸12基、土坑2基がある。

i) 溝(図135～138・141、図版17)

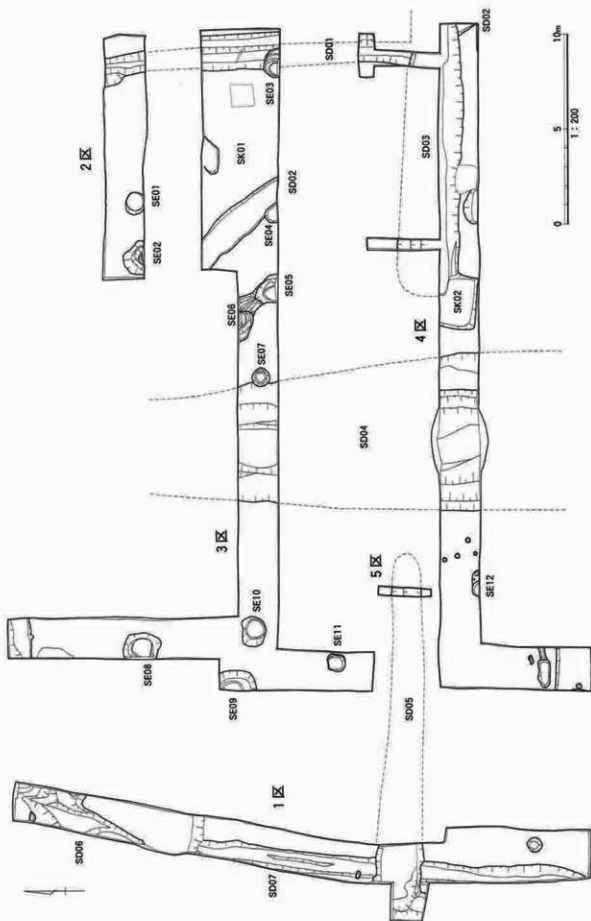


圖135 UR83-3 水源基地平面圖

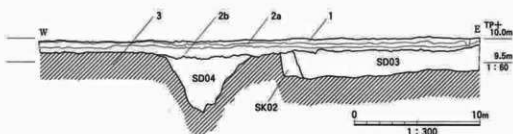


図136 4区北壁断面模式図

SD04 3・4区で検出した幅6.5～8.0m、深さ1.1mの南北方向の溝である(図136、図版17)。埋土は数層に分かれ、下半は水つきの堆積物である。最下部の灰色粘土層より土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・青磁のほか、多量の瓦片および埴が1点出土した(図137、図版31)。

土師器には小皿608・609、羽釜618が、瓦器には小皿610が、須恵器には甕620・鉢621が、瓦質土器には羽釜612～617、甕619、鉢622が、青磁には611がある。

瓦器皿610は内外面のヘラミガキが省略され、ナデ調整のみである。土師器羽釜618は、口縁部が内湾し、端部は外方に折り返され玉縁状に肥厚する。胎土は精良である。同様の形態で胎土に砂粒を多く含み、器壁の厚い個体も出土している。

瓦質土器羽釜は図化していないものも含めて20個体以上出土しており、出土遺物中もとても多い。図化した612～617のうち、口縁部の形態は615が直立する以外、すべて内傾する。体部外面は横方向にヘラケズリを施す。瓦質土器鉢622は、内面に櫛状工具による揃り目が施され、外面は粗いケズリが施されている。ほかにも口縁部が長く直立する瓦質の鉢も出土している。

これらの遺物の時期は15世紀前葉であり、溝が埋没したのもこの頃と考えられる。

SD04から出土した瓦のうち、溝の時期に近いものとして、煙しの掛かった硬質焼成の丸瓦が複数個体認められる。また、遺構の時期を示すものではないが、奈良時代の蓮華文複弁軒丸瓦674が出土している(図141、図版31)。

SD01 2～4区の東端で検出した最大幅1.8m、深さ約0.4mの南北方向の溝で、南端部では東西方向の溝SD03と合流する。埋土は上部が灰色砂質粘土層、下部は褐色粘土層である。SD01の東側の地山の高さは、西側に比べて約0.2m高くなっており、溝の東側に沿って築地塀のような施設があった可能性がある。埋土中から土師器・須恵器・瓦器のほか瓦片が出土したが、総量は多くない。

土師器には小皿623・624、甕もしくは羽釜630が、瓦器には小皿625、碗626～628が、須恵器には鉢631が、白磁には碗629がある(図138、図版6・31)。このうち625・627・628は風化が著しく、ほかの遺物よりも古い要素をもつことから混入品と判断できる。それ以外は15世紀前葉のもので、SD01はこの時期に埋没したと考えられる。また、SD04と同様、煙しの掛かった硬質焼成の丸瓦や平瓦が出土している。この平瓦は凸面にタタキ痕が見られないものである。

SD03 4区東半で検出した幅3.0～3.2m、深さ0.4～0.5mの東西方向の溝で、東端でSD01と連結している。埋土は黄灰色シルト～粘土で澱んだ状態で堆積したと考えられること、および4区の中程で途切れることから、堀状の遺構であった可能性がある。遺物は出土しなかった。

SD05 1・5区で検出した東西方向の溝である。1区では幅2.5m、深さ0.6mの規模であるが、

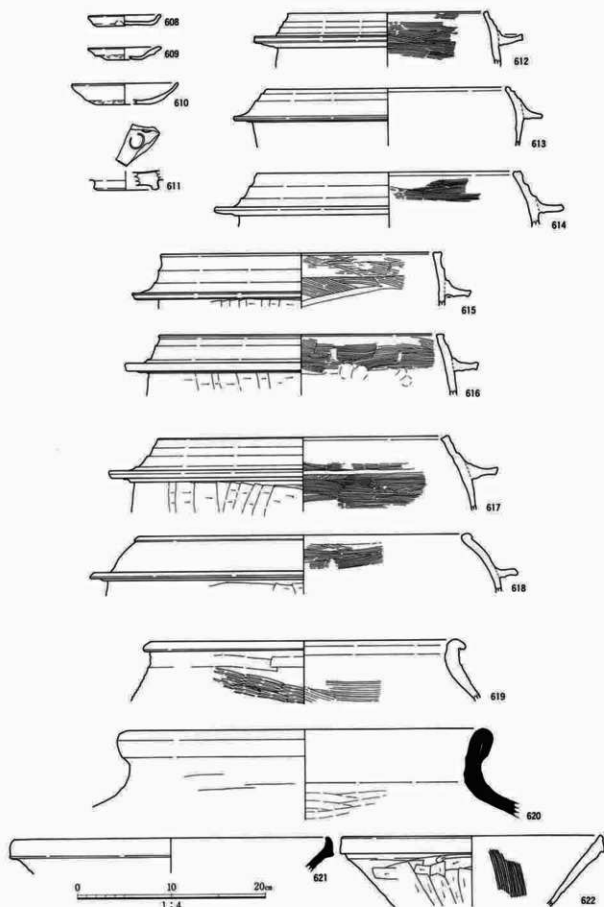


图137 SD04出土遗物

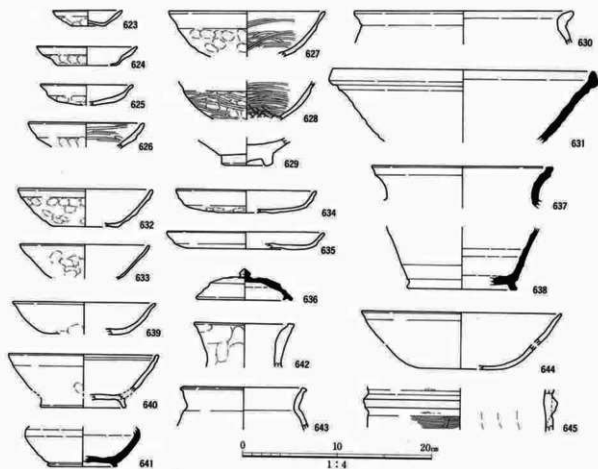


図138 溝出土遺物

SD01(623~631)、SD06(632~638)、SD02(639~641)、SD07(642~645)

5区では0.3mと浅くなることからSD04の西肩付近で途切れる可能性が高い。埋土は下部が灰色粘土～細粒砂からなる自然堆積層で、上部が地山偽礫を含む灰褐色シルトおよび灰色砂質シルトの人為的な埋戻し土である。土師器・須恵器・瓦器のほか瓦片を含む。東西両端で途切れることから堀状の遺構と考えられ、東側のSD03と対になっていたであろう。したがって溝の廃絶時期は、SD01・03と同じ15世紀前葉の可能性がある。

SD07 1区西部で検出した溝で、北から約10°東に振り、旧中高野街道と同方位である。SD05が埋没したのちに掘られている。部分的に西側に拡張を試みたが、西部に向ってさらに落込んでいるため、正確な規模は不明である。深さは0.6m以上である。SD05より後出することから、上限は15世紀前葉以降の遺構である。また、第2層を除去した段階で検出したことから、下限は江戸時代である。

出土遺物には製塩土器642、土師器甕643、黒色土器鉢644、円筒埴輪645のほか、瓦片がある(図138)。図示した遺物は、どれも遺構の時期を示すものではないが、円筒埴輪の出土は付近に古墳があったことを推測させる。645は外面調整が二次ヨコハケの窯窯焼成で、5世紀後葉の所産である。

SD02 3区東部および4区南東端で検出した南東-北西方向の溝で、幅1.5m前後、深さ0.2~0.3mある。埋土は淡黄灰色の粗粒砂層で、人工的な溝ではなく自然流路と考えられる。土師器・須恵器・黒色土器が出土した。

土師器には碗639、須恵器には壺641、黒色土器には碗640がある。641は高台をもち、器形が体部中央付近で屈曲することから、小壺と考えられる。640は内黒の黒色土器で、口縁部の外面は強いナデ調整のために稜があり、高台は長く外方に延びる。これらは平安時代Ⅱ期古～中段階に属するものであり、SD02の埋没時期は9世紀後半と考えられる。

SD06 1区北端で検出した。深さ0.5m以上で、方位は北で西に振るが、ほとんどは調査区外のため正確な形状や幅は不明である。3区北端の落込みも同一遺構の可能性がある。埋土は灰色を呈するシルト～極細粒砂と粗粒砂～礫が互層状に堆積しており、急激な流れがあったことを示している。自然流路の可能性がある。埋土中から土師器・須恵器・埴輪片が出土した。

土師器は碗632・633、杯634、皿635、須恵器は杯身636、甕637、壺638がある(図138)。636以外は平安時代Ⅱ期古段階のものである。SD02出土遺物とほぼ同時期であることから、両者を埋めた砂礫層は一連のものであったのかもしれない。

ii) 井戸(図139～144、写真11、図版17)

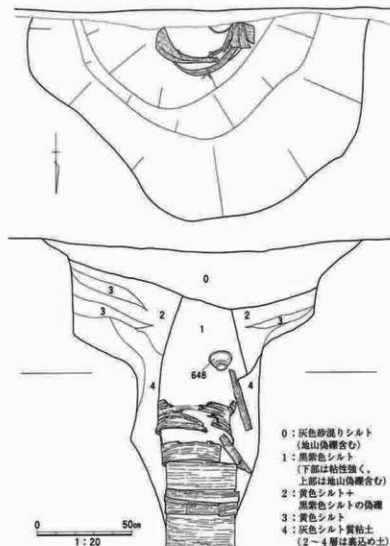


図139 SE02平・断面図

2区で2基、3区で9基、4区で1基の合計12基を検出した。どれも湧水が著しく、完掘しえたのはSE02・08・11のみである。

SE01 直径0.9mの円形で深さは0.9m以上である。土師器・瓦器のほか瓦が出土した。

SE02 曲物を井戸枠とした2段階りの井戸である。深さは検出面より1.6mあった。検出面の上端では直径1.8mで、中位以下は直径0.6mとすぼまっていた。井戸枠である曲物は直径40cm、高さ17cm前後のものが6段分遺存していた。井戸上部(0層・1層上部)は、偽礫を多く含む埋戻し土である(図139、図版17)。

1層上部の基底から完形の白磁碗648が出土しており、井戸の埋戻しに伴って意図的に投棄された可能性がある。このほか、土師器小皿646・647、黒色土器

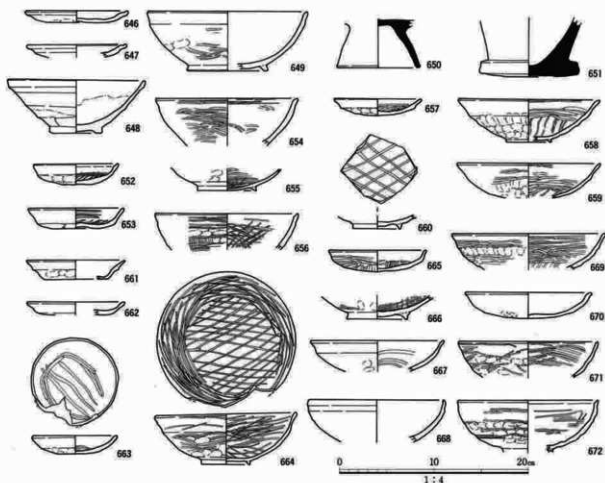


図140 井戸出土遺物

SE02(646～651)、SE10(652～655)、SE04(656)、SE03(657～659)、SE12(660)、SE07(661～664)、
SE05(665～668)、SE11(669～670)、SE09(671～672)

碗649、須恵器高杯脚部650、鉢651などが出土した(図140、図版31)。

648は中国製の白磁碗で、Ⅳ－1類に属する[横田賢次郎・森田勉1978]。646・647は「て」字の口縁部を有する土師器皿である。器壁は厚手で、口径は10.2～10.6cmある。649は両黒の黒色土器碗で、体部は丸みを帯びている。これらは平安時代Ⅳ期古段階に属する。

SE03 検出面での直径が1.4mの円形の井戸である。西側の肩がほぼ垂直であるのに対し、東側の肩は段状に落込んでいる。深さは1.3m以上あった。後述する出土遺物の時期からSD01が掘削される以前の遺構と判断できる。

埋土中から瓦器小皿657、碗658・659などが出土した(図140)。瓦器はⅢ－1期に属する。

SE04 直径0.9mの円形で、深さは0.9m以上あった。SD02を切っており、土師器・須恵器・瓦器のほか瓦片が出土した。Ⅱ－2～3期に属する瓦器碗656が出土している(図140)。

SE05 直径1.4mの円形で、深さは1.2m以上あった。土師器・瓦器・白磁が出土した。

瓦器は小皿665、碗666・667、白磁は碗668がある(図140、図版31)。666は高台径が6.5cmと大きく、しっかりとしたつくりである。また、665・666は内外面にヘラミガキを施しており、666の内面ミガキは格子状である。Ⅱ－2～3期に属する。

SE06 直径1.5mの円形で、深さは0.8m以上あった。遺物は出土しなかった。SE05とともに、瓦質土器を含む溝状の遺構に切られている。

SE07 直径1.0mの円形で、深さは0.8m以上あった。埋土から土師器・瓦器・瓦片が出土した。

土師器は小皿661、瓦器は小皿662・663、碗664がある(図140)。663は内面に幅の太いヘラミガキ

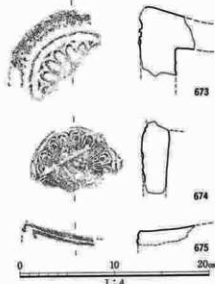


図141 奈良時代の軒丸・軒平瓦

SE12(673)、SD04(674)、SE07(675)

を施す。664は断面台形で突出度の低い高台を有する。外面には一部ヘラミガキが残り、内面は上半が横方向、下半が格子状のヘラミガキを施す。これらはⅡ-3期に属する。ほかにも、軒平瓦675が出土している(図141)。圈線がわずかに残存する外縁の破片であるが、軟質の焼成であることから奈良時代にさかのぼるものと考えられる。

SE09 一部を検出したのみであるが、検出面での平面形は一辺1.8m前後の隅丸方形で、SE08に類似する。深さは1.2m以上ある。土師器・瓦器が出土したが遺物量は多くない。瓦器碗671・672は遺構の時期を示すものと考えられ、ともに器高が比較的高く、内外面ともヘラミガキを施しており、Ⅱ-2期に属する(図140)。

SE10 SE09の東に位置する。検出面では長径約1.5mの楕円形で、途中より直径0.9mの円形となる。深さ0.9m以上あった。土師器・須恵器・瓦器のほか瓦片が出土した。

瓦器は小皿652・653、碗654・655がある(図140)。655は断面三角形で、突出した高台を有する。ともにヘラミガキは内面にのみ施されており、単位は細かい。652・653が平行線状、655が格子状のヘラミガキである。これらはⅡ-3期に属する。

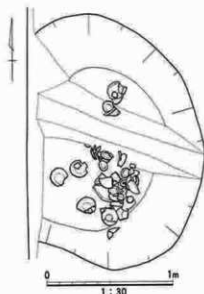


図142 SE08遺物出土状況

SE11 直径1.0mの円形で、深さは0.8m以上あった。土師器・須恵器・瓦器・瓦が出土した。瓦は離れ砂の痕跡が見られるものである。土師器は碗670、瓦器は碗669がある(図140)。時期はⅡ-3期に属する。

SE12 南部が調査範囲外のため正確な形状や規模は不明であるが、検出面では長径約1.4mの楕円形を呈する。約0.2m掘下げたところで、東側は平坦なテラス状を呈し、以深は直径0.8mの円形となる。深さは0.6m以上ある。テラス上で直径0.25m、深さ0.4mの小穴を検出したが、用途は明らかでない。Ⅱ-2~3期の瓦器碗660とともに、軒丸瓦673が出土した(図141、図版31)。673は単弁の蓮華文軒丸瓦で、奈良時代のものである。瓦当裏面および丸瓦凹面に布目圧痕が認められる成形台1本作りである。

SE08 検出面では1辺約1.8mの隅丸方形を呈し、約0.7mで深

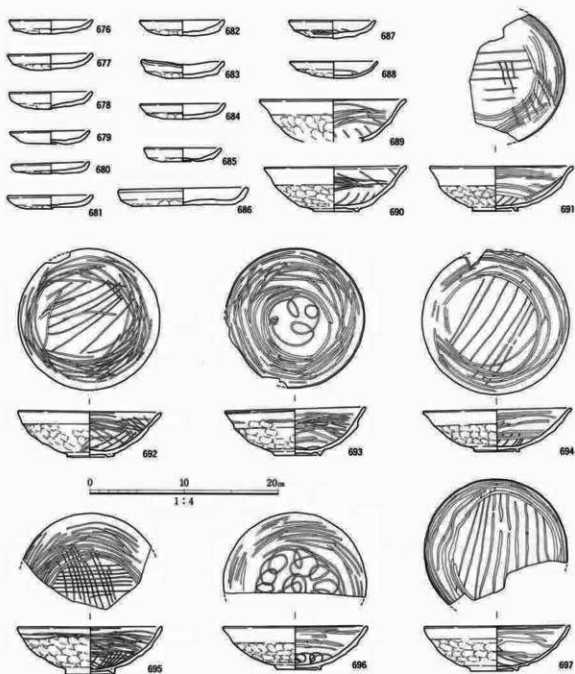


図143 SE08出土遺物

では直径約1.2mの円形となる。深さ1.1m以上あった。埋土の上部を中心に完形の土師器皿・瓦器碗が、埋土の下部を中心に平瓦が多数出土した(図142、図版17)。

土師器には小皿676～685、皿686が、瓦器には小皿687・688、碗689～697が、平瓦には698・699がある(図143・144、写真10、図版31)。

土師器小皿は、口径が8.7cm前後のものが多く、685のように口径8.0cm前後のものは少ない。図化したものの以外に、少なくとも前者は15個体、後者は7個体分ある。外面調整は、体部にユビオサエを施したのち、口縁部に一段のヨコナデを巡らす。676・678・684はヨコナデが強く、屈曲部が明瞭であるが、それ以外はなだらかなのである。686は口径12.4cmをはかり、同様の大きさのものが、ほかに

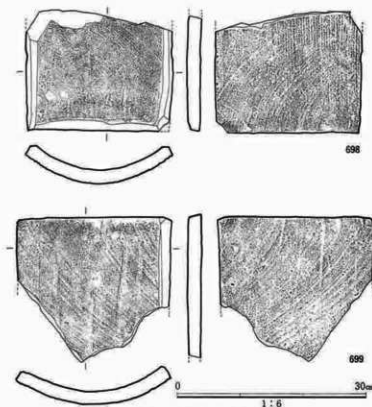


図144 SE08出土瓦

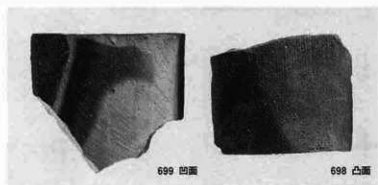


写真11 SE08出土瓦

8個体分出土している。

瓦器碗は個体判別ができなかったが、出土遺物中もっとも多いと思われる。口径が14.8～15.5cm、器高が4.6～5.1cm、高台径は5.0cm前後のもので占められる。高台の形態は、断面台形の690～692・694・696と、断面三角形の693・695・697があるが、ともに低く粗雑なつくりである。外面調整は、692・693・695が部分的にヘラミガキを施すが、ほかはユビオサエおよびナデである。内面には全面にヘラミガキが施されており、格子状の691・695、平行線状の689・690・692・694・697、連線輪状の693・694がある。

以上の土器は、Ⅲ-1期に属するものである。

瓦は平瓦が9点、丸瓦が1点出土している。698・699は平瓦で、離れ砂の痕跡が見られる。凸面に幅太の縄タタキメ、凹面に布目瓦痕が残り、内外面ともその上から斜め方向にケズリを加えている(図

144、写真10)。両者ともほとんど磨滅していない。表面に煤が顕著に付着しており、竈の部材に転用したと思われる個体もある。

iii) 土壇(図135)

3区でSK01、4区でSK02を検出した。

SK01 長径約1.8mの楕円形の土壇で深さは0.1mである。土師器・須恵器・瓦器・陶器の破片が出土した。

SK02 北部が調査区外のため正確な形状は不明であるが、東西2.8m、南北2.0m以上の方形の土壇と考えられる。深さは0.5mである。SD03に切られている。埋土は灰色粘土・褐色砂礫および地山層に由来する礫を多く含む人為的な埋戻し土である。遺物は出土していない。土取り穴の可能性があるので用途は明らかでない。瓦質土器が出土していることから、15世紀代のものと考えられる。

4) 小結

本調査地で検出した遺構は、以下の第1～4期に区分することができる。

第1期は9世紀後葉の遺物を含むSD02・06である。第2期は平安時代Ⅳ期古段階～Ⅲ-1期の遺物を含む井戸群で、実年代では11世紀後半から13世紀前葉までの期間である。第3期は14世紀後葉～15世紀前葉の遺物を含む溝群である。第4期は第3期の遺構を切るSD07である。時期は確定できなかったが、15世紀前葉以降、国産陶磁器を含む第2b層が形成される以前のものである。

第1期のSD02・06からは、奈良時代にさかのぼるとされる瓦片が出土した。この時代の瓦は第2期以降の遺構にも含まれており、軒丸瓦2点、軒平瓦1点が出土している。調査地では第1期の人工的な遺構は検出されていないが、調査地周辺に古代寺院があったことを示している。

第2期の遺構は、約1世紀の間、順次継続して営まれた井戸群である。第2期の中でもっとも新しい時期のSE08には、大量の土師器・瓦器や瓦が投棄されていた。これ以降、第3期までの間には若干の空白期間があることから、集落の廃絶・移動に伴い投棄された可能性もある。平瓦は離れ砂の痕跡が見られるもので、これらはほとんど磨滅しておらず、破片自体も大きい。同様の特徴をもつ瓦はSE02・04・07・12でも認められる。井戸が継続して営まれたこの時期、調査地の近くに瓦を葺いた建物が存在していたことが予想される。

第3期のSD01・03～05は、方位が正方位に近いことや形状から区画に係わる一連の計画のもとに掘られたと推定できる。SD04から出土した瓦には、第2期までとは異なる焼しの掛かった硬質焼成のものが含まれており、この時期にも瓦葺きの建物が付近に存在していたようである。大規模な溝群は寺域を区画する堀であった可能性が高い。SD01を挟んで東側が西側に比べて高くなっていることから、中心となる施設は調査地の東側にあったのであろう。

第4期の溝SD07は、第3期の溝とは若干方位が異なり、北で約10°東に振っている。これは、調査地の西に隣接する旧中高野街道と平行しており、両者に密接な関連性があったことが窺える。SD07の時期は不明であるが、第2b層下面で検出した多数の耕作溝の方向とも一致しており、江戸時代には正方位とは異なる地割に変化したものと考えられる。

以上、第1期から第3期にかけて、周辺に寺院の存在をうかがわせる瓦や遺構が検出され、第4期になって、新たに現在の旧中高野街道と平行する遺構配置に変化することが判明した。かつてこの地に寺院が存在したという記憶は、現在も「光流寺」という字名として残っており、具体的には第2・3期の様相が伝えられたのであろう。

(平田洋司・大庭)

第2節 UR89-26次調査

1) 調査の経緯と経過

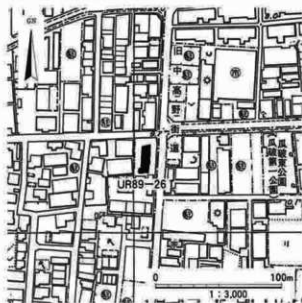


図145 UR89-26次調査地位置図

調査地はUR83-3次調査地の北側約300mに位置し、同じく旧中野街道に面している(図145、図版18)。共同住宅の建設に先立って試掘調査を行ったところ、奈良時代のものと思われる土器片を含む土壌状の遺構が検出されたため、建物建設予定地の全域を対象に調査を実施することになった。

調査の方法は、地山上面まで重機で掘削し、そのうち遺構の検出を行った。

2) 層序(図147)

第1層：現代の盛土層である。層厚は約120cmあった。

第2層：現代の作土層で、層厚は15~20cmあった。

第3層：オリーブ褐色砂質シルト層で、調査地南部にのみ薄く遺存する。江戸時代以降の地層と考えられる。

第4層：灰白色砂混り粘土層の地山である。

3) 遺構と遺物(図146・147、図版18)

地山上、第2層基底面で溝1条、土坑6基を検出した。

SD01 調査地南端に位置する幅1.3~1.5m、深さ0.2~0.3mの東西方向の溝である(図版18)。や

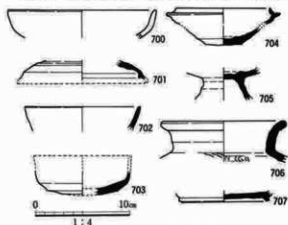


図146 UR89-26次調査出土遺物

SD01(700~706)、SK05(707)

や北西側に振れる。埋土は大きく2層に分かれ、下部は偽礫を多く含み、溝の掘削時の堆積土と考えられる。上部は灰色砂混りシルトを主体とし、南肩部には砂の堆積も認められる。埋土から、土師器杯700、須恵器蓋701、杯身702~704、高杯705、甕706が出土した(図146)。若干の時期幅があるが、7世紀代のものであり、飛鳥時代の溝と判断できる。

なお、埋土の上端付近は還元され青みをおびていること、肩部付近に酸化鉄の斑紋が認められる

ことから、SD01の上位にはすでに削平された別の遺構が存在していた可能性が高い。時期については、後述する土壌がこの部分を避けるように穿たれていることから、江戸時代以降と考えられる。

SK01～06 調査地のほぼ全域で検出した土壌群である。これらはすべて人為的に埋戻されており、埋土は地山、灰色シルト、および褐色シルトの偽礫を主体としていた。一部の遺構を掘下げたのみであるが、土壌は2m×6mほどのいびつな長方形を呈するものが多く、深さは0.5～1.0mであった。掘下げを行っていないが、大型のSK05はいくつかの土壌が切合ったものと推定できる。これらの土壌の機能としては、土壌基底が砂礫ないし砂礫混り粘土の地山であることから、地山上部の粘土層を対象とした粘土採掘に係わるものと考えられる。江戸時代以降の陶磁器や瓦片が出土している。また、褐色シルトの偽礫には、須恵器杯B707のほか、奈良～平安時代後期の土器片が出土しており、周辺にこれらの遺物を含む包含層があった可能性がある。

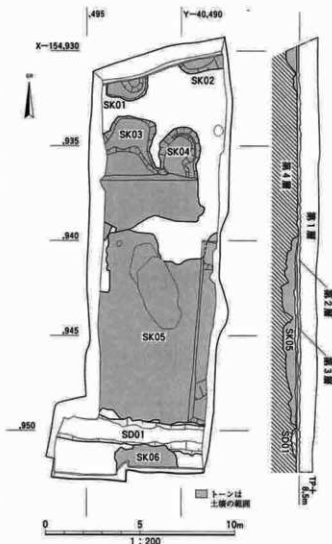


図147 UR89-26次調査地平面図・東壁断面図

4) 小結

SD01は7世紀代の溝であり、土壌埋土にこの時代の包含層を起源とした偽礫が含まれることから、調査地周辺に古代の遺構が分布していた可能性が高くなった。残念ながら、調査地では江戸時代以降の粘土採掘や地下げによって破壊されていた。また、SD01は条里の境にほぼ一致しており、上部の変色からは江戸時代にいたるまでほぼ同じ位置に溝が存在していたと推定できる。

なお、今回の調査地の字名は、「大道畑(端)」であるが、西隣地は「道正寺」ないし「道昭地」である。「道昭」は瓜破の地名発祥の祖として説話が伝えられているが、653(白雉4)年に唐に渡り、法相学を学んで帰国した元興寺の僧侶である。調査地南に存在する永楽山敬正寺は道昭が創建したといわれる永楽寺を継承する寺院といわれ、平安時代の作とされる石像を安置している。『中河内郡誌』では、道昭が瓜破に居住したのは孝徳朝とされている。道昭と瓜破との関係を明確に実証する資料はないものの、今回の調査において同時期の遺構が検出されたことは興味深い。

(平田)

第3節 UR85-41次調査

1) 調査の経緯と経過

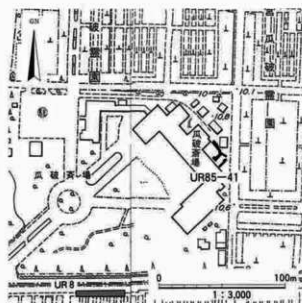


図148 UR85-41次調査地位位置図

調査地は瓜破遺跡の北東部、瓜破霊園内に位置する(図148)。霊園の造成時には弥生土器や奈良時代の瓦片が出土しており[新修大阪市史編纂委員会1988]、また、霊園内には花塚山古墳やゴマ堂山古墳が現存している。

当該地に公害防止設備が建設されることになり、試掘調査を行ったところ、古墳～平安時代の包含層が確認されたことから、調査を実施することとなった。調査は、現代の盛土まで重機によって除去し、以下は人力で行った。

2) 層序(図149)

第1層：現代の盛土層で、層厚は60～70cmあり。本層の直下はほとんど地山であった。

第2層：現代の作土層である。層厚は20cm未満で、部分的に遺存するのみである。

第3層：明黄褐～オリーブ灰色含礫極細粒砂層で、おもに遺構の埋土として遺存する。土師器・須恵器片を含むが、土質から中世以降に下る可能性が高い。

第4層：黄褐色粘質シルト～砂礫層の地山層である。

3) 遺構と遺物(図149・150、図版18)

地山上で溝8条、土壇2基のほか、柱穴の可能性ある小穴を11個検出した。主要なものについて以下に略述する。

SD01 調査区西部で検出した幅0.8m、深さ0.4mの溝である。方位は北で西に振る。埋土は黄褐色含礫シルトで、土師器・須恵器の細片が出土した。

SD02・03 調査区の北端および南端で検出した溝である。SD02は幅1.5m以上、深さ0.3m、埋土は浅黄色粘質極細粒砂である。SD03は幅1.5m以上、深さ0.2mで、埋土は地山礫礫を含む灰オリーブ色含礫極細粒砂である。ともに土師器・須恵器の細片が出土したにすぎない。SD02・03の方位は正方位に近く、SD02は丹北郡5条5里10坪と16坪の境に位置することから坪境の溝と推定される。

SK01 調査地の北端に位置し、SD02に切られている。幅1.0m以上、深さ0.57mで、埋土はにぶい黄色含礫砂質シルトである。出土遺物には土師器・須恵器細片のほか凸面に縄タキを施した平瓦片がある。

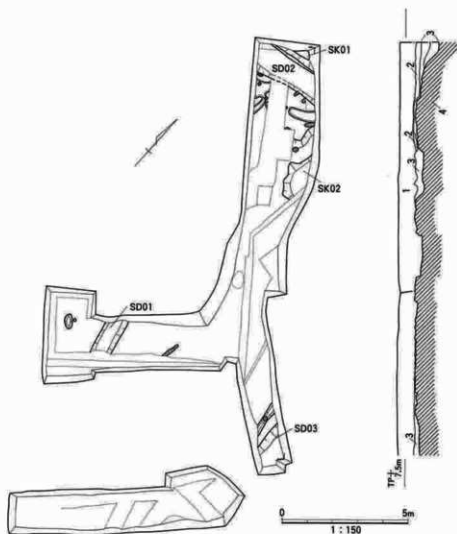


図149 UR85-41次調査地平面図・北東壁断面図

SK02 調査地の北部にある不整形の土壇で、北側が壇状に落ち込む。深さは0.33mで、埋土は地山の偽礫を含む黄褐色含礫粘質シルトである。土師器の細片が出土した。

以上の遺構は出土遺物が少なく、時期を決めることができなかった。埋土の特徴から、SD01・02、SK01は中世以降、SD01およびSK01は古代にさかのぼる可能性がある。図化可能な遺物としては、第3層から出土した、TK23型式に属する須恵器杯身708がある。

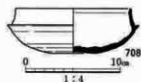


図150 第3層出土遺物

4) 小結

今回の調査地は面積も狭く、遺物の出土量も少ないことから、各遺構のつながりや時期を把握することが困難であった。この中で、坪境と一致するSD02は、条里の地割が行われていたことを示すものである。また、出土した土師器・須恵器は細片が多いながらも、周辺に古墳時代の遺構が存在していた傍証となろう。

(平田)

第4節 UR91-1次調査

1) 調査の経緯と経過

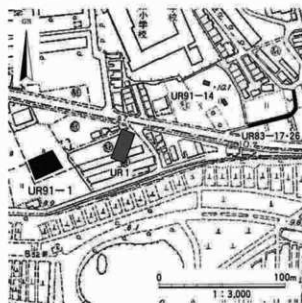


図151 UR91-1、83-17・26次調査地位位置図

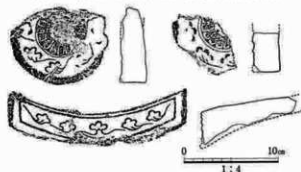


図152 UR1次調査出土の瓦

([新修大阪市史編纂委員会1988]より転載)

および作土層のみ重機で行い、以下はすべて人力によった。

2) 層序(図153・154)

現代の盛土および作土を除去するとすぐに明黄褐色粘土質シルト～細粒砂の地山が露出したが、調査区北東側で検出した落込みSX801内には、地層が残存していた。現代の盛土層および作土層を第1層、地山を第9層とし、SX801内の堆積土を第2～8層に区分した。以下、SX801内の第2～8層について記述する。

第2層：オリープ褐色粗粒砂混りシルトの作土層で、層厚は約15cmあった。本層には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦をはじめ、備前焼・瀬戸美濃焼・肥前系磁器などの国産陶磁器、白磁・青磁・青花などの輸入陶磁器の細片が含まれる。

調査地は瓜破遺跡の東部、現瓜破霊園の北側に位置する(図151)。1976年には東側約50mの地点で、下水道工事に伴う調査(UR1次調査)が行われており、開析谷の中から縄文時代晩期から奈良時代末葉までの多量の遺物が出土した。中でも、瓦は白鳳・奈良時代のものが大部分を占め、飛雲文軒丸・軒平瓦や長岡京出土瓦と同文の複弁蓮華文軒丸瓦などが含まれていた(図152)。このことから寺院の存在が推定され、「成本庵寺」と命名されている。また、この際に検出された東西方向の溝は寺院の南限を画するものと考えられている[新修大阪市史編纂委員会1988]。東約160mのUR83-17次調査地は、寺域内に位置すると考えられ、検出した当該期の掘立柱建物は寺に付属する建物であった可能性がある。

今回の調査地に共同住宅の建設が予定され、試掘調査を実施したところ、瓦片を含む遺構が確認され、成本庵寺関係の遺構・遺物の検出が期待されたことから、予定地全域において調査を実施することとなった。掘削は現代の盛土層

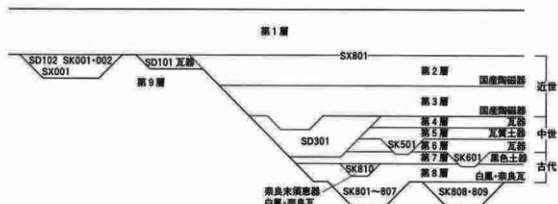


図153 主要な遺構の層位関係

第3層：黄褐色中粒砂層からなる作土層で、層厚は約15cmあった。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・瓦や埴を始めて、備前焼などの国産陶器、青磁を少量含む。

第4層：オリーブ褐色細粒砂質シルト層の作土層で、層厚は約10cmあった。土師器・須恵器・黒色土器・瓦・埴および瓦器を含む。本層の上面でSD301を検出した。

第5層：オリーブ褐色粘土質シルト層で、層厚は約10cmあった。瓦や埴が大量に出土し、また土器類も上位の地層より多い。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・白磁・青磁が含まれる。本層の下面でSK501を検出した。

第6層：オリーブ褐色粘土質シルト層で、層厚は約7cmあった。出土遺物は瓦片が主体で、土器類は少ない。瓦器の破片を含む。本層の下面でSK601を検出した。

第7層：にぶい黄褐色細粒砂シルト層で、層厚は約15cmあった。出土遺物の多くは白鳳・奈良時代の瓦片であるが、土師器・須恵器のほか黒色土器の内黒がある。

第8層：SX801の最下部で確認した暗灰黄色中粒砂シルト層で、おもに遺構内に分布する。瓦片のほか5～6世紀代の須恵器片を含む。

第9層：明黄褐色粘土質シルト～細粒砂層で、調査区の西半で確認した地山である。

各層が形成された時期については、出土遺物の組成や後述する遺構・遺物の年代観から、以下のよう考えられる。まず、第2・3層からは国産陶磁器が出土し、第2層には肥前系磁器が含まれることから17世紀中葉以降、第3層は16世紀にさかのぼる可能性がある。第4～6層では瓦器が出土し、第5層は後述する遺物の年代観から14～15世紀、上位の第4層は15～16世紀、下位の第6層は11～14世紀と考えられる。また第7層以下からは瓦器が出土しないことから、第7層は10世紀、第8層は9世紀と考えられる。

3) 遺構と遺物

遺構の多くは、調査地北東部の落込みSX801内で検出した。各遺構と地層との関係は図153のとおりである。まず、SX801について、次いでSX801内で検出した遺構について時期毎に記述する。また、調査区西半の地山部分の第1層基底面で検出した遺構については、層位的に時期を押さえることができなかったため、時期不明の遺構として最後に記述する。

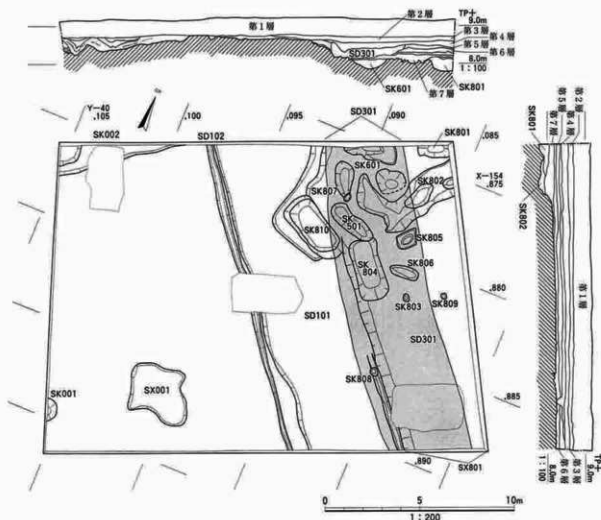


図154 UR91-1 次調査地平・断面図

i) SX801 (図154・155、図版19)

調査区北東部に位置する、幅7.2m以上、深さ1.0m以上の落込みである。溝の可能性も残されているが、50m東方で行われたUR 1次調査が深い谷地形の内部に位置していることから谷地形の肩部を検出した可能性が高い。出土遺物から9世紀以降、17世紀中葉まで窪地として残存していたことがわかるが、第7層下面で検出した遺構の中に瓦をまったく含まないものが存在することから、形成時期は古墳時代以前にさかのぼる可能性がある。以下、第2～7層から出土した遺物について記述する。

第2層から709が出土した。16世紀代に属する饅頭心の青花碗で、古い時期の遺物の混入と考えられる。

第5層から710～713・717・718が出土した。713は土師器皿で、底部から口縁部へと明瞭に屈曲し、端部は丸くおさめる。14世紀後半～15世紀前半のものであろう。712は瓦器碗である。717・718は瓦質土器で、717は羽釜、718は片口鉢である。15世紀代のものである。これらは第5層の時期を示すものと考えられる。710は緑釉陶器、711は青磁である。711は高台および内面に施釉されていないことから体部は袋状であると推定されるが、器形および時期は不明である。

第7層から714～716・719～721が出土した。714は「て」字状の口縁部をもつ土師器皿で、胎土は

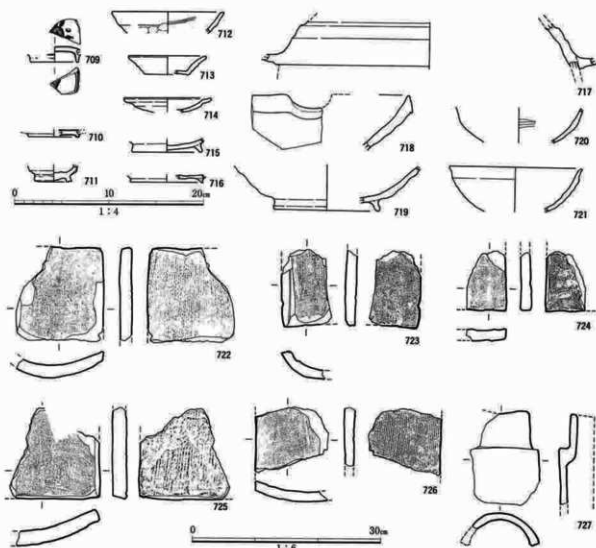


図155 SX801出土遺物

第2層(709)、第5層(710・713・717・718・726)、第6層(722・725・727)、第7層(714・716・719・721)

精良である。715・716は土師器碗の底部、719は土師器鉢である。いずれも器面が磨滅しており、調整は不明である。720・721は黒色土器碗の口縁部で、内黒である。これらの土器はおおむね10世紀代に属するものである。

これらのほかにも、各層から瓦の破片が出土しているが、特に第6層に多かった。図化した722～727のうち、726が第5層、それ以外が第6層からである。722～726は平瓦で、凸面には縦位の縄タキメ、凹面には布目痕が残る。727は丸瓦で、凹面には布目痕が残り、724は凸面に横方向のナデを施す。726は色調が灰色で、焼きはやや硬質である。それ以外の色調は灰白もしくは橙色で軟質である。

ii) 平安時代以前の遺構と遺物

a. 土壌(図154・156～158、図版32)

第8層の下面でSK801～807を、第8層の基底面でSK808・809を、第8層の上面でSK810をそれぞれ検出した。これらは大きさや形状が一定せず、深さは0.1～0.3mと浅いものが多いため、自然に

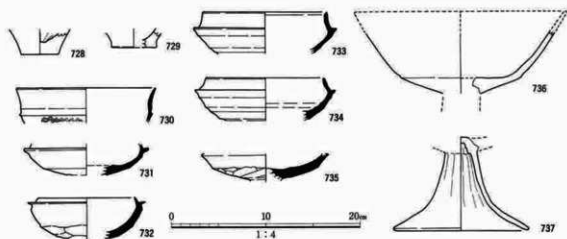


図156 土壌出土遺物

SK002(728・729)、SK801(737)、SK802・803(730・731)、SK501(732)、SK601(733~736)

形成された窪みの可能性もある。

SK801 調査区の北端で検出した土壌である。北部は調査区外のため形状・規模は不明であるが、深さは0.4mあった。焼成不良の須恵器甕体部片のほか、土師器高杯脚部737が出土した。調整は内外面ともケズリのちナデであり、6世紀後半に属する。この遺構からは瓦や埴が出土しなかった。

SK802・803 調査区の北部で検出した不整形な土壌である。形状から本来同一の遺構を底付近で検出した可能性が高い。検出面からの深さは約0.2mあった。土師器・須恵器のほか瓦片が出土しており、730・731を図化した。731は須恵器杯身、730は須恵器無蓋高杯の口縁部である。前者はTK43型式、後者はTK23型式に属するものであろう。遺構の時期を示す遺物ではないが、周辺に古墳時代の集落が存在したことを推定させる資料である。

SK804 長さ2.7m、幅1.5mの整った長方形の土壌である。深さは0.15mと浅く、土師器・瓦の細片が出土したのみで時期は不明である。形状は後述するSK810に類似している。

SK805~807 長辺が1.5m前後の長細い土壌である。遺物がほとんど出土していないため断定はできないが、瓦が出土しなかったため、奈良時代以前にさかのぼる遺構かもしれない。

SK808・809 直径約0.4mの円形の土壌である。ともに瓦が出土していないことから、奈良時代以前にさかのぼる可能性がある。

SK810 長さ3.4m、幅1.6mの長方形の土壌である(図157)。深さは0.9mと他の遺構に比べて深い。埋土は5層に細分でき、下部は粘土主体、上部にいくほど砂質が強くなる。埋土の下部には部分的に偽層が認められることから、埋戻されたものと思われる。出土遺物には多くの瓦や須恵器があり、二次焼成を受けた完形の丸瓦や埴が含まれていた(図158、図版32)。埋土の最上部からは黒色土器の細片が出土している。

須恵器には、鉢739、杯B740、壺E741、小壺742および壺底部738がある。739・740は埋土の1層、742は4層、738は2層、741は5層から出土した。742は頸部以上を欠損しているが、体部はほぼ完存している。同じ器形のものは、ほかにも数点ある。これらは平安時代I期に属する。

平瓦には744・745があり、埋土の1層から出土した。ともに凸面に縄タキメ、凹面に布目痕を

残す。744は色調が橙色の軟質焼成で、SK810出土瓦の大多数がこのタイプである。745は色調が灰色の硬質焼成のもので、量的には少ない。平瓦で全体の形状が推定できるものには一枚作りのものがある。凹面に模骨痕を残すものもあるが、全体の湾曲は小さく、桶巻き作りと断定することはできない。凹面の布目痕には細かいものとやや粗いものがあるが、形状や焼成に違いは見受けられない。丸瓦には743・746～748がある。

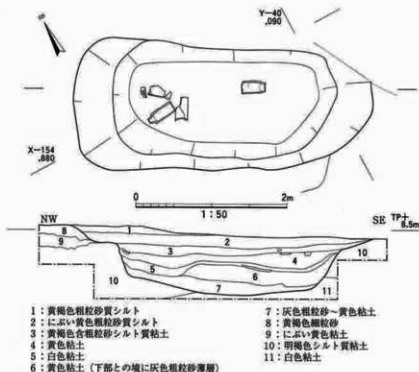


図157 SK810平・断面図

743は埋土の3層、746～748は4層から出土した。746・747は完形で、風化のため明瞭でない部分もあるが、いずれも丸瓦部の凸面は縄タキを施したのちにナデ調整を行っている。凹面には布目痕が残る。丸瓦部と玉縁部との接合は、丸瓦内に玉縁部を付け足すことによって成形し、側縁部のケズリ調整を同時に行っている。色調は743・747・748が橙色、746は褐灰色を呈しており、746は全体に幅広で玉縁部が短いという違いがある。

埴には749～751があり、埋土の5層から出土した。短辺は19.8cm、長辺は26.2cm以上、厚さは6.0cmある。破面の観察では、外側が粘土板状、内面が粘土塊状を示すことから、箱状の型に粘土を押込むことによって成形したものと考えられる(図版32)。粘土塊の大きさは直径4cm前後のものが多く、ほかの破片も大きさはほぼ同じであり、色調は橙色で、いずれも軟質に焼きあがっている。瓦・埴はほかの遺構や層中からも多く出土しているが、SK810出土例と類似するもので占められる。

SK810から出土した瓦・埴は完形品を含み、大型片も多いことから、これらは一括で投棄されたものと考えられる。また、出土須恵器もおおむね平安時代Ⅰ期に属するもので、瓦・埴の投棄が8世紀後半～9世紀前半に行われたことを示している。一方、遺構のベースとなる第8層からも瓦や埴が出土したことから、瓦・埴が使用されていた時期は奈良時代にさかのぼる可能性が高いといえよう。

iii) 鎌倉時代以降の遺構と遺物

第6層下面でSK601を、第5層下面でSK501を、第3層基底面でSD301を、第1層基底面でSD101・102を検出した。

a. 土壌(図154・156、図版32)

SK601 調査区北端で検出した土壌である。北部が調査区外のため形状・規模は不明であるが、深

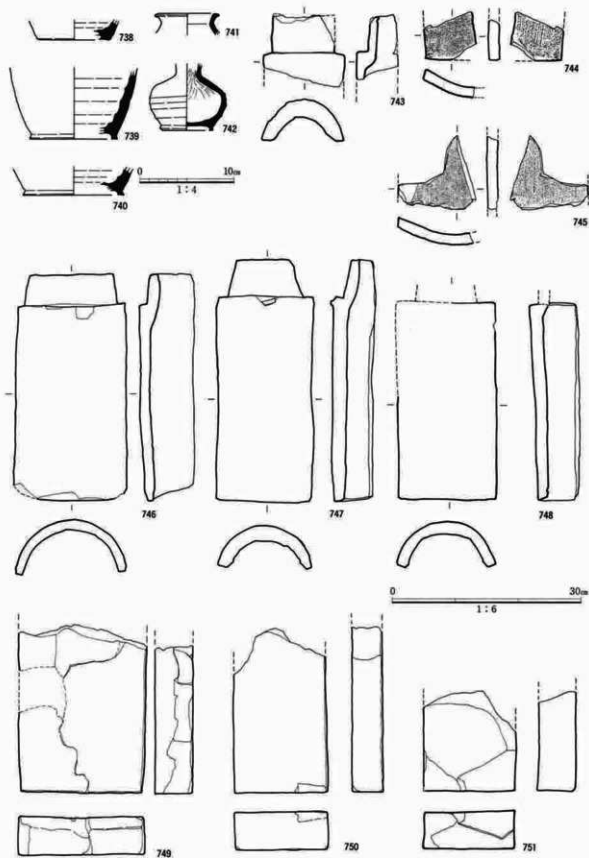


图158 SK810出土遗物

さは0.25mである。土師器・須恵器片のほか、瓦・埴、被熱した砂岩が出土した。

土師器は高杯736が、須恵器には杯身733・734、高杯735がある。736は杯底部と体部の境界ににぶい稜を有するもので、5世紀代のものであろう。733・734はTK10型式に属する。以上のように古墳時代にさかのぼる遺物がみられるものの、瓦・埴を含むことおよび層位から鎌倉時代の遺構と考えられる。

SK501 長軸0.3m、短軸0.9m、深さ0.2mの楕円形の土壇である。瓦・埴のほか土師器高杯・甕、須恵器杯・甕などが出土した。遺構の時期を示す遺物ではないが、須恵器杯身732はTK73型式に属する初期須恵器である。立上がりは短く内傾しており、受け部端は鋭い。体部以下には静止ヘラケズリを施している。同一個体と思われる破片が上層からも出土している。遺構の時期は層位関係から鎌倉時代と推定できる。

b. 溝(図154)

SD301 SX01内に掘削された幅5.0m、深さ0.3mの溝である。方位はSX901にほぼ一致する。埋土は黄褐色中粒砂である。瓦・埴のほか土師器・須恵器・瓦器片が出土したが規模に比して量は少ない。正確な時期は不明であるが、層位関係から15～16世紀と推定できる。機能としては耕作に係わる溝と考えられる。

SD101 SX901の肩で検出した幅4.9m以上、深さ0.15mの幅の広い溝である。埋土はオリープ褐色細粒砂質シルトからなる作土である。耕作に伴い段状に地下げしたものと考えられる。出土遺物は瓦・埴が多いが、土師器・須恵器のほか瓦器片もある。正確な時期は不明であるが、SX01に平行すること、埋土が作土層であることから、第3層あるいはSD301に併行する時期のものであろう。

SD102 SD101に隣接して存在する幅0.4m、深さ0.3mの溝である。北で西に38°振る。埋土はオリープ褐色中粒砂シルトで耕作に伴う溝と考えられる。瓦器碗および瓦質羽釜の細片が出土しており、15世紀以降の遺構と推定できる。

iv) 時期不明の遺構

a. 土壇(図154・156)

SK001 調査区の南西部で検出した直径1.2m、深さ0.5mの土壇である。底にマンガン粒の沈着が認められることから水溜状の遺構と推定される。凸面に斜格子タタキを施した瓦質焼成された平瓦の細片が1点出土したのみで、時期は不明である。斜格子タタキを施した瓦は本調査地ではこれのみである。

SK002 調査地の北西部で検出した落込みである。底は明瞭でない。また、この部分のベースとなる地山層はかなり乱れている。このことから、地震などによる地面の亀裂に土が堆積したもの、あるいは風倒木の痕と考えられる。埋土は黄褐色～暗灰黄色砂質シルトで、いくつかに細分できるが、上層からは土師器・須恵器の細片が、下層からは弥生土器728・729が出土した。いずれも甕底部で、磨滅が著しく調整は不明であるが、弥生時代後期のものであろう。

SX001 調査地の南部にある最大長4.0m、深さ0.15mの不整形な土壇である。SK002と類似しており、風倒木の痕と考えられる。出土遺物がなく時期は不明である。

4) 小結

今回の調査では直接成本廃寺に係わる建物跡などは発見できなかった。本地域はUR1次調査で検出された寺域の南限と推定された溝のさらに南に位置することから、寺域の外に当たっていたのかもしれない。しかしながら、出土した瓦・塼はコンテナ約10箱におよび、完形品も含むことから、近隣に瓦を用いた建物が存在したことは明白である。この建物が寺院に直接関わるものかは現状では不明である。谷地形と考えられるSX801は、これらの瓦や塼の投棄場所として利用されたのであろう。特にSK810からはまとまって出土しており、8世紀後葉～9世紀前葉に建物の建替えあるいは解体が行われたと考えられる。また瓦・塼は各層から出土していることからこうした機会は一度ではなく、数度にわたったのであろう。SX801はその後、埋没につれて耕作域として利用されることになったと推定できる。

(平田)

第5節 UR83-26次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(瓜破東2丁目)は、UR91-1次調査地の東側約150mに位置し、成本廃寺の境内推定地にあたる(図151)。また、南方約50mには花塚山古墳が現存している。

1983年に行われた下水管渠築造に先立つ調査で、多数の柱穴や古墳時代中期の堅穴住居の可能性のある土壌を検出した(UR83-17次調査)。同年、この調査地の隣で水道管の埋設工事が予定され、UR83-17次調査地に沿った個所にトレンチを設定し、引き続き調査を実施した(UR83-26次調査)。両調査地はほぼ重なる位置にあり、幅約1m、長さ約55mの東西トレンチと、これに取付く長さ約15mの南北トレンチからなる。本節では両調査を併せて報告する。

2) 層序(図159)

調査地域は地山が西から東に傾斜しており、東半は近世の削平が特に顕著であった。現代作土以下、地山までを第1～6層に細分した。

第1層：現代の道路舗装に伴う表土と旧作土層からなり、層厚は30～100cmあった。

第2層：灰色シルト～灰黄褐色砂質シルト層で、層厚は10～20cmあった。東西トレンチの西半に分布する。

第3層：灰白色粘土混りシルト～淡灰褐色砂質シルト層で、層厚は15～30cmあった。本層の上面で、江戸時代の溝SD01～03を検出した。

第4層：調査区の東半に分布する黄褐色砂混りシルト～赤褐色砂質シルト層で、層厚は10～30cmあった。古代の平瓦片を多く含むが、近世の掘削に伴う再堆積層と考えられる。

第5層：東西トレンチの西半にのみ分布する灰色粗粒砂混り細粒砂～淡灰色砂質シルト層で、層厚は約10cmあった。本層を除去した段階でSD06を検出した。

第6層：黄～黄白色砂礫からなる地山である。大半の遺構は本層上で検出した。

3) 遺構と遺物

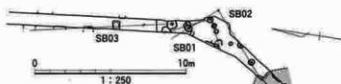
i) 溝(図159)

SD01 第3層上面で検出した東西溝である。幅0.4m、深さ0.4mあった。層位から近世の遺構で、現在の道路に沿っていることから、これに先行する坪境を示す溝と考えられる。

SD02・03 第3層上面で検出した南北溝で、約10m離れて平行する。幅0.6～0.8m、深さ0.4～0.7mあり、平瓦をぎっしり敷き並べていた。江戸時代の遺構である。

SD04 東西トレンチ中央北壁ぎわの地山上で検出した東西溝で、規模は不明である。埋土は暗褐色シルト質粘土で、基底で検出した小穴から7・8世紀代の土師器が出土した。

SD05 幅0.4m、深さ0.2mの南北溝で、暗褐色シルト質粘土を埋土とする。



SD06 幅0.5m、深さ0.2mの東西溝で、出土遺物から鎌倉・室町時代の遺構と考えられる。

ii) 掘立柱建物(図159・160)

地山上で検出した柱穴のうち、柱筋が確認できるものについて掘立柱建物として報告する。ただし、調査範囲が狭いために、いくつかは構になる可能性もあり、また、遺構の時期を明確にできたものはない。

SB01 調査北東部で確認した南北5間分、総長9.5mの柱列で、柱の多くは断面で確認したのみである。平面で検出した柱穴を参考にとすると、方位は磁北に対して約10°振り、柱間隔は1.9mある。柱の掘形は一辺0.5～0.8mの隅丸方形で、深さは0.4～0.5mあった。南端の柱穴で確認した柱径は約20cmで、一部に抜き取り穴が認められた。埋土から土師器片が出土した。SB02に切られている。

SB02 南北2間、東西2間分を確認した掘立柱建物である。南北の柱列は、磁北に対して西へ約25°振っている。柱間距離は南北が1.5～1.6m、東西が0.8～0.9mと南北が長い。SB01を切っており、SB03に切られている。

SB03 SB02と重なる位置にある掘立柱建物である。南北1間以上、東西4間以上に復元できる。南北の柱筋は磁北に対して約40°西に振っている。確認した東西筋の柱間隔は1.3mあった。柱の掘形はいずれも直径0.4m前後の円形で、柱痕跡は12～18cmあった。SB01とは切合っているが、前後関係は明らかにできなかった。

SB04 東西トレンチ西半で検出した東西3間分の柱列である。柱間距離にはばらつきがあり、東から2.0m、1.4m、1.6mあった。掘形は直径20cm前後、深さ0.1～0.2mと小ぶりであった。

iii) 土壌(図159・161・162)

SK01 東西トレンチの東端で検出した土壌である。深さ約0.2mのなだらかな落込みで、復元すると直径約7.0mある。埋土は暗褐色粘土質シルトで、須恵器・土師器の破片を含む。

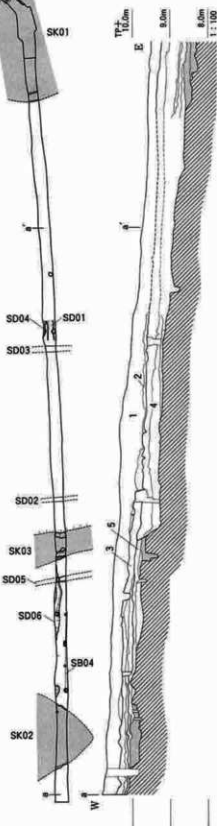


図159 UR83-17・26次調査地
平面図・北壁断面模式図

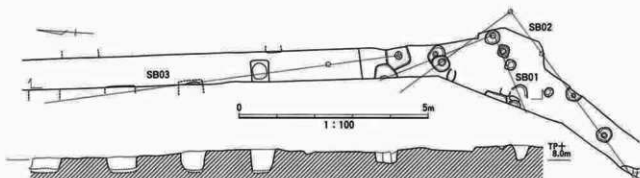


図160 SB01~03平・断面図

SK02 東西トレンチ西端で、幅3.5~4.3mにわたって検出した土壌である。深さ0.2mで、暗褐色シルト質粘土を埋土とする。土壌内で柱穴と思われる小穴を2基検出したほか、須恵器・土師器・製塩土器がまとめて出土した。

須恵器には杯蓋752・753、有蓋高杯蓋754、杯身755、椀756、壺757、蓋758、鉢759がある。これらはTK208型式に属する。土師器は複数個体分の甕の破片が出土したが、図化したものは760のみである。

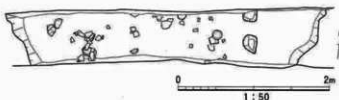


図161 SK02遺物出土状況

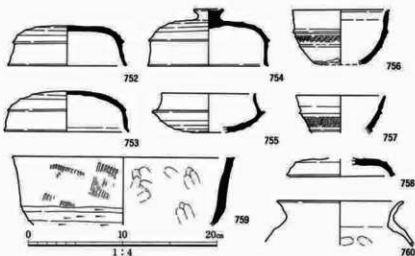


図162 SK02出土遺物

SK03 東西トレンチ中央で検出した土壌で、東半は江戸時代の掘削によって残存していなかった。深さ0.1mあり、西側の落ちに沿って幅0.4m、深さ0.2mの南北溝が存在する。

4) 小結

古墳時代中期の竪穴住居の可能性のある土壌を検出し、西側のUR1次調査の成果と併せてこの時期の集落が一带に広がっていた可能性が高くなった[鎌田博子1987]。また、後世の地層への混入ではあるが、調査地内からは比較的多くの奈良時代の瓦が出土しており、調査地が成本廃寺の境内にあったという推定を裏付けることとなった。検出した掘立柱建物についても、古代寺院に係わるものである可能性が高い。

(大庭)

第6節 UR88-5次調査

1) 調査の経緯と経過

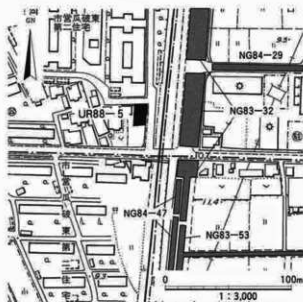


図163 UR88-5次調査地位置図

調査地(瓜破東2丁目)は、東北地区の西端、東側の長原遺跡と接する位置にある(図163)。阪和貨物線を挟んだ東隣で行われた長原遺跡の調査では、古墳時代中期、奈良時代、平安時代といった時期の掘立柱建物群が検出されている[大阪市文化財協会1992a・b]。また、西側には南北方向の開析谷「馬池谷」が存在しており、本調査地は谷の東の肩部付近に位置していることになる。

試掘立会の結果、敷地の北側2/3を対象に調査を行うことになり、南北約17m、東西約10mの調査区を設定し、1988年5月23日より調査を開始した。この時点ですでに現代の盛土部分が

掘削されており、人力により地山の上面まで掘削を行ったのち、遺構の検出を行った。調査は同年6月13日に終了した。

2) 遺構と遺物

現代作土の下に厚層2～5cmのごく薄いシルト層を介して、TP+9.0m付近で地山の粘土層を検出した。地山上には、シルト層上面で認められた南北方向に平行する数条の耕作溝のほか、地山の粘土層を攪拌することによって形成されたと思われる浅い不整形の土壌が多数認められた。これらにより削平を受けているために残存状況は必ずしも良好ではないが、以下に示す弥生～平安時代までの遺構を検出した。

i) 弥生時代(図164～166、図版20)

竪穴住居SB01、溝SD01・02を検出した。

SB01は平面プランが方形の竪穴住居である。周壁溝をもち、床面は外部より数cm低くなっていた。北部は攪乱を受けており、部分的に周壁溝が残っているのみであるが、規模は南北約6m、東西約4mである。複数の周壁溝が重複しており、西辺では3本が平行して確認された。また、床面中央に直径0.5～0.6m、深さ0.2～0.3mの円形ないし楕円形の土壌を3基検出した。焼けた痕跡は認められないが、若干炭を含んでいることから、炉穴の可能性がある。これらのことから、竪穴住居はほぼ同じ場所で少なくとも2回の建替えが行われたことが予想される。柱穴と思われる小穴は床面上でいくつか検出されたが、柱配置を決定するには至らなかった。床面中央部では弥生時代後期の高杯、甕など

の破片が出土している。

また、周壁溝の南西隅と床面南
部から南西方向へ延びるSD01を検
出した。幅0.2～0.6mで、底は南に
向って深くなっていた。この溝は
SB01に取付く排水溝で、西側に予
想されている開析谷に延びていた
と考えられる。溝内からは弥生時
代後期の高杯・長頸壺・広口壺な
どがまとまって出土しており、溝
がある程度埋った時点で投棄され
たものであろう。SD02もSD01同
様、排水溝と考えられる。

761はSB01から出土した高杯で
ある。受け部から口縁部の屈曲は
緩やかで、口縁部も比較的短い。

762～764はSD01から出土した。
762は有段口縁の高杯で、杯部は浅
い。脚部は短く、緩やかに外反
し、小円のスカシ孔を2段で5方
向へ配する。脚部外面に縦方向の
ヘラミガキを施す。763は長頸壺
で、口縁部はやや外開きに直立
し、体部は無花果形である。口縁
部および体部外面に縦方向のヘラ
ミガキを施す。764は広口壺で、頸
部が幅広で直立する。口縁部端部
は肥厚させ斜めに垂下させる。こ

れらは弥生時代後期中葉に位置づけられる。

ii) 古墳時代(図164・166、図版20)

土壌SK04、溝SD02を検出した。調査区北東隅で検出したSK04から、TK23型式に属する須恵器杯
身765が出土したほか、SD02から須恵器杯・甕の破片が出土している。本調査では古墳時代の遺物の
出土は少なかったが、小穴群のうちこの時代に属するものがいくつか含まれている可能性もある。

iii) 平安時代(図164・166、図版20)

SB01の床面中央からやや北よりの位置で、浅い土壌SK05を検出した。中から土師器碗766、皿

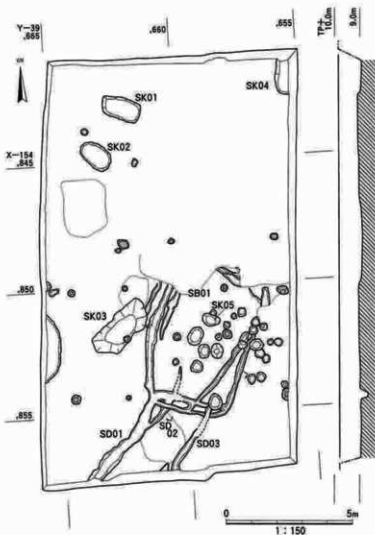


図164 UR88-5次調査地平面図・東壁断面図

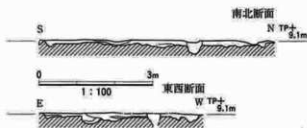


図165 SB01断面図

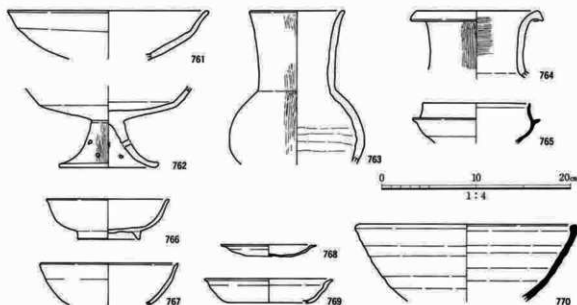


図166 UR88-5次調査出土遺物

SB01(761)、SD01(762~764)、SK04(765)、SK05(766~770)

768・769、黒色土器鉢767、須恵器鉢770が出土した。766は比較的高い高台を有し、767は内黒である。768は「て」の字状口縁の小皿で、器壁は薄い。これらは平安時代Ⅲ期古段階に属するもので、時期は10世紀末～11世紀初頭である。

また、検出した小穴群の中に、直径0.3mと小型で、東西・南北方向に2.0～2.2m間隔で並ぶものが複数認められる(図164のトーン部分)。調査区内で削平を受けている部分が多いため復元は困難であるが、正方位を主軸とする掘立柱建物が存在したと考えられる。東隣で行われたNG83-32次調査では、SK05と同じ時期の、これとはほぼ同規模、同一主軸の掘立柱建物群が検出されており[大阪市文化財協会1992a]、今回検出した建物もこれらの続きであった可能性が高い。

iv) その他

土壌SK01-03を検出した。いずれも均質な赤褐色シルトを埋土とするものであり、遺物が全く出土しなかったため、時期・性格については特定できない。

3) 小結

今回の調査では、周辺での調査成果からみて古墳時代以降の遺構・遺物が検出されると予想されたが、思いがけず弥生時代後期の堅穴住居を発見することとなった。調査地は「馬池谷」に面した台地の縁辺面に立地しており、周辺の調査成果からみて、多数の堅穴住居が群集している様子はうかがえない。おそらく単独あるいは少数の住居からなる単位で存在していたものと推測される。

古墳時代以降の遺構・遺物についてはまとまりのあるものではなかったが、いずれも東隣のNG83-32・84-47次調査で検出された遺構と一連のものであろう[大阪市文化財協会1992a・b]。(大庭)

第Ⅵ章 遺構と遺物の検討

第1節 瓜破・瓜破北遺跡の歴史的変遷

第Ⅱ～Ⅴ章では、1980年から1993年にかけて実施した24件の発掘調査の成果を報告した。調査箇所は、疎密はあるものの遺跡のほぼ全域に及んでいる(表10)。本節では、今回報告した調査成果を中心に、瓜破台地とその周辺地域の歴史的変遷を素描する。なお、本文および図・表では、煩雑さを避

表10 各調査のおもな遺構・遺物一覧

番号	調査次数	地区	田石部	縄文	弥生前期～後期前期	弥生後期中期～古墳前期	古墳中・後期	飛鳥～平安中期	平安後期～鎌倉	室町
A-D E-F	UR80-1・ 4-5-8		ナギナ形石部	縄文土部、石部	方形周溝墓	溝	土部	土部埋納土部	土部	高島溝
I	UR85-16	瓜			溝	後期中葉土部	後期部	後期部、初内環状	瓦部	瓦部・白磁
J	UR85-30				中期後葉土部					
S	UR90-12				中期後葉土部、石部					
W	UR92-28	破	石部製作址	土部	前期土部		土部	耕作溝		
X	UR93-2	西	ナギナ形石部、 内環状石部	中～後期土部(船 渡式歩)、石部	前期～後期前期土部、石部		土部・溝	耕作溝、土部埋納土部		
H	UR86-28				石部			耕作溝		
C	UR80-3				大溝	壱穴住居、竪立柱建物、土部 後期中葉・寺宮式土部、舟具部、 有孔円筒	後期部			
B	UR80-2	瓜			方形周溝墓					
F	UR88-43	破			石部	竪立柱建物、土部	後期部			
Q	UR89-1				後期中葉・寺宮式土部	後期部				
V	UR91-3	北			石部製作址	溝・井戸・砂隠・土部埋納				
T	UR90-13					後期後葉・注内式・寺宮式土部				
N M	UR85-39、 86-11	瓜 破 南	ナギナ形石部	石部	石部			耕作溝 後期部	瓦部	
G	UR83-3	瓜					壱穴住居	耕作溝、溝、土部		
R	UR89-26						壱穴住居、後期部	土部部、後期部、平瓦、 溝口		
L	UR85-41	破					壱穴住居、平瓦、土部部、 後期部	井戸	溝	
U	UR91-1	東					溝	土部部、瓦部、白磁、平瓦	瓦部土部、 瓦・平瓦	
H 21	UR83-17 -26	北					土部部・後期部			
O	UR88-5						土部部	土部	溝	
							土部部、後期部、 平瓦	土部	瓦部土部	
							土部部、後期部、 平瓦	土部	瓦部土部	
							壱穴住居 後期中葉土部	土部部、後期部、 土部部	土部	

集落域もしくは寺域

けるために調査次数名の表記を省略し、第Ⅰ章の図4および表1・2で用いた番号で示す。

1) 旧石器時代

瓜破台地上での人間活動の始まりは、後期旧石器時代までさかのぼる。瓜破遺跡西地区D・W地点ではナイフ形石器や角錐状石器が、東南地区M地点ではナイフ形石器が出土している。これらは遊離資料であるが、W地点では約6,300年前に降下したとされる横大路火山灰降下層準を確認し、この下位層から石器製作址に伴うと思われるサヌカイトのチップを数点採集した。中位段丘構成層の露出した台地上では、旧石器時代の遺構・遺物を検出することは困難と思われる。しかし、W地点のように台地の斜面もしくは埋没谷の低位段丘層もしくは沖積層下部層が残存している個所では、今後も旧石器時代の遺構・遺物の検出が期待できる。

2) 縄文時代

西地区のW地点で、縄文時代中期の北白川C式、後期の北白川上層ⅡないしⅢ式、晩期の船橋式、長原式に併行する時期の土器が出土し、周辺にこの時期の集落が存在していた可能性が高くなった。特に自然流路から船橋式に併行する土器がまとまって出土しており、これまで資料の少なかった時期の土器様相の一端を知ることができた。本資料中には、細かい製作手法のバリエーションがみられ、多くの場合、胎土の違いと共通していた。また、角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土の個体は少数派にとどまっており、これらの点で後続型式である長原式の状況とは大きく異なっている。長原式の段階になると、瓜破台地東斜面の長原遺跡側で遺物の出土が増加するようになる。この頃、瓜破台地西側の沖積平野部では堆積作用が活発化しており、A・N地点では水成層中から縄文時代晩期の土器片が出土している。

3) 弥生時代前期～古墳時代前期

瓜破台地西側の沖積平野部には、瓜破北遺跡と瓜破遺跡西地区南半に弥生時代の集落の大きなまとまりが見られる(図169)。

瓜破北遺跡には、UR6A層に相当する砂礫の堆積によって形成された微高地があり、この上に集落が営まれていた。UR6A層からは縄文時代晩期の土器が出土しており、またこの上位の古土壌であるUR6Z層は縄文時代晩期末および弥生時代前期の遺構・遺物を包含することから、集落が営まれる立地環境は縄文時代晩期～弥生時代前期の頃にはできあがっていたと判断できる。

微高地の南北両端には、大溝SD01・03が地形の傾斜に沿って開削されている(図167)。溝内埋土の下層から出土する遺物から、弥生時代中期の遺構と判断できるが、大溝で囲まれた内側からはこの時期の遺構はほとんど検出されておらず、現段階の資料ではこれらが集落域を囲む環濠として機能していた可能性は低い。

この地に本格的に集落が形成されたのは、弥生時代後期中葉から古墳時代前期(布留式新相)にかけての時期である。この頃には先の大溝は埋没しており、特に窪地として形状をとどめていた北側の

SD01には、弥生時代後期中葉の土器が大量に廃棄されていた。C・P・9・10・15地点で検出した遺構の分布を見ると、弥生時代後期中葉の遺構は微高地南半に、布留式新相の土器が出土する遺構は北半に偏っており、それぞれ南北長約60mの範囲内にまとまっている。このまとまりが一時期の集落を構成する単位であったと考えられ、土器型式からみて継続時期は比較的短期間である。北西側のQ地点では、弥生時代後期後葉～庄内式の遺物や遺構が検出されており、時期によって居住域が微高地を転々と移動していたようである。

布留式新相の時期の居住域の西側には、多数の土壇墓と方形周溝墓1基で構成される墓域が隣接しており、一つの集落単位内での階層分化の様子がよくわかる。方形周溝墓からは新代の方格規矩鏡および後漢代の内行花文鏡の破片が出土している。また、弥生時代後期中葉の居住域内からも前漢代の異体字銘帯鏡の破片が出土しており、複数時期にわたって鏡を保有する集団であったことがわかる。本集落に伴う生産域は未確認であるが、15地点南半でヒトの足跡が多数検出されており、微高地に近接した沖積平野部を生産域としていたのであろう。

一方、大和川河川敷で表採された資料から、瓜破遺跡西地区南半のまとまりは、弥生時代前期から後期まで継続する大規模な集落と考えられる[山本博1940・1941a・b]。この集落は、約1km北側に位置する瓜破北遺跡とは別個の微高地上に形成されていた。

集落の中心部と推定される範囲は、大和川により削平されているため詳細が不明であるが、周辺の調査によって集落の変遷をある程度知ることができる(図168)。まず弥生時代前期は、集落範囲の北部で土器が多く出土する地点があり(3・4地点)、その北東側では土壇墓が検出されている(11地点)。

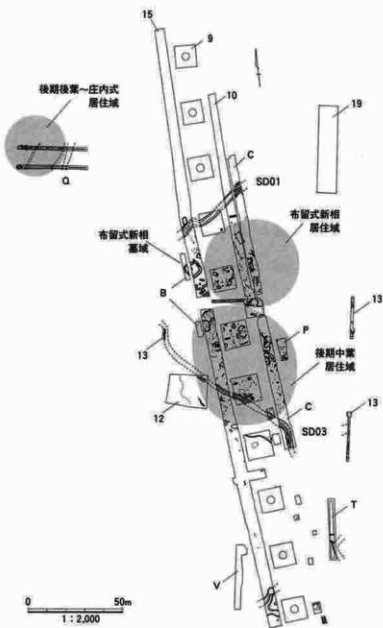


図167 瓜破北遺跡弥生～古墳時代前期の遺構分布

一方、南部の26・27地点では、中期前葉単純期の居住域および墓域が検出されており、大和川以南にも集落の範囲が広がっていることが判明した。また、北部(J地点)でも中期前葉の遺物がまともに見つかっている。J地点では中期中葉の遺物も比較的多く出土しており、11地点ではこの時期の方形周溝墓が検出されている。中期後葉～後期の状況は不明な点が多いが、後期初頭の時期に伴うと考えられる貨幣が1・8地点で出土している。馬野繁蔵氏採集資料[関西大学考古学研究室1987]や、山本博氏採集資料[山本1941a・b]から類推すると、後期には継続して集落が存在していたようである(註1)。

ここで瓜破遺跡西地区と瓜破北遺跡との関係について触れておきたい。馬野繁蔵氏採集資料には、瓜破北遺跡のものと同様する時期の土器が含まれており、両集落は同時に存在していた可能性がある。近接した位置にあることから、有機的な関係を想定することができよう。瓜破北遺跡の集落単位が比較的小規模であり、弥生時代後期前葉以前の明確な居住域が見つかっていないことから、後期中葉になって瓜破遺跡西地区から分岐した集落の可能性がある。

一方、台地東部でも弥生時代後期になって新たな集落が出現している(図169)。かつて1939年の瓜破遺跡建設時に大量の弥生土器が出土したことが伝えられているが[東住吉区役所1961]、近年の発掘調査により周辺の状況が徐々に判明しつつある。O地点では弥生時代後期中葉の堅穴住居を検出しており、また立会調査であるが、25地点では弥生時代後期後葉の土器が大量に出土している(図168)。これらは、「馬池谷」や「東谷」といった谷地形に面した台地の先端部に立地しており、目前の谷斜面を生産域とする小規模な集落であったと考えられる。また、25地点で出土した大半の土器は色調が赤褐色を呈するもので、周辺のO地点や北側の長原遺跡北地区DD84-3次調査地で出土した土器とは明らかに異なっている[大阪市文化財協会1999d]。前者はいわゆる段丘層の一次粘土を用いてつくったものと考えられ[森岡秀人1980]、集落付近の粘土を用いた小規模な自家生産が予想される。位置関係からみて、このような小集落は台地西側の西地区南半や瓜破北遺跡ではなく、長原遺跡など東方

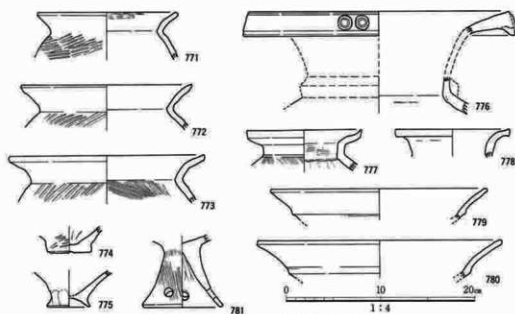


図168 UR91-14次調査地(25地点)出土遺物

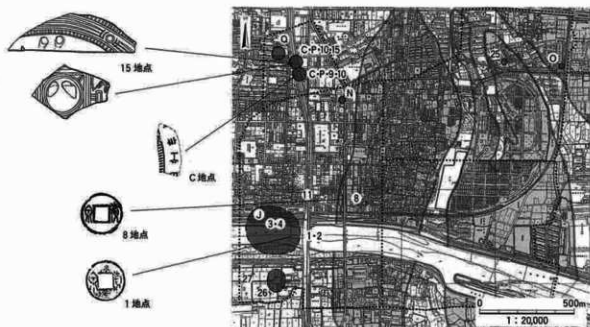


図169 瓜破・瓜破北遺跡弥生～古墳時代前期集落分布と出土青銅器

の沖積平野部に存在する後期の集落から分岐した可能性が高い。

4) 古墳時代中・後期

先にみた瓜破北遺跡の集落は布留式新相の段階で終焉し、それ以降は継続しない。一方、古墳時代中・後期の遺構・遺物はおもに台地の東半で散見されている。西地区北部のN地点では陶質土器が、東北地区のU地点ではTK73型式の初期須恵器が出土している。また、東北地区のH・21地点ではTK208型式の須恵器や土師器を伴う土壌が検出され、6地点では、TK23型式の須恵器や土師器が大量に出土している。さらに、谷地形に挟まれた台地の上には花塚山・ゴマ堂山といった古墳時代中期の方墳が現存しており、G地点およびM地点では川西編年V期の円筒埴輪が出土している。古墳時代中・後期の台地上での展開は、東側の長原遺跡でみられる集落・古墳群の形成・発展と連動するものだろう。

5) 飛鳥～平安時代中期

瓜破台地東半の「馬池谷」周辺には、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物群が分布する。詳細は次節で言及するが、これらは台地東縁部の水田開発を主導した集団の拠点と考えられる。また、台地の東半を中心とした広い範囲から古代の瓦が出土しており(図170)、この集団に係わる古代寺院が存在していたようである。現在、瓜破廃寺と成本廃寺の2つの寺院の推定地がある。1976年、東北地区の6地点で多量の瓦を含む東西溝が検出され、寺院の南限を画する溝と推定されたことから、この地が成本廃寺跡とされた[新修大阪市史編纂委員会1988]。付近のH・21地点やV地点からも瓦や埴輪が大量に出土しており、H・21地点ではこの時代の遺構の可能性がある柱列が検出されている。「馬池谷」および「東谷」に挟まれた台地の先端部分に寺院が存在していた可能性は高い。



図170 瓜破・瓜破北遺跡出土古代の瓦分布

ているほか[宮本佐知子・佐藤隆1996]、飛鳥時代の川原寺資料と同伴とされる埴当が採集されている[大阪市文化財協会1992b]。また、M地点では1点のみであるが、丸瓦片が難波Ⅲ新段階とみられる遺物とともに溝内から出土しており、当地域での瓦葺き建物の出現が7世紀後葉までさかのぼる可能性もある。

この時期の土地開発は、台地の東縁部だけでなく、西側の沖積平野部にも及んでいたようである。西地区のA地点では奈良時代の多数の須恵器をはじめ和同開珎が出土しており、付近に集落の存在が予想される。また、瓜破北遺跡のT地点では飛鳥時代の耕作溝が検出されている。

平安時代になると、遺跡内で遺構・遺物の分布が希薄となる。V地点では、9世紀前葉を前後する時期に、寺院建物の大がかりな解体や建替えを伺わせる瓦・埴当の大量廃棄が行われている。また「馬池谷」周辺では、10世紀末から11世紀初頭に小規模な集落が形成されており、東南地区のM地点で掘立柱建物および溝を、東北地区のO地点では建物の柱穴の可能性のある小穴を検出した。

6) 平安時代後期～室町時代

11世紀後半になると、台地上で新たな展開がみられる。東北地区のG地点では、11世紀後半から13世紀前半にかけての井戸群が検出されており、中国製の白磁や付近に瓦葺き建物が存在していたことを推測させる多量の瓦が出土している。また、14世紀後葉から15世紀前葉には堀状の溝が巡らされるようになり、この地に寺院を中心とした集落の拠点が形成されていた可能性が高い。時代は下るが、江戸時代にはこの地点を中高野街道が通っており、交通の要衝でもあったと考えられる。他の調査地点では、この時期の集落に係わる遺構が検出されていないことから、周辺には生産域が広がっていたのであろう。

(大庭)

これに対し、瓜破庵寺の実態は不明な点が多い。1964年の大阪府文化財地図では、瓜破庵園内を推定地としており[大阪府教育委員会1964]、1939年の瓜破庵園建設に際して古瓦が出土したとされている[新修大阪市史編纂委員会1988]。しかし、瓦が出土した具体的な地点は不明であり、後に発掘調査によって推定された成木庵寺との関係も不明瞭である。

なお、寺院の時期であるが、U地点で奈良時代末に位置づけられる長岡京7802B型式と同伴の蓮華文軒丸瓦や近江系の飛雲文軒平瓦が出土し

第2節 UR86-11次調査飛鳥時代建物群の検討

本節では、瓜破遺跡東南地区UR86-11次調査で検出した飛鳥時代の建物群について、1)出土遺物の編年の検討、2)建物群の変遷の復元、3)造営尺度について検討を行う。そして、4)で周辺地域のなかでの建物群の位置づけを行ったあと、5)ではこれらを総合して建物群の歴史的評価を行う。

1) 飛鳥時代須恵器・土師器の編年の位置づけ

i) はじめに

本調査地ではこれまでに報告したように1～5区の掘立柱建物や溝、土壇などの遺構をはじめ、第2層から飛鳥時代前葉から奈良時代前葉にかけての須恵器および土師器が出土している。これらの多くは難波Ⅲ古～新段階に属するものであるが、一部は難波Ⅳ古・新段階のものもあった。ここでは、1～5区の第2層および遺構から出土した須恵器と土師器の編年的な位置づけを行って、1区と3区の掘立柱建物群の変遷を考える際の一助としたい。図171・172は個々の型式的な特徴によって新旧を判断して分類したものである。分類名については、難波地域の編年と対比させ、その資料が主体となる段階名を便宜的に当てている。難波宮地域の土器編年に従ったのは、既述したように須恵器・土師器ともに各器形の形態や法量が一부를除いて前期難波宮に関連する遺構とされた水利施設周辺[大阪市文化財協会2000b]から出土したものに酷似しているからである。なお、文中では必要に応じて上記の編年以外にも都城編年[奈良国立文化財研究所1995]も併用した。

ii) 1～5区の第2層出土の須恵器と土師器

1区は飛鳥時代の掘立柱建物群が検出された地区であるが、建物群のある南部は旧地形が周辺に比べて高いこともあって第2層の残りは悪く、遺物の出土量も他の地区より少なかった。これに比べて旧地形が南から北に向かって低くなる1区の北部および3・5区では須恵器、土師器ともに出土量は多かった。しかし、須恵器に比べて土師器は破片が多いうえ、器表面の残りも悪いため、図化しえたものは少ない。したがって、ここではおもに須恵器について述べる。

第2層で確認された須恵器の器形としては杯H・杯G・杯B・杯A・無蓋高杯・平瓶・提瓶・横瓶・鉢・長頸壺・甕などがある。このうち量的に多いのは杯類で、杯H22点、同蓋19点、杯G12点、同蓋25点、杯B6点、同蓋6点、杯A1点を図示することができた。このほかに図化しなかった破片の中には器形の判明したものがあるが、これを含めても出土総量に占める各器形ごとの割合は上述したように杯H次いで杯Gが多く、杯Bはごく少量で、杯Aはわずか1点のみである。後述する遺構から出土した須恵器も杯類が過半数を占めており、杯Hならば杯Gが多い点も第2層と同様である。以下、須恵器杯類についてみる。

難波Ⅲ古段階とした杯H蓋は495・498・500・501・503・546・548・584の8点である。口径は9.4～12.4cmで、このうち口径がやや大きな546を含めてすべて天井部はヘラ切り後不調整である。杯Hは509・512～514・516・517・552～554・556の10点があり、口径は先行型式の可能性のある517

を除き8.8～10.8cmある。底部は517を除きすべてヘラ切り後不調整である。この段階の杯Hの立上がりとは後続段階のものと比較してわずかに長い。杯Gは口径10.5cm前後あり、口縁部が短く開くものとわずかに内傾して、体部がやや丸みをおびるものがある。杯G蓋はかえりが受け部から外に出ており、かえり径(以下、口径とする)も後続段階のものに比べて大きい。以上のうち杯Hは飛鳥Ⅰの川原寺西南部地区SD002[奈良国立文化財研究所1960]および山田寺下層出土のもの[奈良国立文化財研究所1990]に類似品がある。

難波Ⅲ中段階とした杯Hは504・505・507・508・510・511・515・518・593・594の10点である。口径は8.8～9.6cmで、立上がりとは前型式のものより短い、受け部からわずかに出る。底部はヘラ切り後不調整である。杯H蓋は493・494・496・497・499・502・547・550・551・585の10点がある。口径は9.4～11.2cmで、天井部はすべてヘラ切り後不調整である。なお、杯Hにはわずかながら天井部および底部の中央をヘラ切りのあとナデるものがあった。杯G蓋は519・520・524～527・529・531・532・559・560・563・565・569の13点があり、天井部の中央に宝珠あるいは乳頭状のつまみがつく。かえりは前段階に比べて短く、受け部と同じ高さのものが多い。口径は7.9cm～10.6cmで、大小がある。杯G身は534・539・540・567～569・571の7点がある。口径は9.2～11.0cmで、蓋と同様に大小がある。口縁部は底部から直立ぎみに伸びるものが多い。底部はヘラ切り後不調整であるが、571のようにヘラ切りのあと中央をナデるものもある。以上の杯類は飛鳥Ⅱの坂田寺下層SG100の資料中[奈良国立文化財研究所1973]に類似品がある。

難波Ⅲ新段階とした杯Hは506・555の2点であり、口径は9.1cmで、前型式より小さく、立上がりも受け部と同じく短くなる。底部はヘラ切り後不調整で厚い。杯H蓋は1点あるが、遺構出土のこの段階のものを含めると、前段階より口径は小さくなり、器高も低く、天井部がやや扁平になる。杯G蓋は521・528・530・557・558・561・562・564・586の9点があり、口径は8.1～9.9cmで、大小がある。かえりは受け部の高さより短く、口径の大きな蓋のかえりは受け部より内側にあり短い。天井部は全体に扁平になり、中央のつまみも乳頭状が目立つ。杯G身は前段階と形態はさほど変わらないが、小型のものは口径がわずかに小さくなり、底部も幾分厚い。なお、第2層出土の杯Bについては破片を含めて確認できなかったが、この段階に属する杯Bは後述する1区の土壌SK02から出土した449がある。口縁部は底部から直立して、端部近くでわずかに開く。体部は深く、底部の裏面に幅約1cmの高台がはがれた痕があり、後続する段階の高台より少し高いものと思われる。当該段階とした杯類は前段階に比べて少ないが、杯Hおよび杯Gは難波Ⅲ新段階の標識資料とされる住友銅吹所下層SD801出土のもの[大阪市文化財協会1998]に近く、飛鳥地域では、飛鳥Ⅱの末と考えられる水落遺跡漏刻跡の資料中[奈良国立文化財研究所1995]に類似品がある。ところで、難波宮の土器編年[佐藤隆2000]では難波Ⅲ新段階は飛鳥Ⅱから飛鳥Ⅲを含めて位置づけており、難波地域においては、現状では飛鳥Ⅲと認定しうる土器群を厳密には区分しがたいようである。本調査でもあえて難波Ⅲ新段階と後続する難波Ⅳ古段階の過渡期に位置づけられる可能性のあるものとして、杯G587・595、杯Bの高台575を図示したが、杯G587以外は破片であること、わずか3点と前後の段階に比べて個体数が格段に少ないため、ここでは難波Ⅲ新段階に含めておきたい。

難波Ⅳ古・新段階に相当する須恵器杯類は建物群の位置する1区から北に離れた3区および5区から出土しているが、その量は既述した1区の難波Ⅲ古～新段階としたものに比べて少ない。難波Ⅳ段階にとみた杯類には、杯A596・杯Aあるいは杯B蓋533・573・574・589・590・591、杯B576・579・597・598、同蓋588をはじめ、つまみ572や口径の大きな蓋592がある。杯Aはわずか1点ではあるが確認されており、この段階から登場するものと思われる。ここではかえりのみられない蓋533・589・591・592、扁平なつまみ572、高台が底部の外縁近くにある杯B576・597を難波Ⅳ新段階に相当するものとした。以上、1～5区の第2層から出土した須恵器杯類をみたが、このうち掘立柱建物群の位置する1区では難波Ⅲ古段階→難波Ⅲ中段階→難波Ⅲ新段階と一定量を保ちながら変遷することを追認した。これは後述するように1区の掘立柱建物群の存続期間ならび建物群の変遷小期をも示唆するものといえる。ところで、1区の掘立柱建物群の北方に位置する3区では須恵器杯類の型式は難波Ⅲ新段階の新相としたものを若干含む以外は、難波Ⅳ古・新段階に相当するものであったが、これも掘立柱建物群が1区から3区に移ったとする説[京嶋覚1992]を支持するものといえよう。

一方、第2層出土の土師器の中には難波Ⅲ古・中段階に相当するものとみられる杯C・甕・壺・高杯・移動式甕などが出土したが大半が細片であり、時期が判明したものは少ない。なお、1区から出土した移動式甕545は曲げ底で、掛口に同心円当具痕があり、焚口および把手の近くの体部の内面には補強のための突帯がある。これの近くから細片ながら羽釜が出土しており、ともに胎土は生駒西麓産であることから、本来は一組の炊飯具として用いられたもので、河内地域からの搬入品と考えられる。本調査で確認された移動式甕は本例のみで、羽釜もSD01から出土した332を含めてわずか2点である。難波Ⅲ中段階に属するものであろう。

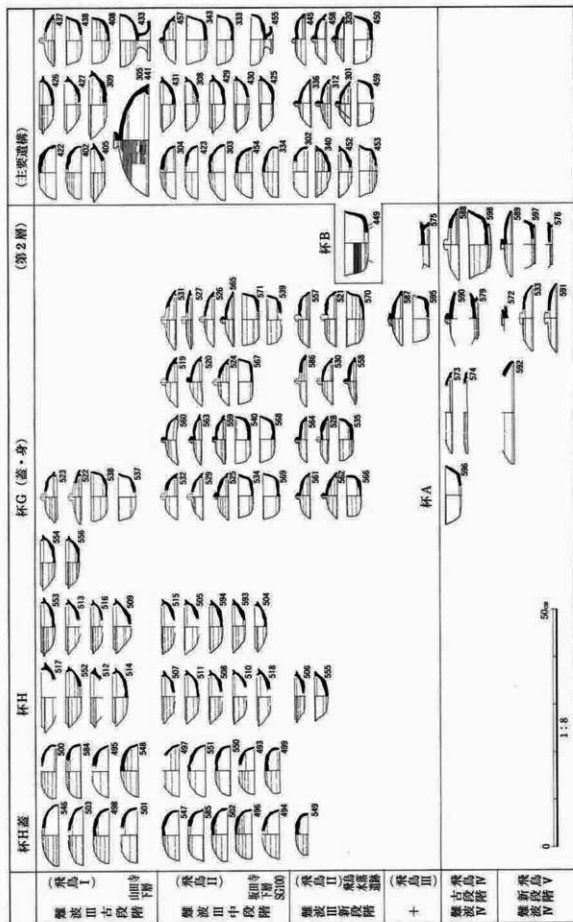
iii) 遺構出土の須恵器と土師器

1区の遺構から出土した須恵器と土師器のうち、掘立柱建物群に伴うもので、型式がある程度判明したものを以下に列挙する。

建物群関係ではSB06の柱掘形(杯G301・杯H302:難波Ⅲ新段階)、SB08の柱掘形(杯H303・304:難波Ⅲ中段階、鉢蓋305:難波Ⅲ古段階)、同柱抜き取り穴(土師器高杯306:難波Ⅲ中段階)、SB10柱掘形内(杯H308:難波Ⅲ中段階)、SB13の柱掘形内(杯H309:難波Ⅲ古段階)、SB14の柱掘形内(土師器杯C310:難波Ⅲ中段階)、SB15の柱掘形内(土師器杯C311:難波Ⅲ中段階)およびSA05の柱穴内(杯G312・313:難波Ⅲ新段階)などがある。これらは個々の建物の時期の上限あるいは下限を示すものとみられるが、ここでは柱掘形から出土したものは建物の上限を、柱の抜き取り穴から出土したものは建物の下限を示すものと考えたい。なお、図171に示したように建物群に伴うものは難波Ⅲ古～新段階の範疇におさまっており、この点は既述した1区の第2層から出土した遺物のあり方とも一致している。

次に溝および土壇から出土した須恵器・土師器の中で、1区の建物群に係わるものについて述べる。

SD01では須恵器杯H・杯G・甕および土師器甕・皿・羽釜などが出土した。このうち、須恵器は難波Ⅲ新段階とした杯G320以外は難波Ⅲ中段階に相当するもので、土師器も図示したものは難波Ⅲ中段階と思われる。SD03では須恵器杯H・杯G・無蓋高杯・碗・長頸壺をはじめ、土師器杯C・高



杯などが出土したが、須恵器は難波Ⅲ古段階とみられる少量の杯Hを含む以外は難波Ⅲ中段階および新段階に相当するものがほぼ同量であった。土師器は難波Ⅲ中段階とした杯C 1点以外は時期の判明したものは少ない。SD04・06は1区の建物群の北を画するSA05に平行する溝で、須恵器杯H・杯G・台付壺・鉢をはじめ、土師器杯C・高杯・甗などが出土している。須恵器杯H・杯Gは難波Ⅲ中段階および新段階に相当するものがほぼ同量あるが破片を含めるとやや前者が多い傾向にある。土師器は杯Cが比較的多く出土しており、口径の大きな364・365・374・375と小さな362・363・373がある。径高指数は前者が24・30・34前後、後者は27・29前後であった。このほか丸い底部から口縁部が開く杯372もある。高杯366・367は杯部の浅いものである。これらは難波Ⅲ中段階に相当するものであろうが、杯Cで体部の中程以下をヘラケズリ調整するものは難波Ⅲ中段階でもやや時期のさかのぼるものかもしれない。SD05では須恵器杯H・杯G・甗・鉢および土師器杯・杯C・皿・高杯が出土している。須恵器は難波Ⅲ古段階とみられる杯H379・380、難波Ⅲ新段階とした杯G382～384・387以外は難波Ⅲ中段階に相当

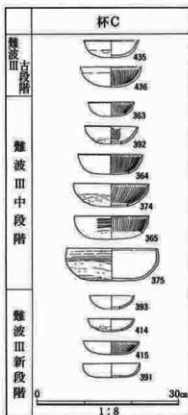


図172 主要遺構出土土師器杯C断面

するものと思われる。土師器杯C391～393、杯395、皿394、高杯396～398も難波Ⅲ中段階に相当するものであろう。以上、SD01・03～06の須恵器および土師器をみたが、それぞれ難波Ⅲ古段階のものを含むが、量的には難波Ⅲ中段階、次いで難波Ⅲ新段階に相当するものが多い傾向が窺われた。これらの溝は1区の建物群の区画溝あるいは土地区画のための溝として機能していたようであり、上限は出土遺物からみて難波Ⅲ古段階で、遺物量の比較的多い難波Ⅲ中段階を経て次の難波Ⅲ新段階が下限と考えられる。したがって、前述した溝の前後関係はSD01が最初に掘られたあと、SD03～05が引き続いて掘られた可能性が高く、これらは建物群が北方の3区に移ったとみなされる難波Ⅳ古段階には廃絶していたようである。次に土壌であるが、比較的多く出土した1区の土壌はすべて建物群の北側にあるため、建物群との関係や性格については明らかにしがたい。ただし、建物群の北東部の別区画内にあるSK01や区画の西側に位置するSK03～05では建物群の存続期間に当る難波Ⅲ古～新段階の須恵器や土師器が比較的多く出土している。SK01では難波Ⅲ古段階の須恵器杯H421・422・426～428、無蓋高杯433、長脚二段スカシ高杯の脚部432をはじめ、土師器杯C434～436と、難波Ⅲ中段階の須恵器杯H423・425・429～431、杯G424などが出土していることから、本土壌の上限は難波Ⅲ古段階で、下限は難波Ⅲ中段階と考えられる。しかし、難波Ⅲ中段階とした須恵器杯Hは前段階のものと比べて法量や形態に大きな差異が認められないことから、遺物の時期差はさほどないものと思われる。なお、土師器杯Cの径高指数は32～33であり、口径のわりに器高が高い。これに対してSK02では難波Ⅲ新段階に相当する須恵器杯H444、杯G445・446・450、杯B449、平瓶447・448、土師器高杯451などがまとめて出土した。これらの中には平瓶447や土師器高杯451

のような難波Ⅲ中段階のものとさほど変わらないものもあるが、前者は体部が扁平な平瓶448に共存したこと、後者は口縁端部が単に丸くおさめられていることから難波Ⅲ新段階とした。また、杯B449は難波Ⅲ新段階には杯Bが存在したことを示す希有な一例といえる。以上、1区と3区の建物群に係わるであろう溝や土壌から出土した須恵器および土師器について検討したが、これは既述したように、1～5区の第2層の須恵器や土師器のあり方に近いといえる。つまり、1区の建物群の周辺から出土した須恵器や土師器は難波Ⅲ古～新段階に相当するもので占められており、これとは対照的に3区の建物群の周辺では難波Ⅳ古～新段階とみられる須恵器が多かった。これは1区の建物群の北面を区画するSD01を境にして南側の建物群は難波Ⅲ古～新段階に造営されたものであり、3区の建物群は1区の建物群が廃絶したあと、難波Ⅳ古段階から同新段階にかけて造営されたことを示唆している。ところで、3区に北接するNG84-24地区では、難波Ⅳ古～新段階の須恵器や土師器が出土した土壌SK02や井戸SE01が検出されており、ともに調査地域における飛鳥時代後葉の土器編年の標識資料として報告されている[京嶋覚1992]。SE01・SK02の資料は3区の建物群の時期を決めるうえで参考になるので、以下に難波宮地域の土器編年と対比しておきたい。

SE01は井戸側の構造が削貫いた丸太材を3枚組み合わせた「丸太分割削貫き井戸」と呼ばれるもので、掘形から土師器杯C1点と須恵器短頸壺が1点出土したほか、井戸側内から土師器杯Cが4点、甕31点、小型の壺1点、高杯3点(内ミニチュア1点)をはじめ、須恵器杯B蓋1点、杯G1点、長頸壺4点、短頸壺2点、提振1点、平瓶12点(内ミニチュア1点)などが出土している[大阪市文化財協会1992b・1994]。ここでは個々の遺物については詳述しないが、井戸側内から出土した土師器杯Cは径高指数が25～26で、掘形から出土した径高指数34の杯Cより新しく位置づけている[京嶋1992]。須恵器杯Gは体部が丸みをもつもので、底部はヘラ切りのあとナデ調整している。杯B蓋は天井部が平坦で、中央に宝珠つまみがある。須恵器長頸壺は最大径が体部の中程にあり、やや扁平なものと球形に近いものがある。平瓶は大小があり、体部が球形なものの1点を除いて扁平である。報告書ではこれらの時期について、飛鳥Ⅲの範疇に含まれるもので、飛鳥Ⅳに下るものは非常に少ないとされている[京嶋1992]。SE01の資料は須恵器の杯類がわずか2点であり、セット関係に偏りが認められるが、ここでは、掘形から出土した杯Cと須恵器短頸壺を難波Ⅲ中～新段階に、井戸側内の須恵器と土師器については難波Ⅳ古段階の標識資料とされる森の宮遺跡MR94-7次調査のSD701から出土した資料[大阪市文化財協会1996b]に相当するものとみておきたい。なお、SE01の西側で検出されたSK02でも飛鳥時代の須恵器や土師器がまとまって出土しており、SE01同様に3区の建物群の存続時期を推定するうえで参考になる[大阪市文化財協会1992b]。SK02では須恵器が杯H1点、杯B2点、杯B蓋2点、杯C1点、杯G8点、杯G蓋4点、杯F1点、杯F蓋1点のほか、甕・長頸壺・平瓶が各1点あり、土師器は杯C4点、鉢3点、甕2点、羽釜1点などが出土している。このうち、杯Gは蓋とともに口径に大小があり、身は形態が後出する杯Aに類似するものを含む。杯B蓋は短いかえりがあり、身の高台は外傾している。杯Fの蓋にはかえりがない。土師器杯Cは大小があり、径高指数は19、23、28、32である。これらの時期は、須恵器杯B・杯Fを含むことや土師器杯Cの法量や形態からみて、上述したSE01の資料と同様に難波Ⅳ古段階に属するものとみておきたい。このようにSE01・SK02

の資料は3区の建物群が遅くとも難波Ⅳ古段階には造営されていたことを示唆しているが、SE01のように一部の遺構については難波Ⅳ新段階までに廃絶したものも存在したようである。

iv) まとめにかえて

以上、第2層および遺構から出土した須恵器および土師器について、難波宮地域の土器編年に準拠しながら編年的な位置づけを行った。これは本書で報告してきたように、1区および3区の建物群の造営時期のみならず当地域の土地利用の有様や歴史的な変遷過程を復元する際の基礎的な作業の一つといえる。これまでも調査地域の飛鳥時代の土器編年やこれに基づいた遺構の変遷については京嶋覚ほかの都城編年を基準にした考察がある[京嶋覚1992、高橋工2000a・b]。今回は難波宮地域の土器編年を基準にして作業を進めたが、先に提示されている結果と大きな齟齬は生じていない。暦年代については、難波Ⅲ古段階を7世紀前葉、難波Ⅲ中段階を7世紀中葉、難波Ⅲ新段階を7世紀中～後葉、難波Ⅳ古段階を7世紀後葉～末、難波Ⅲ新段階を7世紀末～8世紀初頭とする難波宮地域の年代観に従っておきたい[佐藤2000]。ただし、既述したように難波宮の土器編年と都城編年を対比すると、難波Ⅲ新段階と難波Ⅳ古段階の過渡期に飛鳥Ⅲが位置づけられており、この点が両編年を基準とする際に留意する必要がある。本報告では図171に示したように飛鳥Ⅱの新相と飛鳥Ⅲの区分を行っていないが、この点は難波宮地域の土器編年と都城編年とのクロスチェックを含めた今後の課題となった。

(田中)

2) 1区建物群の変遷

建物群の変遷については、1区の建物群を3期に区分する復元案が、調査を担当した南秀雄によって提示されている[南秀雄1987]。これは遺構の切合いや方位をもとに推定されたものであり、一定の説得力をもつが、整理途中での見解であること、その後の周辺の調査で資料が増加したことから、一部追加・修正が必要である。また、3区で検出した建物群は、出土遺物から1区の建物群に後続する時期のものであることは本節1)でみたとおりである。ここでは1区を中心とした区域の建物群の変遷を、周辺の調査成果と合わせて再度検討する。なお、UR86-11次以外の調査で確認し、今回検討に加えた建物については、便宜的にSB24～30の遺構番号を新たに付した(図174)。

i) 建物構成と敷地区分

検出した建物はすべて掘立柱建物で、合計27棟ある。これらは規模や構造から以下の①～④のグループに分けることができる(図173)。

①：平面形が正方形に近く、面積が25㎡以下の桁行3間、梁行2～3間の総柱建物である。SB04・06・08・14～16・18・19の8棟がある。側柱に比べて床束が小さいものが多く、側柱の掘形が布掘りのSB08・15は側柱と床束の規模がほぼ同じである。またSB06は、側柱の柱穴が極端に大きくかつ深い点で、ほかとは大きく異なる。

②：面積が①とほぼ同じで、梁行が2間、桁行が2～3間の側柱建物である。平面形は①と異なり、桁行方向がやや長い長方形である。SB03・20・29の3棟がある。SB20の南隣にあるSB21も、位置関係からこれと同じ形態の可能性はある。

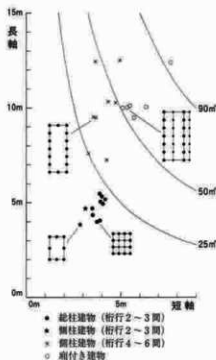


図173 建物の規模と構造

これらの建物群は、溝で区画された北側の区域と、それ以南の建物が密集する区域に分かれている。②や③のうち規模の小さい建物は北側の区域にあり、付近には畝の畝間状の溝や土壌が多数存在する。この区域は、畝間状の溝が存在することから園地的な空間、または包含層からではあるが移動式竈や羽釜が出土したり、遺構内から出土する土師器甕の割合が高いことなどから、厨家などの施設があった可能性もある[南1987]。一方、③のうち桁行が6間のものや①・④はすべて南側の区域にあり、居住や管理に係わる区域と考えられる。特に、倉庫と考えられる①は、SB06を除いてその西半に集中しており、柱筋をそろえて南北に2棟セットで並ぶものが多い。また、建物群の外側にある東西・南北方向の溝は、出土遺物からみて建物のいくつかとは時期的に併行することから、建物群を中心に広い範囲の外郭を区画していた可能性がある。東側の南北溝は北端で西に折れ曲がっており、南端でも西に枝分かれしている。これによって区画された範囲は南北150m、東西80mに及ぶ。

ii) 方位

建物の方位はN0.1°WからN19.3°Wの範囲におさまり、おおむね南北を指向している(図174)。細かくみると、多くの建物がN10°W付近に集中するが、これから東西に若干触れるものも存在している。また、コの字形に巡る櫓も、各辺のSA04～06が少しずつずれており、特にSA06は途中でその方向を変えている。櫓がきれいなコの字形にならない要因については、内側に方位の異なる建物が混在することから、櫓の築造がこれらに規制されたと考えるのが妥当であろう。これは、建物の方位の違いとともに、遺構の変遷を考える上での鍵となる。櫓と建物との方位の関係をみると、SA05およびSA06北半は、建物の多くが集中する方位と一致するが、SA04およびSA06南半はこれより若干東に振れている。この点を考慮して、建物の方位を図173・174のようにA～Cの3群に区分する。

A群：N13.9°WからN19.3°Wの範囲で、櫓とは大きくずれる。SB09・18～20・30の5棟がある。

③：面積が30㎡以上、梁行が2間、桁行が4～6間の側柱建物である。SB05・07・09・11・12・25・26・30の8棟がある。特に、SB07・09・11・12・25・26は桁行が6間と細長く、面積が40㎡を超えるものもある。

④：庇付きの建物で、面積は50㎡以上と大型である。一面庇のSB10・22・24・28、二面庇のSB13、四面庇のSB17の6棟がある。SB10・17・24は床束をもつ。一面庇のSB10・22・28がほぼ同じ大きさであり、四面庇のSB17は面積が95㎡に達するもので、建物群中最大規模を有する。

以上の掘立柱建物は、規模や構造からみて、①・②が収納用建物である倉庫、③・④がそれ以外の建物、例えば住居や管理棟などの機能が想定されよう。特に④は庇を付設することから格式の高い建物であり、建物群の中心的な主屋であろう。また、SB06は通常の倉庫とは異なる機能を考える必要があるかもしれない。

B群：N8.8°WからN12°Wの範囲で、SA05およびSA06北半とそろろう。SB03～06・10・11・13・14・16・21・22・27～29の14棟とともとも多い。

C群：N0.1°WからN8.2°Wの範囲で、SA04およびSA06南半と同一方向かこれに近い。SB07・08・12・15・17・24～26の8棟が該当する。

iii) 遺構の変遷

遺構の変遷を、遺構の切合い、方位、建物同士の位置関係、遺物の年代などから復元する。まず、復元の根拠を述べつつ変遷の大きな流れを押さえていく。

8個所で切り合いによる遺構の前後関係が判明しており、SB22→SA05、SB22→SB06、SB09→SB10、SB09→SB16、SB11→SB12、SB14→SB15→SA04、SB19→SB20のようになる。最大3基の遺構が重複しており、建物・櫓に少なくとも2回の建替えがあったことがわかる。

このように、南側の区域では複数時期の遺構が重複・混在しているが、位置関係から同時期の遺構群であることが明らかとなり、2群抽出することができる。一つは、櫓SA04～06とそのほぼ中心に位置するSB17である。もう一つは、コの字形に整然と並んだSB04・10・11・16・22・27・28である。

ともに主屋と考えられる庇付き建物を含み、またSA05がSB22を切っていることから、異なる時期の建物配置と判断できる。

ここで問題となるのは、建物群中最大規模を有するSB17がいつ創建されたかという点である。SB17はほかの遺構と重複しておらず、また出土遺物から時期を決めることができないため、周辺建物との関係を方位から類推する。まず、SB17の方位はC群に属し、これと方位をそろえる建物は、西側に位置するSB08のみである。位置関係からみて、これらは同時存在していた可能性が高い。SB08の北

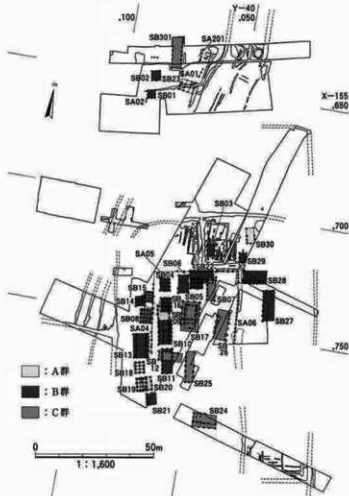


図174 建物の配置と方位

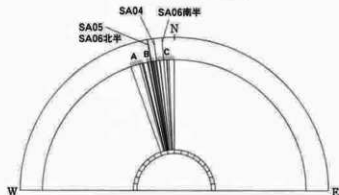


図175 建物の方位

隣にある布掘りのSB15も同時期のものであろう。SB15はSA04に切られており、SB08もこれと重複している。したがって、櫓が巡らされる以前にSB17とSB08・15とが共存する時期があったものと思われる。では、コの字形に並ぶ建物群との関係はどうか。これらの建物は方位がB群で整然と並んでいることから、計画的に設計・建造された同時期のものであったと考えられる。SB17はこれらと方位がそろわない。また、SB17とSB08が相互を意識して配置されていることから、その間にあり両者を連るSB09・16は存在していなかった可能性が高い。すなわち、建物の配置がコの字形をとるように設計・建造された時点で、SB17は存在していなかったと判断できる。

以上のことから、SB17はコの字形に整然と並ぶ建物群より後に建てられ、一定期間SB08・15などと共存したのち、最後に櫓がこれを囲むという変遷が想定できる。また、方位がA群のSB09はSB16およびSB10に切られており、建物がコの字形の配列をとる以前にも方位を連る建物群が存在していたようである。中心的な建物の変遷と建物配置の画期に注目し、同時存在していた可能性のある建物群を第1～3段階に大別し、第3段階をa・bに細別する。

第1段階：当地に建物群が出現する段階で、方位はA群を主体とする。該当する建物の柱の掘形からはほとんど遺物が出土していないが、本段階の時期を示すものとして、SB03の掘形から難波Ⅲ古段階に位置づけられる須恵器が出土している。ほかにもSB30の北東隣にある土壇や、SK03、SD17・18からも難波Ⅲ古段階に位置づけられる遺物が出土している。実年代は7世紀前葉と考えられる。

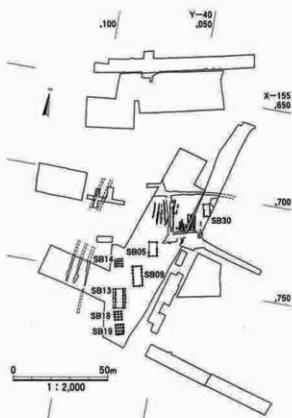
この段階には、コの字形の建物配置はとっておらず、南側区域の西半に二面庇のSB13を主屋とした複数の南北棟建物で一つの群が構成されている。SB13の南側には2棟の総柱建物SB18・19が柱筋をそろえて並び、また北側には規模の異なる側柱建物SB05・09と総柱建物SB14がそれぞれの梁行方向の柱筋をそろえて市松状に並んでいる。

北側区域のSB30も、方位や付近の土壇から出土した遺物の年代観からこの段階のものと考えられる。西側には欽状の溝群があり、SB30は畠地に伴う付属施設であろうか。この区域を囲む溝も存在していたと想定する。

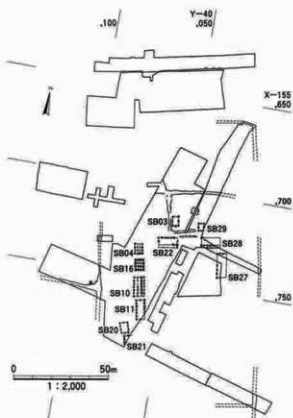
第2段階：南側の区域に建物がコの字形に整然と並ぶ段階である。SB10の柱の掘形から難波Ⅲ中段階に位置づけられる須恵器が出土しており、SK01からもこの時期の遺物がまとめて出土している。また、建物周囲の包含層からは難波Ⅲ中段階の遺物をもっとも多く出土していることから、第2段階と次の第3 a 段階は建物群の最盛期と判断できる。実年代は7世紀中葉と考えられる。

建物の方位はほぼB群に統一される。庇付き建物は、ほぼ同規模のものが3棟あり、コの字形に並んだ北辺に東西棟のSB22・28が、西辺に南北棟のSB10が位置する。ともにコの字形に囲んだ内側に庇を向けている。この空間には第2段階に属する建物は存在しないため、広場であった可能性がある。なお、SB27は東側に庇をもつ建物の可能性があるが、調査では明確な証拠が得られておらず、ここでは言及しない。倉庫はSB10の北側にこれと並列するSB04・16があり、南西側のSB20・21もこの段階に含めた。

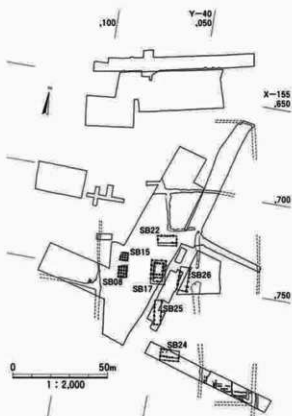
北側の区域を囲む溝では難波Ⅲ中段階の遺物をもっとも多く出土しており、方位がB群のSB03・29をこの段階に含めた。また、建物群の東西両側にある南北溝からも、難波Ⅲ中段階の遺物が多く出



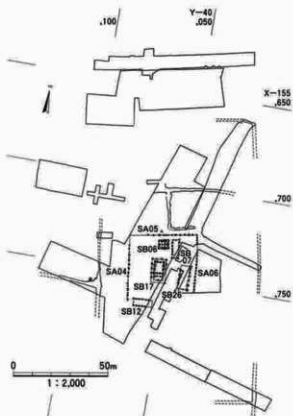
第1段階(7世紀前葉)



第2段階(7世紀中葉)



第3 a 段階(7世紀中葉)



第3 b 段階(7世紀後葉)

図176 飛鳥時代の遺構変遷

土しており、コの字形に並んだ建物の東西両端の柱筋との距離が約17mとほぼ等しいことから、この段階で建物群の外郭に溝が巡るようである。

第3 a 段階：四面に庇をもつ大型の南北棟建物SB17が建てられた段階である。SB08およびSB15の布掘りから難波Ⅲ中段階に位置づけられる須恵器・土師器が、SB26の柱穴から難波Ⅲ中段階に位置づけられる須恵器がそれぞれ出土している。したがって実年代は7世紀中葉と考えられる。

この段階に存在した建物は、SB17と方位がそろった西側のSB08・15、およびSB17の東辺と柱筋をそろえるSB24・25が想定される。また、次の段階に巡らされる櫓SA06の方向に影響を与えた可能性のあるSB26や、SA05がその位置を踏襲するSB22もこの段階に存在していたのであろう。さらに、SA06と平行しこれに切られる南北溝も、この段階に敷地を画する目的で掘られた可能性がある。第3 a 段階は、SB17が建てられることによりそれまでの建物の配置形態が崩れ、かつ前段階の建物のいくつかは残存していることから、過渡的な段階ととらえられる。SB17の周辺にはこれと切合う建物がいないことから、SB17は第2段階に広場であった空間に建てられたものと考えられる。

第3 b 段階：SB17を中心に櫓が巡る段階である。SB06の柱の掘形、SA05の柱穴から難波Ⅲ新段階の須恵器が出土しており、実年代は7世紀後葉に下ると考えられる。

この段階の方位はC群を主体としているが、櫓北辺SA05および東辺SA06の北半は前段階のSB22を踏襲するB群であり、近接するSB06・07もこれにそろった。一方、櫓西辺のSA04は第3 a 段階のSB08・15の東辺を踏襲しており、東辺SA06の南半はSB26の方向に規制されていたと考えられる。この段階の大きな特徴として、櫓で囲まれた一辺約35mの正方形の範囲の内側に建物が集中することがあげられ、3棟の細長い側柱建物と1棟の総柱建物が、SB17を囲むように配置されている。総柱建物はSB17の北側に位置するSB06のみであり、通常の倉庫は櫓の内側には存在しない。

北側区域を囲む溝からは、難波Ⅲ新段階の遺物も出土しており、溝はこの段階まで機能していたようであるが、内部に建物が存在したかどうかは不明である。建物群内、および周辺から難波Ⅲ新段階以降の遺物はほとんど出土していないため、第3 b 段階で建物群は廃絶し、北側の3区へ移動したと判断される。

iv) 建物群とその変遷の特徴

今回検討した建物群は、機能の異なる複数の施設が敷地区分されて存在する点、櫓や溝で区画される点、主屋が庇を有するという格式の高い大型建物である点、出土遺物に杯などの食器類が極めて多い点などからみて、一般の集落とは考えがたく、支配者層の居宅もしくは公的な施設といった地域の拠点であった可能性が高い。

建物群は、実年代でいう7世紀前葉～後葉の間に4段階の変遷をたどり、その配置が短期間で大きく変化する。7世紀前葉には、庇付き建物1棟、倉庫2棟と側柱建物2棟からなる一群と、北側の付属施設によって建物群が構成されている。7世紀中葉(第2段階)になると、前段階の敷地を踏襲しつつその配置を大きく変える。建物は方位をそろえてコの字形に整然と並び、また庇付き建物が東西棟2棟、南北棟1棟の合計3棟と増加し、ともに広場側に庇を向けるという計画的な配置をとるようになる。さらに、建物群を含む広い範囲が溝で区画されていた可能性がある。このようなコの字形の配

置は、7世紀代には政権中枢の宮殿などに採用されており、7世紀末から8世紀初頭にかけて全国的に出現する郡衙遺構に多く認められるとされる[山中敏史1986]。瓜破遺跡の第2段階の建物群は、郡衙例に先行するものとして注目される。

一方、第3 a・b段階になると、前時期の建物を残しつつ、第2段階のコの字形の配置から、四面底をもつ大型建物SB17を中心とした建物配置へと変化する。7世紀後葉(第3 b段階)には、SB17の周囲に櫓が巡らされ、そのほかの建物も櫓の内側に集まり、大型の柱穴をもつ総柱のSB06と細長い側柱建物3棟がSB17を囲むようになる。中心建物の顕在化が進行するとともに、内部が特殊な空間となったことが伺える。さらに、後述するように、この時期には倉庫の管理形態にも変化があったようである。畿内の6世紀末～7世紀後葉の首長居館とされる例には、櫓や塼で建物群を囲繞する場合が多く認められ、その閉鎖的・防衛的空間を首長の家政機関とする見解がある[広瀬1989]。本例も、第2段階のような計画性は認められないが、この地区の建物群がより隔絶化・特殊化していったことがうかがえる。

このような建物配置と類似したものに、京都府城陽市正道遺跡の官衙Ⅰ期の資料がある[城陽市教育委員会1993]。正道遺跡官衙Ⅰ期の時期は7世紀後葉とされ、南北棟の大型建物を中心として周囲に櫓と建物群がコの字形に並んでいる。櫓で囲まれた範囲や倉庫は瓜破遺跡の約2倍と大規模である。櫓とコの字形に並ぶ建物群には重複が認められることから、瓜破遺跡同様、時期差がある可能性がある。規模に大きな違いがあるが、畿内の他遺跡でも、ほぼ同時期に共通した構造をもつ例が存在していることは、これが瓜破遺跡に限った特異な現象ではないことを示している。なお、正道遺跡官衙Ⅰ期の建物群の性格について、報告者は「ミヤケ」施設の可能性を想定している。

ここで、建物群に付随する倉庫の所有・管理形態について言及しておきたい。倉庫と考えられる総柱建物や小型の側柱建物は建物群の西半に集中しており、南北に並列する規模の若干異なる2棟のまとまりが合計4単位認められる。これらの単位ごとにそれぞれ方位が異なっていることから、時期差をもって順次建造されていったようである。第1段階と第3 a段階には2棟、第2段階には4棟の倉庫がそれぞれ存在していたと推定した。第2段階としたSB20・21は方位がB群とA群と異なることから、前段階からの過渡的なものの可能性がある。したがって、第1～3 a段階までの間、基本的に2棟を単位とした倉庫が一時期に存在していたと考えられる。これらの倉庫には、4)で後述するように稲が収納されていた可能性が高い。規模は全て25㎡以下であり、側柱と床束の特徴からみて、上部構造は植木久のいう「通し柱・束柱構造」の「板倉」が想定される[植木久1998]。一般的にこのような構造の倉庫には、重量の軽い穎稲が収納されたと推定されており、一時期の数からみても郡衙正倉にみるような大量の収穫物を管理するあり方とは異なるようである。このような特徴を山中敏史らは豪族の居宅に伴う倉庫のあり方としている[山中敏史・石毛彩子1998]。また、第3 b段階には、柱穴の規模が極端に大きいSB06を除いて、小型の総柱建物が櫓の内側に存在せず、この段階に倉庫の管理形態に変化が起こった可能性がある。未確認であるが、櫓の外側に倉庫のみで構成される建物群の存在も想定しておく必要があろう。

(大庭)

3) 飛鳥時代建物の造営尺度について

i) はじめに

以下では試論として、今回検出した飛鳥時代建物の造営尺度(具体的には、基準となる尺度)について検討を加える。一般に遺跡で検出された建物跡からその構造や意匠を復原することには非常に困難が伴う。それに対して、造営手法ひいては意匠・計画にも通じる尺度の検討[宮本長二郎1974]は、遺跡から検出される柱穴(および柱痕跡)によってある程度は可能である。よってここでは、建物群の実体を明らかにする作業のひとつの足がかりとして、尺度の検討、具体的には基準尺度の推定を行いたいと思う。飛鳥時代の寺院建築や官衙建築の研究に対して、それらに認定されていない建物や住居に関する研究は決して進展しているとはいえない。実際の建物はもとより文献などの資料も知られていないこれらの研究において、発掘調査で得られる資料の果たす役割は非常に大きいと思われる。よってそうした意味でも、今回の検討はある種の意義を持つものともいえる。

遺跡から検出される柱穴から尺度を検討する場合には注意しなければならない点が多い。ほとんどの場合、柱は抜き取られているか土壌化しており、柱痕跡が当時の柱の状況をそのまま表現しているという保証はない。また特に古代の柱穴には柱筋が通りにくいものも多く、柱の上部と下部とで異なった柱間寸法をとる可能性も存在する。尺度といったミリ単位の誤差をもなおざりにできない分野において、これらの点は重要な問題を含むものであるが、今回は試論である性格上、遺構としての柱穴が当時の状況を表しているものと仮定して検討を行うことにしたい。

古代の度量衡においては、法定尺として大宝令の度量衡規制による大尺・小尺が知られている[小泉製装勝1977b]。建物の造営尺度はそれ以前から存在していたと考えられるが[小泉製装勝1977a]、尺度の制度・実体については不明な点が多い。そのような中で、遺構・遺跡からある程度の推測がなされてきている。高麗尺(35.6cm)は飛鳥寺以来の伝統をもつものとされており、法隆寺金堂・塔もこの尺度によって造営されていたらしいことが判明している[浅野清1988]。公的な色合いの強い高麗尺に対して、各地域では独自に存在していた尺度を用いていた可能性も指摘されている[宮本長二郎1974、伊東太作1988]。例えば、前期難波宮の遺構は一尺=29.2cmを基準として建物が造営されていたことが指摘されており、建物配置については一尺=35cm程度を基準としてなされていたらしい[中尾芳治1986]。この尺度はこれまでに知られている尺度(高麗尺や唐尺)とは少し異なっており、難波宮造営において独自の尺度を用いていた可能性を示唆するものである。

次に、古代の寺院や官衙建築では完数制が用いられていたことが指摘されている。平城宮や前期・後期難波宮などの主要殿舎では柱間を10尺に計画したものが知られており、建物配置においても10尺方眼地割が確認されている[宮本長二郎1974、中尾芳治1986]。また平城宮建物には掘立柱建物が多く含まれており、平面寸法が1尺もしくは5寸の整数倍で計画されていることが指摘されている。前期難波宮はすべて掘立柱建物であることから完数制のもっとも古い遺構の一つと考えられている[宮本長二郎1974]。今回検出した建物群は前期難波宮と前後する時期のものであり、地理的にも比較的近いところに存在する。以上の事柄を鑑みた場合、今回検出した建物群の尺度を検討するにあたり、次の2点を想定することにした。

- ・建物およびその配置計画に造営尺度が存在するという事。
- ・平面寸法が一尺もしくは五寸の整数倍で計画されていること。

次に、尺度を検討する際の留意点を以下に記す。

- ・身舎桁・梁行柱間総長を第1義的に用い、各柱間寸法を第2義的に用いることにする。
- ・柱痕跡の判明しないものについては、柱筋の通りからおよその柱位置を推定し、その寸法を用いることにする。
- ・柱間寸法は、すべて心々寸法による。

- ・尺度の測定には現地での測定した値、もしくは1/20の図面で得られた値を基本として用いる(註2)。

ii) 掘立柱建物群における尺度の検討

今回検出した建物群には大きく二つのグループが存在する。一つは梁行・桁行が2～3間のもので、総柱建物と思われるものが多く含まれる。もう一つは梁行が2～3間、桁行が4間以上のもので、ほとんどが側柱のみの掘立柱建物である(一部庇が付く)。ただ、すべての建物において柱穴や柱痕跡が明瞭になってはおらず、よって四周(側柱)すべてに柱穴および柱痕跡が明瞭(推定可能)なもの、隅柱の柱および柱痕跡が明瞭(推定可能)なものを中心に検討する(全13棟)。

今回の建物では官衙建築のように柱間が10尺になるといった事柄が想定しづらく(そうすると一尺あたりの寸法が0.2mを切るものがほとんどとなる)、柱間寸法も一定していない。よって推定方法としては、まず桁行・梁行柱間総長および柱間寸法から有効と思われる数値を抽出し、それらの公約数(基準尺候補)を求めた上で、遺構に当てはめられた場合に最も完数値となりうる基準尺を求めることにする。求められる基準尺の有効数値としては、一尺=0.23～0.30mの範囲を想定することにする(註3)。

建物群は梁行柱間総長の寸法によっていくつかのグループに分けることができ、これらをA～C類とする。A類は梁行が4.2m前後の値をとるもの(SB05・06・10・11・13)、B類は梁行が4.0m前後の値をとるもの(SB08・14・16・19、すべて3間×3間の総柱建物)、C類はその他のもの(SB09・15・18・20)である。以下各々について検討する。

まずA類であるが、梁行柱間では2.1m×2間が一つの基準になるとと思われる。桁行柱間総長ではSB10・11・13が同じような寸法(10.13～10.20m)をとり、桁行柱間の数(6間)も等しいことから、同規模・同形式の建物とみて良さそうである。そうするとSB13の梁行柱間は元来2間であった可能性が高い。ここでは平均値10.17mを挙げる。桁行各柱間は様々な値をとるが、有効値としては1.55、1.70、1.83mが挙げられる(SB10は桁行柱間が1.70mで等間隔)。そうすると、およそ一尺=0.260m前後で完数値を得ることができそうである。この数値はSB05・06についても適用できそうである。

次にB類であるが、SB08・16・19は柱間も等しく、ほぼ同規模(桁行5m前後×梁行4m前後)と考えられる。SB16の柱痕跡が最も明瞭で、ここではその桁行総長5.23m、梁行総長4.05mを挙げる。各柱間寸法では梁行1.3m前後、桁行1.7m前後が有効値として挙げられる。そうすると、一尺=0.260m前後で完数値を得ることができそうである。この数値はSB14においても適用できそうである。

最後にC類であるが、A、B類で求められた一尺=0.260mを適用してみると、おおむね良好な数値を得ることができそうである。ただ、SB20はこの数値で復元した梁行寸法が2間で14.5尺となり、

表11 1区の建物柱寸法

建物種別			実測値					復原値(一尺=0.260m)	
形式	遺構名	測定箇所	m	曲尺(0.303m)	高麗尺(0.356m)	唐大尺(0.297m)	前期測量官尺(0.292m)	尺数	m
銅柱 4×2間	SB05	桁行総長	7.32	24.16	20.56	24.65	25.07	28	7.28
		桁行柱間(一部)	1.83					7	1.82
		梁行総長(平均)	4.20	13.86	11.80	14.14	14.38	16	4.16
		梁行柱間(平均)	2.10					8	2.08
総柱 3×2間	SB06	桁行総長(復原)	4.77	15.74	13.40	16.06	16.34	18.5	4.81
		桁行柱間(平均)	1.59					6	1.56
		梁行総長(復原)	4.14	13.66	11.63	13.94	14.18	16	4.16
		梁行柱間(平均)	2.07					8	2.08
総柱 3×3間	SB08	桁行総長(復原)	5.17	17.06	14.52	17.41	17.71	20	5.20
		桁行柱間(一部)	1.70					6.5	1.69
		梁行総長(復原)	3.90	12.87	10.96	13.13	13.36	15	3.90
		梁行柱間(平均)	1.30					5	1.30
銅柱 6×3間	SB09	桁行総長(平均)	10.34	34.13	29.04	34.81	35.41	29	10.35
		桁行柱間(平均)	1.70					6.5	1.69
		梁行総長	4.64	15.31	13.03	15.62	15.89	13	4.64
		梁行柱間(平均)	1.55					6	1.56
総柱 6×2間	SB10	桁行総長	10.20	33.66	28.65	34.34	34.93	39	10.14
		桁行柱間	1.70					6.5	1.69
		梁行総長(復原)	4.20	13.86	11.80	14.14	14.38	16	4.16
		梁行柱間(平均)	2.10					8	2.08
銅柱 6×2間	SB11	桁行総長	10.13	33.43	28.46	34.11	34.69	39	10.14
		桁行柱間(一部)	1.55					6	1.56
		梁行総長(復原)	4.30	14.19	12.07	14.49	14.73	16	4.16
		梁行柱間(平均)	2.15					8	2.08
銅柱 6×1間 (2間)	SB13	桁行総長	10.16	33.53	28.54	34.21	34.79	39	10.14
		桁行柱間(平均)	1.69					6.5	1.69
		梁行総長	4.11	13.56	11.54	13.84	14.08	16	4.16
		梁行柱間							
総柱 3×3間	SB14	桁行総長(復原)	4.07	13.43	11.43	13.70	13.94	15.5	4.03
		桁行柱間(一部)	1.42					5.5	1.43
		梁行総長(平均)	3.90	12.87	10.96	13.13	13.36	15	3.90
		梁行柱間(平均)	1.30					5	1.30
総柱 3×3間	SB15	桁行総長	3.88	12.81	10.90	13.06	13.29	15	3.90
		桁行柱間(一部)	1.30					5	1.30
		梁行総長(平均)	3.73	12.38	10.53	12.56	12.84	14.5	3.77
		梁行柱間(一部)	1.30					5	1.30
総柱 3×3間	SB16	桁行総長(平均)	5.23	17.26	14.69	17.61	17.91	20	5.20
		桁行柱間(一部)	1.70					6.5	1.69
		梁行総長	4.05	13.37	11.38	13.64	13.87	15.5	4.03
		梁行柱間(平均)	1.33					5	1.30
総柱 3×2間	SB18	桁行総長(復原)	4.38	14.46	12.30	14.75	15.00	17	4.42
		桁行柱間(一部)	1.50					6	1.56
		梁行総長(復原)	3.60	11.88	10.11	12.12	12.33	14	3.64
		梁行柱間(平均)	1.80					7	1.82
総柱 3×3間	SB19	桁行総長(復原)	4.98	16.44	13.99	16.77	17.05	19	4.94
		桁行柱間(一部)	1.65					6.5	1.69
		梁行総長(復原)	3.97	13.10	11.15	13.37	13.60	15	3.90
		梁行柱間(平均)	1.32					5	1.30
銅柱 3×2間	SB20	桁行総長(復原)	5.42	17.89	15.22	18.25	18.56	20	5.46
		桁行柱間(平均)	1.81					7	1.82
		梁行総長(復原)	3.72	12.28	10.45	12.53	12.74	14.5	3.77
		梁行柱間(平均)	1.85					7	1.82

完数値とはいわずらう。

以上の結果、およびこれまでに知られている尺度による計算値をまとめたものが表11である。

基準尺度としては、全体を通じて一尺=0.260m前後という数値が一つの可能性として挙げられよう。しかし、建物個々の検討においてはその他の尺度も当然想定されうるのであり、よってこの結果はあくまで一つの可能性としてあるということをお断りしておきたい。

iii) 掘立柱建物群の配置計画における尺度について

古代の尺度には、常用・測地用の2様の尺度が存在していた。前段で求められた尺度は常用尺と考えられるが、実際のところは常用・測地用のいずれであるのかは不明である(常用・測地用の尺度が同じ数値をとる可能性も考えられる)。よって単純にこの尺度を建物の配置計画に適用するには議論が必要であるが、当時のこの地の尺度が少しも明らかになっていない現状では、とりあえず今回求められた尺度を用いて、建物の配置計画に適用してみることもあながち無意味とはいえない。以下では、先に求められた尺度を用いて建物の配置計画をみってみることにしたい。その際、大・小尺が奈良時代では1.2:1.0の比率をとることを参考にして[宮本長二郎1974]、ここでは0.260mを基準に、それが大尺であった場合(その際小尺としては0.217m)と小尺であった場合(その際大尺としては0.312m)の数値も用いることにする。

本節2)において、遺物や切合い関係から3ないし4段階の建物群の変遷を想定した。ここでは、その変遷に沿って建物間距離を検討する(表12、註4)。

第1段階 建物はSB30を除いて、すべてが一個所に密集しているが、建物間の距離、柱筋の通りなどに明確な規則性は見受けられない。基準尺に関しては検討に用いた数値のいずれかには該当しそうなものの、それぞれが異なった値をとりそうである。

第2段階 この段階では建物の配置計画に明確な規則性が現れてくる。SB04・10・11・16・22・27・28によって構成されるコの字形配置がそれである。各建物間の

距離は一尺=0.312mに該当する例が多いといえる。

第3a段階 この段階における配置は、前段階とはうって変わって不明確なものである。SB17とSB25の東辺柱筋とSB24の西妻側柱筋がほぼ通ること以外は明確な規則性を見いだせない。また、この柱筋の通りにしても、計画的な意志を感じるものとはいえずらう。尺度としては十分なデータが存在していないため、いずれとも

表12 1区の建物間距離

段階	名称	実測値			
		m	一尺=0.260m	一尺=0.312m	一尺=0.217m
第1段階	SB18-19	2.47	9.50	7.92	11.38
	SB13-14	11.73	45.12	37.60	54.06
第2段階	SB04-16	3.23	12.42	10.35	14.88
	SB10-16	3.95	15.19	12.66	18.20
	SB16-27	38.85	149.42	124.52	179.03
	SB10-11	2.03	7.81	6.51	9.35
	SB10-22	12.92	49.69	41.41	59.54
	SB10-27外々	48.75	187.50	156.25	224.65
	SB22-28内々	12.63	48.58	40.48	58.20
	SB22-28外々	32.60	125.38	104.48	150.23
	SB28-27	3.13	12.04	10.03	14.42
	SB28-29	3.60	13.85	11.54	16.59
	SB22-03	6.34	24.38	20.32	29.22
	東西西側溝間	84.70	325.77	271.47	390.32
第3a段階	SB17-25	8.73	33.58	27.98	40.23
第3b段階	SB06-07	2.08	8.00	6.70	9.59
	SA04	33.72	129.69	108.08	155.39
	SA05	35.60	136.92	114.10	164.06

決しがたい。

第3 b段階 この段階では橋によって建物群が取り囲まれ、明確に領域を形成する配置がなされている。しかし、建物間を見ると、柱筋の通りなどに明確な規則性は見いだせない。建物群を取り巻く橋の柱間寸法においても、想定した尺度のいずれかに特定するのは困難である。

以上、各段階における建物間距離をみると、寸法の検討以前に配置の不規則性が明らかになってくる。全体を通しては、検討に用いた数値のいずれに該当するかは一概にはいえそうにない。ただし、第2段階には規則的に建物が並び、建物間の距離が一尺=0.312mに当てはまるものが比較的多いといえる。可能性としては、この段階に何らかの計画的な見地から尺度に則った建物の配置がなされたことが考えられよう。

iv) まとめ

今回の検討によって、建物造営の基準尺度としては一尺=0.260m前後が可能性として推定された。また、建物群の配置計画においては、一時期何らかの計画的な見地から尺度に則った建物の配置がなされた可能性が指摘された。しかし、検討に用いた数値ではいささか蓋然性に欠けるようであり、具体的な数値に置き換えるのは困難であるといえる。

一尺=0.260m前後という数値は唐大尺よりもかなり短い尺度で、同じような尺度は知られていない。しかし、当時のこの地域における基準尺度の可能性として、一応挙げておくことにしたい(註5)。今回得られた数値はあくまで仮定の域を出ないものである。ここでは可能性のある数値を挙げることでとし、以後の研究の足がかりとする事で、とりあえずのまとめとしたい。(李陽浩)

4) 周辺の状況からみた建物群の性格

瓜破遺跡とその東側の長原遺跡では、これまで継続して調査が実施されており、この地域の飛鳥・奈良時代の状況についても、多くの検討が行われている。ここでは、これらの先行研究を整理し、その上でUR86-11次調査地の飛鳥時代建物群の性格を位置づけてみたい。

今回報告した建物群が、瓜破台地東縁部の水田開発・経営と密接に係わっていたという指摘は、これまでにも多くなされている[南1987、広瀬和雄1989、京嶋寛1990・1992、高橋工1999a]。長原遺跡の広い範囲で確認されている水田は、層位や出土遺物の検討からその開始期が7世紀初頭にさかのぼり、8世紀末～9世紀初頭に起こった洪水によって放棄されるまでの、約2世紀にわたって存続していたことが判明している[京嶋1990・1992]。また、水田が営まれた時期とほぼ同じ頃、この西側の瓜破台地東部には、多数の掘立柱建物が分布しており(図177)、その中心が長原遺跡西南・南地区、瓜破遺跡東南地区、喜連東遺跡の順に移動したことが指摘されている[京嶋1990、京嶋ほか1990]。位置関係や消長が一致することから、建物群は瓜破台地東縁部の水田開発・経営に係わった集団の住居や管理のための施設であったと考えてほぼ間違いないであろう。

水田開発の開始と時期を同じくして出現した長原遺跡西南・南地区建物群の性格については、高橋工が整理を行っている[高橋1999a]。高橋は古墳時代から飛鳥時代にかけての長原遺跡を中心とした周辺地域の微地形を復元し、集落の動態を詳細に検討した。その上で、長原遺跡西南・南地区に出現



図177 瓜破遺跡東南地区、長原遺跡西南・南地区の飛鳥・奈良時代の遺構の分布

した建物群は、古墳時代中・後期にこの地域で多数の古墳を造営した在来集団とは系統を異にする、水田開発に際して新たに編成された集団と位置づけた。

長原遺跡では台地を掘削して造営した南北方向の人工水路が複数検出されており、周囲の水田化については、7世紀初頭に始まる古市大溝の開削や南河内丘陵を含む大規模開発の一部とする考えが有力である。このような狭い地域の枠を越えた、沖積平野部と洪積段丘にまたがる統一的かつ計画的な大規模開発を、広瀬和雄は「国家」主導型開発と評価している[広瀬和雄1983]。高橋が指摘するように、長原遺跡で7世紀初頭に始まる水田開発は、大規模な地域開発事業に際し、新たに編成された集団が主体となった可能性が高い。このことから、瓜破台地東部に分布する建物群は、大阪南部の広域に及んだ土地開発の一翼を担い、瓜破台地東縁部域を直接開発・経営した末端組織であったと位置づけることができる。

次に、UR86-11次調査で検出した建物群を、これに先行する時期の建物群と比較してみる(図177)。長原遺跡西南・南地区では、難波Ⅱ新段階から難波Ⅲ古段階までの遺物を含む遺構が分布しており、建物群はおおむね7世紀前葉のうちに長原遺跡西南・南地区から瓜破遺跡東南地区に移動したと判断できる。両地区の建物群の比較を行った高橋は、瓜破遺跡東南地区に比べて、長原遺跡西南・南地区の建物の方位に統一性が見られない、小型の建物が多いなどの差異があることを指摘した。そして、後者が一般集落に近い要素をもつことから、この地区を実際の開発に携わった人々の拠点、前者をその管理部門と考え、水田開発が重層的な組織のもと行われていた可能性を想定した[高橋1999b]。集落景観から集団組織の復元を試みた視点は重要であるが、上述したように両地区の建物群には時期差があり、この見解は再検討が必要である。難波Ⅲ中～新段階の建物は、瓜破遺跡東南地区以外では未検出であり、中心となる建物群が整備された時期の周囲の景観の復元は今後の検討課題として残されている。現状の資料から両地区の違いに意味を見いだせば、長原遺跡西南・南地区の建物群が広範囲に散在しており、また、建物同士の重複が認められないのに対して、瓜破遺跡東南地区では、同一地点で頻繁な建替えが行われていることが指摘できる。すなわち、7世紀中～後葉には当地域の中核となる施設が一個所に固定化していたことがわかる。

また、長原遺跡西南・南地区でも、瓜破遺跡東南地区の第1段階と類似した構成の建物群を抽出することができる。NG97-18次調査地では、二面庇の大型建物と2棟の倉庫と考えられる小型建物が南北方向に並んで検出されており、その南側にも南北に並んで2棟の総柱建物が存在する[大阪市文化財協会1997d]。建物群の細かい時期は正式報告をまって検討する必要があるが、周囲の遺構群の大まかな変遷から判断して、瓜破遺跡東南地区の第1段階の建物群に先行する、水田開発の開始期の中核的な施設であった可能性があろう。また、2棟を単位とした倉庫のセット関係が、長原遺跡西南・南地区でも確認される点は注目されよう。

以上のことから、2棟の倉庫と庇付き建物を基本単位とした建物群が、水田開発の開始に伴って長原遺跡西南・南地区に営まれ、これが瓜破遺跡東南地区に移動したのち、7世紀中葉になって敷地が固定化するとともに外観が大きく変化するという変遷が読み取れる。

(大庭)

5) まとめ

1)から4)で検討してきたことをまとめると以下のようになる。

- ①、1区建物群の存続時期は、遺構および包含層出土遺物からみて、難波宮地域の土器編年という難波Ⅲ古～新段階におさまり、実年代は7世紀前葉から後葉の間である。特に、難波Ⅲ中段階の遺物がもっとも多いことから、建物群の最盛期は7世紀中葉と想定される。
- ②、建物群は3ないし4段階の変遷をたどり、配置が短期間で変化する。7世紀中葉(第2段階)が最も大きな画期で、建物がコの字形に整然と並び、計画的な配置をとるようになる。第3a段階にはこの配置が崩れ、7世紀後葉(第3b段階)には、四面庇のSB07を中心に建物群が構で囲まれる。
- ③、建物の建造には、一尺=0.260mの基準尺度が用いられたことを推定した。また、7世紀中葉(第2段階)の建物の配置計画には一尺=0.312mが測地用尺度として用いられた可能性がある。
- ④、7世紀初頭になって、南河内丘陵から瓜破台地東縁部に及ぶ広い範囲で、それまでの小地域の枠を越えた大規模な土地開発が始まったと考えられる。瓜破台地東部の建物群はこの一翼を担うものとして編成され、瓜破台地東縁部に広がる水田の経営・管理を目的とした施設であった。
- ⑤、水田開発の開始期である7世紀初頭から7世紀前葉までの間、中心的な建物群の構成は庇付き建物1棟と倉庫2棟を基本としていた。
- ⑥、7世紀中～後葉の間、瓜破遺跡東南地区のUR86-11次調査地付近で頻繁な建物の建替えが行われており、この場所に中核的な施設が固定化していたようである。
- ⑦、7世紀初頭から7世紀中葉にかけて、建物群には2棟を単位とした倉庫が伴っており、保有・管理形態には変化が認められない。一方、7世紀後葉の第3b段階になると、通常の倉庫が構の内側から排除されており、この時期に大きな変化があった可能性がある。

さて、古代の地方行政制度の成立の画期が大宝令施行に伴う国郡里制にあることは、広く認められるところである。これに先行する7世紀代の地方行政組織の整備がどのような形で進行していったかという問題は、律令国家の成立を考える上で最も重要な課題の一つであり、これまでも文献史学の膨大な研究と論争がある。考古学的には、7世紀末～8世紀初頭を画期として全国的に郡衙遺構が出現することから、飛鳥浄御原令の施行期に全国的な立評が行われたとする山中敏史の説が有力である[山中敏史1994]。瓜破遺跡東南地区第2段階の建物群は、これに先行して官衙風の建物配置をとる例として注目される。山中は7世紀中葉の孝徳朝の立評記事に係わる初期評衡の存在も想定しているが、官衙の主要な施設が整っていないことや施設の構造が連続性を欠くことから、地方支配の行政機関としては先駆的・端緒的な段階にとどまっていたとする[山中1994]。

近年の前期難波宮の調査の進展によって、これが孝徳朝の難波長柄壘碁宮にさかのぼることがほぼ確実となった[江浦洋2000、光谷拓実2000]。また、難波宮地域の土器編年が整備されたことによって、この時期の周辺地域との関係を細かく検討することが可能となり[佐藤2000]、難波宮と近い畿内中枢部に位置する瓜破遺跡は、上記の問題を考える上で格好の資料といえる。

前期難波宮が造営された時期、瓜破遺跡東南地区では第2・3a段階の建物群が営まれていた。第2段階は建物群変遷の中で最も大きな画期であり、②・③・⑥で示したように建物群の外観が一斉か

つ計画的に整備されるようになる。このような変化の背景には、前期難波宮の造営を契機とした中央政権との強い結びつきを想定する必要がある、孝徳朝の立評記事とも関連して注目されよう。ただし、前段階の倉庫の保有・管理形態や敷地の区分には変化が認められないことから、この時期の中央政権の介入も既存の集団組織をそのまま継承する形で行われたと判断される。

これに対し、第3b段階(7世紀後葉)には、主屋となる建物が顕在化し、これを中心に建物群が柵で圍繞されるようになる。7世紀中葉に整備された建物配置が、そのまま継続していかない点については、第2段階に推定した中央との関係が定着しなかったことを物語っており、施設の連続性を欠くとした山中の指摘とも合致する現象である[山中1994]。しかし、中心建物が出現するとともに柵によって特殊な空間が形成され、また倉庫の管理形態にも変化が想定される点は注目されよう。

UR86-11次調査地の南方約1kmには屯倉神社が鎮座しており、依網屯倉の推定地とされている[直木孝次郎1985]。また、長原(城山)遺跡では、水田の畦畔に埋め込まれた状態で出土した7世紀後葉の土師器杯Cに「富官家」の墨書があり、当地域とミヤケとの関係が指摘されている[藤井正明・阿部幸一1985、黒田慶一1986]。7世紀初頭に出現した建物群は、広域の土地開発に伴って編成された拠点施設の一つであると考えられることから、これが公的な性格を有していたことは想像に難くない。この性格は7世紀代を通じてそのまま継承され、上記のような中央政権との係わりを経て徐々に組織が整備されていったと考えられる。このような変遷については、ヤマト王権による直轄支配の拠点として整備されたミヤケ制の存在が、評制施行の歴史的前提となったとする鎌田元一の説が参考になる[鎌田元一1993]。地域を瓜破・長原両遺跡に限定してみれば、7世紀代の地域支配は、おおむね上記のような過程を経て実施されていったと考えられる。(大庭)

註)

- (1)馬野繁蔵氏採集資料が、具体的に瓜破遺跡のどの地点で採集されたかについては不明である。ただし、その経緯から大和川河川敷で採集された可能性が高いということを、寄贈先である関西大学考古学研究室の米田文孝氏からご教示いただいた。本文でも瓜破遺跡西地区南半の集落域の資料として用いる。
- (2)ここで用いた建物柱間の数値と第IV章の建物平面図で示した復元ラインの長さは、必ずしも一致しない。
- (3)基準尺度の有効数値に関しては、既存の研究成果を参照して設定した。まず先行する例としては、大阪市中央区法円坂出土の5世紀代の巨大倉庫群がある[大阪市文化財協会1992c]。基準尺度は個々の建物で微妙に異なるが、そこではおよそ一尺=0.23~0.25mの範囲に収まる数値が想定されている。次に今回の建物群に続く時代のものとしては奈良時代における唐大尺の例があり、一尺=0.297mほどとなる。一般的に尺度は時代と共に伸びてゆく傾向があり[小泉装太郎1977b]、よって今回の建物群の基準尺度としては一尺=0.23~0.30mを有効数値として想定することにした。なお、高麗尺は一尺=0.356m程度とされており、前記の尺度の流れからすると類例のない長い尺度であるため、今回の検討においては参考として掲げるものの、有効数値の設定においては除外して考えることにした。
- (4)建物間の距離の計測については、1/20の原因から計測することが困難であるため、デジタルの遺構平面図を1/20まで拡大して行った。したがって、建物の柱間隔の計測とは同一基準ではない。
- (5)新井宏氏は遺跡や遺構の検討から「古韓尺」として一尺=0.268m前後の数値の存在を挙げているが、今回得られた数値は、どちらかというとこの数値に近いものといえる。

引用・参考文献

- 青木遺跡調査団1977、「土器の検討」：『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅱ、pp.315-323
- 秋山浩三・小林和美・後藤理加・山崎頼人2000、「近畿における古備型甕の分布とその評価」：『古代古備』第22集、pp.104-150
- 浅野清1986、『昭和修理を通じてみた法隆寺建築の研究』中央公論美術出版
- 足利健亮1985、「地形発達と地質」：松原市史編さん委員会編『松原市史』第一巻、pp.17-36
- 新井宏1992、『まほろしの古代尺』吉川弘文館
- 伊東太作1988、「土地と建物の尺度」：『季刊考古学』22号 雄山閣、pp.79-82
- 今里幾次1943、「畿内遠賀川式土器の細別について—河内西瓜破遺跡水門西地点調査概報—」：『古代文化』第13巻第8号
- 植木久1998、「発掘遺構からみた倉庫建築の構造とその変遷—飛鳥・奈良時代を中心に—」：奈良国立文化財研究所編『古代の稲倉と村落・郷土の支配』、pp.115-130
- 梅原末次1933、「讃岐高松石清尾山石塚の研究」：『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第12冊
- 江浦洋2000、「難波宮北西部の発掘調査—木簡の出土とその周辺—」：『第40回大阪府埋蔵文化財研究会資料集』大阪府文化財調査研究センター
- 岡村秀典1986、「中国の鏡」：『弥生文化の研究』第6巻 雄山閣、pp.69-77
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 1989、『昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 1993、『平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』
- 1980、『瓜破北遺跡』
- 1981、『瓜破北遺跡』Ⅱ
- 1983、『瓜破遺跡』
- 1989、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 1991、『橋原孝氏による建設工事に伴う瓜破遺跡発掘調査(UR91-22)略報』
- 1992a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 1992c、『難波宮址の研究』第九
- 1993a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ
- 1993b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ
- 1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ
- 1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ
- 1996a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅵ
- 1996b、『森の宮遺跡』Ⅱ
- 1997a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ
- 1997b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅹ
- 1997c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅺ

- 1997d、『平成9年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(その2)(NG97-18)完了報告』
- 1998、『住友銅吹所跡発掘調査報告』
- 1999a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XII
- 1999b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XIII
- 1999c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XIV
- 1999d、『長原遺跡発掘調査報告』V
- 1999e、『大阪市文化財協会発掘調査報告』-1996年度-, pp.19-44
- 1999f、『大阪市文化財協会発掘調査報告』-1997年度-, pp.15-26
- 1999g、『平成10年度長吉瓜破土地区画整理事業 施行に伴う長原遺跡発掘調査(その5)(NG98-32)完了報告』
- 1999h、『平成10年度長吉瓜破土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査(その6)(NG98-46)完了報告』
- 2000a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV
- 2000b、『難波宮址の研究』第十一
- 大阪府教育委員会1964、『大阪府文化財分布図』
- 大阪文化財センター1976、『大阪府高速大阪松原線建設に伴う瓜破遺跡試掘調査報告書』
- 勝田邦夫1981、『上六万寺遺跡の調査』:東大阪市教育委員会編『馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑66号墳調査報告』, pp.14-26
- 鎌田元一1993、『部・屯倉・評』:新版『古代の日本』『古代史総論』 角川書店, pp.239-258
- 鎌田博子1981、『瓜破遺跡』:韓式系土器研究会編『韓式系土器研究』I, pp.46-47
- 川西宏幸1978、『円筒埴輪総論』:『考古学雑誌』第64号第2巻 日本考古学会, pp.95-164
- 1989、『古墳時代前史考-原儀内政権の提唱-』:九州古文化研究会編『古文化談叢』第21集, pp.1-36
- 関西大学考古学等資料室1985、『馬野繁蔵氏寄贈 瓜破遺跡採集資料報告〔I〕』:『関西大学考古学等資料室紀要』第2号, pp.33-78
- 1986、『馬野繁蔵氏寄贈 瓜破遺跡採集資料報告〔II〕』:『関西大学考古学等資料室紀要』第3号, pp.17-84
- 1987、『馬野繁蔵氏寄贈 瓜破遺跡採集資料報告〔III〕』:『関西大学考古学等資料室紀要』第4号, pp.23-80
- 京嶋覚1980、『鏡片』:大阪市文化財協会編『瓜破北遺跡』, pp.60-68
- 1982、『瓜破北遺跡出土の前漢鏡片』:『考古学雑誌』第67巻第2号, pp.129-131
- 1986、『瓜破北遺跡』:『弥生時代の青銅器とその関係』埋蔵文化財研究会第20回研究集会資料, pp.165-166
- 1990、『水田遺構と古代の長原』:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』II, pp.294-306
- 1992、『飛鳥時代の土器とその時期』:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』VI, pp.149-154
- 京嶋覚・西畑佳恵・上野祐子1990、『平野区喜連東遺跡の奈良時代建物群』:大阪市文化財協会編『葦火』24, pp.2-3
- 久保和士・宮本康治1997、『瓜破遺跡の弥生時代集落跡』:大阪市文化財協会編『葦火』67, pp.2-4
- 黒田慶一1986、『長原(城山)遺跡出土の「富官家」墨書土器』:『ヒストリア』111号 大阪歴史学会, pp.1-23
- 建設省国土地理院『河内低地とその周辺』:『土地条件調査報告書(大阪平野)』第3編II, pp.69-76
- 小泉要俊1977a、『度量衡の歴史』 原書房

- 1977b、『ものさし』 法政大学出版局
- 神戸市教育委員会1986、『森北町遺跡現地説明会資料』
- 古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』
- 小林行雄1955、『古墳の発生の歴史的意義』、『史林』第38巻第1号『古墳時代の研究』1961所収、pp.135-159
- 佐藤隆1992、『平安時代における長原遺跡の動向』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114
- 2000、『古代難波地域の土器様相とその史的背景』：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-268
- 城陽市教育委員会1993、『正道官衙遺跡』
- 新修大阪市史編纂委員会1988、『新修大阪市史』第一巻
- 菅榮太郎1995、『石鏡資料の型式および製作技法の編年的検討』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.367-388
- 杉原莊介・神沢勇一1961、『大阪府瓜破遺跡』：『日本農耕文化の生成』
- 鈴木秀典1982、『瓦器碗の編年』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-282
- 高倉洋彰1972、『弥生時代小形仿製鏡について』：『考古学雑誌』第58号第3号、pp.1-30
- 1976、『弥生時代副葬物の性格』：九州歴史資料館編『九州歴史資料館研究論集』2
- 1993、『前漢鏡にあらわれた権威の象徴性』：国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集、pp.3-37
- 高橋工1999a、『長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期から飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態』：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79-122
- 1999b、『飛鳥時代の集落について』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅤ、pp.145-149
- 高橋徹1979、『廃棄された鏡片』：九州古文化研究会編『古文化談義』第6集、pp.63-88
- 1986、『伝世鏡と副葬鏡』：『九州考古学』第60号、pp.53-60
- 立岩遺跡調査委員会1977、『立岩遺跡』
- 田中清美1981、『出土遺物のまとめ』：大阪市文化財協会編『瓜破北遺跡』Ⅱ、pp.28-33
- 2000、『河内湾周辺における弥生時代文化の着床過程』：土器持寄会論文集刊行会編『突帯文と達賀川』、pp.869-900
- 田辺昭三1966、『陶器古墳址群』Ⅰ 平安学考古学クラブ
- 1981、『須恵器大成』 角川書店
- 趙哲済1983、『瓜破・瓜破北遺跡の層序』：大阪市文化財協会編『瓜破遺跡』、pp.17-20
- 1995a、『長原遺跡の標準層序』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.19-34
- 1995b、『本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語』：同上、pp.41-44
- 趙哲済・京嶋覚・高井健司1992、『長原遺跡の地形と地質の概要』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.15-18
- 都出比呂志1974、『古墳出現前後の集団関係』：『考古学研究』第20巻第4号、pp.20-47
- 寺沢薫・森井貞雄1989、『河内地域』：寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、pp.41-146
- 富岡謙蔵1920、『古鏡の研究』
- 直木孝次郎1985、『律令制以前の丹比地方』：松原市史編さん委員会編『松原市史』第一巻、pp.99-133
- 中尾芳治1986、『難波京』 ニュー・サイエンス社
- 奈良国立文化財研究所1960、『川原寺発掘調査報告』
- 1973、『坂田寺跡の調査』：『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』3、pp.5-9

- 1976、『平城京発掘調査報告書』Ⅷ 奈良国立文化財研究所学報第26冊
 1978、『川原寺西南部の調査』：『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』Ⅱ
 1990、『山田寺第7次調査』：『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25、pp.76-86
 1995、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』Ⅳ

日本考古学会1949、『口絵及び口絵解説』：『考古学雑誌』三五一終巻号

東住吉区役所1961、『東住吉区史』

樋口隆康1979、『古鏡』 新潮社

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1997、『表山遺跡』：『平成8年度年報』、pp.33-36

広瀬和雄1983、『古代の開発』：『考古学研究』第30巻2号、pp.35-69

1989、『畿内の古代集落』：『国立歴史民俗博物館研究報告』22、pp.29-110

藤井正明・阿部幸一1985、『城山遺跡水田跡出土の墨書土器』：『大阪文化誌』第18号、pp.49-54

三谷拓実2000、『前期飛鳥宮水利施設出土木材の年輪年代測定』：『大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』』第十一、pp.207-208

南秀雄1987、『瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群』：『大阪市文化財協会編『華火』』8号、pp.2-4

宮本佐知子・佐藤隆1996、『四天王寺とその周辺出土の瓦』：『大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』』
 I、pp.93-119

宮本長二郎1974、『尺度と建築』：坪井清足・鈴木嘉吉編『古代史発掘』9 埋もれた宮殿と寺 講談社、pp.144-145

宮本康治1998、『瓜破遺跡の弥生時代方形周溝墓』：『大阪市文化財協会編『華火』』74号、pp.4-5

森岡秀人1980、『土器からみた高地性集落を下山の生活様式』：『藤井祐介君追悼記念考古学論文集』、pp.191-207

1990、『大阪市城遺跡出土土鏡の伝来をめぐる問題の二、三』：『大阪の歴史』第30号、pp.1-34

1993、『近畿地方における銅鏡の受容』：『季刊考古学』43 雄山閣、pp.21-25

森毅1980、『瓜破北遺跡出土の第V様式土器の占める位置』：『大阪市文化財協会編『瓜破北遺跡』』、pp.40-46

1980、『大阪市長原遺跡』：帝塚山大学考古学研究室編『シンポジウム二上山旧石器遺跡をめぐる諸問題』、pp.24-32
 文珠省三1986、『大和川河床出土の貨泉・鉢・台付無蓋壺・甕について-瓜破遺跡出土資料の紹介(一)-』：『大阪市立博物館研究紀要』第18冊 大阪市立博物館

梁上椿1940-42、『嚴原藏鏡』

柳瀬明彦1977、『川入・上東遺跡の弥生式土器および古式土器について』：『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 岡山県教育委員会

山中敏史1986、『律令国家の成立』：『岩波講座日本考古学 6 変化と画期』 岩波書店、pp.199-240

1994、『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房

山中敏史・石毛彰子1998、『地方豪族の居宅と稲倉』：奈良国立文化財研究所編『古代の稲倉と村落・郷里の支配』、pp.199-240

山本博1940、『河内国大和川川床出土の弥生式遺物に就いて』(一)：『考古学雑誌』第30巻第11号

1941a、『河内国大和川川床出土の弥生式遺物に就いて』(二)：『考古学雑誌』第31巻第2号

1941b、『続河内国大和川川床出土の弥生式遺物に就いて』：『考古学雑誌』第31巻第7号

横田賢次郎・森田勉1978、『太宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-』：『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館、pp.1-26

吉川周作・榊原孝博・榊原博之・古谷正和1986、『近畿地方中部に分布する後期更新世-完新世の火山灰層について』

『地球科学』40-1 地学団体研究会、pp.18-38

米田敏幸1991、『土器の編年 近畿』：『古墳時代の研究』6 雄山閣、pp.19-33

あ　と　が　き

長年にわたって蓄積された、瓜破・瓜破北遺跡の調査成果をようやく公にすることができた。過去の3冊の報告書および、東側の長原遺跡を含めた土地区画整理事業の施行に伴って刊行された多数の報告書と合わせて、過去の瓜破台地とその周辺地域の考古学的成果は、これらによってほぼ知ることができる。ただし、本書に収録した報告の中には、調査を終えてから20年近い歳月を経たものもあり、事実記載に終始したばかりか、報告の内容にも不鮮明な部分が生じたことは否めない。

瓜破遺跡東南地区の飛鳥時代掘立柱建物群については、当時の地域支配組織の実態を知る資料として、調査当初から注目を集めていた。今回その基礎データを公表し、その位置づけについて複数の方面から検討を加えた。

膨大に蓄積されたこれらの資料から、地域の歴史的な変遷やその特質を掘り下げていく作業は、今後も継続していく必要がある。また、今後の調査によって解明していかなければならない課題も多い。本書が、これらの問題提起となり、今後の調査研究に活用されることになれば、望外の喜びである。

(田中清美)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- | | | | | |
|---|----------------|--|----------------|--|
| い | 生駒西麓 (産) | 13, 19, 35, 36, 55, 66,
78, 126, 158, 165 | 青花 | 142, 144 |
| | 異体字銘帯鏡 | 50, 86, 159 | 青磁 | 129, 142~144 |
| | 移動式竈 | 23, 39, 124, 165, 170 | 石鍾 | 68, 69, 157 |
| え | 円筒埴輪 | 5, 90, 131, 161 | 石甃 | 13, 19, 26, 27, 31, 36,
38~40, 42~45, 53, 86,
90, 157 |
| か | 瓦器 | 14, 15, 21, 24, 27, 42,
49, 80, 81, 84, 89, 127,
129, 131~137, 142~
144, 149, 157 | 塙 | 129, 143, 146, 147, 149,
150, 161, 162 |
| | 角錐状石器 | 31, 157, 158 | た 堅穴住居 | 4, 5, 51, 62, 67, 69, 77,
151, 153, 154, 156, 157,
160 |
| | 火山ガラス | 27~30 | つ 坪境 | 140, 141, 151 |
| | 瓦質土器 | 15, 129, 134, 136, 143,
144, 157 | て 手埴り彩土器 | 72, 74 |
| | 貨泉 | 3, 5, 6, 160 | と 陶質土器 | 46, 157, 161 |
| き | 北白川 | 27, 32, 35, 158 | な ナイフ彩石器 | 11, 31, 89, 90, 157, 158 |
| | 古備型甕 | 74 | 長原式 | 13, 26, 27, 35, 36, 39,
158 |
| く | 管玉 | 90, 157 | 難波Ⅲ古段階 | 14, 106, 112, 113, 115,
120, 124, 163, 165, 167
~169, 172, 182, 183 |
| こ | 耕作溝 | 40, 80, 81, 89, 127, 137,
154, 157, 162 | 難波Ⅲ中段階 | 49, 105, 106, 108, 110,
112, 113, 115, 120, 124,
126, 164, 165, 167~169,
172, 174, 182, 183 |
| | 黒色土器 | 131~133, 142, 143, 145,
146, 156, 157 | 難波Ⅲ新段階 | 49, 105, 106, 110, 112,
113, 115, 120, 124, 126,
162~165, 167~169, 174,
182, 183 |
| | 甌 | 14, 108, 167 | 難波Ⅳ | 49, 118, 120, 126, 163~
165, 167~169 |
| さ | 槽 | 6, 67, 87, 91, 99, 101,
102, 106, 117, 118, 152,
170~172, 174, 175, 180,
183, 184 | に 二重口縁甕 | 72, 74, 77 |
| | 山陰系 | 78 | ぬ 布掘り | 91, 95, 98, 169, 172,
174 |
| し | 庄内甕 | 77, 78 | の 軒平瓦 | 134, 137, 142, 162 |
| | 庄内式 | 52, 77~79, 157, 159 | 軒九瓦 | 5, 129, 134, 137, 142,
162 |
| せ | 製塩土器 | 46, 131, 153, 157 | | |

は 白磁	15, 80, 129, 132, 133, 142, 143, 157, 162	ま 九瓦	120, 121, 129, 134, 136, 145~147, 162
ひ 疵	23, 96~101, 124, 165, 170~172, 174, 175, 177, 182, 183	や 弥生時代後期	4, 5, 10, 13, 15, 26, 27, 38, 43~46, 49~53, 55, 59, 62, 64, 66~69, 71, 72, 74, 75, 77~79, 83, 86, 149, 154~160
平瓦	5, 46, 121, 129, 135~ 137, 140, 145~147, 149, 151, 157	弥生時代中期	5, 6, 13, 15~20, 38~40, 42, 44, 45, 52, 53, 68, 85, 86, 158
ふ 楠羽口	96, 157	弥生時代前期	3, 5, 6, 10, 13, 15, 18, 21, 23, 26, 27, 32, 39, 53, 62, 90, 157~159
船橋式	26, 27, 32, 35, 37, 39, 158	ゆ 有孔円板	50, 157
布留式	49, 52, 55~57, 59, 61, 67, 70, 74, 79, 157~159, 161	よ 横大路火山灰	29, 30, 158
ほ 方形圓溝墓	4~6, 13, 67~70, 157, 159, 160	り 緑釉陶器	120, 121, 144
掘立柱建物	4, 5, 53, 55, 56, 67, 70, 74, 91, 94, 100, 118, 120, 142, 152~154, 156, 157, 161~163, 165, 169, 170, 176, 177, 179, 180	わ 和同開珎	14, 157, 162

〈地名・遺跡名など〉

う 馬池谷	1, 2, 154, 156, 160~162	難波宮	4, 163, 164, 168, 169, 176, 178, 183, 184
瓜破台地	1, 2, 9, 15, 28, 29, 39, 157, 158, 161, 180, 182, 183	成本庵寺	142, 150, 151, 153, 161, 162
瓜破庵寺	161, 162	に 西谷	1, 2
瓜破霊園	3, 140, 142, 160, 162	は 花塚山古墳	140, 151, 161
き 喜達東遺跡	2, 180	ひ 東谷	1, 2, 160, 161
こ ゴマ堂山古墳	140, 161	ふ 古市大溝	182
な 中高野街道	127, 131, 137, 138, 162	や 大和川	1, 3, 6, 18, 159, 160, 184
長原遺跡	1, 2, 28, 29, 38, 89, 90, 154, 158, 160, 161, 180 ~182, 184		

**Archaeological Reports
of the
Uriwari and Uriwari-kita Sites
in Osaka, Japan**

A Report of Excavations
Prior to the Development of
Uriwari and Uriwari-kita Area
between 1980 and 1993

September 2000

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SA : Palisade or Fence

SB : Building

SD : Ditch

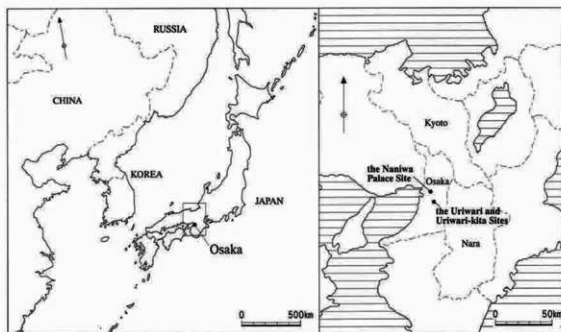
SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole

SX : Other features

NR: Natural Stream



CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Acknowledgement

Chapter I The Environment of the site and the Investigation to date	1
S.1 Topographical setting of the site	1
S.2 Investigation history and current research	3
Chapter II Western sector of the Uriwari Site	7
S.1 UR80-1, 4, 5 and 8	7
1) Background and progress of research	7
2) Stratigraphy	9
3) Features and artifacts	11
i) The Palaeolithic period	ii) The Jomon period
iii) The Yayoi period	iv) The Kofun to Nara period
v) The Late Heian to Muromachi period	
4) Conclusion	15
S.2 UR85-16	16
1) Background and progress of research	16
2) Stratigraphy	16
3) Features and artifacts	17
4) Conclusion	17
S.3 UR85-30	18
1) Background and progress of research	18
2) Stratigraphy	18
3) Features and artifacts	19
4) Conclusion	20
S.4 UR90-12	21
1) Background and progress of research	21
2) Stratigraphy	21
3) Features and artifacts	23
i) Before the Early Yayoi period	ii) The Asuka period
iii) The Kamakura period	
4) Conclusion	24
S.5 UR92-28	25
1) Background and progress of research	25
2) Stratigraphy	25
i) Stratigraphy of the investigation area	
ii) Stratum containing volcanic ash	
3) Features and artifacts of the Palaeolithic to Middle Jomon Period	29
i) Lithic artifacts	ii) Pits
4) Features and artifacts of the Late Jomon to Early Yayoi Period	32

i) Natural stream	ii) Artifacts from the natural stream	
iii) Pits	iv) Other lithic artifacts	
5) Features and artifacts of the Middle to Late Yayoi Period		38
6) Features and artifacts of the Nara Period		39
7) Conclusion		39
S.6 UR93-2		40
1) Background and progress of research		40
2) Stratigraphy		40
3) Features and artifacts		42
i) The Yayoi period	ii) The Kamakura period	
4) Conclusion		42
S.7 UR86-28		43
1) Background and progress of research		43
2) Stratigraphy		43
3) Features and artifacts		44
i) The Jomon period	ii) The Yayoi to Heian period	
4) Conclusion		46
Chapter III The Uriwari-kita Site		47
S.1 UR80-3		47
1) Background and progress of research		47
2) Stratigraphy		49
3) Features and artifacts		49
i) Artifacts from each stratum	ii) Northern grid	
iii) Southern grid		
4) Conclusion		67
S.2 UR80-2		68
1) Background and progress of research		68
2) Stratigraphy		68
3) Features and artifacts		69
i) Northern grid	ii) Southern grid	
4) Conclusion		70
S.3 UR88-43		71
1) Background and progress of research		71
2) Stratigraphy		71
3) Features and artifacts		71
i) The Late Yayoi period	ii) The Early Kofun period	
4) Conclusion		74
S.4 UR89-1		75
1) Background and progress of research		75
2) Stratigraphy		75
3) Features and artifacts		77
i) Ditch	ii) Small pits	
iii) Pits	iv) Well	
v) Pottery concentration	vi) Artifacts from each stratum	
4) Conclusion		79

S.5 UR90-13	80
1) Background and progress of research	80
2) Stratigraphy	80
3) Features and artifacts	83
i) Before the Yayoi period ii) The Asuka period	
4) Conclusion	83
S.6 UR91-3	84
1) Background and progress of research	84
2) Stratigraphy	84
3) Features and artifacts	85
4) Conclusion	86
Chapter IV Southeastern sector of the Uriwari Site	87
S.1 UR85-39 and 86-11	87
1) Background and progress of research	87
2) Stratigraphy	89
3) Features and artifacts before the Kofun Period	89
i) The Palaeolithic period ii) The Jomon to Yayoi period	
iii) The Kofun period	
4) Features and artifacts of the Asuka to Heian Period	91
i) The Asuka period ii) The Heian period	
iii) Artifacts from each stratum	
Chapter V Northeastern sector of the Uriwari Site	127
S.1 UR83-3	127
1) Background and progress of research	127
2) Stratigraphy	127
3) Features and artifacts	127
i) Ditch ii) Well	
iii) Pits	
4) Conclusion	137
S.2 UR89-26	138
1) Background and progress of research	138
2) Stratigraphy	138
3) Features and artifacts	138
4) Conclusion	139
S.3 UR85-41	140
1) Background and progress of research	140
2) Stratigraphy	140
3) Features and artifacts	140
4) Conclusion	141
S.4 UR91-1	142
1) Background and progress of research	142
2) Stratigraphy	142
3) Features and artifacts	143
i) SX801 ii) Before the Heian period	

iii) The Kamakura period and later	iv) Features of the unknown period	
4) Conclusion		150
S.5 UR83-26		151
1) Background and progress of research		151
2) Stratigraphy		151
3) Features and artifacts		151
i) Ditch	ii) Structures featuring pillars imbedded directly into the ground	
iii) Pits		
4) Conclusion		153
S.6 UR88-5		154
1) Background and progress of research		154
2) Features and artifacts		154
i) The Yayoi period	ii) The Kofun period	
iii) The Heian period	iv) Another period	
3) Conclusion		156
Chapter VI Examination of the excavated features and artifacts		157
S.1 The historical changes of the Uriwari and Uriwari-kita sites		157
1) The Palaeolithic Period		158
2) The Jomon Period		158
3) The Early Yayoi to Early Kofun Period		158
4) The Middle and Late Kofun Period		161
5) The Asuka to Middle Heian Period		161
6) The Late Heian to Muromachi Period		162
S.2 The group of the Asuka period structures at UR86-11		163
1) Chronological study of the Asuka period <i>Sue</i> and <i>Haji</i> wares		163
i) Introduction		
ii) <i>Sue</i> and <i>Haji</i> wares from the stratum 2nd in the grid1-5		
iii) <i>Sue</i> and <i>Haji</i> wares from the features	iv) Conclusion	
2) Changes in the group of the Asuka period structures in the grid1		169
i) Composition of the structures and division of residential area		
ii) Direction of the structures		
iii) Changes in the features	iv) Characteristic of the structures	
3) The standard scale used in the construction of the Asuka period structures		176
i) Introduction		
ii) The scale used in the structures featuring pillars imbedded directly into the ground		
iii) The scale used in the layout of the group of the structures featuring pillars imbedded directly into the ground		
iv) Conclusion		
4) Historical changes in the group of structures and the sites of surrounding area		180
5) Conclusion		183
References		185

Postscript/Index
 English Contents and Summary
 Reference Card

ENGLISH SUMMARY

In this volume we report the results of 24 excavations carried out at the Uriwari and Uriwari-kita sites between 1980 and 1993. The sites are located in Hirano Ward in the southeastern sector of Osaka City, Japan.

The excavations cover a variety of locations including sites on both the alluvial plain and the top of the Kawachi Terrace. Material dating from between the Late Palaeolithic and the Muromachi (15th Century) periods was recovered during the excavations. As a result of these excavations, we hope to gain an archaeological insight into the historical changes which occurred in this area. Especially important are the two following points.

Firstly, investigation of the Uriwari-kita site revealed the remains of a village dated to the late Yayoi to early Kofun period (1st~4th century AD). The village featured pit dwellings and structures featuring pillars imbedded directly into the ground and ranged approximately 60m north-south. A Chinese mirror of the Western Han dynasty was also found in the village; such mirrors are characteristically found in villages of this period. The long distance these objects had been imported suggests that may have been prestige goods.

The second point of interest is the investigation of the remains of a group of the Asuka period (7th century) structures located in the southeastern sector of the Uriwari site. The group featured the remains consisting of warehouses and large size buildings. The structures were separated by a series of ditches and palisades. The group of structures may have been associated with a local aristocrat who manage a series of wet-rice fields that existed to the east of the group, the remains of which have been found at the neighboring Nagahara site. Additionally, as the epoch in the changes of this group dated to the same time as the construction of the Former Naniwa Palace, they represent important information concerning the control of this area during the formation of the ancient state.

Further Reading

- Osaka City Cultural Properties Association
1983 *Archaeological Reports of the Uriwari sites*, Osaka. (In Japanese)
- Osaka City Cultural Properties Association
1980-81 *Archaeological Reports of the Uriwari-kita site* Vols. I-II, Osaka. (In Japanese)
- Osaka City Cultural Properties Association
1978-1999 *Archaeological Reports of the Nagahara sites* Vols. I-VII, Osaka. (In Japanese, with English summary)
- Osaka City Cultural Properties Association
1978-2000 *Archaeological Reports of the Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-XV, Osaka. (In Japanese, with English summary)
- Osaka City Cultural Properties Association
1997-2000 *Archaeological Reports of the eastern sector of the Nagahara sites* Vols. I-III, Osaka. (In Japanese, with English summary)
- Osaka City Cultural Properties Association
2000 *Archaeological Reports of the Naniwa palace site (The historical investigation of the Forbidden city of Naniwa)* Vol. XI, Osaka. (In Japanese, with English summary)

報告書抄録

ふりがな	うりわり・うりわりきたいせきはつくつちょうさほうこく						
書名	瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告						
副書名							
編著者名	大庭重信・田中清美・平田洋司・京嶋覚・趙哲済・李陽浩・宮本康治・Robert Condon						
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会						
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833						
発行年月日	西暦 2000年9月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 名所在地	コード 市町村 道路番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
うりわり 瓜破遺跡	大阪府大阪市平野区 瓜破・瓜破西・ 瓜破東・瓜破南	27126 ー	34°35'56"	135°33'31"	19800311-19930521	9,836㎡	下水管工事などの 公共事業のほか、 民間の建設工事。 計18件
うりわり 瓜破北遺跡	大阪府大阪市平野区 瓜破西1丁目・ 瓜破1丁目	27126 ー	34°36'10"	135°33'09"	19800715-19910522	1,350㎡	下水管工事などの 公共事業のほか、 民間の建設工事。 計6件
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
瓜破遺跡	集落	旧石器時代	石器製作址		ナイフ形石器・角錐状石器・剥片		
		縄文時代	自然流路・土壌		船橋式土器・長原式土器・石鏃ほか		
		弥生時代	堅穴住居・方形周溝墓・溝		弥生土器・石鏃ほか		
		古墳時代	土壌		土師器・須恵器・埴輪・管玉		
		飛鳥・奈良時代	掘立柱建物・溝・溝・土壌		土師器・須恵器・瓦・輪羽口・銅銭		
		平安時代	掘立柱建物・溝・土壌		土師器・黒色土器・緑釉陶器・製塩土器・瓦		
		鎌倉時代	井戸・土壌・耕作溝		土師器・瓦器・白磁・瓦		
		室町時代	溝・土壌		土師器・瓦器・瓦質土器・白磁・瓦		
瓜破北遺跡	集落	弥生時代	掘立柱建物・堅穴住居・溝・井戸・土壌・石器製作址		弥生土器・製塩土器・前漢鏡・石鏃		
		古墳時代	掘立柱建物・方形周溝墓・土壌		土師器・須恵器・有孔円板		
		飛鳥・奈良時代	耕作溝		須恵器		

原 色 図 版



瓜破北遺跡出土遺物 (UR80-3、88-43次)



瓜破遺跡東南地区出土遺物 (UR86-11次)

圖 版

80-8次
D区南半全景(南から)



80-4次
a-6区西壁断面



80-1次
2区SD01および
SK01(東から)





85-16次
SD04・05(東から)



90-12次
調査地全景(南から)



90-12次
NR1101埋土断面
(南から)

第18層下面検出状況
(南から)



西壁地層断面



旧石器遺物出土状況
(北から)





第11D層下面検出状況
(南から)



第11A層上面検出状況
(南から)



第9層下面検出状況
(南から)

NR1101埋土断面
(北から)



NR1101埋土と断層断面
(北から)



NR1101西岸の偶蹄類足跡
(東から)





93-2次
調査地全景(南から)



86-28次
SX501(西から)



86-28次
NR601(南から)

調査地全景(南から)



SD03(南から)



SD03南壁断面





・ 北区北半(北から)



SK16(東から)

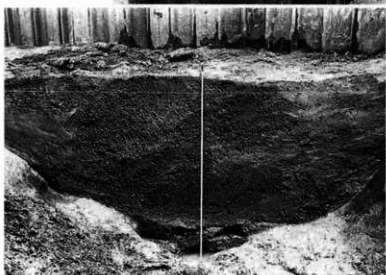


SB04(東から)

SD01 (南から)

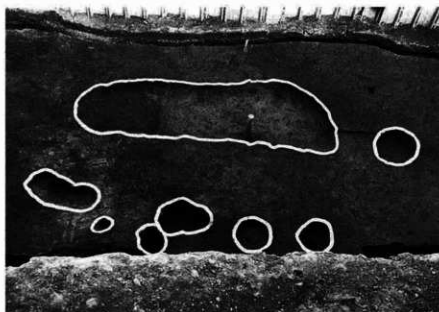


SD01東壁断面



SK04~06 (南から)





SB01・02、SK07



SK07(北から)



SK03



80-2 次 北区方形周溝墓1 (南から)



91-3 次 石器遺物集中区



89-1 次 II区全景(西から)



89-1 次 I区全景(西から)



88-43次
SK01・02(北東から)



90-13次
調査地全景(南から)



90-13次
東壁断面



調査地遠景(南から)





SB08とSA04(白線)(北から)

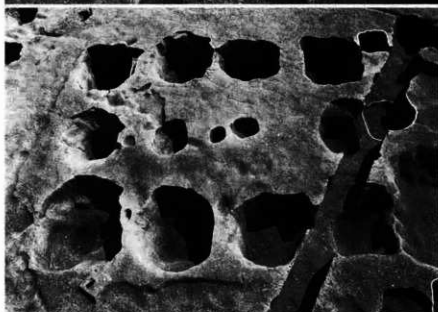


SB17(北から)

SA05(西から)



SB06(北から)



SB09・10・16の
重複状況(北から)





1区北半(北から)



3区東半(東から)



3区西半(西から)

3区SD04(西から)



SE08(東から)



SE02(北から)





85-41次
SK01・02、SD02
(北西から)



89-26次
調査地全景と旧中高野街道
(南から)



89-26次
SD01・SK06(東から)

調査地全景(東から)



SX801(北から)



SX801瓦出土状況
(南から)





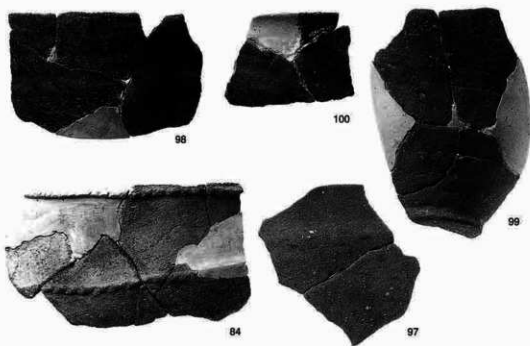
調査地全体(南から)



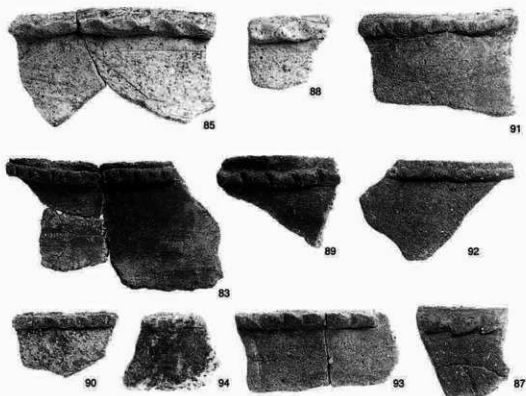
SB01(南から)



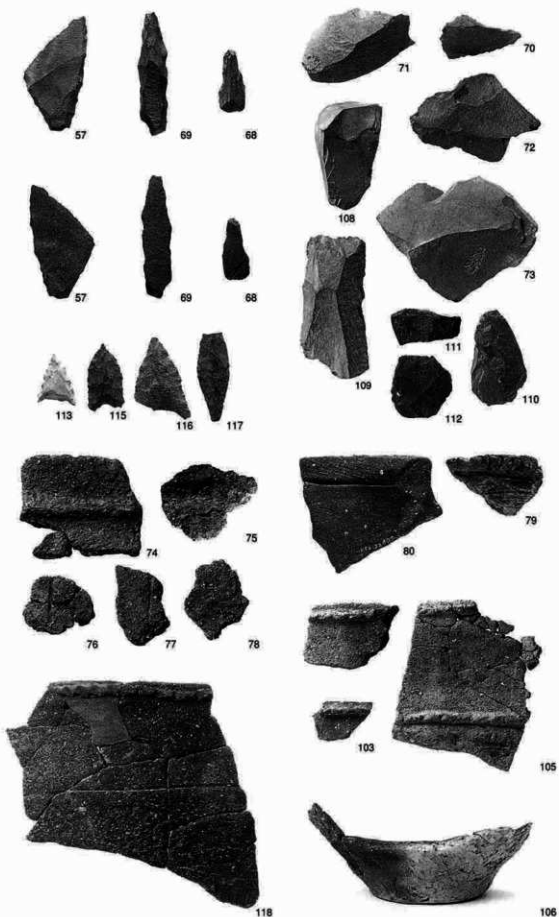
SD01遺物出土状況
(北東から)



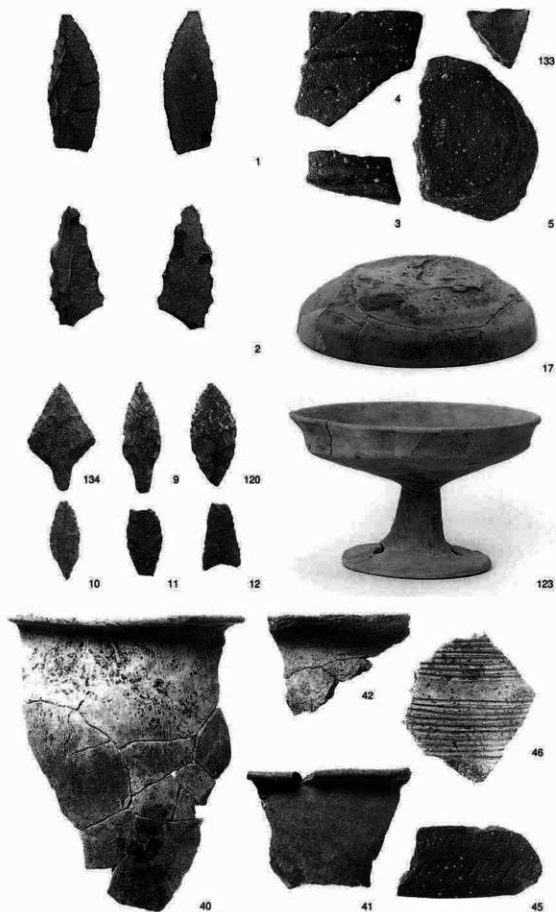
NR1101第11B層(84・97~100)



NR1101第11B層(83・85・87~94)



NR1101第11C層(79・80)、NR1101第11A層(103・105・106・116)、SK1108(118)、SK1301(74
 ~78)、第5層(69・71・72・117)、第6層(68・70)、第9層(115)、第11層(113)、第11B層(108・
 110~112)、第11C層(109)、第13~14層(57)、第18層(73)



UR80-1次3区(1)、同2区(3~5)、同1区(17)、UR80-4次a-9区(2)、同a-4区(9)、同a-8区(10)、同a-12区(11)、同a-13区(12)、UR85-30次第3層(40~42・45・46)、UR86-28次SX501(123・134)、同NR601(133)、UR93-2次SK501(120)



159



173



158



166



161



160



162



165



179



194



180



177



190



218

217

216



209



211



205



207



245



240



247



246



242



236



241



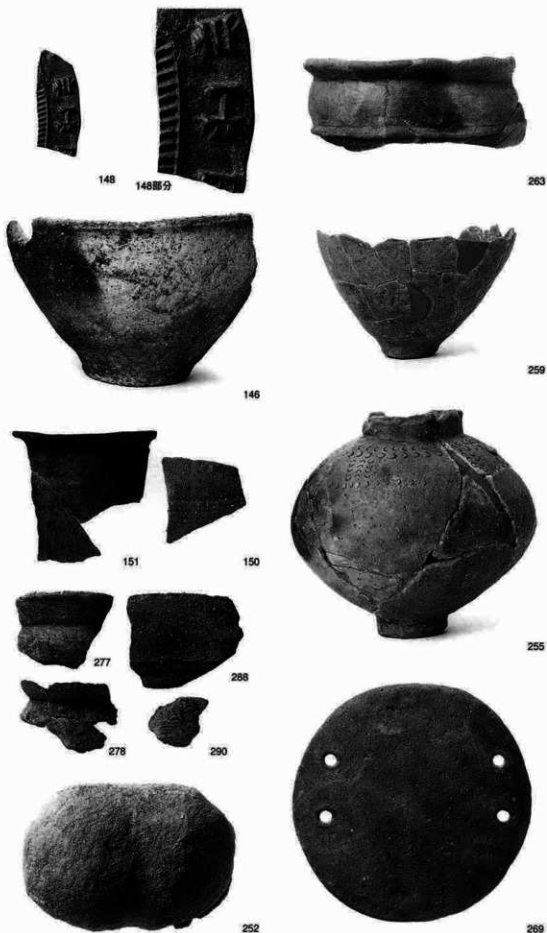
226



230



225



UR80-2次第9層(252)、UR80-3次南区第5層(146・148)、同SD01(150・151)、UR88-43次SK01(255・259・263・269)、UR89-1次土器溜り3(277)、同SK02(288)、同SK03(278)、同SD04(290)



292



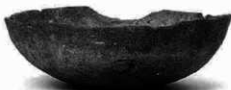
293



298



415



311



435



450



448



332



451



367

1区第3層上面(292)、1区第1層(293)、1区第2層(298)、SB15(311)、SD01(332)、SD04(367)、SD20(415)、SK01(435)、SK02(448・450・451)



384



336



376



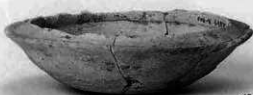
334



422



335



431



341



433



340



390



419



343



551



550



594



556



553



555



563



560



568



567



589



564



598



566

1区第2層(550・551・553・555・556・560・563・564・566~568)
3区第2層(589・594・598)

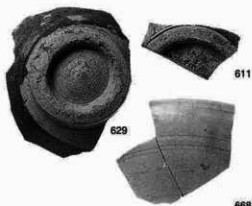


SE08上段から696・693・695

694・691・690・692・697

676・677・678・679・680・681

687・682



SD01(629)、SD04(611・674)、SE02(648)、SE05(668)、SE12(673)



750

749

749断面



747



748



742



732



734

大阪市平野区 瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告

ISBN 4-900687-46-4

2000年9月30日 発行©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

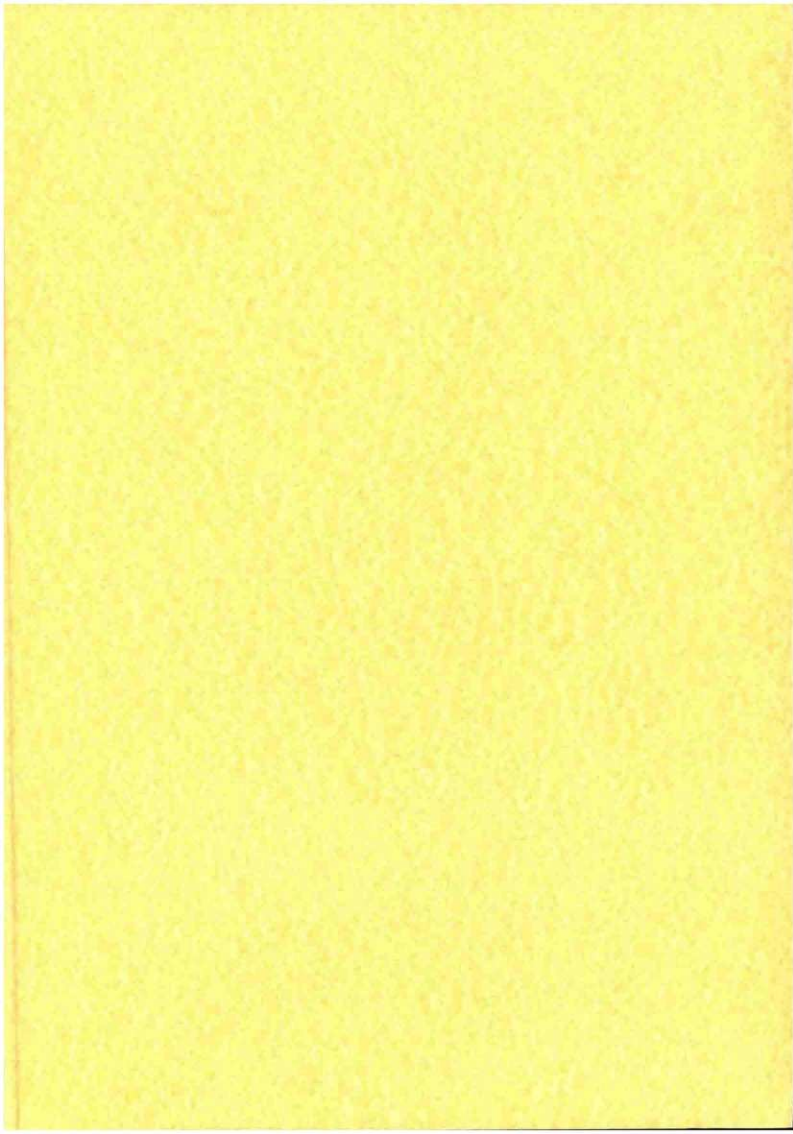
〒537-0002 大阪市東成区深江南 2-6-8

**Archaeological Reports
of the
Uriwari and Uriwari-kita Sites
in Osaka, Japan**

A Report of Excavations
Prior to the Development of
Uriwari and Uriwari-kita Area
between 1980 and 1993

September 2000

Osaka City Cultural Properties Association



**Archaeological Reports
of the
Uriwari and Uriwari-kita Sites
in Osaka, Japan**

A Report of Excavations
Prior to the Development of
Uriwari and Uriwari-kita Area
between 1980 and 1993

September 2000

Osaka City Cultural Properties Association